第 4 章　大きな転機――初めての杭州

［第 4 章その一］

熙寧4 年［1071 年］、蘇軾36 歳。

熙寧 5 年［1072 年］、蘇軾 37 歳。

■【04-1-001】臘日遊孤山訪恵勤恵思二僧

【解題】熙寧4 年 11 月 28 日、蘇軾は杭州に到着した。その 3 日後の 12 月 1 日［臘日］に西湖に遊び、湖中に浮かぶ孤山にある寺で恵勤、恵思の 2 人の僧に会った。西湖は杭州の町の西側に広がる湖で、現在も風光明媚な観光地として知られ、蘇軾も杭州にきたからには何はさておいても西湖に遊びたかったのだろう。恵勤は作品番号 03-4-026 で見たように、欧陽脩の古くからの友人である。

【訳文】

天は雪を降らせようとしているのか、

雲が湖に満ちてきて、

楼台は現れたり消えたり、

山はあったりなかったり――。

水は浅く澄み、岩が飛び出し、魚を数えられるほど。

林は深く暗く、人はどこにもおらず、鳥の呼び合う声だけがする。

十二月一日の今日、

家に帰って妻や子の顔を見ようともせずに、

道を窮めた高僧に尋ねることを名目として、

自分の楽しみを得ようとしているのである。

高僧の住まいはどこかと問えば、

宝雲寺（ほううんじ）への道は、うねうねと山の中へと入って行く。

この山の名は孤山（こざん）――

湖の中に孤絶して立つ。

誰が敢えてこのようなところに庵（いおり）を結ぶのか。

高僧が住まえば、

人は仏の道を問いにきて、道が自ずと通じ、

孤山は「孤」ではなくなる。

高僧の住まいは、

竹の庵に、窓は紙を貼っただけではあるけれど、

高僧の近くに身を置くと、

それだけで暖かく感じられ、

葛（くず）の衣を着て、蒲団の上に座ったまま、眠りに落ちてしまう。

しかしながら、

この寒い天気に町から遠いところにまできて、

私に随う者たちは嬉しそうにはしていないので、

まだ日が暮れないうちにと、

帰りの支度をさせる。

山を下って顧みると、

雲と木が一つに合わさって、

寺の上に隼（はやぶさ）が巡り飛んでいるのが見えるだけ。

今回の遊びはあっさりしたものであったけれど、

歓びは十二分にある。

家に帰り着いて、ぼんやりしていると、

ふつふつと夢が湧き上ってくるかのようで、

逃げ行く者を追いかけるようにして、

この詩を作り始めた。

美しい景色も、ひとたび心の内より失われてしまったならば、

後からはなぞり直すこともできなくなってしまうだろうから――

【補足】［(1) 蘇軾がその生涯において、故郷以外で最も愛着を覚えたのは杭州の西湖であったといって間違いないだろう。これは初めて西湖に遊んだ記念すべき作品。

(2) 杭州は五代十国時代に銭氏の建てた呉越国の都として発展し、豊かで美しい町であった。行政単位としての杭州は、銭塘、仁和、余杭、臨安、富陽、於潜、新城、塩官、昌化の九つの県を管轄し、杭州の中心部分は銭塘県に属し、州庁などの役場は銭塘県内にあった。そのために、蘇軾は詩文の中で、杭州の中心都市を呼ぶときに、杭州といってみたり銭塘といってみたりしている。蘇軾が赴任したときの杭州の州知事は沈立、銭塘県の県知事は周邠であった］

■【04-1-002】初到杭州寄子由二絶

【解題】杭州に到着した直後の思いを詩に詠んで弟に送った。

【訳文】

其の一

眼に看る時事に、僕の力はもはや耐えられそうにない。

それでも、皇帝の恩を恋い貪って退かずにいる。

どんくさい僕は、いずれは辞表を投じて去らねばならないだろう。

そうしなければ、知事殿が早晩僕を窓際族に追いやるであろうから。

【補足】［(1)「皇帝の恩」とは、かつて皇帝自身から「どのような意見でも遠慮なく言上せよ」と直接いわれたことを指し［→作品番号 03-2-008］、いつかは朝廷に復帰できると、蘇軾は心に期待するものがあったのだろう。(2) 最後の句は苦し紛れの訳である。原文は「使君何日換聾丞」［使君 何れの日か聾丞を換えん］で、「使君」とは知事のこと、「聾丞」とは漢の時代の許丞老を指す。許丞老は老いて耳が聞こえなくなり、仕事にさしさわるとして、その上官は許丞老を辞めさせようとした。しかし、温情家の黄覇は、まだ重々しくお辞儀をするくらいのことならできるのだからといって役場に残した。この句はその故事を踏まえて、自分は許丞老のように留めてはもらえないだろうと嘆いてみせたのである］

其の二

陛下は聖明にして寛大で、この身を全うすることを許してくださった。

しかし、僕は病み衰え、くだくだに崩れて人を畏れるばかりである。

君は心配の余り、岡に登って懸命にこちらを見ようとするだろうか。

それには及ばない――竈の神を祭って君の隣に住むことを祈っているのだから。

【補足】［この二首は、赴任早々に西湖に遊んだ詩とはかなり趣を異にする。厳しい政治情勢のもとで地方官として赴任した蘇軾には大きな不安があって、弟にはそれを率直に吐露しているのである。任期が満ちるまでここで勤め切れるかどうかわからないというのが蘇軾の本心であったのではないだろうか］

■【04-1-003】次韻柳子玉二首

【解題】劉瑾［字は子玉］から二篇の詩が送られてきたので、それに次韻して返した。劉瑾は、食糧が尽きて困窮した状態で陳州で蘇軾に会っていたが［→作品番号03-4-021］、その後、寿春に着任していた。劉瑾の詩は、第一首は地爐［牀の下に設ける火］を、第二首は紙帳［反故を貼り合わせた夜具］を主題にして、困窮に苦しむ日々を詠んでいたのだろう。蘇軾は劉瑾のわびしい暮らしに思いを寄せてこの詩を返した。

【訳文】

其の一　地爐

地爐のあたりから漏れてくる細い声は蚯蚓であろうか、

貴君はそれを聞きつつ、

夜具を抱えたまま夜明けまで眠れずにいる。

雪山のように真っ白な頭から、

衰えた髪がはらりと落ちる。

若いころには意気盛んであった心も、

いまはだらりと垂れた旗のようになってしまっている。

地爐の火が仙薬を錬く火であればまだしものこと、

鐘の音とともに時が過ぎ行くのをただ虚しく過ごしている。

牀の脇にある竹の机は、

俗に竹夫人といわれはしても、

かの王安豊の妻のように、

我が心に適う返事をしてくれるわけではなく、

ただ蚯蚓だけが鳴き続けているのである。

其の二　紙帳（しちょう）

亀の甲羅の皺のような乱れた字で、

ぐちゃぐちゃの文章が記された紙。

それを切って繋いだ紙の夜具なんそは、

青く綾（あや）が施された高級品に慣れたお歴々には、

とてもではないが使用に耐える代物（しろもの）ではない。

貴君が笑っていうには、

「ありがたい高僧の衣よりも清らかで、

　草原の民の毛布よりも暖かです。

　たとえ錦の布団をくれたとしてもすぐに返してしまいます。

　屋根の破れから空が見えても少しも愁いておりません」

それでも私が心配するのは、

可愛い子供らの寝相が良すぎて、

夜中に足で踏みやぶって、

結局は皆が眠れなくなってしまうことだ。

【補足】［(1)「子供ら」とあるが、劉瑾（りゅうきん）は蘇軾よりも一世代上なので、紙帳（しちょう）を踏み破るとしたら孫であろう。(2) 劉瑾はこの後、不本意な官職にあって不自由な暮らしを余儀なくされているよりはと、何らかの時点で退官したようで、蘇軾は杭（こう）州副知事時代に劉瑾との交流を深めるようになる。(3) 劉瑾の息子の妻は、前述の通り、蘇軾の伯父の蘇渙（そかん）の娘、つまり蘇軾のいとこである。そのいとこに対して、蘇軾はかつて恋愛感情を抱いていたのではないかというかなり大胆な推測がある［林語堂『蘇東坡』］。だからこそ、劉瑾一家に対して、特に厚い心配りをしたというのである。ただ、その説をその後支持する人はほとんどいないようだ。劉瑾は詩才豊かで人柄も魅力的

であったから、蘇軾が敬愛の念を抱き、その一家と親密にしたということで十分であろう］

■【04-1-004】李杞寺丞見和前篇復用元韻答之

【解題】蘇軾が杭州にきてすぐに西湖を詠んだ詩［→作品番号 04-1-001］はたちまち人々に知れるところとなったようだ。朝廷から杭州に出向していた李杞が同じ韻を使って和したので、蘇軾はやはり同じ韻でその返事をした。蘇軾の最初の詩の冒頭は「天欲雪、雲満湖、楼台明滅山有無」で、この詩の冒頭は「獣在藪、魚在湖、一入池檻帰期無」となっている。同じ形でありながら内容を巧みに大きく変化させている。

【解題】

獣は藪の中にあるべきもの、

魚は湖の中にあるべきもの、

ひとたび檻に入り、池に入ったならば、もう帰ることはできない。

我等も、弓や旗に誘われて塵土［官界］に入ってしまったために、

「鞭で打て」と命令を下して、

痛みに叫ぶ声を聞き続けなければならない。

近ごろでは、塩の私的取引を厳しく禁じ、

役人は日々に罪人を捕らえ、

しかも拘束はその妻や子にまで及ぶので、

役人暮らしの百日の間はとかく愁いばかりがあって、

楽しみを得られるのは一日あるかないか。

彼方の白い雲は、

ついにはそのもとで老いるべきとの旧い約束があるかのように浮かんでいるが、

この朱い綬[官員のしるし]などは、

山にあるべき人に似合うものではない。

人の生とは草ぶきの小屋に一宿するようなもの、

故郷の山では、

鶴や猿がしょんぼりと待っているだろうか。

いつの日にか、

鹿に車を曳かせて俗世を去り、

菖蒲の根から仙薬を得て、

白髪をすっかり取り除くことができるのだろうか。

そのときは、麻底の鞋を履いて狩人に従って、

狐や兎を朝夕の食事に供するのだ。

陶淵明は隠者としての姿を、自ら『五柳先生伝』として文に描き、

潘閬は驢馬に乗って山に入って行く姿を、人によって画に描かれた。

私がぴんぴんしていられるのはあと何年であろうか、

五十歳で四十九年の非をようやく覚った衛鞅にも恥じねばならなくなるのだろうか。

今年は不作であったから、

逃げ去る民が多く出るのかもしれない。

いまのお歴々は何をしているのか。

へぼが白鳥を描いても鶩鳥くらいにはなるけれど、

虎は達人でなければ犬になってしまうという、

つまりは、そういうことなのだろう。

【補足】[この詩には、ややわかりにくいが、改革政治のもとで地方官として務めな

ければならない葛藤が詠み込まれている]

■【04-1-005】再和

【解題】李杞(りき)が上の詩にまた和したので、さらに和して返した。

【訳文】

東は海を望み、西は湖を望む。

水は遠くにまであり、

山は遥かなところへと平らになり、

細く細く無に返って行くのだろう。

私の如き野人(やじん)はここぞとばかりに釣り糸を垂れ、

知事殿は寛大にも飲んで歌うもよろしかろうと大目に見てくださる。

しかも、皇帝の恩は我が妻子にも及んで、

十分に食べて、暖かく眠れるので、

才能のある方々が忙しくしておられる傍らで、

拙い私は楽しく過ごしていられる。

出掛けるときに連れはなく、私の籃輿(たけかご)が一つだけで、

もともと脚の力はあるから、

岩を踏み峠を越え、山水を巡り巡り、

三百六十の寺を回り回って、倦むことがない。

詩についていえば、

ほんのとば口のところをうろうろしているだけであるのだけれど、

博打(ばくち)で憂さ晴らしをするよりは賢いように思う。

貴君の詩才ときたら優れ者が百人も集まったようなもの、

朝から始めて日がまだ高いうちに千篇も作ってしまい、

西湖のあたりを行き来して貴君が得た佳句を唱えるならば、

西湖を描いたどれほどの名画だって見る必要がない。

貴君の詩稿を納めた函にはそうした宝物がどっさりあるだろうから、

私と唱和したところで、錦繍と雑草とではどうせ釣り合わないからと、

物惜しみをしないで出していただきたい。

貴君と競っても勝ち目がないからと、

さっさと逃げることはしないし、

負けても、いつまでもしつこく悔しがったりすることもないから……

■【04-1-006】遊霊隠寺、得来詩、復用前韻

【解題】霊隠寺を訪れると、李杞からまた和した詩がきたので、さらにまたまた和して返した。上の詩で、朝から作り始めて日暮れにならないうちに千篇も詠むとあったけれど、二人ともまさに早業であった。霊隠寺は、西湖の南東の霊隠山にある有名な寺である。

【訳文】

さあ、銭塘湖[西湖]をよく見るがよい、

ここにはもはや銭王[呉越国の王であった銭氏]の勇壮な姿はない。

数々の建物を、金や珠を秤で量って飾りつけた栄華も、

運が尽きてしまっては、

降伏を促す短い手紙を送りつけるまでもなく、

銭王は宋の皇帝にもとに馳せ参じなければならなかったのだ。

銭王に仕えていた官員は家族を連れて散り散りになってここを去り、

当時の宮殿はいまは私のような閑人が楽しむところとなっている。

盛と衰、哀と楽、これらは一瞬にして入れ替わるものであるから、

憂いばかりが多いと心を鬱屈させるまでもないだろう。

山はどこでも廬を建てて隠れるのによく、

とりわけ霊隠山は、天竺より仙霊が飛び来ったところであるのだから、

どこよりも愛すべきである。

聳え立つ松は百丈の蒼い髯を垂らし、

ざわざわ揺れてばかりいる柳や蒲を下に見て笑っている。

寺の高い堂で食事をするのは千人の僧、

朝に夕に鐘を撞き太鼓を撃ってまことににぎやかである。

香の籠った方丈で眠るなら、

粗末な敷物も豪奢な絨毯に勝る心地がする。

清らかな風によってはっと目覚めると、

羲皇[伝説の太古の王]の時代にいたような気分が残る。

寺から帰るときには、

鴉はことごとくに山へと飛び去ろうとしていて、

沈む夕日が、ぽつんと浮かぶ雲に向かって光を投げかけている。

この光景はもはや言葉で言い表すことはできない。

■【04-1-007】戯子由

【解題】弟に送った詩。題に「戯れ」とあるのは、むしろ本心を率直に明かしたと見

てよいのだろう。詩の冒頭に「宛丘先生」とあるのは、陳州にある小高い丘の名に掛けて、背の高い弟に付けたあだ名である。

【訳文】

宛丘先生の背の丈は丘のように高いのに、

宛丘先生の学び舎は小舟のようにちっぽけである。

立って書物を音読するときには頭を低く垂れねばならず、

ふいに欠伸でもしようものならごちんと天井に頭を打ち付けてしまう。

風が吹くと、カーテンがまくれ上がって顔に雨が降り注ぐありさまで、

傍らの人は気の毒がってくれるのだが、

宛丘先生には意に介するところがない。

大飯食らいの独活の大木と笑われようとも、

雨に立ちん坊の案山子と嘲われようとも、

宛丘先生は気にもとめない

眼の前でごちゃごちゃいさかいが起こっても、

目、耳、鼻、口、心、知の六つの穴のコントロールが自然にできているから、

宛丘先生は天に遊ぶ心地でいる。

宛丘先生は一万冊の本を読んでいても、その中に実務書はないので、

皇帝陛下が古代聖天子の堯や舜の政治をなさるお手伝いをする技術は持っていない。

世間には勤労を促す指令が飛び交っているのに、

宛丘先生は塩をふった韮さえあれば十分だと、

のんびり老年を迎えようとしている。

門の外で何があろうと目をくれず、

頭を垂れて書物を読むだけで、

気持ちは少しも屈しないのである。

ところが、杭州の副知事様ときたら、

何の功績もないくせに、

長さ五丈の大きな旗を振り回せるくらいの大広間で大胡坐をかき、

屋根は遥か上にあるから、雨音なんぞは聞こえないし、

部屋数がやたらとあるので、屋内で風が渦を巻くほどだ。

これまでは顔を赤らめてできなかったようなことも恥じることなく行い、

疲れ切った民衆に平然と鞭打ちの刑を食らわせている。

道で威張りん坊の政治屋に出会えば、

へいこら挨拶し、

心の中ではよろしくないと思っても、いそいそ言い付けに従ってしまう。

暮らしは高く、その代わり志は低く、

それで何がよいのかというと、

意気を縮小させて、残らず消し去ってしまおうというわけだ。

文章を書くなどはごくごくつまらない技で、

世の模範となるようなことはないと見切ってしまった。

宛丘先生と副知事様はもとは並び称されていたのだけれど、

二人はそれぞれにこんなみっともないありさまになって、

はてさて、どちらがましなのか、

もののわかる人に判断してもらいたいものである。

【補足】［(1)「実務書はない」と訳したあたりの原文は「読書万巻不読律」［読書万巻律を読まず］で、「律」とは法律関係の書物である。このとき進行中の改革におい

ては、法や制度に精通して実務能力に長けた人間を重用していた。(2)「威張り坊の政治屋」と訳したのは、原文では「陽虎」で、孔子と同じ時代に専横な振る舞いが多かった実力者の陽貨のことである。この詩で「陽虎」は具体的に誰を指すのかと詮索する必要はないだろう。このときの直接の上司は杭州知事の沈立で、必ずしも良好な関係にあったわけではないようだ。知事の立場からしたら、蘇軾は都から追い出された要注意人物でありながら、類い稀な才能の持ち主で早くも杭州の人々の耳目を集め始めていたのだから、これからどうなることかと冷や冷やものであっただろう]

■【04-1-008】与林子中

【解題】林希［字は子中］に宛てた手紙。林希と蘇軾は同じ年の科挙で合格した「同年」の間柄で、このときは父の喪に服して故郷の福州に帰っていた。福州は杭州よりもさらに南で、南東方向に遠く台湾を望む海辺の町である。林希の名はこの後ときどき見るようになる。

【訳文】

別のお手紙によって、大きな事[父の葬儀]を終えられたと知りました。一族の皆様がお集まりになって、費用は少なくはなかったことでしょう。貴君はふだんは衣食がわずかに足りれば十分というお暮らしでありましたが、このたびの変化を経て、さぞ窮迫されているであろうと、そのありさまを想い描き、空しく憂うばかりであります。しかし、御兄弟[弟の林旦も官員になっていた]でいつまでも困窮しているようなことは決してありませんでしょう。天下には飢えと寒さに耐え偲ばなければならなかった人々は大勢いましても、必ず心がほどける変化があるものです。世俗の人は苦労は悲しむものとしていますが、苦労は買ってでもせよともいいますから、苦労の味わいを知るのはきっと早い方がよいのでしょう。

……[以下、林希からの手紙で問い合わせてきた薬方について、楊檜、単驤、文同の名を挙げてコ

メントしている[楊檜は官員仲間、単驤は当時有名な医者、文同は蘇軾の親友]]……

私は都にいたときに詩を作るのを断ちましたが、近ごろはまた行うようになりました。これよりほかに懐いを遣るものがないからで、きちんと書き留めたりはしておりません。詩を御覧になりたいとのお求めではありますけれども、少々の御猶予をいただきたく思います。

■【04-1-009】浪淘沙

熙寧5［1072年］、蘇軾37歳。

これは詩ではなく詞、「浪淘沙」は楽曲の題名。「城外探春」というサブタイトルが付けられている。春らしく和やかな雰囲気に満ちた作品で、それが詞という形式にぴったり合っているのだろう。

【訳文】

昨日出東城。[昨日出てみましたのは町の東])

試探春情。[試しに探ってみましたのは春の情]

牆頭紅杏暗如傾。[塀の上にしだれかかると想見されたのは紅い杏]

檻内群芳芽未吐、[花々の芽はまだ内に秘められて出てきてはいませんでしたけれど]

早已回春。[早くもここに春は回り返ってきているのです]

綺陌斂香塵。[今日は鎮まりましたよ、香るような春の塵も]

雪霽前村、[雪の後で晴れ上がった前の村]

東君用意不辞辛。[辛いことも用意しているのが春の神様]

料想春光先到処、[春の光が最初にやってくるところ]

吹綻梅英。[そこにほころびるのはきっと梅の花なのです]

■【04-1-010】越州張中舎寿楽堂

【解題】杭州の南には古くから栄えた越州があり、そこの知事の張次山の求めに応じてこの詩を作った。蘇軾は越州に実際に行ったわけではなく、張次山が官舎の西南に建てた寿楽堂のありさまを想像して詩を詠んでいる。張次山も新法に反対して地方に出ていた。

【訳文】

青い山のきりっとした姿は、

高潔な人、「高人」に似ている。

高人は普通はのこのこ役所なんぞに顔を出したりはしない。

高人はもとから山と縁が深い。

だから高人の庭には招かなくても山が揃ってやってくる。

越州の東側には、竜が伏せるようにして山がわだかまっている。

竜の股のあたりに、越州の町の家屋が甍を並べる。

山に背を向けているなら、山がないのと同じで、

美しい毛皮を裏返しに着るようなものだ。

張知事の眼は自然の奥の奥を見抜き、

ここの荒れ地を巧みに拓いて建築物に変え、

その中で顎を撫ぜつつくつろいでいるだけで、

越州の秀抜な十の風景の内の五つをここに集めてしまっている。

張知事は才能が豊かであるのにすべきことが少ないので、

暇であるのを嫌いつつ、

山の上で靄や霧が風や雨に変化するありさまを伏して眺めるのである。

かたわらで筍が玉の箸のように地面から突き出し、

桑の実が簪のように連なって稔る。

張知事は無理にも酒を飲み、

山々をここに招き入れて、主人として振る舞おうとする。

このような楽しみを、

年少の者が早くから知ってしまうのも悪くはなかろうと思っている。

ただ、恐れているのは、

自然の楽しみを多く取り過ぎているではないかと、

造物者に訝しく見られてしまうことだ。

春はこまやかにして、

午後の明るい窓辺で眠りが十分に足りると、

ちょうどよい具合に入った茶があればと張知事は思うのである。

■【04-1-011】与文与可

【解題】張次山の寿楽堂に刺激されたわけではないだろうけれど、蘇軾はこのころに庁舎の近くに鳳咮堂を建てるのを思い立ったようである。そして親友の文同［字は与可］［→作品番号 03-3-014 など］に鳳咮堂について詩を詠むよう求めた。これはその手紙。

【訳文】

官舎は鳳凰山の下にあります。この山はまことに鳳凰のようで、両方の翼があって、翼の上にはそれぞれ塔が建っています。鳳凰の嘴がちょうど落ちるところに池があり、かつてそこに山から落ちるようにして

一つの堂がありました。近ごろ、それを葺き直して、鳳咮堂と名付けました[咮はくちばしの意味]。よって詩を求める次第です。

山の上には多数の怪石があり、百個余りを採取しましたので、鳳咮堂の東の書斎のあたりに重ねて山を作り、そこに水を引き、濺玉斎と名付けます。鳳咮堂の後ろに真四角の庵を建て、方庵と名付けます。石を重ねた山には一つの峰を作り、月形の穴を開け、月岩斎と名付けます。

【補足】[(1) 文同には、鳳咮堂、濺玉斎、方庵、月岩斎を詠んだ詩が残っている。文同は遠く離れた蜀の地で、やはり想像で詩を詠んだのである。士大夫仲間はこうした詩を贈り合って楽しんでいたのである。(2) 杭州の町の西側には西湖があり、町の南側から、西湖の南、そして西方には山地が連なり、呉山、鳳凰山、霊隠山、南屏山など数々の山がある。蘇軾は詩文において、個々の山の名を区別して用いていることもあれば、山地全体を一つの名で代表させているようなこともあり、それを区別するのは容易ではないので、我々としては町と湖を山々が取り囲んでいるというぼんやりとした認識で十分であろう]

■【04-1-012】姚屯田挽詩

【解題】姚闢という官界の先輩が亡くなったので、その挽歌を詠んだ。姚闢について詳しいことはわからない。

【訳文】

京口の耆旧[年配の先人]は年々衰えゆき、
高人[高い倫理性を保った人]が喪われるたびに路行く人も悲しむのだった。
漢の時代に、韋賢は先帝の師だったことで宰相に任じられた、
そのように先賢を大切にすることはとんと聞かれなくなった。

貧の病にあっては、善をなす楽しみだけを知り、

ぶらぶら歩きをしつつ、官を棄てるのがむしろ遅かったと恨むのである。

お別れしてからの七年はまさに夢のよう、

痩せた鶴のような蕭然としたお姿をありありと思い出すことができる。

【補足】［(1) 姚闢は京口［潤州、鎮江］の人。別れて７年とあるのは、蘇軾が父の喪に服すために故郷に帰った船旅の途中で潤州に立ち寄って会っていたのだろう。

(2)「痩せた鶴」は、孤高の老人の形容として頻繁に用いられる］

■【04-1-013】送岑著作

【解題】蜀に帰る岑象求を見送った詩。岑象求は旅の途中で杭州に立ち寄って蘇軾に会ったのであろう。

【訳文】

懶くしている人は、静かであるのに似ている。

しかし、静かである者が懶いわけではない。

拙い人は、真っ直ぐであるのに似ている。

しかし、真っ直ぐである者が拙いわけではない。

岑先生は静かでありかつ真っ直ぐであって、

時の流れに応じて柔らかく伸びたり縮んだりしている。

私は全くもって岑先生のようにはなれないけれど、

気持ちが通じ合って余りある歓びがある。

私は元来は世間に背を向ける人間ではないのに、

どうも世間とずれてしまう。

林の奥に迷い込んでしまった鳩よりも拙く、

氷の底に閉じ込められてしまった魚よりも懶くしている。

それで、人は私の脳味噌が腐っていると笑う。

先生だけは、私の愚かさを憐れんでくださる。

真っ直ぐな者も、時に適えば信(まこと)を尽くそうとし、

静かな者も、終わりまで同じ場所でじっとしているわけではない。

私が懶く拙いのは薬も効かない病のようなものだ。

先生が出発するに臨んで妙に酒が薄いのは、

別れの涙が混ざるからなのだろう。

これからもう二度と会えないわけではないにしても、

先生も私も、今後のことは皆目見当もつかない。

確かなのは、

故郷を想う私の夢は、

先生の後に従って蜀(しょく)の我が家へと行き着くということ。

■【04-1-014】雨中明慶賞牡丹

【解題】杭州(こう)での初めての春はいよいよ深まり、蘇軾は雨の日に、杭州の町の北側にある明慶寺(めいけいじ)を訪れて牡丹を見た。

【訳文】

静かに降り注ぐ雨、

しっとりと濡れて、

牡丹は清らかにも美しく、

御仏(みほとけ)に捧げる燈火(ともしび)のように燃えている。

明日は恐らくは花曇り――

花はなお見ごろを保つだろうから、

興平酥(こうへいそ)はまだまだおあずけのままだろう。

【補足】[最後の句は説明がないとわからない。「興平酥(こうへいそ)」は菓子の名。昔、ある風流人は、牡丹が咲くと花を切り、それに金鳳箋(きんぽうせん)という上質の紙に歌を記したものと興平酥を添えて親類や友人に配った。受け取った人は花が散るまでは花を眺めて楽しみ、散った後で興平酥を炙り花を偲びつつ食べた。つまり、明日はまだ花が散らないだろうから、「花より団子」の「団子」がなかなか食べられないというジョークである]

■【04-1-015】吉祥寺賞牡丹

【解題】杭州(こう)の吉祥寺(きちしょうじ)でやはり牡丹を見た詩。このときは州知事の沈立(ちんりゅう)と一緒だった。

【訳文】

人は老いると羞(はじ)らいを忘れ、

花を簪(かんざし)の替わりに差して若ぶろうとする。

花の方では、老人の頭に載せられるのを、

きっと羞らっているに違いない。

その上、べろべろに酔って、

人に助けられてやっとのことで帰ってきた。

そういえば、道沿い十里の間、

どの家も簾(すだれ)が半ば上がっていたのは、

さだめしそんな姿を覗き見て笑っていたのだろう。

【補足】［(1) 州知事と副知事が牡丹見物の帰りに酔態をさらして街中の見世物になったとユーモラスに詠んでいる。このとき蘇軾は 37 歳で、「老人」というにはさすがに無理があるのだが、詩の世界では、実際以上に自分を老いた者として表現することが少なくない。(2) この詩のユーモアを沈立知事が喜んだかどうかはわからない。謹厳実直な人ならむっとしたであろう］

■【04-1-016】吉祥寺僧求閣名

【解題】同じときに、吉祥寺の僧に閣の名を求められてこの詩を詠んだ。

【訳文】

人の世の栄枯盛衰が眼を過るのは、

あたかも電光が風とともに来ては去るかのようで、

花が紅を保つよりもさらに短い。

上人は閣に坐して、

色［物質的存在］を観て空を観て、「色即空」を観るのであるから、

「観空閣」と名付けるのがよいであろう。

■【04-1-017】牡丹記叙

【解題】蘇軾が沈立知事とともに吉祥寺を訪れて牡丹を見たのは 3 月 23 日であったとこの文章から知ることができる。

【訳文】

熙寧五年三月二十三日、私は知事の沈公[沈立]に随って吉祥寺の僧の守璘の圃で牡丹の花を観た。圃中には千本の花があり、その品種は数十余りもある。酒酣で音楽を催すと、町の人々が大勢集まってきた。金の槃、彩なす籃で座中の者に酒食や花を振る舞ったところ、その相手は五十三人に及んだ。酒を飲んでの楽しみはいよいよ甚しく、もともと酒を飲まない者までも酔った。

かくて駕籠を担ぐ者も食事の給仕をする者も皆が花を頭に挿して知事に従って歩いたので、それを観る者が数万人にふくれあがった。

翌日、沈公は『牡丹記』十巻を出して客人に見せた。牡丹に関する言い伝えや、栽培の仕方や、古今の詩歌や、怪奇小説に至るまですべてがそこに集められていた。

私は花が最も盛んなありさまを観て、州の人々が遊び楽しむさまを観て、そしてこの書物が極めて広く深く徹底しているのを観た。この三者はいずれも記録に残すに値することであって、沈公は『牡丹記』の冒頭に文を記すよう私に求めたのだった。

そもそも牡丹の花が重んじられるようになって三百年余りになり、妖を窮め麗を極め、天下の観るべき美を独占するほどになった。近年は特に姿かたちを変えたものが百出するようになり、新奇なものを追う人の好みに合うよう努めて作られたものはいちいち数え挙げられないほどにある。それらは草木の中でも智巧便佞[猿智恵のごますり]の者というべきであろう。

いま沈公は老成されて徳を重んじられ、その一方で私は愚かな迂闊者で、世の中にこれほどまでに違う二人はいないのであるが、この書物にはどのような人にでも当てはまるよう花のことが記述されている。唐末の皮日休は、宋璟[唐代半ばの名宰相]の人となりは心が鉄のようで腸が石のようでありながら、宋璟の作った『梅花賦』が艶やかで南朝の軟弱な文体であるのを訝しく思っていた。私はそれを観て、世間の目を晦まして書いたまでであって、宋璟の信を記したものでは決してないのだろう考えている。私は世間の目を晦まして沈公に代わって文章を書けるような者ではないのだが、沈公のために強いてこの文章を書いたのである。

沈公の家には三万巻の蔵書があって、博覧強記、事に遇えば書物を編み、ただ『牡丹記』だけがあ

るのではない。

■【04-1-018】戯贈

【解題】この詩はいつどのような状況で詠まれたのかはっきりとはわからない。詩の題に「戯れに贈る」とあるのは、宴席の座興として妓女に贈ったものだからなのかもしれない。沙河は杭州の町の東の外側を流れる川で、両岸には家が密集していた。

【訳文】

人を思い悩ませるもの、

それは沙河の十里の春、

ひとつの花が開き終われば、

また一つの花が咲き始める。

小さな二階屋は昔のままに夕日の中にあるが、

そこで舞っていたかの人を見ることはできない。

■【04-1-019】和劉道原見寄

【解題】故郷の廬山に帰っていた劉恕［字は道原］［→作品番号 03-4-007］から詩が送られてきたので、それに和して返した。

【訳文】

佳き時代へと向かいつつあるのに、

貴君が世に容れられないのを怨みはしないが、

残念でならないのは、

我が道が貴君とは別れて東に向かってしまったこと。

貴君のもらす一言は、

権威者を懼れさせるのに十分であったのに、

貴君が帰ってしまったために、

北の野[朝廷のこと]にはしかるべき馬がいなくなってしまった。

孤独の鶴は、

鶏の群れのように一斉に夜明けに鳴いたりはしない。

いま群がっている烏どもは、

黒いばかりでまだ雌雄を見分けることはできない。

盧山は昔から行くのが難しいとされているところ、

いつか貴君とくまなく道を窮めたいものだ。

【補足】[鶴や鶏や烏は当時の官界の人々の隠喩であるのだろう]

■【04-1-020】和劉道原寄張師民

【解題】劉恕［字は道原］が張師民に寄せた詩に和した。張師民は官員の子で、劉恕や蘇軾とどのような交遊関係があったのかはよくわかっていない。

【訳文】

仁義とは、行くべきところへの一番の近道、

詩はその道しるべ、書物は宿屋となるべきもの。

世には高官のしるしとなる飾りをやたらと誇りながらも、

口では『詩経』の句をさも有難げに唱える輩がいる。

梟は腐った鼠を奪われまいと威嚇するが、

白鳥は高く大空の彼方を目指して飛ぶだけである。

頭のおかしな連中は呼び醒まそうとしても無駄、

酒が尽きればだんだんとしらふにもどるであろう。

【補足】［(1) これも当時の官界のありさまを批判する寓意があるのだろう。(2) 劉怤から送られてきた詩は 3 首あって、以上の他に歴史を題材に詠んだものもあり、蘇軾はそれにも和している。劉怤も蘇軾も歴史に精通していたので、詩は種々の故事を踏まえた判じ物のようで、訳すのはかなり難儀で割愛する］

■【04-1-021】送張職方吉甫赴閩漕六和寺中作

【解題】張吉甫という人物が南方の閩［福建］に赴任するに際して杭州に立ち寄ったので、六和寺で見送ったときの詩。

【訳文】

羨むのは、

貴君が超然とした鸞［鳳凰］や鶴のようであること。

江湖へと下ろうとして［杭州に立ち寄ったことをいう］、

また飛び去ってゆく。

ここに留まってくれないのを、

この地の人々は空しく怨むのである。

七閩の路は青い山のそのまた向こう。

六和寺の門前の水はここを去って、

あるいは天に翔け上がりもするのか。

貴君はこれより大河の流れのように日に千里を行く。

六和寺の後ろの池は碧の玉の環のよう。

私はその水のように千山の底に留まっているのである。

■【04-1-022】和子由柳湖久涸、忽有水、開元寺山茶旧無花、今歳盛開

【解題】陳州にいる弟から近況を記した詩が送られてきたのでそれに和した。弟の詩には、柳湖［→作品番号 03-4-016］の水がしばらく涸れていたのが急に増水したり、開元寺の山茶はいままでは花がなかったのが今年はにわかに満開になったりとか、幾つかの異変が記されていた。

【訳文】

其の一

陳州の名所、太昊祠の東、鉄墓の西に、柳湖がある。

かつて一樽を携えて君とそこに遊んだ。

振り返れば、南に、官舎の欄干が連なり、

前を見れば、北に、船の帆柱が突き出ていた。

その時、僕と君とは、

豆を啄み、草の実を食べる二羽の水鳥のようであった。

柳湖が涸れてしまったので、

昔からの言い伝えに従って、

君は川の水を口に含んで吐き出してみたのだろう、

たちまち雨が降って、

大空には虹がかかったのだった。

柳湖に水が戻っても、

僕がいないのでは喜びをともにする者もなく、

君を堤へと誘い出すのは、

花の下でころころと鳴く鳥だけなのだろう。

【補足】［鉄墓については作品番号 03-4-023 で見ている］

其の二

開元寺の長明燈の下の石の欄干も、杉や松も、

寒い冬にも姿を変えずに、長い歳月を経てきた。

山茶もまた、葉は厚く、枝は堅固のままに保ってきたのだが、

にわかに鶴の頭のような丹い花を無数に咲かせたのだった。

寺に注ぐ雨を久しく受けてきた山茶は、

先生［蘇轍のこと］が盤に載るのは苜蓿だけのような質素な暮らしをしているのを見て、

我が花でもって慰めようとしたのだろう。

雪のうちから盛んに開いたのは、

来年になってからでは見てくれる人がいないと恐れたのだろう。

【補足】［最後の句は、そろそろ蘇轍は陳州を去るであろうという意味なのだろう］

■【04-1-023】与堂兄

【解題】従兄の蘇不疑［字は子明］［→作品番号 03-4-009 など］への手紙。

【訳文】

……弟からは常に手紙がきていて、非常に安らかに過ごしております。私のもとでは、四月四日に男の子を授かりました。元気に育っていて、似叔と名付けました。

蘇林の妻と子の彭と寿も元気にしております。兄上[蘇不疑]と楊宗文君[郷里の人]のお考えをしばしば語って聞かせており、近頃ようやくそれに従おうとする気になってくれています。まことに穏便に事が進みそうです。……

ここのところ、公私ともに暇がありません。ここでは都と同じくらいに物価が高く、与えてくれる農地はわずかしかなく、公庫は逼迫しつつあって、配られるものは雀の涙です。好い味わいがあるのは西湖だけです。役法も塩法も皆新しくなり、盗賊が縦横に起こり、上下ともに困り果てて、役人も民衆も休息する間がありません。……

【補足】[(1) この手紙では大勢の親族について触れているが、あまりに煩瑣になるので多くを割愛した。(2) 4 月 4 日に生まれたのは三男の蘇過［幼名が似叔］である (3) 不幸にして若くして亡くなった蘇林［→作品番号 03-3-028］の妻については、どうやら郷里の楊宗文［字は君素］の親族との再婚話がまとまりつつあったようだ。(4) 新法が引き起こした混乱についても触れている]

■【04-1-024】雨中遊天竺霊感観音院

【解題】4 月の雨の日に天竺山の霊感観音院を訪ねてこの詩を詠んだ。作品番号 04-1-005 で「三百六十の寺」と詠まれていたように杭州には多数の仏寺があり、蘇軾はあちこち訪ね歩いていた。

【訳文】

蚕が成虫になり、

麦の穂が半ば黄色になろうというときに、

前方の山にも、後方の山にも、

後から後から浪のように雨が降り注ぐ。

農夫は鋤をかついで麦畑に出られず、

女は籠をかついで桑畑に出られない。

観音様は好い気なもので、

このようなときにも立派なお堂でぐつろいでおられる。

【補足】［人々の願いに応じて叶えてくれるので霊感観音といわれていながら、長雨に苦しむ農民をよそに立派なお堂にのうのうとおさまっているだけだと皮肉るのは、改革を進める執行部を謗るものだと、後にこの詩は批判を浴びる］

■【04-1-025】和欧陽少師会老堂次韻

【解題】この年の 4 月に、潁州に隠棲する欧陽脩［→作品番号 03-4-024］のもとを、趙概という 80 歳になる老友が訪れた。このときの潁州知事はかつて朝廷の重鎮であった呂公著［→作品番号 03-3-025］で、呂公著は 2 人を宴席に招き、3 人が集まった建物を特に「会老堂」と呼んだ。欧陽脩は会老堂で詩を詠み、後になって蘇軾がそれに和したのがこの詩である。

【訳文】

少年のときから天下に名を馳せた方々が、

徳を積み年を経た後に、またともに逢うのは容易ではない。

聞くところでは、

趙公が上座に招かれ、

呂公が床にあって拝礼されたとか。

聞くところでは、

欧陽公は自ら箱を開いて古書を日にさらされ、

古の鼎鐘に刻まれた文字を収集されているとか。

私は官職を棄てて三公のもとに走り、

重ねて道をお尋ねしたいと思うのだが、

非力すぎて、筵でもって鐘を撞くようなとんちんかんなことしかできなのだ。

【補足】[結びの部分は、訳者にはここでの故事の用い方が理解できていないので、ひどいこじつけの訳である]

■【04-1-026】和欧陽少師寄趙少師次韻

【解題】これは上の詩の続きで、欧陽脩が趙概に寄せた詩に和したもの、

【訳文】

欧陽公の朱塗りの門には、

訪れる人もいないので、

啄木鳥の突いた穴が開いている。

そこへ千里の彼方から飛びくる燕のように、

趙公がやってこられた。

趙公が百回呼んでも、

欧陽公の家は氷のように静まり返って、

返事がなかった。

欧陽公は昨日会ったのと変わらずに趙公を迎えたが、

親しかった友の半ばは世を隔ててしまっているので、

二人が向き合うのを見て、

傍らの人々は驚かずにはいられなかった。

近頃では、世間の人は、濃い酒のようにべたべたした付き合いをしている。

真の友情は春の雲のように淡いものだ。

二人の声は凛凛(りんりん)として和し、

しかしながら、それは互いに相手に合わせようとしているのではない。

心は長く親しんでいても、上辺を揃えようとはしない。

二人の白い髪と白い髭が向き合うのは、

松の間に二羽の鶴が佇むかのようだ。

二人がやりとりする清らかな句は、

雪の中で鴻(おおとり)が鳴く声のようだ。

いつしか私もお二人のような自由の境地に至りたいものだ。

【補足】［この詩の結びの訳も上の詩と同様である］

■【04-1-027】和蔡準郎中見邀遊西湖三首

【解題】蔡準(さいじゅん)がある人に呼ばれて西湖(せいこ)で遊んで詩を詠み、それに蘇軾が和した。蔡準がどのような人かというと、宋代(そうだい)の歴史をいくらかでも知る人には、蔡京(さいけい)の父だというのがわかりやすいだろう。蔡京は徽宗(きそう)皇帝とともに政治を弛緩させ、北宋を滅亡へと向かわせたとしてすこぶる評判の悪い人物。ただし、全くの無定見ではなかったとして敢えて再評価しようとする歴史家もいる。蘇軾のこの詩は、3 首とも、幽、秋、洲、浮、留、休という韻字を共通して用いている。そのことが日本語でもわかるようにやや無理をして訳してみた。

【訳文】

其の一

夏のいま、湖に漲(みなぎ)り溢れる水、

その豊かな幽(おくふか)さ。

西からの風が木の葉を落とすのは、

芙蓉(ふよう)の花の秋。

冬には、雪雲が暗く空を塞ぎ、

春には、水から蒲(がま)の新芽が突き出るのは、柳の若葉の洲。

湖上の四季は見て飽きることがなく、

人の一生もまたこのように何かに浮かぶ。

顔をほころばして笑う機会はそうあるのではなく、

酒があると招いてくれるのならそこに留まろうか。

あなたは見るがよい、

この地にさまよいきた一人の役人が、

朝に囚人を獄に入れ、夕方には罪を決定しなければならず、

誰かが呼んでくれるのでなければ、

休んではいられないのを。

其の二

町中の人は実は知らない、

この西湖(せいこ)の幽(おくふか)さ。

つまりは、夏の蝉には語ってもわかってもらえない

蝉が見ることのない春と秋。

だからといって、町中に西湖を置いたのでは、

あたかも山の鹿を無理に遊ばせる水辺の洲。

しかし、道を窮めた高人は無心であるのだから、

所を得ればしばらく止まり、流れを得ればしばらく浮かぶ。

古い友人や高い位の人も高人を引き留めることはできず、

ただ心に適うのならいつまでも留まろうか。

あなたは見るがよい、

官を擲った陶淵明がいうには、

「琴に弦がなくても楽しめるし、酒は頭巾に受けたってよいけれど、

　客人には引き取ってもらわないと、

　酔っても休んではいられない」と。

　其の三

田圃の間を流れる引き水、

その音の幽さ。

まだ稲の苗を植え終わらないうちに、

麦はすでに秋。

手を携えあって竹の寺に遊んで筍を焼き、

下って船を浮かべるのは蓮の花の洲。

舳先では獲れたての魚を細かく刻み、

船尾では玉のような米を炊く香りが浮かぶ。

風に吹かれてたっぷり食べてゆったり眠れば、

あえて細かなことなど胸の内に留まろうか。

あなたは見るがよい、

憔悴の時にある壮士が、

餓えては食べることを謀り、渇いては飲むことを謀り、

功名は時に巡り合わねばならないので、

休んではいられないのを。

【補足】［中ほどにある「船頭斫鮮細縷縷、船尾炊玉香浮浮」［船頭鮮を斫り細くして縷縷、船尾玉を炊ぎて香りは浮浮］は、西湖での舟遊びの楽しさを生き生きと描写した句としてよく知られている。あたかも現代の屋形船での遊びに通じるものがある］

■【04-1-028】六月二十七日望湖楼酔書五絶

【解題】蘇軾は杭州にきてまだ半年余りであるのに、西湖を詠んだ詩として歴史に残る名品をいくつも作ってゆく。これは西湖の畔の望湖楼で詠んだ 5 首の七言絶句。望湖楼はその名の通り、湖を望みみる好処に建てられた楼閣。

其の一

墨をひっくり返したような黒い雲が、

山を遮って隠してしまうよりも前に、

白い珠がはじけ跳んで、

船の中へと雨粒が入ってくる。

大地を巻き上げて風が押し寄せ、

たちまちどこかへと通り過ぎる。

そして、望湖楼の下に、

あたかも青空が広がるのだった。

其の二

西湖(せいこ)は放生(ほうじょう)の池、

魚も亀も人を恐れずに近寄ってくる。

至るところで誰のものでもない蓮の花が開く。

水を枕にすれば、

山が上を向いたり下を向いたり――

風に船を任せれば、

月とともに徘徊する。

其の三

銭に糸目を付けずに、

黒い菱(ひし)やら白い蓮(はす)やらを買い求め、

緑の苴(まこも)を編んだ盤(さら)に積み上げる。

思い出したのは、

都のかの有名店で、新奇な料理を前にしたときのこと。

こちらにやってきて、

初めておいしいものをたんと食べられるようになった。

【補足】[菱(ひし)や蓮(はす)の実を人々は好んで買い求めたのだろう。都の高価な料理よりもそれをよしとする蘇軾は、やはり都をあまり好ましく思っていなかったのだろう]

其の四

粋なこしらえの檜(かい)、

花を挿したような妓女の髪飾り、

やわな風に乗って細かな雨が降りかかる。

見渡す限りの岸辺に咲く杜若。

古の歌を引いて、

あのあたりに船を寄せようと謎をかけるけれど、

今どきの女性には通じない。

其の五

田舎に隠れるのを小隠といい、

市井に隠れるのを大隠という――

まだどちらもできないので、

官職にありつつ気持ちだけ隠れるのが中隠だと、

いささかお茶を濁している。

長い暇はしばしの暇に勝るに違いなくとも、

それは得られるものではない。

私には元来定住の家はなく、どこへでも行く。

だからこうして出会えたのだ――

我が故郷にはないこのすばらしい湖と山に。

【補足】[最後の 2 句「我本無家更安往、故郷無此好湖山」[我に本より家は無く更に安にか往かん、故郷に此の好き湖山は無し]は蘇軾の新しい人生観を詠んだものとして深く味わいたい。官職に就くために都に上った旅の途中の荊州では、蜀の人間であることを強く意識した詩を詠んでいた[→作品番号 01-2-023]。この詩では、故郷にないすばらしい湖と山がここにあると詠んでいる。「飛蓬」[→作品番号 03-4-027]を肯定的に捉える哲学がこうして強められて行くのである)]

■【04-1-029】七月一日出城舟中苦熱

【解題】上の詩で「中隠（ちゅういん）」をしていると詠んでいたけれども、取り組むべき公務はもちろん多々あり、7 月 1 日から郊外の諸県を巡って歩く出張の旅に出た。7 月 1 日は昔の暦では秋の最初の日。しかし、杭州（こう）はまだまだ暑さの盛りで、北方の気候に馴れていた蘇軾の身体にはかなりこたえたようである。

【訳文】

涼しい風よ、きておくれと、

呼んでもちっとも吹いてくれない。

全身が流れる汗で覆われる。

蓮の間を過ぎるときも、

香りは入ってきてくれても、

暑さは変わらない。

眠りたくても眠れないので、

いらついて枕を動かすと、

鯉や鮒を驚かせてしまう。

やたらと欠伸（あくび）が出るのは昨日の酒が残っているせいなのか。

仕方なく、座り直して川の水で顔を拭おうとする。

空に明滅する星の数は次第に稀になりつつあり、

なお暗い水の上に微かな光が流れる。

火のような夏の暑さは今も勢いが盛んで、

月のしずくの涼しさに洗われるようにはならない。

このちっぽけな身はどこに行こうとしているのか。

東方が明るくなるのを待つだけである。

■【04-1-030】宿余杭法喜寺、寺後緑野堂、望呉興諸山、懐孫莘老学士

【解題】蘇軾は杭州の町を出て西に進み、余杭県の法喜寺に宿泊した。寺の後ろに緑野堂があり、北に呉興［湖州周辺］の山々を見晴らすことができた。この詩は、湖州知事の孫覚［字は莘老］のことを思って詠んだもの。孫覚は官界の先輩で、かつて蘇軾とともに朝廷にいて若干の親交があった。

【訳文】

ぶらぶらと秋の野原を行くと、

晩照の中に涼しさが感じられる。

水は流れ続け、天は尽きるところがない。

遠く人を思う心もまたどこまでも窮まるところがない。

ここは、秦の始皇帝が波に阻まれて、

船を杭に繋いで降りたところだとか。

始皇帝は自ら統一した中国を見てまわる旅の途中であったが、

始皇が犯した過ちは、書物を見れば明らかである。

ここの西北にある舟杭山は、

大洪水のときに舟を山上に繋いだところだとか。

その大洪水を鎮めた禹［古代の聖君主］の功績は、

いまのこの豊かな風光を見ても明らかである。

稔りを迎えた稲に風が吹き寄せ、

そこに蛙が鳴き出し、

豊かに垂れ下がった柳の葉は、

ところどころ虫に食われた書物のようになっている。

蓮の葉が翻って白い裏側を見せ、

蓮の花は雨に当たって紅い色が褪せつつある。

このようにして懸命に句を求めているのは、

詩を習い始めたばかりの子供ようであり、

かつて楽しかった遊びを思い出しているのは、

寂寞を慰める老人のようである。

北を望めば、

苕溪(ちょうけい)の流れは向きを変えつつ、

遥かに震沢(しんたく)[太湖](たいこ)へと通じているのだろう。

昔、魚を烹(に)ようとして腹中から手紙を得たという話があるが、

この詩は魚に託した手紙なのです――

「紫髯翁(しぜんおう)殿はお元気でありましょうか」

【補足】[(1) 苕溪、太湖は湖州の近くの地名。(2) 最後にある「紫髯翁」は、長い髯が自慢の孫覚(そんがく)のこと。孫覚とはこの年の末に会うことになる]

■【04-1-031】宿臨安浄土寺

【解題】余杭(よこう)県から臨安(りんあん)県に至り、町の南にある浄土寺(じょうどじ)で休息した。

【訳文】

鶏の鳴き声とともに余杭(よこう)を発ち、

浄土寺に着いたのはすでに正午。

参禅するほどの熱意はなくとも、

何はともあれ、

腹を満たすお勤めだけは果たさなければならない。

腹がくちくなると、

ここのところ眠りが足らないので、

風の入ってきそうな庵を急いで片付けさせ、

ぴたりと門を閉ざす。

何もかもが静まり返って、

時を測る香の煙だけが真っ直ぐに上る。

目が覚めると、

岩の清水を汲んで紫筍という名のまろやかな茶を湧かす。

涼しくなった夕方時分に沐浴し、

髪を梳かすと、毛は衰えて、残りの本数を数えられるほどだ。

詩を吟じつつ門を出る。

村は夕暮れの色に染まっている。

細い月が山へと傾き、

蓮の葉が揺れて互いに露を注ぎ合う。

石橋の上に佇み、

古い友人と夜長を語り合う。

翌朝は、足を伸ばして山房院に入る。

輝く石の鏡が参道に置かれている。

昔この寺を建てた呉越王の雄姿がそこに映されたのだろうか。

今では山の猿や鳥が己の姿をそこに見るだけだ。

世の興廃は嘆き悲しむには当たるまい――

万世といえども、頭を挙げ下げする間に過ぎ去るものなのだから。

【補足】[山房院への参道には表面がつるつるの黒い岩が置かれて「石鏡」と呼ばれていた。この寺を建てたのは、五代十国時代に呉越国を興した銭鏐である。各地に地方政権が乱立したなかで、銭鏐は屈指の名君であった。呉越国は安定した政治のもとで飛躍的な発展を遂げ、その豊かさは宋の時代にそのまま引き継がれ、ひいては南宋の都が杭州に置かれたのだった]

■【04-1-032】自浄土寺歩功臣寺

【解題】同じ日に浄土寺から歩いて功臣寺に至った。功臣寺は呉越国のために尽くした功臣の菩提寺である。

【訳文】

葛の頭巾に夕日を受け、

羽根の団扇で夕風を入れつつ、

ゆるゆると松の間を歩み行く。

竹林を抜け、ゆらゆら揺れる橋を渡る。

横に連なる峰々は、神が鑿でうがったかのように、

巨大な岩石がここかしこに露わになっている。

呉越王が千人の匠を使って一晩で掘らせたという千人溝――

その深い崖の遥か下を細い水が流れ下る。

小高い山が寄り集まる奥の方に、

金碧の甍が輝き見えるのが功臣寺だ。

呉越国を興した銭鏐は、

もとはこのあたりの村で荷担ぎをして暮らしていた。

ほんのわずかな食を得るために、

人の股下をくぐるような恥も忍んだという。

山の岩は心なき存在ではない――

この世に稀なる男児の英気漲るありさまに、

屹立して身を震わせたという。

王となった銭鏐は、万騎を率いてこの村に帰り、

古老を招いて酒宴を催した。

かつて担いでいた荷袋の代わりに錦の袋を用意し、

金の珠を入れて貧しい人々に配った。

呉越国はすでに消え去り、

銭鏐の姿はもはや想像するだけ。

いかなる栄華も薄れて消滅し、

世の変転は急使の馬が走り行くよりも速い。

御仏の燈火だけが長く消えることなく、

本堂の内を照らし続けている。

【補足】[作品番号03-3-008で、呉越国の王の末裔の銭藻を見送った詩を見た。そのとき蘇軾は呉越国の都であった杭州に行くことになるとは思ってもいなかったのだが、杭州にきてすぐにその風光と文化的な豊かさに魅了され、銭鏐の功業を高く評価するようになったようだ]

■【04-1-033】遊径山

【解題】蘇軾は臨安県にまで至ってひとまず公務を終えたのだろう、そこから足を延ばして径山に遊び、この詩を詠んだ。臨安県の北西に天目山の峰々が連なり、その山中に至る途中に径山禅寺があった。

【訳文】

天目山から多数の峰々が下り来る。

その勢いは、

駿馬が平地に向かって駆け降り、

千里をも踏破する脚を中途で緩め、

金の鞭、玉の鐙がぐるぐると旋回するかのようである。

人はいう、山のあるところには水もまたあると、

この山にもまた太古から竜の潜む淵がある。

かつて法欣大師は天に通じる眼をもってここに王気があると知り、

荒れた山の頂に庵を結んで静かに座り続けた。

その精誠は山をも貫き石をも裂くばかりで、

天女が下って惑わそうとしても、

顔は蓮の花のように白く無垢のままであった。

大師が窓辺で足を暖めていると兎が来て、

大師が夜に水を鉢に注いでいると竜が来て、

朝早くには眉が真っ白な老人が門を叩いて、

いずれも大師の弟子になることを願った。

それから興廃を経ること三百年、

呉と会稽の地を回って金銭が集められ、

山の谷から楼閣が飛び上がり出て、

高殿が湧き上がるようにして、

ここに伽藍が立ち並び、

朝の鐘、暮の太鼓が山に轟き響くようになった。

晴れた空のもと、海に浮かぶ蜃気楼も見え、

落ちる日を受けて、林に帰る鳶を下に数えることができる。

生あるものは天と地の間にともいて、

蝋と火のようにじりじり焼き焼かれる関係にあるのだろうか。

ここのところ、世間の路の狭さをいよいよ知るようになり、

寛やかなところにきてわずかに安らぎを得ることができた。

ああ、私はもう老いてしまったのか、

すべての事を廃してしまうのがよいのか。

旧い学問を尋ねると、かえって心が茫然としてしまう。

この山中には眼病を治す竜井の水があるというから、

それで眼を洗って、

書物の細かな字を見つつ、残る歳月を銷すのがよいのであろう。

【補足】［この詩の大半は径山寺の由来を踏まえて詠まれていて、最後の部分に至って自身の心情を述べている。「旧い学問を尋ねると茫然としてしまう」とあるのは、王安石の主導のもと、学問も実用性を重んじる方向で変わりつつあるなかで、官員としての己をどのように位置付けたらよいのかわからないということを表現しているのだろう。この後、新しい学問観に基づくテキストが作られ、科挙の受験生はもっぱらそれを学ぶようになる］

■【04-1-034】自径山回、得呂察推詩、用其韻招之、宿湖上

【解題】径山から臨安県の町中に帰ると呂仲甫［字は穆仲］からの詩が宿に届いていた。呂仲甫はこのとき府よりも広域の行政区である路の役人として杭州に赴任していた。一連の出張旅行、特に径山に登ったことが一つの転機となって、蘇軾の心情にある変化が生じたようだ。杭州に戻ると、すぐには役所に顔を出さずに西湖畔に留まり、呂仲甫からもらっていた詩に次韻してこの詩を作り、呂仲甫を西湖畔に誘い出そうとした。呂仲甫は太宗皇帝と真宗皇帝のもとで宰相を務めた呂蒙正の孫であることから、呂仲甫のことを詩中で「貴君子」と呼んでいる。

【訳文】

貴君は貴君子であって、

素敵なことに、

女性を愛する以上に山を愛している。

貴君の心はいつでも一葉の舟に乗って旅に発とうとし、

夢はいつでも千の青い山々を巡っている。

貴君の新しい詩を道の途中で得て、

嬉しさの余り下駄の歯が折れたのにも気付かずにいた。

お上に仕える者は、

地位を得れば失うのを恐れ、

地位を得られなければ悲しむのを常とし、

数代にわたって官職から離れなければ、

裸足で自在に山を歩けるようにはならないものと、

昔から相場が決まっている。

私は仕事を終えて帰ってきたものの、

役所に戻る気がしなくて、湖の畔でうろうろしている。

役人としての地位の上昇下降など気にもしない。

長官に叱られることも恐れない。

思うところへ飄然と行こうとするだけだ。

そうした気持ちを共有してくれる友がいてくれるのを切に願う。

貴君にもしも湖上で一緒に遊んでくれる気があるのなら、

今すぐに町を出れば暗くなる前にここにこられるであろう。

【補足】[出張から帰ってきて、職場には気の進まない仕事と気の合わない上司が待っているとしたら、そこには戻りたくないと、誰もが思うであろう。径山寺でしばし己と向き合う時間をもった蘇軾は、種々の矛盾を抱えたまま役所に戻る気にはなれず、理解してくれそうな相手だと思って呂仲甫にこの詩を送ったのだろう]

■【04-1-035】宿望湖楼再和

【解題】上の詩にあった「寧畏官長詰」[寧ぞ畏れん官長の詰じるを]の句は穏やかではない。それを受け取った呂仲甫はかなりとまどったであろう。うっかり誘いに応じたら杭州知事の沈立との関係がまずくなってしまうかもしれない。呂仲甫は湖畔に現れず、蘇軾は一人で望湖楼に行き、同じ韻を用いてもう１首詩を詠んだ。

【訳文】

月は天性の美人に似て、

東の海から出てすぐにすでに艶やかである。

湖の上へとやってきて、さやさやと光を注ぎ、

空にも水にもさざ波が広がる。

夜の涼しさにまだ眠らぬ人がいて、

静かな山辺に下駄の音がこだまする。

詩を詠む人はもとより感じやすく、

秋を悲しみ、さらに恐れ慄く。

貴君はどうしてきてくれないのか。

貴君を待つうちに、

我が詩稿は墨やら朱やらでぐちゃぐちゃになってしまった。

今回の旅では想うところがあって、

十日の間、杭州のことを忘れていた。

ただ残念なのは思いを共にする友人がいないことだ。

詩が不出来であってもそれを指摘してもらえない。

貴君がきてくれて試しに詩稿を吟詠してくれるなら、

頭を垂れて感じ入るような詩に仕上がることだろう。

そんなわけで、この詩は書いては消し、消しては書いた結果、

紙いっぱいに、蚯蚓やら蛇やらがのたくっただけのものとなってしまった。

■【04-1-036】夜泛西湖五絶

【解題】その夜はさらに西湖に舟を浮かべ、5 首の七言絶句を詠んだ。

【訳文】

其の一

新月には魄があり、その姿は不安を感じさせる。

五、六日ほどすると、ようやく光が満ちてくる。

今夜は艶やかに半分の璧のようになり、

湖に遊ぶ人は夜中に至るまで月を見ていることができる。

其の二

夜中に向かって月は次第に垂れ、

落ちようとして落ちないときの光景がことに好い。

人間界において明日に何が起こるかなど誰も知りはしない。

蒼竜星が西に沈むのを見つめるだけである。

【補足】［この詩にある蒼竜星や、次の詩にある牛宿、斗宿はいずれも星の名］

其の三

蒼竜星が沈むと牛宿、斗宿が横たわり、

北極星が天球を回して、東に金星を昇らせる。

漁師は暁になる前に釣り道具を収め、

その船が行ってしまうと、菰や蒲に寄せる波音だけがする。

【補足】［漁師が朝になる前に漁を終えるのは、西湖は放生の池で殺生を禁じているからである［→作品番号 04-1-028 の其の二］。密漁なので人目を忍ぶのである］

其の四

菰や蒲が無限に続き、水が茫々と広がる。

夜のうちに蓮の花が開いたのか、風も露も香りを含む。

遠い寺に燈明が掲げられたのが見える。

月がすっかり消えるのを待って、「湖光」を見ようと思う。

【補足】［西湖には淡い光が湖水の上に広がる「湖光」という現象があった。発光プランクトンによるものであろうか］

其の五

「湖光」は鬼［亡霊］が成すのでも仙人が成すのでもない。

風が安らぎ波が静かになると、川に光が満ちる。

それが二つの流れになって湖の中へと入ってくる。

そして孤山へと向かうのを目で追うが、たちまち消えてただ茫然とする。

【補足】［こうして、夜を西湖畔で過ごした蘇軾が翌日には杭州の役場にちゃんと顔を出したのかどうかはわからない］

■【04-1-037】求焦千之恵山泉詩

【解題】焦千之［字は伯強］に恵山泉の水を求めた詩。恵山泉は常州無錫県にあって、唐代の陸羽が茶に用いるのに天下第二の水であると評したことから名水として知られるようになった。焦千之は欧陽脩の門弟の一人で、このころに無錫県の知事として赴任したばかりであった。この詩によると、焦千之から茶葉が贈られてきたので、合わせてよい水もほしいと所望したのである。

【訳文】

この山はきっと中が空洞で、

その腹の内は清らかな水で満たされているのだろう。

隙間に遇うと水はあちこちから現れ出るのであって、

それらの味や香りはみな同じ仲間である。

流れの深い浅いは出るところにより、

水は貯えるものに従って円くなったり四角くなったりする。

あるときは雲のように湧き出て、

あるときは切れたりつながったりする。

洞穴の中で楽器のような音を立てるかと思うと、

蒼い岩の割れ目に沿って竜のようにうねうねと巡る姿を見せもする。

瓶(かめ)に入れられてあちこちに運ばれもするのだが、

瓶の中身は本物もあればけしからんまがい物もある。

高貴な人々の酒宴が終わって、

酔った眼に紅やら緑やらがちかちかしているときに、

赤い封印を開いて、紫色の新茶を截(き)り、

甌(ほとぎ)を傾けて茶を嘆賞し合うのだが、

召使たちは、

「あきれた物好きだ、

　泉のほとりに住む僧が、

　手ですくって飲む水のうまさにかなうわけないだろうに」

と、ささやき笑っているのである。

我が友は私が茶好きであるのを憐れんで、

籠に入れた新茶を贈ってくれた。

窓辺での昼寝からあくびとともに覚めたときに、

これを喫するとよいというわけであろうが、

よい茶はぼんくらの水を嫌うというから、

ついでながら、恵山泉(けいざんせん)の水も一斛(こく)ばかり所望いたしたい。

【補足】［蘇軾は茶を好んだけれども、詩の中に召使たちの笑いを入れ込んだように、極端なまでの茶道楽に対しては冷めた視線を向けていた］

■【04-1-038】答任師中次韻

【解題】郷里の先輩である任伋(にんきゅう)［字(あざな)は師中(しちゅう)］［→作品番号 03-2-002］から送られてきた詩に答えたもの。任伋の詩は、詩と酒をもって自ら楽しむことを勧める内容であったと、蘇軾自身が注を付している。

【訳文】

閑(ひま)であるときにこそ深い趣がある――

そのことを若い連中が早くから知ってしまうのを、

私は常々心配している。

昔の隠者が、山に入る前にあらかじめ借金をして土地を買っていたとは、

聞いたことがない。

故郷の蜀(しょく)に帰る気になったら、行けばよいだけのことだ。

私はすでに世間とは疎くなっているのだが、

貴君はなお私のことを想って、

酒と詩をもって自ら楽しむようにと忠告してくださる。

せっかくながら、私は平生から酒は飲まないし、

貴君の前では恐れ多くて詩を論じることもできない。

【補足】［最後の部分は、故郷の大先輩に甘えて、ちょっとすねてみせたのだろう］

■【04-1-039】沈諫議召游湖、不赴、明日得双蓮於北山下、作一絶持献沈、既見和、又別作一首、因用其韻

【解題】出張から帰ってすぐには役所に顔を出さなかったことを先に見たが、杭州知事の沈立との関係が良かったのか悪かったのか、はっきりしたことはわからない。この詩の題は、「沈立知事に西湖での遊びに誘われたが、私は行かなかった。翌日、湖の北の山で二輪咲きの蓮を得たので、絶句一首を添えて知事に差し上げた。知事がその詩に和したので、また別に一首を作ってさらに和した」。知事と副知事はさほど親密ではなくとも、表面的に取り繕うことくらいはしていたのだろう。

【訳文】

其の一

湖のほとりの棠の木は知事殿が手づから栽えたもの、

その木は、知事殿に、あと何回来てくれるのかと問いかけている。

水仙王廟の神もまた知事殿が帰ってしまうのを恐れて、

一晩のうちに二輪咲きの蓮の花を咲かせたのだろう。

【補足】[沈立知事が転任することが間近に迫っていたので、水の神が知事を引き留めるために珍しい花を咲かせたのだと、蘇軾は世辞をいってみたのだ]

其のニ

知事殿は金で飾られた詔を近く受け取られ、

知事殿のために宮中で音楽が演奏されることになるであろう。

そのような栄誉を受けられても、

今年この花が咲いたところを忘れないでいてほしい、
西湖の西の畔、北の山の前でである。

■【04-1-040】与范子豊

【解題】范百嘉［字は子豊］に宛てた手紙。范百嘉は范鎮の三男である。范鎮は蜀出身の大先輩である［→作品番号 03-3-023 の補足など］

【訳文】

南方の夏は熱く、都のあたりの夏とはまるで違います。秋に入ってやや涼しさが得られるようになりました。しかし、夏の田は日照りのために七、八割方損なわれてしまっています。塩法が変更されたこともあって、税収が不足したならば、閑な部署であっても累が及ぶことは免れられないでしょう。その他のことはいつも通りです。范百揆君や范百歳君はこのごろはどうされていますか。もう官職に就かれたのでしょうか。いつまたお目にかかれますやら、北の方を望んで、情が馳せ行くのを抑えることができかねます。

【補足】［(1) 名が挙がっている范百揆［字は子中］、范百歳［字は子老］は范百嘉の兄と弟である。(2)「秋に入って」と書いてあるので、手紙は 7 月に書かれたのだろう。この年は閏 7 月があり、その 23 日に欧陽脩が亡くなった。66 歳だった。兄弟揃って欧陽脩に会ったのはちょうど 1 年前であった。蘇軾が訃報に接したのはしばらく後のことである］

■【04-1-041】監試呈諸試官

【解題】8 月に科挙の一次試験が実施され、蘇軾は杭州で行われた地方試験の試験監督［試官］の一員として役所［試院］にしばらく缶詰めになった。これは試院にいたときに同輩に向けて詠んだ詩。王安石が大規模な改革が進めるなかで、科挙も変わり

つつあった。蘇軾は都にいたときに科挙制度の変革に強く反対していたが［→作品番号 03-2-006、03-3-007］、信念を曲げることなく、この詩でも科挙に対する自身の考えを率直に、そして欧陽脩（おうようしゅう）への深い敬愛の念を篭め、かつユーモラスに詠んでいる。このときはまだ欧陽脩が亡くなったことを知らずにいた。

【訳文】

私は山のなかで育った人間であったから、

受験のための勉強には苦労した。

練習を重ね重ねて、ようやく少しばかりの文章が作れるようになっても、

右から左にすぐに抜けてしまうのだった。

その上、ここ十年はもうすっかり勉強を怠けていたから、

もしもいまさら受験生の仲間入りでもしようものなら、

大昔に落第者にはそんな罰があったように、

きっと墨汁を飲まなければならないだろう。

こんな私に試験監督の仕事がまわってきたらどうしたらよかろうかと、

ずっとひやひやしていた。

ここは我が田舎とは打って代わって繁華な都会で、

才能のある人であふれかえっている。

なにしろ、そこらに生えている雑草でさえよい香りがし、

貧しいといわれる家でも真珠くらいはざらにあるといった、

まばゆいばかりの土地柄だ。

まばゆいといえば、文章もかつては目もくらむばかりであった。

黄金を細かく砕いて散りばめてみたり、

鮮やかな錦をやたらとくっつけてみたり、

見た目の奇抜さを求めて調和なんぞはどこへやら、

気取り過ぎてまともに歩けないようなありさまだった。

わいわいキャーキャー群がる雑魚どもが、

本物の竜が現れ出て初めてびっくりするように、

このときまで格好だけを気にしていたシティーボーイどもは、

欧陽公[欧陽脩]の出現にびっくり仰天した。

正しい音を耳にしなければ調子っぱずれのまま歌い、

正しい味を口にしなければゲテモノでも食べていられるように、

欧陽公がいなかったならば、

いまも平気で装飾過多の意味不明の文章を書いていたことだろう。

欧陽公のお蔭で正しい文章が千年にわたって伝えられると思ったのも束の間、

誰かさんが変革とやらを言い出して、

人を評価する秤に目盛りはいらない、

本当の味を知るのに肉は煮なくてよい、

ちまちましたルールで文字を並べる詩など作らなくてよいと、

高邁すぎる御説を開陳し、

孔子先生が講義をする教室でも、

昼寝をしていたって構わないというようなことになった。

そうした新潮流のもとでの試験である。

私のような鈍い愚か者は、

新しい芸当はいまさらとても身に付けることができない。

皆さまは才能ある傑人であるから、

不細工である私がこのようにぼやくのをどうかお許しいただきたい。

時に秋の心地よい午後であるから、

私も昼寝をするとしよう。

■【04-1-042】望海楼晩景五絶

【解題】これも試験期間中の詩。杭州の州庁は西湖の南側に連なる山々の東斜面にあって、それらの建物はもともとは呉越国の王宮群であった。蘇軾はその一角にある中和堂で缶詰になっていたようで、中和堂の北隣には高さ十八丈の望海楼があって、そこからはその名の通り海を望むことができた。山の南側には銭塘江が流れ、その河口付近は潮位の差が極めて大きく、大潮のときには潮が激しく川を遡る「海嘯」が見られた。その大潮まで10日のときに、監督官が連れ立って望海楼に登り、蘇軾は五首の絶句を詠んだ。

【訳文】

其の一

海の上に波頭が一本の直線となって現われ出ると、

すぐに望海楼の下へと、

雪を堆く積んだような潮が迫ってくる。

潮が上りくる時には必ずこの楼に登るようにしたいものだ。

銀色の山のような潮を、二十回を数えるまで見てやるのだ。

【補足】[大潮の当日ほどではなくても潮の遡るありさまが望海楼から見られたのだろう。終わりの句は、潮の満ち引きは1日2回あるから、いまから大潮の日まで通い続ければ10日間で20回になるという計算である]

其の二

横風に吹かれて雨が楼の中へと斜めに入ってくる――

雨と潮が織りなすこの壮観を好い句に詠んで誇るべきであろう。

雨が通り過ぎ、潮が平らになって、川と海が青さを取り戻したとき、

電光が走って、紫金(しきん)の蛇が天空に貼り付けとなった。

其の三

青い山々が連なる縁(へり)に、望海楼(ぼうかいろう)とともに幾つもの塔が建ち、

岸を隔てた向かいの人家は呼べば応えてくれそうである。

川の上の秋風は夕方に向かって強くなり、

山の寺の鐘の音を遠く南の町へと伝えて行くであろう。

其の四

楼へと香りが昇りくるのは、

どこかの家で夜の香(こう)を焚いているのだろうか。

わずかな涼しさのなかで、

笙(ふえ)の音が哀しくもまた怨むかのように響いてくる。

見捨てられた秋の扇の悲しみを、

風に臨んで歌っているのだろうか、

月を見上げつつ虚しく夜の化粧をする女性の心を。

其の五

向こうの沙河の塘の燈火が山を紅く照らし出す。

歌や鼓の音が賑やかに起こり、

笑い声がその中にまじる。

遊興に身を委ねる若者に尋ねよう、

いずれ自分も老いて髪が白くなることを知っているのかと。

【補足】[沙河の名は作品番号 04-1-018 で見ている。望海楼から沙河は北の方向にある]

■【04-1-043】試院煎茶

【解題】試院に仕方なく拘束されている間は、そこそこ時間の余裕があったようで、茶に詳しい同輩から細かく教わったりしたようである。この詩には茶に関する特殊な用語が幾つも用いられていて、注釈家泣かせの語彙もあるほどなので、訳者としてはいい加減な「ずっぽ訳」でお茶を濁すしかない。

【訳文】

湯の表面に立つ泡の状態が「蟹眼」を過ぎて「魚眼」になると、

しゅうしゅうと「松風」の音となる。

すり鉢の中で、細かい珠を連ねた「蒙茸」の様になった茶葉を取り出し、

軽やかに雪が飛ぶように甌のまわりを巡らせる。

銀の瓶に湯を注ぐのは天下第二の法とされるやり方。

茶を煎れるのではなく水を煎れるのだと古の人がいったことの意味は、

私にはまだわかっていない。

皆は知っているだろうか、

昔の李先生は自分で客人に煎れるのを好み、

炭火を「活火」に、湯を「新泉」の状態にするのを貴んだのを。

皆は知っているだろうか、

近時の茶の名手の潞公は、煎茶は「西蜀の法」を学び、

定州で造られた花の模様の瓷を用い、

それに紅玉を散りばめたのを。

私はいま貧病で長く餓えに苦しむ身であるから、

美女が捧げ持ってくれるような玉碗などは無論ない。

さしずめごく一般的なやり方を学んで、

「茗飲」とやらを為そうと思うくらいで、

瓦や石でこしらえた粗末な道具で，

しばらくは満足しようというのである。

ある人が御大層にも、

三椀の茶を飲めば、それが腸に入った先に五千巻の書物があると、

いったらしいけれど、

私の腹には何もないので、

一杯の茶によって睡眠が十分に足りて、

昼まで寝ていられるのを願うだけだ。

■【04-1-044】孫莘老求墨妙亭詩

【解題】湖州知事の孫覚［字は莘老］［→作品番号 04-1-030］に求められていた詩を試院にいる間に作った。孫覚は書の愛好家で、昔の人々の名筆を刻んだ石が湖州周辺に散在するのを集め、「墨妙亭」と名付けた建物に収蔵する事業を進めていた。孫覚

は蘇軾に、墨妙亭についての詩を詠んで、自ら筆を執って書いてくれたならば、それも墨妙亭に納めたいといってきていたのである。この詩では、蘇軾は墨妙亭に収蔵される作品に触れつつ書の歴史についての見解を披歴している。名が挙がっている王羲之、顔真卿、徐嶠之、李斯、李陽冰はいずれも歴史に名高い名筆家である。上の詩に続いてオタク的な詩で、これまた「ずっぽ訳」である。

【訳文】

王羲之が繭紙に記した『蘭亭の序』の真筆は、

唐の太宗皇帝の墓に納められてしまったのだけれど、

世間に遺されたその模写を見るだけでも、

竜が躍り虎が伏すと評された筆の勢いを窺い知ることができる。

唐の顔真卿は王羲之の書法を変えて新意を出し、

細かい筋肉がしっかりと骨に附いた秋の鷹の趣がある。

唐の徐嶠之とその子もまた秀絶で、

字の中に稜が内包され、外側に向かって力が溢れ出ている。

嶧山の碑に刻まれた唐の李斯の書は一つの典型を成したもので、

その後に千年にも残るような筆法を得たのは、

唐の李陽冰ただ一人しかいない。

杜甫は痩せて硬いのを貴ぶと詩に詠んだけれど、

この論は公平とはいえず、私は賛同しない。

書においては、短いのも長いのも、

肥えているのも痩せているのもそれぞれによいのではないか。

これを女性に譬えれば、

グラマーな楊貴妃もスリムな趙飛燕もそれぞれに美しいのである。

湖州の知事殿は真に古を好み、

財産をはたいて石の断片まで買い求め、

それらを墨妙亭に納めようと、

建設中の建物からは一日中コツコツと作業をする音が響いている。

このすばらしい事業によって、

呉越の地方に伝わる諸家の書が一覧できるようになると、

友から友へと伝えられて大いに評判になっている。

知事殿自身から私のもとに手紙がきて、

このことを詩に詠み、自ら筆を執ってそれを書いてほしいとの依頼があったので、

こうして剡藤紙を用いて記した。

百世という時代の変遷も、

眼の前を通り過ぎる早さからいったら、

風が燈火をひと揺れさせるのと変わりはしない。

ほんの一瞬でもすでに過ぎ去ってしまった後では、

古の人々と我々は一緒にはいられない。

その恨みは、墨妙亭に納められた書を見て慰めるしかない。

この詩も我々の交情を語るものとして後に伝わり、

我々が古を望み見るのと同じように、

後々の世の人が今を見るようであってほしいと切に願う。

【補足】［(1)「グラマーな楊貴妃」「スリムな趙飛燕」は訳者の悪乗りであるが、二人は歴史に名高い美女で、体格は対照的であったとされる。書と女性を対比させるのは、当時の人々にはたぶんこの訳文くらいの粗雑な印象を与えたのではないだろうか。

(2) 剡藤紙は、剡渓という谷に自生する藤の繊維に楮の繊維を漉き合わせて作った白くて丈夫な上質の紙。孫覚からは墨妙亭で保管して長く後の人に見てもらえるようにしたいので剡藤紙を使用してほしいとの依頼だったのであろう]

■【04-1-045】李公択求黄鶴楼詩、因記旧所聞於馮当世者

【解題】これもかねてから友人に求められていた詩を缶詰中に詠んだもの。朝廷にいる間に親交のあった李常［字は公択］［→作品番号 03-3-022］から黄鶴楼について詩に詠んでほしいと依頼されていた。黄鶴楼は長江中流の武昌にある有名な高楼で、費禕という仙人が黄色い鶴にまたがってこの地から飛び去ったという伝説がある。李常もやはり改革に反対して都を離れ、黄鶴楼に近い鄂州知事となっていた。蘇軾は、黄鶴楼の下にある仙人洞にまつわる伝説を馮京［字は当世］から聞いていたので、それに基づいてこの詩を詠んだ。馮京の名は作品番号 03-2-010 で見ている。

【訳文】

夜の黄鶴楼、

その前の川に月の光が満ちてきたとき、

関を守る老卒は腹が減って眠れずにいた。

三人の笑い声が聞こえ、

下駄の音が人気のない山に響きわたった。

鬼[亡霊]でもなければ人でもない、

きっと仙人であろうかと、

老卒はその後ろについて行った。

三人は石の扉を叩き、

澄んだ音がやむと、

がらがらと洞穴の門が開いた。

三人はふわふわと煙のように入って行こうとした。

すでに月は落ちかかり、鶏が鳴き始めていた。

老卒は三人を拝み見て、

「お供させてください」

と、願った。

「おまえの骨は生臭い。

　一緒に連れて行ける者ではない。

　そこの石を持って去るがよい」

と、三人はいった。

石は肩に担ぐこともできないほどに重かった。

どうにかこうにか持ち帰り、

破れた筵に包んで部屋の片隅に置いた。

夜になると、

その小屋から天を射るばかりの光が漏れ出た。

何であろうかと村人たちが見に来た。

石はすでに変化しつつあって、

石に似て石ではなく、

鉛に似て鉛ではなく、

ついには黄金になったのだ。

人々は騒ぎ立て、

羨んだ者がお上に訴え出た。

何の功もなくにわかに黄金を得て喜んだのもつかの間、

老卒の運命はたちまち暗転してしまったのだ。

仙人たちの戯れとしてはひどすぎるのではなかろうか。

それから今に至るまでに何年になるのか。

これは信じるべきこととして馮公から聞いたのだが、

確かなことなのか、そうではないのか、

貴君によくよく吟味していただきたい。

■【04-1-046】与范夢得

【解題】試験中は拘束の身ではあっても閑な時間が多くあったことはこの手紙からも知ることができる。これは范祖禹［字は淳甫ないし夢得］に宛てた手紙。范祖禹は范鎮［→作品番号 04-1-040］の甥で、『資治通鑑』の編集に携わった歴史家である。

【訳文】

久しく事に牽かれてお手紙を差し上げる暇もなく、深く恥じ入るばかりです。これまでの間に頂戴したお手紙は無事届き、起居の佳勝を詳らかにいたしております。

私は地方に出まして、春から夏は特に事も少なかったのですが、ここのところ煩わしさを覚えますのは、盗賊が多く、訴訟沙汰が常に溢れるようなってきていることです。これはきっと新法が行われているからなのでしょうか。……私はここ十日余り杭州の試験監督の任にありまして、二十日余りの閑を得ました。中和堂に滞在し、望海楼に坐し、時に快さを覚えております。詩を数首寄せてくださいましたのは、楽しく拝見しております。

■【04-1-047】八月十日夜看月有懐子由並崔度賢良

【解題】8 月 10 日はなお試院に閉じ込められたままで、ちょうど 1 年前の同じ日に陳州で弟とその同僚の崔度と月光のもとで語り明かしたのを思い出してこの詩を詠んだ。陳州にある丘の名にちなんでここでも弟のことを宛丘先生と呼んでいる［→作品番号 04-1-007］。

【訳文】

笑ってしまうのは、

宛丘先生は凝り性で、いくら深く学んでも決して満足しないこと。

さらに笑ってしまうのは、

崔先生が貪欲過ぎて、百の学問の全てを究めようとしていること。

去年の今日は、

夕方にふらりと立ち寄ってから、

柏の木の彼方に冬の星座が昇りくるまで、

三人で過ごしたのだった。

宛丘先生は山盛りにした豌豆をぽりぽり食べ続け、

崔先生は恐ろしく赤い色の酒をくびくび傾け続けた。

今年もまた去年と同じ月を見て、

二人の先生は露の冷ややかさに感じ入っていようかと、

遥かに思いを寄せる。

笑ってしまうのは、

この春、崔先生は着物を質に入れて、

豆を植えてみたものの、

長雨のためにごっそり蛙が出てきただけだったということ。

さらに笑ってしまうのは、

宛丘先生の家は壁があるだけの虫けら小屋同然のものなので、

とうとう身体を悪くしてしまい、

王江先生とかいう道人に呼吸法を教わって治したということ。

王江先生といえば陳州で知らぬ者のない大酒飲みであるのだから、

どうせなら終日酔っ払っている法を深く学んだ方がよいだろうに。

【補足】［弟はこのころ胸を患い、道士の王江から呼吸法を学んで、症状を大きく改善することができた。後に、蘇軾はそれを弟に教わり、独自の工夫を加えて自身の健康法の一つとするようになる］

■【04-1-048】和沈立之留別二首

【解題】蘇軾が試院にいる間に知事の沈立は杭州を発って新たな任地へと向かった。これは送別の宴で知事が詠んだ留別の詩に後から和したもの。

其の一

いま杭州の民衆が千粒の涙をこぼす光景は、

公が杭州に来られたときに、

公の前任地で見られた光景の再現に他ならない。

とはいえ、公がここに遺した愛の形を、

碑文に刻むようなことまではしないのがよいだろう。

古の真に徳のある人は、

自分の行為が世間に知られるのを畏れたのだから。

其の二

役所に居続けの私は、

遠くで鳴り響く銅鑼や太鼓の音を、

公の船が発つのを見送っているのではなかろうかと、

寝床の内で聞き、

夢の中で公と別れの觴を交わした。

別れの愁いがどれほどのものであったかと尋ねられたら、

川の水を何万杯汲んだところで私の涙には足らないと答えたい。

■【04-1-049】催試官考戯作

【解題】銭塘江(せんとうこう)を激しく遡る潮、すなわち海嘯(かいしょう)がピークとなるのは 8 月 18 日であるとされていた。その日までに試院から必ず解放されるよう仕事を早く終えようではないかと、同輩に向かって戯れの詩を詠んだ。

【訳文】

八月の十五夜は、

どこでも月の色のよさは変わらない。

田舎の茅の軒端であろうとも、

都会の楼閣であろうとも、

蓬莱島(ほうらいとう)の仙宮にも譬えられる立派なここの官舎であろうとも。

構内の鳳咮堂(ほうしゅどう)の前では橘の実が香り、

剣潭橋(けんたんきょう)のほとりでは蓮の花が枯れかかり、

ことに味わい深く月を見ることができるであろう。

八月十八日は大潮、

海嘯(かいしょう)の壮観は天下無比で、

かの大魚が鵬(おおとり)に化し、翼を撃って飛び上がるときの三千里の水しぶきか、

はたまた、かの楚の大王が呉(ご)に攻め込んだときの十万の軍勢が長く連ねた白い布か。

見物客が、赤い旗やら青い蓋(かさ)やらをぎっしり並べて待ち構えるところに、

それらを呑み込んでしまおうと、

白い浪が黒い砂を巻き上げて押し寄せるのだ。

人生においては一つのチャンスをものにするのも難しい。

十五夜と海嘯の二つとも心ゆくまで見たいものだ。

さあさあ、諸君らは蝋燭(ろうそく)を二重にも三重にも接(つ)いで、

せっせと採点の仕事に励んでくれたまえ。

門の外には合格発表を待ちわびる受験生が、

鶴のように首を長く伸ばして待っていることでもあるし。

【補足】[鳳咮堂(ほうしゅどう)の名は作品番号 04-1-011 で見ている]

■【04-1-050】八月十七日、復登望海楼、自和前篇、是日榜出、余与試官両人復留五首

【解題】8月 17 日に試験の合格発表が終わり、仕事は一段落したのだが、蘇軾は2人の同僚とともに役所に留まって望海楼(ぼうかいろう)にまた登ってこの詩を詠んだ。これは先の五絶句に和したものである。この一連の詩は何かしら寓意を籠めて、科挙の現状を批判するものであるらしいのだが、訳者には何のことかわからないので、其の一と其の二は意味不明のままに日本語に置き換え、寓意とは関係しないと思える其の三を訳し、其

の四と其の五は割愛する。

【訳文】

其の一

おかしなことに、

楼閣の上に雲が上がってこない。

楼閣の前に堆く積まれた紙が邪魔しているからなのか。

昔、唐の皇帝が群臣に詩を作らせたときに、

たちまち風が起こって、

凡作は吹き飛ばされてしまった。

文字を無理に繋ぎ止めておくことはできないので、

自然から見放されないことが大切なのだろう。

其の二

燈火が暗くなり、眼が疲れ切っても、

細かい文字を見続けて、

精緻に答案を検討したと誇ったところで、

明日の杯は得られはしないのだ。

結局は、蛇に足を描き加えるような仕事であったのだから。

其の三

千層に重なる山々が暁の訪れを遮るかのように並ぶ。

秋の涼しさに睡りはうまく、揺すっても貴君は起きない。

昨夜の酒が巡る旅では、貴君は嘆いていたけれど、

いまはきっと夢で呉興に帰っているのだろう。

【補足】［同僚の中に呉興［湖州］からきた劉摎がいた。その人に贈った戯れの詩なのだろう］

■【04-1-051】与郭功父

【解題】郭祥正［字は功父］に与えた短い手紙。郭祥正は何らかの公の用事で旅する間に杭州に立ち寄ったようである。ここまでの一連の詩で、試験中は意外と閑であったようだが、それでも缶詰生活はかなりのストレスだったのだろう、その後体調を崩してしまったことがこの手紙から知ることができる。

【訳文】

昨日はお訪ねくださり、ことのほか心が慰められました。今日の御気分はいかがでしょうか。

私は試院を出たならお目にかかりに伺おうと思っていたのですが、腹を下して力が乏しくて果たすことができません。それもさほど御心配には及びません。

短い書面でまことに失礼いたします。

■【04-1-052】和陳述古拒霜花

【解題】秋の終わりに新しい杭州知事として陳襄［字は述古］が着任した。かつて宰相を務めた陳堯佐の長男で、蘇軾よりも15年早くに科挙に及第し、中央で活躍していたが、改革を巡って王安石と鋭く対立したために地方に出された。なおかつ蜀の人であったから、蘇軾と新知事とはすこぶる良好な関係を築くことができた。陳襄が中和堂の芙蓉が盛んに花を咲かせるのを見て詩を詠んで蘇軾に示したので、それに和

した。詩の題にある「拒霜花」は芙蓉の別称である。

【訳文】

千の林が秋の風に掃われて、

どこも一つの黄色になったときに、

芙蓉だけが独り芳しい花を開く。

「拒霜」[霜を拒む]と呼ばれてはいるのはどうもぴったりしない、

子細に考えてみると、

「宜霜」[霜に宜しい]とするのが最もふさわしいのではなかろうか。

【補足】[先の知事の沈立が去って陳襄が着任するまでの間、副知事の蘇軾が知事の業務を代行していたのだが、そのときにあったとされる一つのエピソードを王霽之の随筆『澠水燕談録』などが伝えている。王霽之は蘇軾よりも 10 年ほど遅れて科挙に合格した人で、蘇軾と直接的な交流はなかったようだ。訳者の力不足で訳せないところがあり、一部を原文のまま掲げる]

【訳文】

王霽之:『澠水燕談録』

蘇公[蘇軾]が杭州副知事であったときに、州知事の仕事を代行した時期があり、新知事が到着する前に、ある営妓が、年を取ったので妓女の籍から抜け出て良民になりたいと申し出た。

公は次のような判決文を下した。

「五日京兆、判状不難、九尾野狐、従良任便」[妓女の願いを許すとの意味]

周生という営妓がいて、美しさも芸も杭州で最も優れていた。周生は蘇公が一人の営妓を解放したと聞いて、良民のもとに嫁したいと願い出た。

人々は周生が去るのを惜しんだので、公は次のような判決文を下した。

「慕周南之化、此意雖可嘉、空冀北之群、所請宜不允」[妓女の願いは却下するとの意味]

公がすばやく諧謔をなすのはいつもこのようであった。

【補足】[(1)「営妓」とは、官が管理する妓女で、「官妓」ともいい、官員の宴席などに呼ばれて接客をする女性で、民間の「私妓」と比べると、芸も優れ、教養もあった。「営妓」も「私妓」も完全に拘束された身で、「営妓」は知事の許可を得て籍からその名を抜かれると、自由な「良民」になれた。(2) 原文のまま掲げた最初の判決文は、「九尾野狐」と呼ばれていた妓女を望み通り解放したものである。何か掛け詞のようになっているのだろうが、訳者にはわからない。他の文献によると、九尾野狐は性格がよく、魅力的で、人から好かれる女性だったという。(3) 周生に対する判決文は、籍から名を抜くことを許さないという、女性からすると非情なものであった。こちらも何らかの掛け詞になっているのだろう。この場合は男性官員の要望をいれて周生を泣かせてしまったのだが、蘇軾が営妓を解放したエピソードは他に幾つも伝わるので、基本的には女性に対して優しい知事であったといってよいようである。ただ、女性の運命を決める重大な判決が諧謔の文であったというのは、この随筆の著者のように感心できるものではない]

■【04-1-053】次韻答開祖

【解題】銭塘県知事の周邠［字は開祖］は母が亡くなり、しばらく喪に服すことになった。そのことを周邠が詩で報せてきたので、それに次韻して答えた。

【訳文】

秋の風に涙を滴らせるのは、

孔子のように世の衰亡を嘆くからではない。

俗世においていくら名を挙げたところで、

本当に実のあることではない。

昔、阮籍は母を葬る前に、

蒸した豚を食らい、二斗の酒を飲んだのだが、

母を悼む心は誰も及ぶ者はなく、

その純孝はいまも讃えられている。

ならば、貴君の家の近くを通った折には、

西湖に誘い出して遊んだってよいのであろうが、

貴君はあまりにすばやく詩を作るので、

仲間に呼び入れるのをいささか躊躇もする。

ともあれ、貴君は自然をすこぶる好むのであるから、

岩の前に坐して春の巡りくるのを一人見て楽しむこともできるであろう。

■【04-1-054】周夫人挽詩

【解題】周邠のために母の挽歌を作った。

【訳文】

子に教えて経典を理解させるのは、

古から賢母の為すことであるとされている。

貧乏であっても心を安らかに保って道義を守り続けられるのは、

最も節操の堅い人の為せることであるとされている。

貴君の母はそればかりではなく、

熊が檻から飛び出て皇帝を襲いそうになったときに、

その前に立ちはだかった女官のような勇気を持ち合わせ、

燭を掲げて、弟たちが勉強に励むありさまを見るのを、

何よりも楽しみとした姉のような愛情の深さも持ち合わせていた。

その優れた行いがお上から顕彰されるのを待たずに、

新たな墓を土で覆うことになってしまった。

そよ風さえも心を刺す棘のように感じるという古い歌を唱えないでくれたまえ、

私もまた母を喪った身、

涙を流さずにはいられなくなってしまうのだから。

■【04-1-055】梵天寺見僧守詮小詩清婉可愛、次韻

【解題】詩の題は、「梵天寺で、僧の守詮の小さな詩を見たところ、清婉で愛すべきものであったので、それに次韻した」。守詮は垢まみれの僧衣をまとった僧で、詩を得意とした。鳳凰山にある梵天寺の壁に記されていたその人の詩が蘇軾の目にとまったのである。

【訳文】

霧の外には鐘の音だけが聞こえ、

霧の中の寺を見ることはできない。

まだ歩いてわずかばかりのうちに、

草履は草の露でぐっしょりと湿ってしまう。

山から昇った月だけが、

夜ごとにあたりを照らすのである。

【補足】[三句目にある「歩く」の主体が原詩では「幽人」となっているが、訳詩では敢えて主語を省いた。「幽人」の語を訳すのは容易ではない。「隠れ人」、ないしは「隠れ人でありたいと思っている人」、ないしは「奥深い何かを理解する人」、ないしは「幽玄に遊ぶ人」、ないしは「幽玄に遊ぶ人を理解する人」といったところであろうか。ここでは、「幽人」は守詮その人を指すと見てもよいのかもしれない]

■【04-1-056】聴賢師琴

【解題】定慧院の僧の惟賢が演奏する琴を聴いてこの詩を詠んだ。

【訳文】

長い弦の音は、春の温もりのように和らかくして平らかである。

短い弦の音は、高く折れるかのようで亮かにして清らかである。

私はもとより音階がよくわからないので、

宮の音は、牛が穴ぐらで鳴く声かと思ってみたり、

角の音は、雉が木の上で鳴く声かと思ったりする。

惟賢師が琴を弾いていると、

門をほとほとと叩く者がいた。

師は山にあっても閑がないようで、

琴はそのまま中断されてしまった。

それを残念に思う前に、

私はまずは家に帰って千斛の水を求め、

箏や笛の音に慣れてしまった耳を洗って出直さないとならないだろう。

【補足】[宮や角はドレミのような音階である]

■【04-1-057】雑書琴事十首

【解題】9年後の元豊4年に上の詩について記した短文があるので、ここで読んでおこう。

【訳文】

『雑書琴事』 其の二「欧陽公論琴詩」

唐の韓愈の詩に『穎師の琴を聴く』があり、

昵昵児女語、[ぺちゃぺちゃとお嬢さん方がしゃべるかのようでもあり]

恩怨相爾汝。[愛と怨みがこもごもであるかのようでもある]

画然変軒昂、[にわかに高くなったり、勢いづいたり]

勇士赴敵場。[勇士が戦いの場に赴くかのようでもある]

と、ある。

かつて私は欧陽公[欧陽脩]から、

「琴を詠んだ詩で最も佳いのはどれだろうか」

と尋ねられ、この韓愈の詩を挙げた。

欧陽公はこのようにいわれた。

「この詩は確かに巧みである。しかし、これは琵琶を聴いての詩であって琴の詩ではない」

後に私は『杭州の僧の惟賢の琴を聴く』という詩を作った。

大弦春温和且平、

小弦廉折亮以清。

平生未識宮与角、

但聞牛鳴盎中雉登木。

門前剥啄誰扣門、

山僧未閑君勿嗔。

帰家且覓千斛水、

浄洗従前箏笛耳。

詩ができて欧陽公に寄せようと思ったのだが、公はすでに亡くなっていた。いまに至っても残念でならない。

【補足】［この短文によると、惟賢の琴を聴いたのは、欧陽脩の訃報が届く前だったようである。だとすると、蘇軾は試院から解放されてしばらく経った頃に欧陽脩の死を知ったことになる］

■【04-1-058】祭欧陽文忠公文

【解題】蘇軾は欧陽脩の訃報を聞くと、欧陽脩を祭る文を書き、恵勤、恵思のいる孤山の寺［→作品番号 04-1-001］に納めた。

【訳文】

嗚呼、哀しいかな。

公がこの世に生きておられた六十六年の間、民にはいうなれば父母があり、国には命運の傾き度合いを測定する天秤があり、道義には正しい指針があり、学ぶ者には師匠があった。君子には拠り所があって恐れを抱くことなく行動でき、小人には畏れる所があって何かをしでかすことができなかった。一つの譬えをいうと、大河や高峰は何かの動きをしているようには見えなくても、その影響は万物に及び、それがもたらしている効能の全てはとても数え尽くすことができないのである。

今や公が亡くなられてしまい、天下の赤子にはいうなれば仰ぎ見て庇ってくれるものがなく、朝廷には迷いから抜け出る羅針盤がなく、道義は数々の異端だらけとなり、学ぶ者は異界に師を求め、君子は

善を為そうと努めなくてもよかろうと思うようになり、小人はついに我等の時がきたと勇み立つようになったのである。一つの譬えをいうと、深い淵や広い原から竜が消え虎が去ってしまうと、様々な変化や妖怪どもが雑然と出てきて、泥鰌やら海蛇やらが歓び舞い、狐やら狸やらが歓び叫ぶのである。

昔、公がまだ朝廷に用いられずにいた頃は天下は病み、公が用いられるとそれが遅すぎたのを残念がり、公が朝廷から去ると再び用いられるのを願わない者はなく、公が老齢をもって隠退すると人々は望みを失ってがっかりしたのだった。それでも万に一つ、また用いられることがあるのではないかとの望みを繋いだのは、幸いにも公がまだまだ衰えずにいたからである。誰もが、公がもはやこの世に思いを致すことがなく、たちまち去ってしまって、その後を誰も追ってこさせないようにするとは、思いもしなかったのである。あるいは、世の混濁を嫌って、身を潔くして行ってしまったのだろうか。はたまた、もはや民には福がなく、民には何も遺さなくてもよいと天が定めたのだろうか。

昔、我が父が大切な物を内に秘めたままこの世を去ってしまってからは、公がいなければ私をよく教え導いてくださる人はいなかった。この不肖者、このふつつか者は、縁があって公とお近づきになれ、その門下生として教えを受け、ここに十六年となる。公の亡くなったことを聞いて、道義としては這ってでも葬儀に参上しなければならないのに、俸給が大切と行かずにいる。何よりも道義を重んじた古の人に恥ずかしく、忸怩たるものがある。

私にできるのは、この祭文に我が思いを封じ込めて千里の彼方に送ることだけである。その思いのつまるところは、大きくいえば天下のために慟哭し、小さくいえば私一人のために泣くのである。

嗚呼、哀しいかな。

■【04-1-059】哭欧陽公、孤山僧恵思示小詩、次韻

【解題】孤山の恵勤が欧陽脩と旧くからの知己であったことは作品番号 03-4-026 で見ているが、恵思もまた欧陽脩とかつて交流があった。そのことを恵思が詩に詠んだので、それに和したのがこの詩。

【訳文】

親しくさせていただいたかの人は土となり、

我が髪は秋に驚いてさらに衰えようとしている。

それでも孤山(こざん)のもとで、

かつての交流を語り合えるのは嬉しいことだ。

■【04-1-060】秋懐

【解題】秋の懐(おも)いを詠んだ詩。蘇軾は精神的に調子を落としていたようである。

其の一

ひどい暑さの頃は、

秋の風が立ってくれるのを念じつつ、

ひょっとしたらもう吹かないのではないかと恐れさえした。

今ここに凛(りん)とした清涼な風が吹いてくると、

また一年が過ぎ行くのかとの悲しみが湧き上がる。

夜になり、寝床で蟋蟀(こおろぎ)が鳴き出したので、

起き上がって窓辺に寄ると、

黄色く染まった葉が飛んでくる。

それは梧(あおぎり)の葉で、

冷たい露が降り下るときには、もはや枝には残っていられない。

夜空に不気味な声を立てるのは、

軒端近くに棲みついた梟(ふくろう)だ。

梧の木を好んで住まいにするという鳳凰(ほうおう)は、

梟のために安らかな眠りにつくことができないで、

独りどこかの空を飛んでいるのだろうか。

屋根のあたりを舞う蛍にも友がいて、

互いに追いつ追われつしている。

寒い霜の時期が迫ってきているから、

それができるのももういくばくもないだろう。

物の変化は留まることがない。

我が目はいよいよ冴えてきて、嘆息をする。

だからこそ昔の人は、

夜も燈火(ともしび)を掲げて、

とにかく楽しいことを急いでしなければならないと戒めたのである。

【補足】[梧(あおぎり)、梟(ふくろう)、鳳凰(ほうおう)、蛍(ほたる)などは、蘇軾を取り巻く状況を暗示するものであるようだ。蘇軾は季節的に秋から冬のころがあまり得意ではないようで、欧陽脩(おうようしゅう)が亡くなったことや、政治情勢が厳しいことなども影響して、このようなやや悲観的な詩を詠んだのだろうか]

其の二

海からの風がきて、

三日続いた雨をすっかり吹き払ってくれた。

外に出る階段(しずく)に滴が少し残り、

それがそっと話しかけてきた。

「あの頃、君はあの部屋で、

　静かに過ごすのを、何よりの歓びとしていたよね」

「ああ、そうか、君は、

　故郷の僕の部屋の前の階段にあったあの滴なのだね」

「あの頃、君は、田畑で働いた後には、

　壺に入れた酒を持ち寄って、

　村人と一緒に互いの疲れを癒し合ったり、

　寒さと飢えの折には、

　葉に包んだわずかな飯を持ち寄って、

　村人と一緒に慰め合ったりしていたよね」

「今年は、すでに秋の稔りの時を迎えて、

　故郷では、食べ飽きるほどの御馳走を並べていたりしているのだろうか。

　ああ、僕は一体何を求めて、

　万里の川を流れ下って、

　この海辺にまできてしまったのだろうか。

　故郷にいれば貧しくても食うには困らないのに、

　なぜか田園に暮らすのでは満足できないと思ってしまったのだ」

露と語り始めたのは雨上がりの午後、

夜の窓辺に梟の声を聞きつつ、

語り続けて朝に及ぼうとしている。

蠟燭（ろうそく）は暗く消えかけて、

今また不意に明るい光を発しようとしている。

【補足】［(1) 原詩の第四句で、滴りの音を「幽人（ゆうじん）と語るに似たり」と詠んでいることから、この詩の後半は、滴りと会話したものとして訳してみた。ここでの「幽人」

は、世の真実をよく知り、蘇軾のことを深く理解してくれる人なのであろう。(2) この詩では、故郷の農村生活をやや理想化して詠んでいるが、より詳しい叙述を作品番号 01-2-001 で見ている]

■【04-1-061】次韻孔文仲推官見贈

【解題】孔文仲［字は経父］の詩に和した詩。孔文仲は熙寧3年［1070年］に范鎮の推薦を得て特別試験の制科を受けるために上京した。ところが、試験の答案として提出した論文の中で王安石の改革を強く批判したために孔文仲は不合格となり、元の任地に帰された。そうしたことを踏まえてこの詩は詠まれている。

【解題】

私はもとより鹿の本性を有する者であるから、

国家という車の轅を曳く堂々とした馬の姿には合致すべくもない。

貴君はペルシャの駿馬の「汗血馬」のようで、

そのたたずまいからして世に類がない。

私は天子から賜った鈴を身に付けて、

貴君と一緒に大道を走ってみた。

驚いたことに、

疾走しつつ己の発するこの声を聞いた。

「もう繋がれるのは御免だ！」

貴君は朝に北の草原を出発して、

まだ日が傾かないうちに、

もう長江の水を飲んでいて、

こういうのだ、

「中途で止まってなどいられない！」

世の駄馬、驢馬どもは貴君には付いて行けない。

金と錦と玉(ぎょく)を纏った貴君の姿は、

傍目(はため)には実に美しいけれど、

貴君自身はこれらの飾りを嫌っている。

塩を運ぶ苦役の方が卑しいとする理由はなく、

どちらも人に使役されているのだ。

見るがよい、

天子を護衛する馬どもを。

自由に嘶くことも、あたりを見回すことも許されず、

鞭で叩かれて徹底的に仕込まれ、

己のものといったら骨と皮があるだけではないか。

人生にはそれぞれに志があるはずだ。

このようなことを私はいつも考えているのだけれど、

他人が聞いたら笑うだけなのだろう。

貴君だけは理解してくれるところがある……。

ここのところの秋の長雨のせいで私は病み、

我が身を支えるのも厭わしく、

がらんとした部屋で伏せていた。

その間に、蔓草が垣根の上に這いのぼり、

落ち葉が階段でからからと鳴った。

門前には訪れようとする客人はなく、

だからといって、誰かを呼ぼうとするでもなく過ごしていた。

貴君がやってこられたとの報せに起き上がると、

貴君は結局のところ田舎の職務に留まるという。

高潔な貴君と向き合って語ったことで、

俗吏の卑しい身にあることをしばし忘れることができた。

今朝はまた詩を寄せてくださったので、

鳳(おおとり)がきらきらと翼を輝かせて挨拶にきてくれたような気がした。

私は哀れにも、

山に登ってみたら梯子がなく、

海に落ちて深淵に迷い、

枯れた枝のような心地でいる。

貴君の言葉に潤いを得て、

心の内に華が開くような思いがしている。

世俗の人々は、

掻き毟(むし)る心地よさを得るために、

むしろ腫れ物が出来るのを求めるという。

賢明なお歴々は日に日に登用されて、

美しい御殿で世を賛美する曲を歌っている。

ならばいっそのこと、

天下の最盛期を祝う一大式典のための頌歌(しょうか)を、

あらかじめ作っておくことをお勧めしたいものだ。

【補足】［(1) 自分の本性は鹿であると、蘇軾はしばしば詩に歌うが、この詩の第一句、「我本麋鹿性」［我(われ)は本(もと)もと麋鹿(びろく)の性(せい)］はその最初のものといってよいのかもしれ

ない。「麑」とは大鹿で、「麑鹿」で鹿全般を指す。蘇軾は元来山にいるべき鹿でありながら、孔子の教えに従って天下をよくしようと官の仕事に就いたために、様々な矛盾に苦しまなければならないのである。(2) 詩の最後にある「天下の最盛期を祝う一大式典」とは「封禅の儀式」のことであろう。それは王朝の極盛期に皇帝が泰山に登って天の神と地の神を祭る儀式で、宋の時代には三代皇帝［真宗］のもとで大々的に行われていた。そのときは王欽若という稀代の「才人」が皇帝の心を忖度して、天からの手紙［天書］があちこちに降るという摩訶不思議な演出をして、国の総力を挙げてその儀式を行った。王欽若はもののみごとに封禅大フィーバーを現出させたのだが、熱から冷めてみるとあまりにも馬鹿馬鹿しいものであったために、封禅の儀の価値は大暴落し、その後の王朝はほとんど行わなくなった。真宗時代の異常な熱狂ぶりになぞらえて、現在進行中の改革を皮肉ったのだろう］

■【04-1-062】湯村開運塩河雨中督役

【解題】改革の一環として、国の生産力を高めるために全国各地で様々なインフラ整備が計画され実施されていた。成果を急ぐあまり、どれだけ意味があるのかわからないような事業が無理やり実施されるということもあったようだ。11 月、蘇軾は、杭州の町の北の仁和県の湯村で進行中であった運河の掘削工事の督促に赴いた。運河は塩の生産地である塩官県一帯と杭州を繋ごうとするものであった。

【訳文】

昔ある人は、

官職に就いてはいても仕事がちっとも与えらないので、

気持ちが晴れ晴れとして実に結構と、

反語的につぶやいたのだけれど、

私はそれを羨まずにはいられない。

昔ある人は、

職を辞して、いまこそ故郷に帰るべきだと決然と歌ったのだけれど、

私はその人に対して恥じずにはいられない。

運河の工事の期限は厳守、

督促は急で、

農耕の妨げになると憐れむ者はいない。

暁にドンドンと太鼓が鳴り響くと、

民衆の一万の指が溝の上に並ぶ。

天には、お上の仕事を手助けするつもりがあるのやら、

雨がざあざあと民衆の笠や衣に降り注ぐ。

民衆は鴨やら猪(ぶた)のようになって、

泥の中でもがき合う。

私は堤の上で馬から下りる。

四方を見れば、

どこも湖のように、水の下に沈んでいる。

我が足を細い溝に入れる。

牛や羊が争うように泥と格闘する。

故郷の田園に帰るのは、

身分を落とすことになるけれど、

泥の中で労働することに変わりはない。

それでも、自分で耕して得た物を皆で食べることができる。

だから、故郷の友よ、

私が間もなく行くのを待っていてほしい。

【補足】［(1) 蘇軾は自ら率先して泥に身を投じた。副知事という高い地位にある者がそのようなことをするのだろうか、文学的修辞に過ぎないと疑う向きもなくはないが、同様の行動はその後も取っているし、これまで見てきたように蘇軾は運動能力に優れ活動的であった。(2) 蘇軾は秋になってから何かと不調であったが、現場に出てからはにわかに快活になる。これもまたよくあるパターンである］

■【04-1-063】是日宿水陸寺、寄北山清順僧二首

【解題】泥と格闘したその日に水陸寺に泊まり、杭州の西湖畔にある宝厳院の清順に宛ててこの詩を詠んだ。清順は優れた詩を詠む僧で、蘇軾はあるとき宝厳院に遊んで壁に記された清順の詩を見て感嘆し、それより 2 人の交流が始まった。なお作品番号 04-1-055 では梵天寺で守詮が書いた詩を見てそれに和していたように、寺の壁などに詩を書くことは有効なコミュニケーション手段の一つであった。

【訳文】

其の一

小川の堤は草に埋もれ、

雨のために村は暗い。

寺は奥まった竹林の中に潜み、

どこに門があるのやら。

寺の僧は気の毒にも病床にあって、

薪を拾って薬を煮ている。

それでも、地を掃い、香を焚いて、

我が旅の魂を浄めてくれる。

村人の野良仕事は小雪を冒してなおも続いていて、

御仏に捧げる燈火は黄昏時のいま初めて灯される。

ここのところ奥深く暮らすことの味わいがようやくわかってきたので、

高人（こうじん）と寝床を並べて語り合ってみたいものだ。

【補足】［「高人（こうじん）」とは徳の高い人、ここでは清順（せいじゅん）のことをいう］

其の二

西湖（せいこ）のあたりでは、いつも鐘や太鼓が賑やかであるのを嫌っていた。

このあたりは静か過ぎるくらいだが、

それでこそ自然なのだろう。

寺の僧は村を巡って食を乞い、

真に満腹することを知っている。

客人に対して口を開かずにいるけれど、

それは禅の無言の業にあるのではない。

私は水の路を通すために、

草を払って泥に入ってきた。

いまは足を洗って門を閉ざし、

雨を聞きつつ眠ろうとしている。

遥かに想うのは、

夜の寒さの中で詩を練り上げている貴僧の姿だ。

■【04-1-064】塩官部役戯呈同事兼寄述古

【解題】蘇軾は塩官県に赴き、杭州の同僚や知事の陳襄［字は述古］にこの詩を送った。詩の題に「戯れに」とあるのは、終わりの部分でやや不謹慎なことを述べているからである。

【訳文】

新月に照らされた水は、

冷え冷えと光っていまにも凍り付きそうだ。

屋根を通り抜けて夜の霜が寝床にも降ってくるのか、

衣が冷たくこわばる。

労役に駆り出されているこの土地の人々は、

一様に頬が赤く眉が丸い。

田の中の小屋で、牛や羊と寝床を分け合い、

昼間の労働で、履き物が破れ、衣に穴が開いてしまっても、

それを繕う間もなく、眠りに落ちてしまう。

そして、暁には、

烏や鵲とともに起きて、

千人の人々が野に並ぶ。

その千の口にはきっと言いたいことがあるのだろう――

早く家に帰りたいと思わないはずがない。

しかし、他人に嘲笑されるのを恐れて何もいわずにいる。

私は人々に向かってこういってやりたい――

「我が州の立派な方々は、

民衆を使うことについてよくよくわかっておられるので、

新しい酒とたっぷりの豚肉をきっと買って用意してくれる。

だから、寒さに耐えて頑張ってほしい。

努力すればそれだけ帰る日が近くなる。

足がもしも寒さに凍り付いてしまったなら、

知事殿が御自身で揉んで軟らかくしてくださるだろう」

【補足】[州の副知事は、民衆から見れば非常に高い地位の官員であるのだが、王朝の官僚機構の中にあっては、自由裁量の度合いは極めて限定的であったようだ。だから、蘇軾は命じられた通りに工事を督促する以外に手はなく、民衆に向かっていえることといったら、この詩にあるような非現実的な慰めしかなかったのだろう。せめて自ら泥に中に飛び込むことで、己の誠意を民衆に示そうとしたのだろう。弟が後に書いた兄の墓誌では、杭州副知事時代の事績について、「このとき、全土において［改革派の新法である］青苗法、免役法、市易法が実施され、［杭州を含む］浙西では水利塩法も合わせて実施されていた。公［蘇軾］はその中で、法に拠りながらも常に民衆にとって便宜となるようはからったので、民衆はそれを頼って少しばかり安らぐことができた」とあって、具体的に何をしたかの記述はなくて、民衆に寄り添おうとしたことだけが記されている。工事の督促に赴いたのは、ここにある「水利塩法」に基づく施策による]

■【04-1-065】塩官絶句四首

【解題】塩官県に滞在する間の仏寺を訪ねて四首の絶句を詠んだ。

【訳文】

其の一　南寺千仏閣

古くは、ここの村の半ばは海の波の中にあって、

この寺を開いた師が来て高く築き上げたのだった。

師は千金を使い尽くし、身には何もなく、

白毫を巡る香の煙を眺めて過ごしたのである。

【補足】［(1) 塩官県の西南にある慶善寺［南寺］にある千仏閣での詩。海辺に近く、最初に建てられたときには観海寺と呼ばれた。(2)「白毫」とは、仏陀の眉間にある白い毛で、三千世界を照らす光を放つという］

其のニ　北寺悟空禅師塔

世界は微塵に等しいとすでに知り、

人の身とは、

空の中に浮く花、

あるいは夢の中のものだと観ていながら、

それが後に皇帝になる人の顔であるなどと、

わざわざ見分けたりするものだろうか。

悟空禅師の天眼は天人［仏陀］を識るだけであったはずだ。

【補足】［塩官県の西北にある安国寺［北寺］にある悟空禅師塔での詩。悟空禅師とは、僧の斉安の号で、俗姓は李で、もとは唐の皇室の出であった。憲宗皇帝の子が故あって密かに民間に落とされていたときに、悟空禅師はひと目で貴人であることを見抜き、大切に保護したところ、後に宣宗皇帝となったという伝説がある。蘇軾のこの詩は、そのような話を笑って斥けている］

其の三　塔前古檜

この二本の檜はもとは二人の童であったのだろう。

童は向かい合ったままずっと無言を通し、

老いてさらに恭しくなった。

童は悟空禅師の教えを聴こうと、

庭に立ち、腰まで雪に埋もれてもそのまま動かずにいて、

とうとう化して、いまや蒼い竜のような大木になったのである。

【補足】［(1) 悟空禅師塔の前に立つ古い檜を詠んだ詩。(2) 寺の僧が飼う白い鶏を詠んだ第四首は訳者には解し難いので割愛する］

■【04-1-066】六和寺沖師閘山溪為水軒

【解題】塩官県での仕事を終えて帰って後に、六和寺でこの詩を詠んだ。寺の僧の沖師は谷川に水門を作って堰き止め、その水辺に庵を建てていた。六和寺の名は作品番号 04-1-021 ですでに見ている。

【訳文】

清らかな水は渓から放たれて自在に流れようとする。

師は、氷雪のような美しい水が、

山を出て沙洲に落ちたならば、

きっと潮や泥に汚されてしまうのを残念がっている。

水よ、山の僧のために、少しばかりここに留まってくれたまえ。

■【04-1-067】送杭州進士詩叙

【解題】出張から帰って間もなく、10 月 10 日に知事の陳襄は、科挙の地方試験に合格してこれから二次試験、三次試験に挑むために上京する者たちを中和堂に集め、激励の詩を贈った。蘇軾はその詩にこの序文を添えた。

【訳文】

右の「登彼公堂」以下の四章は知事陳公[陳襄]の詞である。

蘇子[蘇軾]はこのようにいおう。

士が仕えるのを求めるからには、(地位や名声を)得ようと志すものだ。仕えても得ることは志さないとするのは偽りである。もしも得ることを志しても、道[正しい道義]によらずに、時勢の上下するのを視て、その学問を変えて、「私が得るためにはやむをえないのだ」と言い出しならば、得るためには何でもしてしまうことになるだろう。それでよいのだろうか。

昔、斉国の景公が狩りをしたときに、旗によって虞人[山野の管理人]を呼んだところ、虞人は景公のもとには行かなかった。孔子はその虞人の行いを善しとして、「虞人を呼ぶには皮の冠をもってするのが決まりであるからだ」といった。旗を使おうが皮の冠を使おうが、呼び寄せることの意味においては格別変わりがないのだろうが、やはり制度として混同するのはよろしくないのである。まして、学んだものを棄てるのでは、道を学んだところで意味はないのである。

熙寧五年、銭塘県の士で礼部での試験[科挙の二次試験]を受ける者九人が、十月乙酉、中和堂に集まり、陳公はこの詩を作って励ました。流れて返らないものは水である。季節によって遷らないものは松や柏である。陳公の詩は、まず水を歌い、松と柏に及んだ。これは動くものを詠み、進むことの難しさをいわれたのである。万世に移らないものは山である。飛んでときに止まるのは鴻や雁である。陳公の詩はまず山を歌い、鴻と雁に及んだ。これは静かなものを詠み、時代の変化に対応することの難しさをいわれたのである。陳公が士に対する配慮は用意周到というべきである。

『詩経』に、「何も言わなければ用いられない、徳がなければ報われない」とある。

諸君は陳公に対して何をもって応えるのか。

眉山(びざん)の蘇軾が序文を記した。

【補足】［改革の進行に伴って学問のありようが変わりつつあることに、蘇軾はここでも抵抗しようとしているのである］

■【04-1-068】和人求筆跡

【解題】蘇軾はしばしば揮毫を求められた。これは、詩をもって依頼してきたのに応え、その詩に和したもの。初句にある「剡藤紙(えんとうし)」は、作品番号 04-1-044 で見たように、当時の高級な紙。依頼人は詩に剡藤紙も添えてきたのだろう。

【訳文】

剡藤紙(えんとうし)こそは気の毒である。

机の上に広げたときには、

麦の粉のように真っ白に輝いて一点の瑕(きず)もない。

夜になり、青い灯が私の眼をちらちら照らし出すと、

ここに剡藤紙のお弔いが始まる。

私が筆を執ったがために、

春の蚯蚓(みみず)がそこらをのたくりまわり、

秋の蛇がはいずりまわるありさまとなってしまうのだった。

■【04-1-069】冬至日独遊吉祥寺

【解題】11 月 10 日の冬至、春に牡丹を見た吉祥寺(きちしょうじ)に独り遊びに行ってこの詩を詠んだ。

【訳文】

井戸の底に映る太陽をのぞき見ようとする――

冬至のこの日に、

わずかでも光の強さを取り戻していようかと。

しかし、枯れた草の根に、冷たい雨が静かに注がれている。

誰か少しでも似る者がいるだろうか、

牡丹の時期でもないのに独りここにやってきた蘇先生に……。

【補足】[「蘇先生」の原文は「蘇夫子」で、これはむろん蘇軾自身のことである。詩の題に「独り」とわざわざ記しているのは何かしら意味があると見るべきなのだろうか。とはいっても、副知事であるから、供をする者はそれなりにいたはずである]

■【04-1-070】与子明兄

【解題】11 月 15 日付けの従兄の蘇不疑［字は子明］［→作品番号 03-4-009 など］への手紙。一部を省略しつつ訳す。

【訳文】

九月にお手紙を差し上げました。届いておりますでしょうか。目にはいつも兄上の万福を想い見ております。甥も姪も、その子たちも安らかにお過ごしでありましょうか。私も元気にしておりますが、お別れしてから歳月はたちまち過ぎ去り、今年もわずかとなってしまいました。西の方を見て、いつまたお会いできるのだろうかとぼんやりと思うばかりです。何かと事が多く、至るところばたばたとしています。

銭塘はもとは楽都と呼ばれもしたところですが、このごろは尽く削減と倹約がいわれ、一方で家の者の数が増え、物価はすべて高く、日々かつかつで暮らしています。……

ちょっとした公用で間もなく湖州に行きます。出発前のあわただしい中で書きましたので、手紙は首尾をなしていません。……

■【04-1-071】後十余日復至

【解題】冬至の日に訪れた吉祥寺を、十日余り経ってまた訪れた。

【訳文】

春の神様はちょっとばかり薄情で、
まずは梅の花だけを咲かせようとする。
千本もあろうかという牡丹の木には、
また紅色の気配さえもない。
昔むかしの仙人の殷七七を呼んできて、
そこにもここにも花を開かせてもらいたいものだ。

【補足】[殷七七は伝説上の仙人。昔ある人が9月に杜鵑花で有名な鶴林寺を訪れ、天下第一とされる花が見られないのを残念がると、そこに居合わせた殷七七が数日後に菊の花とともに杜鵑花も満開にしてみせた。まだまだ牡丹の時期ではないのに、2 度も吉祥寺を訪れたのはどうしてなのだろうか]

■【04-1-072】送張軒民寺丞赴省試

【解題】張軒民が科挙の二次試験［省試］を受けるために上京するのを見送った詩。蘇軾自身の注で、張軒民の父の張瓌は、伯父の蘇渙と同じ年の科挙で合格した間柄であったと付記されている。

【訳文】

竜飛の甲子の年に科挙を受けようと都に集まったのは、

ことごとく英豪の人々であった。

私は喜ばしいことに、

そのころに老成の士をまだ見ることができた。

人は、春の花が競い咲くときには、

秋の菊はとうに枯れ果てたと笑うのだが、

天は、明るい月ばかりでなく、

空に長庚［金星］も伴わせるのである。

かのときの英豪から家ごとに学問が伝えられ、

貴君と会えば兄弟のような心持ちがする。

都で躍り上がる馬を見るなら、

それに乗るのはまさしく貴君、

祝賀の詩が貴君のお父上のもとにたちまち届くであろう。

【補足】［(1) 最初にある「竜飛の甲子の年」とは仁宗皇帝が即位した天聖元年［1023 年］を指し、その年に張軒民の父も蘇渙も科挙の地方試験に合格して都に向かった。新皇帝を大空に向かって飛ぶ竜に譬えたのである。(2) 終わりの部分は、張軒民がきっと科挙に合格するであろうと歌っている。ある考証によると張軒民の父はこのころ 70 歳ほどですでに退官して宣州にいたという］

■【04-1-073】将之湖州戯贈莘老

【解題】先の蘇不疑への手紙にあったように、11 月の終わりに、蘇軾は公務を帯びて湖州に出向いた。湖州で計画されている水利工事の実態を調査しに行ったのである。

湖州には孫覚［字は莘老］［→作品番号 04-1-030］がいて、杭州を発つにあたってこの詩を送った。

【訳文】

秋に赴いた杭州近くの余杭は、
山水の粋が集まる窟のようなところであった。

ほのかに聞くに、
湖州近くの呉興はさらに清絶であるとか。
太湖のまわりの橘の林は霜のような白い花をつけ、
苕渓の苕の花は雪のように飛んで水面に浮び、
顧渚の茶畑に伸びる芽は歯よりも白く、
梅渓の木瓜の花は真っ赤な頬よりも赤いという。

土地の人がさばく刺身は薄く飛ぶばかりであると聞けば、
行く前からもう涎が流れ出る。

昔の名宰相がこの地に赴任することを長く求め、
昔の名詩人がここの春を尋ねるのが遅すぎたと嘆いたのも、
なるほどとうなずくことができよう。

これほどの地であるから、
貴君と私は会っても、
ただ座禅を組む腰掛けを並べて向き合うだけで十分であろう。

私を歓待しようとするあまり、
湖で華やかなボートレースを催してくれることまではしなくて結構である。

【補足】［(1) 先に余杭を訪れたことは作品番号04-1-030などで見ている。(2) 湖州は

太湖という大きな湖の南に位置し、呉興、苕渓、顧渚、梅渓はその周辺の地名である。この詩はこれから行く湖州周辺の名所を挙げて、旅に出る期待を楽しく詠んでいるのである。(3) 太湖では春の清明節に派手に飾った船による競争が行われていた。詩の題にある通り、末句は孫知事への戯れの言葉である]

■【04-1-074】再用前韻寄莘老

【解題】上の詩と同じ韻を用いて再び孫覚［字は莘老］に送った詩。この詩は故事を用いて、このころの心情をかなり間接的に歌ったもので、その真意を汲み取るのはかなり難しい。従って以下に示すのはかなり荒っぽい「ずっぽ訳」である。

【訳文】

晋の時代の王衍は、大切なのは我が身だと、
兄弟三人で領地をがちがちに固め、
「三窟」に籠ってしまえば万全と思っていた。
同じ時代の顧愷之が、阿呆者と自称して、
みごとに生き抜いたのには到底及ばなかった。
つまるところ、阿呆者は己の境遇に満足して、
天から与えられた寿命を終えるのだが、
知恵者は己の知恵のために死んでしまって、
その罪を晴らすことができないのである。
いま困窮の身にある者［恐らく蘇軾を指す］は、
貴君のよき按配を必要としているのだが、
貴君は頬杖をついて山を眺めているだけである。

野の鳧[恐らく蘇軾を指す]は翅が重くて自分では飛べずにいる。

黄色い鶴[恐らく孫覚を指す]はなぜか両翼を垂れたまま飛ぼうとはしない。

鳧と鶴は泥の中に長くいることはできないだろう。

いま私はまだ進んでいない。

もはや遅くなってしまっているのだろう。

江南に無双といわれる人はまだ去らずにいるだろうか。

私はいま、文章をともに喜び合う仲間がいないのを残念に思っている。

【補足】[この詩の終わりの部分で「江南に無双といわれる人」とあるのは黄庭堅[字は魯直]だという。黄庭堅は蘇軾よりも9歳若く、6年前の科挙に合格していた。後に蘇軾の弟子ないし友人となり、詩と書において蘇軾と並ぶ北宋の大家と称せられる。黄庭堅は17歳のときに孫覚と出会い、科挙に合格した翌年に孫覚の娘と結婚したが、その妻はその 2 年後に亡くなっている。黄庭堅は官職には恵まれず、蘇軾が湖州に向かおうとしていたときには孫覚のもとに身を寄せていたので、この詩の終わりに黄庭堅と会えることを期待していると詠んだのである]

■【04-1-075】答黄魯直書

【解題】これはこれより6年後に黄庭堅[字は魯直]に宛てた手紙。この手紙によると、蘇軾は孫覚のところで黄庭堅の詩文を見たけれども、本人には直接会ってはいないようである。黄庭堅は北京大名府の学校の教授として招聘され、すでにそちらに赴任した後だったのだろう。

【訳文】

……私が貴君の詩文を初めて見たのは、孫覚君のところでした。私は詩文を見て居住まいを正し、

これは優れたものであると感じ入り、いまの世の人の作ったものではあるまいと思いました。

孫覚君はこのようにいいました。

「この人のことを知る者はまだ少ししかいません。貴君はぜひともこの人の名を称揚していただきたい」

私は笑っていいました。

「この人は純金か美しい玉ともいえる人で、人によって名を挙げたりするのではなく、自分自身で名を挙げるはずで、評判になるまいと逃げようとしてもそれはできないのです。どうして私などが称揚する必要があるでしょうか」

その文を観てその人となりを考えるに、身の外にあるものを軽んじて、身の内側にあるものを重んじる人あるとわかります。それは今の君子諸君にはできないことです。……

【補足】［この手紙の後半は後に改めで読むであろう］

■【04-1-076】画魚歌

【解題】この詩と次の詩は湖州への道の途中で詠んだもの。湖州は杭州のほぼ真北、直線距離で 70km ほどである。詩の題の「画魚」とは、鈎でひっかけて魚を獲る漁法で、湖州周辺の水郷地帯で冬場に行われていた。

【訳文】

季節が寒くなると、

沼地の水位が下がって、魚は泥の中に潜り込む。

村人は鈎を付けた短い棒を手にし、

犁で田を耕すように泥水を滅多やたらと打ちまくる。

渚の蒲を手当たり次第にへし折り、

水草をやたらとえぐり取り、

魚の子一匹逃すまいとする。

私も試しにやってみたが、

手にまかせて打ったのは全てはずれだった。

もともとが労を厭わず、万に一つの当たりを得ようとする漁法なのだ。

鈎の刃先に一匹の魚が命中すると、

百匹の魚が驚き、蝦やら蟹やらがあわてて走り、飛び上がるものさえもいる。

聞くところでは、

漁師というものは本来は雛を養うように魚を養うとか。

魚を食ってしまう水鳥を、竿を振って追いやることもする。

鈎を付けた棒を雨霰と叩きまわるこのような漁法があるのを、

私は知らずにいた。

水を無暗と乱して魚を求めるのは、

いささか粗雑すぎるのではなかろうか。

■【04-1-077】鴉種麦行

【解題】詩の題は「鴉(からす)が麦(むぎ)を種(う)える行(うた)」。

【訳文】

老獪な鴉(からす)様は、

霜が降るこの季節、

林を棲家にしていて暇があるらしく、

畑の東側で麦を拾っては、

畑の西側に蒔いておられる。

畑の西側では、植えられた麦がずんずん伸びて青々とし、

畑の東側では、毛の抜けた牛の尻尾のようにまばらなありさまとなる。

来年になって麦が熟す頃には、

麦の芒(のぎ)が穂(ほ)を集めたように突き立つであろう。

そのとき、農夫がまだ食べないうちに真っ先に啄むのが鴉様だ。

鴉様は悠然と歩き、誇らしげに顔を上げたり下げたりし、

翼を振って跳びまわり、牛の角に上りさえもする。

思うに、古(いにしえ)の聖天子の舜(しゅん)が農地を耕したときには、

鳥が草を抜いてその手伝いをしたというけれど、

いまの鴉様はもっともっと働きもので麦を植えているのである。

農夫は一列に並び、

鴉様に、どうぞ休んでいてくだされと拝むのだけれど、

鴉様は知らん顔で飛んで行ってしまう。

ちょうどそこに私はお役人様として乗り込んできて、

もっと働けと農夫に命じるのである。

【補足】［前の詩もこの詩も、民情を歌いつつ、現在の政治状況を批判しているのだろう］

■【04-1-078】墨妙亭記

【解題】蘇軾は湖州(こ)に到着すると、孫覚(そんがく)が建てた墨妙亭(ぼくみょうてい)［→作品番号 04-1-044］を実際に見てこの文章を書いた。

【訳文】

熙寧四年十一月、孫覚知事は広徳から湖州に移り、翌年の二月、庁舎の北、逍遙堂の東に墨妙亭を建て、湖州域内にある漢以降の古い書を刻んだ石を集めて墨妙亭を満たすことにした。

湖州は、東晋の時代から、善い土地柄、とりわけ山水が清遠であることで知られた。魚や稲や蒲や蓮等の産物に十分に恵まれ、民は求めるところが少ないので、争うことがない。そして、この地に用事がなければ訪れる者はいない。だから、ここに知事として赴任する者は、もっぱら風流を重んじ、酒宴を開いて詩を詠じたり、壺に矢を投げ入れる遊びに興じたりしていればよいのである。

孫知事がここに来ると、その年は大水が出て、田圃は稔りがなく、飢饉となって、流亡する者が大勢出た。孫知事は非常時のための蓄えを大いに放出し、民衆を救おうとする至誠の心をもって率先して行動した。それに応えて富裕の者は皆争って穀物を提供して官の救済措置を支えた。それによって生きることのできた者は数知れなかった。

この時、朝廷は国政の改革を進め、新しい法を続々と作り、それを知らせる使者が相次いで湖州にやって来た。だから、孫知事は公文書を処理する仕事に追われてしまって、これまでのように悠々と酒宴に姿を見せることはあるまいと人々は思った。ところが、孫知事はますます客人と席を同じくするのを喜び、詩を賦し酒を飲むのを楽しんだ。その上余暇を得て、古の人々の詩文を収集することに努め、賦詠数百篇を集めて、『呉興新集』と名付けた書物を編集した。その傍らで、書を刻んだ石が荒野の草の中に埋もれているのを破片に至るまで捜し出して、この墨妙亭に集めたのである。

この年の十二月、私は湖州に来て墨妙亭の内を見て回り、感嘆の余り、孫知事のためにこの文章を記すことになった。

ある人は私にこういった。

「すべての物体は必ず尽きてなくなるものだ。しっかりとした固い形体を恃みとしても、長久を期すことはできない。堅固な金属や石でもいずれは変化して壊れてしまう。だから、功名や文章のような形のないものこそを後の世にまで伝えて、より久しきを保とうとするのである。だとすれば、詩文を石に刻むのは、久しく存在するものを、逆に速やかに壊れてしまうものの助けを得て長く保とうとすることになるのではないだろ

うか。昔の人がこのような惑いによって刻んだ石を、孫知事は立派な建物を作って保管しようとしているのだが、その意図するところを察するに、物の道理、万物の法則を知らないと言わざるを得ないのではなかろうか」

それに対して私はこのように考える。

「人間としてできる限りのことを尽くした上で、道理としてついにはこのようになったということであるのならば、後悔するところがない。そうしてこそ物の道理、万物の法則を知る者だといえるだろう。物が形を成せば、必ずそれは壊れる。譬えていえば、人が生まれて必ず死に、国家が興って必ず亡ぶのと同じである。それは必然であるとわかっていても、君子が身を保養して死の訪れを遠ざけ、少しでも長く生きようとするのは無用なことだとはいわないだろう。国を治めるのも同様で、国の安泰を保とうとし、あるいは亡びるのを救おうとして、あらゆる手立てを尽くし、どうすることもできなくなって初めて事を終えるのである。こうしてこそ物の道理、万物の法則を知る者といえるだろう。だから、この墨妙亭を作るのは意味がないとする議論は成り立たないのだ。このことを私はきちんと弁じておかずにはいられない」

それでこの説を記して、墨妙亭に並ぶ品々の横に置くのである。

■【04-1-079】題羊欣帖

【解題】蘇軾は、南朝時代の書家の羊欣の書の模写を孫覚にプレゼントして、墨妙亭のコレクションを増やすことに貢献した。

【訳文】

この羊欣帖はもとは王随公の家にあったもので、私はそれを公の子の王鍇から得た。それを呉興[湖州]知事に孫覚に与え、石に刻んで墨妙亭に置いてもらうことにした。

【補足】[王随は仁宗皇帝のもとで宰相にまで昇ったのだが、何ら功績なく１年で辞めた、と史書には厳しく書かれている]

■【04-1-080】和致仕張郎中春昼

【解題】この詩の題にある「致仕張郎中」とは、かつて「郎中」であっていまは官職から退いている張先［字は子野］である。張先は、北宋の最盛期であったと回顧されることの多い仁宗皇帝治下の古き良き時代を象徴するような風流人である。詞を得意とし、それもまた古き良き優美な歌風であった。湖州の人で、杭州の西湖畔にも別邸を構え、両所を自在に行き来していた。80 歳を超えてなお粋な遊びを好み、かなりの有名人であった。蘇軾は杭州に赴任してすぐのころに、湖畔で偶然張先と出会っていた。張先は湖州で蘇軾が来るのを待ち受け、孫覚も一緒になって 3 人で遊び、張先が「春の昼」と題する詩を詠んだので、それに蘇軾が和した。

【訳文】

張さんは、大官の印を投げ捨てて帰ってきてからは、

万事軽やかに過ごし、

いまも豊かな風情を保っておられる。

この地の人の伝統として、

名物の蓴菜を食べることを理由に職を退き、

新たな歌謡を作って過ごしておられる。

特に神仏に祈っているわけでもないのに、

安らかに健康であるのは、

骨にもとより長い寿命が宿っているからであろう。

杯に浅く酒をついで飲めば、

頬に紅が生じる。

才能は内に秘めておこうとしているのに、

その名を隠すことができないのは、

もとより詩が上手すぎるからである。

口に細やかに句を唱えれば、

穏やかに声の調子が整う。

蝸牛(かたつむり)の殻のような家さえあれば心を自由にできるから、

世の栄辱とは無関係に平穏である。

蠅の頭のような字も明瞭に読めるから、

世の盛衰を閲して微笑を浮かべている。

かつて大軍師になった人が膝を屈して老人に兵法を習い、

かつて大学者になった人が失われた書物を老人に尋ねたように、

張さんに教わろうとする者はたくさんいる。

春風が吹くまでもう指折り数えるばかりであるので、

恐れるのは、

張さんの詩に促されて杜鵑(ほととぎす)が早くも鳴いてしまうことだ。

■【04-1-081】和邵同年戯贈賈収秀才三首

【解題】蘇軾は湖州(こしゅう)で邵迎(しょうげい)［字は茂誠(あざなもせい)］と賈収(かしゅう)［字は耘老(うんろう)］に会い、邵迎が戯れに賈収に贈った詩に和した。邵迎は蘇軾と同じ年の科挙で合格した「同年(どうねん)」の間柄で、一方で賈収は湖州の人で、このとき初めて会ったのが縁となって、その後長い付き合いとなる。なお、詩の題に「賈秀才(かしゅうさい)」とあるのは、日本語でいうところの「秀才」ではなく、科挙の受験を目指して勉強した経験があることを示し、それ相応の教養を具えている人物だという意味である。

【訳文】

其の一

これまでは馬と牛のように互いに省みることもなかったのが、

こうしてすれ違って、たちまち笑って語り合う仲となった。

昔ある人は郷里に帰ると、

心を許せる者だけが通れる三本の道を開いたという。

昔ある人は山に桂が叢生する詩を詠んで、

友人にともに退隠することを誘った。

我等[蘇軾と邵迎(しょうげい)]もまた、

貴君[賈収(かしゅう)]の隣に住むことを許されて、

ともに老いてゆけるであろうか。

この身がいかになるのか、

天に問うのは止めるとしよう。

いずれにしても、

髪が白くなることだって誰もが同じというわけではないのだから。

【補足】[(1) 賈収(かしゅう)はすでに仕官しないと決めていたのだろう。(2) 続く第二首は、当時、賈収は再婚することを意図していたようで、結婚に関連する故事を多数並べて詩を構成している。第三首もまた故事のてんこ盛りで、どちらも結局何が言いたいのか訳者には理解不能なので割愛する]

■【04-1-082】邵茂誠詩集敘

【解題】これはほぼ2年後の熙寧(きねい)7年［1047年］に書いた文章。このときに会った邵(しょう)

迎［字は茂誠］について記しているので、ここで読んでおこう。

【訳文】

貴いか賤いか、長生きか若死にか、それは天によって定められたものである。賢者が必ず貴くなり、仁者が必ず長生きをする、それは人が望むところである。人の望みと天の定めは一致し難いものだ。

昔、匠の梓慶は山に入り、天と一つに合することで驚くべき名器を作り上げたという。これはなかなか普通にあることではない。たまたまうまくいっただけのときに、それが常にあることだと思ってしまうと、多くの人は天を怨むようになる。それは何もわかっていない者の考えである。人が詩文において窮迫するのは仕方のないことだ。心を尽くし、精神を消耗させて、己の気[エネルギー]を盛んにして外界に抗して、詩文を作るのであるから、いまだ老いる前に衰病し、悪いことはしていないのに罪を得たかのように身を疲れさせてしまって、しかもわずかな詩文しか作れないままに終わってしまうのである。

天と人が一致するのが難しく、人が自らを害ってしまうのがこのようであるのなら、困窮するまいとしてもできないのである。

茂誠君の諱は迎、姓は邵氏、私と同じ年の科挙で合格した。その十五年後に、私は呉興の孫覚君の座上で邵君に会った。邵君は数百篇の詩を出して見せてくれたので、私はそれを読んで一カ月余り飽きることがなかった。その文は清和にして妙麗で、南朝の晋や宋のころの人のもののようであった。詩はまことに愛すべきで、咀嚼すると味があり、南朝や唐朝の人の風があった。その人となりは篤学、強記、恭倹、孝友で、しかも法律に通じ、吏事をすばやくこなした。しかし、その姿を見ると、衣の重さにも耐えられないほどで、語気はわずかに聞こえるだけであった。私は邵君には為すべきことが多くあって、それで身を疲れさせてしまっているのを心配して、病気ではないかと疑った。すると翌年になって邵君は亡くなったのだった。

そのまた翌年に私は高郵を過り、服喪中の邵君の家に立ち寄り、中に入って邵君の死を哭した。幃は破れ、ごく粗末な燈があるだけで、部屋はがらんとしていた。そのためにまた涙が出て、大きく嘆息し

たのだった。孔子の弟子の原憲は貧乏で、同じく孔子の弟子の顔回は短命で、漢の時代の揚雄は子がなく、漢の時代の馮衍は不遇で、晋の時代の皇甫謐は病で、それぞれに困苦した人として知られ、いまに至るも人はそれを哀れむのだが、それぞれ苦しむところは一つであったのに対して、邵君はそれらの全てを兼ねていた。果たしてそれは運命によるものだったのだろうか。

私は邵君の詩集をここに編み、邵君のことを哀れに思いはしても、天を怨むことはしない。それが詩文に心血を注いだ邵君の意であると思うからだ。

■【04-1-083】呉中田婦歎

【解題】「呉の農婦の歎き」という詩。呉とは蘇州や湖州のあたりのこと。この詩には蘇軾自身の注で、賈収の韻に和したと記してある。

【訳文】

田圃で出会った農婦がいうには――

「今年は、稲の稔るのがひどく遅れてしまいましたので、

〈霜の風〉がくるまでにまだまだ時間があってほしいと願っておりました。

ところが〈霜の風〉はすぐにきてしまいまして、

雨がざあざあ降り続き、

農具には苔やら茸やらが生えてしまいました。

やるせなさに涙が枯れてしまいましても、

雨は尽きませんでした。

黄色い稲の穂が泥に倒れてしまいましたのは、

見るに忍びないありさまでありました。

それでもどうにかして稲を守ろうと、

田圃に作った掘っ立て小屋で一カ月過ごしまして、

ようやく晴れた日に稲を刈って車に積んで帰りました。

それを肩が赤く腫れ上がるまで目いっぱい担いで、

汗を流しつつ市(いち)に売りに行きました。

値段を安く叩かれたことといったら、

糠(ぬか)を売ったくらいにしかなりませんでした。

お米を売るのは、お上は銭がお要りようだとかで、

お米のままでは税を納めることができないからです。

それで牛を売るしかなくなりまして、

ついには、家を壊して煮炊きをしなければならなくなりました。

わたしは愚かで思慮がありませんので、

来年の飢えにまで気が回りません。

米の値が下落しての民の苦しみといったら、

国境の向こうから敵兵が攻め込んできたのと変わりがないのではありませんでしょうか。

朝廷には民にために立派な政治をなさる方々が溢れていると聞きます。

そういう方々がどんどん増えているのに、

民衆はますます苦しむというのでは、

あたしなんぞは、

川に飛び込んで河童のもとに嫁ぐしかないのでしょう」

【補足】［(1) 農婦が実際にこのように語ったわけではないだろうが、湖州(こしゅう)周辺の実情を見て詩に詠んだのである。「来年の飢え」がどうなったのか、本章の後半で見ることになる。(2) この詩にある通り、お上は租税を物ではなく銭で納めることを求めた。作物を換金する際に商人に安く叩かれ、そのために没落する自作農が絶えなかっ

た。改革はそのような農民を救済することを一つの目的としていたが、その効果はすぐには挙がらなかった]

■【04-1-084】双荷葉

【解題】この詞はいつ詠んだのか不明だが、賈収［字は耘老］のもとにいた「双荷葉」という名の若い妓女のために作ったものと推測されている。「双荷葉」の名は、左右に分けて束ねた髪の様子から付けたものであるようだ。賈収は仕官していなかったが、そこそこに裕福であったのだろう。

【訳文】

双溪月。[二つの谷川に映る月]

清光偏照双荷葉。[清らかな光が二枚の荷の葉をくっきりと照らし出します]

双荷葉。[二枚の荷の葉よ]

紅心未偶、[紅い花のつぼみはまだなくて]

緑衣偸結。[緑の衣をひそやかにまとっているのです]

背風迎雨流珠滑。[風を受けて雨を迎えると珠となって流れます]

軽舟短棹先秋折。[舟をすばやく進めると秋よりも先に折ってしまいます]

先秋折。[秋よりも先に折ってしまいます]

煙鬟未上、[煙る山の上にのぼる前に]

玉杯微缺。[月はちょっと欠けてしまっています]

【補足】[宴席での御祝儀のような詞であるから、心地よく聞ければそれで十分なのだろう。前半は妓女のまだ幼さを残す様子を歌い、後半はそれが失われてゆくのを惜

しむ思いを歌っているのだろう］

■【04-1-085】遊道場山何山

【解題】湖州の南に連なる道場山と何山に遊んでこの詩を詠んだ。

【訳文】

道場山の頂は雲の峰を凌ぎ、

何山の麓には深い谷が刻まれている。

山の水が流れる穴ぐらのようなところから出ると、

この山のすばらしさと向き合うことになり、

いくら見ても飽きない。

眼の下には、白く輝く湖が細くどこまでも続き、

眼の前には、青い山が竜のようにわだかまっている。

山が高いために、松は風がなくても音を響かせ、

岩が白いために、急流が下るのかと誤認してしまう。

道場山にある万寿禅寺の僧は、

滝の水を放たずに留め、

その池からの反射が庵の中を照らしている。

階段の前に、雲に入るほどの桂の大木があり、

月からきた仙人が植えたものだという。

道場山から出て見返ると、

翠の山の中に碧い瓦と朱い欄干がぼんやりと見えている。

小川の脇の田圃で路を問うと、

何山はあの渓の奥深くにあるという。

そこは晋の時代に何楷が籠って夜も読書をしていたところ、

いまも夜半には時を報せる鶴が鳴くという。

私はいま学問を辞めて山に帰らずにいる。

山を見て、酒に対して、何度も嘆息するのである。

■【04-1-086】莘老葺天慶観小園、有亭北向、道士山宗説乞名与詩

【解題】湖州の庁舎の北側に天慶観という道教の寺院があり、その小さな庭に孫覚知事が作った小さな亭があった。天慶観の道士の山宗説は蘇軾にその亭の名と詩を所望した。蘇軾は帰雁亭と名付け、この詩を作った。

【訳文】

春の風が動こうするとき、

北からの風は微かになり、

帰雁亭のあたりでは北に帰る雁を見送る。

しかし、蜀からの客[蘇軾]は、

南に遊んで家から最も遠くにきてしまったままだ。

呉の山々は寒さが尽きて雪がさっと消え去る。

立ち去る舟を見送るようにして花絮[楊の花]が乱れ飛ぶ。

この次に知事がまたここに来るときには、

従う客人はかつての人とは異なっている。

道人だけはかつての人を忘れずにいて、

琴を抱いて夕日の中で黙って佇むのである。

【補足】［帰る雁、故郷から遠く離れた蘇軾、そして湖州から間もなく去る蘇軾、そうした移り変わりをここにいて見続ける道士の心を歌っているのである。できれば、自分が道士のようにここに留まっていたいという思いがあるのだろう］

■【04-1-087】贈莘老七絶

【解題】12 月の終わりに蘇軾は湖州を離れ、その際に孫覚［字は莘老］に 7 首の七言絶句を贈った。これを見れば、湖州滞在中に人々と遊んで詩を詠んでばかりいたわけではないことがわかるだろう。

【訳文】

其の一

ああ、貴君も私も、

世間に群れる人々から長らく離れている。

耳は何も聞かないから、すっかり冷え切り、

心は何も煽られないから、火の消えた灰となっている。

貴君と私とこうして山に向かっているときに、

もしも世間の事なんぞを口にしたならば、

大きな酒盃を飲み干す罰を与えよう。

【補足】［世間の事を聞かないし口にしないのは、孫覚も蘇軾も改革に反対して都を出ているからだ］

其の二

天目山の前の水は、我が裾を浸すばかりに豊かであり、

碧瀾堂の下の水には、船と船とが銜え合うばかりにぎっしり並んでいる。

ここらに堤防を作って水を防ぐということであるが、

「そんなの関係ない！」

と、私はいってしまいたい。

さあさあ、我等は暇をかこって、

苕溪の流れとともに太湖に入って行こうではないか。

【補足】［(1) 天目山は春に出張したときに南側から仰ぎ見ていた［→作品番号 04-1-033］。(2) 碧瀾堂は湖州にあった当時有名な建物。(2)「そんなの関係ない」と訳した原文は「非吾事」［吾が事に非ず］。藤原定家が日記に書いた「紅旗征戎吾が事に非ず」と同じセリフである。蘇軾は湖州での水利事業について視察に来て、事業が無意味であると見たのである。本心としては、改革そのものを「吾が事に非ず」といいたいのだろう］

其の三

夜になって雨が降ったために、

碧の山がより険しくそそり立つ。

そこに雲が浪のように湧き立ち、

町へと流れてくると寒さが増す。

空の極めて澄んだときにしか見られないという弁山は果たしてどこなのか。

四方をそこらじゅう見回して探し出したいものだ。

其の四

夜、橋の上の燈火が川の水を照らし出すようになると、

もうじっとしていられない。

小舟を放ち、歌いながら行こうではないか。

官妓(かんぎ)を借り出して舟に乗せ、笛を吹いてもらい、

明日の明け方に細い月が上ってくるまで、遊び続けようではないか。

【補足】［官が管理する妓女は「官妓(かんぎ)」とも「営妓(えいぎ)」とも「官奴(かんど)」ともいった。この原詩では「官奴」と表記している。当時の妓女は身の自由を奪われて男性官員に隷従する者であったのだ］

其の五

三年の間、私は都にいて、まずい飯にもう飽き飽きし、

淮魚(わいぎょ)を楚粕(そはく)に漬けたのを食べたくて仕方なかった。

今日は駱駝橋(らくだきょう)の下で船を泊めて見ていたら、

上げた網から銀の刀のような淮魚が、

次から次へと出てくるではないか。

【補足】［淮魚(わいぎょ)の粕漬(かすづ)けは湖州(こ)の名物であった。都での飯はまずかったと回顧していることからも、蘇軾が都をあまりよく思っていなかったことがここでもわかる］

其の六

烏程(うてい)の稲は、霜の季節を経て熟したために、

香り強く人を襲う。

雪水(とうすい)の流れは、

まるで春風を溶かし込んだかのように光り輝いている。

この米とこの水から醸した酒を、

多く酌むのはやめるがよい、

私は醒めるときなく狂ってしまうだろうから。

【補足】［(1)「烏程」は湖州近くの地名で、湖州というよりは何かゆかしい感じがあるのだろう、実はこれまでにも原文では湖州ことを「烏程」と表記していた箇所が幾つもあった。(2) 霅水は湖州の町中を流れる川。(3) 終わりの部分は故事を用いて婉曲に述べているところを露わに訳した。(4) 其の四以下がことさらに享楽的な感じで詠まれているのは、与えられた任務を忠実に果たすことが良心に反するので、あえて斜に構えているのだろう］

其の七

去年の十二月には西湖の孤山を訪ね、

僧坊の窓辺を借りて、半日ゆっくり昼寝をして過ごし、

家に帰って妻や子の顔を見ようとは思わなかった。

間もなく私は杭州に帰るのだけれど、

やはり妻や子の顔を見ようという気はさらさらない。

だから、貴君がまた次の約束をしてくださるのなら、

すぐにここに戻ってくるだろう。

【補足】［これはちょうど 1 年前に恵勤、恵思の 2 人の僧に贈った詩［→作品番号 04-1-001］を踏まえたもの。その詩が評判となって湖州の孫覚にも知られていたのだろう］

■【04-1-088】至秀州、贈銭端公安道、並寄其弟恵山老

【解題】湖州での仕事を終えると、帰路は東に出て秀州を経由して杭州に戻った。秀州で、銭顗［字は安道］に会ってこの詩を贈り、合わせてその弟に寄せた。銭顗は官

界の先輩で、王安石の改革を厳しく批判した硬骨漢で、このときは左遷されて、秀州で酒税を監督する業務に携わっていた。その弟は常州［秀州の北］の恵山に住む道士で、この詩の題では恵山老と呼ばれているが、後に銭道人の名で登場する。

【訳文】

鴛鴦湖のあたりは月の光に照らされ、

どこまでも水が広がっているかのよう。

夜に一艘の小舟を放つと、

眠っていた鴛鴦たちを起してしまう。

暁まで遊び、石橋亭に舟を繋ぐ。

髯御史殿[先年まで朝廷の御史台にいて髯が自慢の銭顗のこと]は、

忝くもこの寒さのなかを付き合ってくれた。

貴君と交わりを結ぶようになったのは最近のことであっても、

情愛はことのほか厚く、

深く心を論じ合える数少ない相手なのだ。

不遇であったことで知られる漢の時代の蕭望之や揚雄にも似た境遇に、

貴君が置かれていることには、

寂寞として悲しみに耐えられなくなるのだが、

貴君の表情を見ると、

むしろ溌剌としていて、

遷謫されるのはかえってよいことなのかと思えてしまう。

天公[天を擬人化したもの]が人を苦しめるのなら我等はどうすることもできないが、

世間が抑圧しようとしたところで貴君には意味がない。

毘陵[常州]の高山[恵山のこと]には、錫で突いたところから泉が溢れ、

陸羽[唐代の著名な茶人]はその水に他の味は全て忘れてしまったといった。

弟君はまことに賢く、

若くして衣を払ってこの山に入り、

泉で耳を洗って世俗のことは聞かなくなかった。

山の上に立って湖を望むならば、眼に光が揺れ、

山に下に立って足を濯くならば、指に波が生じる。

【補足】[(1) 冒頭の鴛鴦湖は秀州の町の南にある湖で、南湖とも呼ばれ、鴛鴦がたくさんいることで知られていた。(2) 恵山に陸羽が褒めた水があることは作品番号 04-1-037 ですでに見ている。(3) 詩の終わりにある湖は太湖のことであろう。湖のありさまを叙述した後に、原詩にはさらに結びの二句があるのだが、晋代の故事を用いていて意味がさっぱりわからなかったので訳せなかった。それでこの訳文は尻切れトンボになっている]

■【04-1-089】秀州報本禅院郷僧文長老方丈

【解題】秀州にある報本禅院を訪れると、蜀地方の訛りで話す文長老に会ったので、この詩を贈った。

【訳文】

郷里は万里の彼方、

今はただ夢の中だけにある。

子供時代に親しんだ蜀音は、

いまではすっかり呉音に変わってしまった。

蜀僧に出会って半日話すうちに、

私はたちまち呉音を忘れてすっかり蜀音に戻り、

峨眉山の青い山並みがすぐそこの空に聳えているかのような気分にもなった。

文長老は蜀音ばかりか実は言葉も忘れて、

仏道の真に奥深いところにおられる。

私は詩を詠もうとして言葉を捜すのだが、

百の句を並べたところでもとより何ら意味がないに違いない。

来年は天台山に登って妙薬を掘り当て、

その霊力でありとあらゆる題材で詩を詠み尽くしたいものである。

【補足】[峨眉山は蜀の名山。天台山は中国の三大霊山の一つで、仏教の聖地。杭州から遠くないので、杭州任期中に登っておきたいと思っていたのだろう]

■【04-1-090】王復秀才所居双檜

【解題】杭州に帰った蘇軾は、ある日、町の候潮門の外に住む王復の住まいを訪ね、そこにある二本の檜を詩に詠んだ。

其の一

かつて呉越国の王が築いた遍重城[杭州の町をいう]、

そのかたわらにあった池に臨む館、

その跡地にある王君の庭、

そこには珍しい草、奥ゆかしい花がある。

呉越国は遠い昔に去ってもはや見ることはできない。

ただその名残として、

太平を願って植えられた二本の檜がここに聳え立っている。

其の二

二本の檜は向かい合って凛々しく立ち、

決して欺き合ったりはしないし、

幹はただ真っすぐに空を凌ぎ、

奇をてらうようなことは決してしない。

根は折れ曲がることなく九泉[地下の別世界]に達していて、

世間に隠れた竜が潜むのを、

この檜だけが知っているのである。

【補足】[(1) 王復の住まいは種徳亭と呼ばれ、それについて詠んだ詩を次の章で見ることになる。そこに王復の人となりが記されている。(2) 後に蘇軾を嫌う人々は、この第二首は、蘇軾が世間から埋もれた境遇に置かれているのを恨んで皇帝を謗った詩であるとして、蘇軾を告発する一つの材料として挙げた。しかし、この詩はどのように読んでも王復が埋もれていることを惜しんでいるのであって、告発者のような珍解釈をすれば漢文のテストで赤点を取るしかないだろう。皇帝もまた「檜を詠んだ詩がどうして朕と関係しようか」と、告発を却下したという]

■【04-1-091】与林子中

【解題】林希[字は子中][→作品番号 04-1-008]に宛てた手紙。

【訳文】

貴君は喪に服して、楽しみとすることもなくお過ごしでありましょう。しかも貧乏をされて、何事も困難ばかり

といったところでありましょうか。近ごろ、王存君からの手紙を得ましたが、貴君と同じようにされています。吾らがこのようでありますのは、つまり逃れようのないものだからなのでしょう。

杭州にきてからは、俸給でほぼ足りるようになりましたので、甥を一人呼ぼうかと思っています。多忙も少しは緩むでしょうか。これはことさらに言うに足りないことでありますが、つまりは飢えや寒さにはとりあえず窮せずにいられるということです。

これもまた些細な事ですが、近頃何人かの僧を放逐して、改めて別の僧に長老として来てもらおうとしています。いま朝廷に人を派遣して、瑞光本師にお願いしようとしています。……

【補足】［(1) 王存［字は正仲］は官員仲間で、このときやはり喪に服していた。(2)「甥を一人呼ぼう」としているのは、劉瑾［→作品番 04-1-003］の孫のことであろうと推測されている。(3) 瑞光本師は宗本禅師あるいは円照禅師とも呼ばれ、陳襄知事は杭州の浄慈寺の住持として招こうとしていた。仏教界の主要な人事は国家の管理下にあった］

■【04-1-092】除夜、直都庁、囚繋皆満、暮莫不得返舎、因題一詩于壁

【解題】大晦日の夜、蘇軾は役場に残って仕事をしていた。牢獄には、明日は元日だというのに、裁きが決まっていない罪人が大勢いた。当時は行政官が裁判官も兼ねていたので、蘇軾は未決囚の多さに責任を感じ、思うところを詩に詠んで壁に書いた。

【訳文】

大晦日には早くに家に帰りたいものだ。

しかし、公務があって役所に留まらなければならない。

筆を持ち、書類に向かって不意に涙がこぼれる。

哀れではなかろうか、ここに繋がれている囚人たちは。

法の網に落ちるのを恥とも思わず、

ただただ食うためにしてしまったのだ。

私だって食うために、わずかな給与が恋しくて、

ぐずぐずと故郷に帰れずにいるのだ。

どちらが賢くてどちらが愚かということはない、

同じく食うためにしているだけなのだ。

せめて正月の間だけでも、

囚人たちを家に帰してやりたい……。

昔のそのようなことを実行した立派な人々に恥じ入るばかりだ。

【補足】［未決囚のなかには塩の専売に違反した者もいたのではないだろうか。改革政治は税収を増やすために、塩の専売を強化し、杭州を含む江南は強化のモデル地区とされ、非常に厳重な取り締まりが行われた。それによって犯罪者が大量に生じ、蘇軾はそれらの人々の判決文を書くたびに涙を流したと、別のところで書いている。先祖が絹商人であったと推測される蘇軾には、民間による自由な交易に任せた方がより効率的で全体の利になるという思いがあった］

第 4 章　大きな転機――初めての杭州

［第 4 章その二］

熙寧6年［1073年］、蘇軾38歳。

■【04-2-001】元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作

【解題】蘇軾は杭州で 2 度目の正月を迎えた。これは、張先［字は子野］に贈った戯れの詩。詩の題によると、初めに七夕のときに孫覚［字は莘老］が詩を作り、それに張先が和し、それにまた蘇軾が和した。昨年の終わりに湖州で張先や孫覚と交歓したことは作品番号 04-1-080 などで見ている。後半の途中に挟まれている八句は訳者にはさっぱり意味が掴めないので割愛する。

【訳文】

眠りの中に新たな春が入ってきて目覚めると、

南の空に星がまだまたたいていたので、

貴君のセタの句を思い出した。

酒仲間として私は貴君に全く敵わなかったし、

詩壇における貴君の功績は大きなものがある。

……

何はともあれ、囁嚅翁殿にお尋ねするのは、

小蛮さんはどうなさっていますかな。

【補足】［終わりの部分は、唐代の著名人である白居易［字は楽天］の故事を引いた楽屋落ちである。「囁嚅」とはべちゃべちゃよくしゃべることで、ある友人が白居易

を「囁嚅翁」と呼んだことがある。張先もきっと同様であったのだろう。白居易は晩年は洛陽で悠々自適の日々を送り、身近に若い妓女を置き、その一人に「小蛮」がいた。張先もまた名立たる風流人で家には幾人かの妓女がいた。この詩では、蘇軾が張先に戯れて白居易になぞらえたのだが、後年、蘇軾自身が何かと白居易と比較されるようになる]

■【04-2-002】正月九日、有美堂飲、酔帰径睡、五鼓方醒、不復能眠、起閲文書、得鮮于子駿所寄雑興、作古意一首答之

【解題】長い題をそのまま訳すと「正月九日、有美堂で飲み、酔って帰ってすぐに眠った。明け方前に目が覚め、再び眠ることができなくなり、起きて文書を見ていると、鮮于侁［字は子駿］から『雑興』と題した詩が寄せられていたのがあった。やや古めかしい内容の詩を作ってそれへの返事とした」。有美堂は、杭州の町の南にある鳳凰山の上にあった有名な建物。南に銭塘江を、北に西湖を見下ろす絶好のビューポイントに建っていた。鮮于侁は伯父の蘇渙に所縁の人で［→作品番号 02-4-017］、范鎮［→作品番号 03-3-023］とも縁故があり、蘇軾は 5 年前に郷里から上京した際に成都で会っていた。鮮于侁はそのときからそのままずっと蜀で地方官を務めていたようだ。

【訳文】

世間の人が事を起こして何かと騒がしくしている中で、

志のある人が独り憂いに沈んでいる。

琵琶の弦が古くゆかしい音を奏でようとすると、

なぜか大勢の踊り手の腰の太鼓が派手に鳴らされてしまう。

酒を三杯飲むと一万の憂いを忘れることができるという。

酒が醒めると憂いはまたありありと戻ってきてしまう。

轆轤(ろくろ)を、ぶん回す索(ひも)が一度離れはしても、

すぐにまたぐるぐるとまとわりつくようなものだ。

私はこういうことを読んだ――

漢(かん)の時代に原渉(げんしょう)という人がいて、

若い頃は品行方正で非の打ちどころがないとの評判であったが、

叔父の仇を討ってからはもっぱら任侠の徒と交わり、

姦人(かんじん)の雄(ゆう)といわれるまでになった。

それで人々が原渉を批判すると、こう答えた。

「君も知っているだろう、かの有名な未亡人の話を。

　その未亡人は初めのうちは己をしっかりと戒め、

　独り身を守り通すために焼死したり自殺したりした昔の人のように、

　自分もならなければいけないと考えていた。

　ところが、盗賊によって身を汚されてしまうと、

　もはや貞節な女には戻れないと、

　不道徳な行為を率先して行うようになった。

　それと同じで、

　一度道をはずしたならもはや元には戻れないのだ」

私はこういうことも読んだ――

普段は羊の肉を炙ったものを嗜み、

その美味をじっくりと味わって、

敢えて満腹するまでは食べないように戒めていた人がいた。

ところが、蛇を煮たり蛙を焼いたりしたものを、恐る恐る口にしてみて、

初めはなかなか喉を通らなかったけれども、

次第に慣れて、

もはや食べずにはいられないまでになってしまった。

いま私はこうしたことの境目にいるのではなかろうか。

憂いに襲われてもう眠ることができない。

起きて天の川の茫漠とした明かりを見ていると、

それに流されるようにして、

一つの星が欄干へと落ちた。

そこに、薄明の中、

明けの明星が明るい光を伴って昇ってきたのだった。

【補足】［(1) 幾つかの故事を引いて、鮮于侁とそれに自分自身をも鼓舞しようとしている。地方官僚として世間の流れに乗ってしまうのか、己に場所に踏み止まるかの瀬戸際に立っていると、このとき蘇軾は危機感を抱いていたのだろう。(2) 後半で引かれている「有名な未亡人」は「陳孝婦」と呼ばれた人。その話は、2018 年のノーベル平和賞を受賞したナディア・ムラド氏のことを思うと、およそ別の解釈が可能になるだろう。900 年前の蘇軾の倫理観は当然ながら現代とは大きく異なっている。(3) 詩の終わりは、金星の輝きに希望を見るとともに、金星は月に次いで明るい星であるので、皇帝を補佐する清廉な大臣を象徴するものなのだろう］

■【04-2-003】次韻答章伝道見贈

【解題】章伝［字は伝道］が送ってきた詩に和して返した。章伝について詳しいことはわからないが、幾つかの史料から、上の詩で見た鮮于侁と同じく蜀の閬州の人で、蘇軾より 10 歳ほど年長であったらしいことが知られている。内容的に上の詩と共通す

るところが多い。

【訳文】

人々は皆、天地の広がる「宇」[空間]に生まれ、

人々は皆、古今に流れる「宙」[時間]を目にする。

下を見ることで、上に高みがあると知れ、

前に起こったことがあるから、後に為すことがわかる。

上には、道理に通じた達人がいて、

譬えるなら、

達人は強い弓をやすやすと引き、

ひとたび緩めたなら、他の人はもはや引くことができない。

下には道理に暗い下士がいて、

譬えるなら、

下士は王冠を頭に載せた猿で、

縄で繋がれているくせに、誇らしげに踊りまくる。

時の流れは、

速いと見れば、細い隙間を馬が駆け抜けるほどの間、

遅いと見れば、雨だれが石を穿って突き抜けるほどの間。

誰もが目にするように、漢や唐の皇帝が住んだ宮殿も廃墟となり、

まして、衆人の栄華なんぞは、ほんの一杯の酒に酔うようなもの。

「宇」と「宙」の間にあるものは、

一つの尺度で安易に測ることはできない。

昔、ある王様は、珍しい海鳥の訪れを喜び、

賓客を迎えるように、音楽を演奏して最高の御馳走を並べたのだけれど、

海鳥は音楽に眩暈(めまい)を起こし、何も食べられずに死んでしまった。

昔、ある哲人は、野辺に伏した髑髏(どくろ)を枕にして眠り、

夢にその髑髏の主と語り合い、

「死ねば、社会の縛りからも、自然の変転からも解放され、

　この楽しみは何物にも替えられない」

と、聞いた。

ああ、昔、私が年少だった頃には、

道義を守る事だけを思い、

貧乏であっても疚(やま)しさはなかった。

役人として出仕しようとしてからは、

事物に使役され、ついにはその囚われの身となってしまうのを恐れるようになった。

漢(かん)の時代の著名な儒学者は権勢ある大臣に媚び、

漢の時代の著名な歴史家は権勢ある大臣に媚びた。

その先例に習うなど、

頑固で意地っ張りの私は断じて望むところでなく、

煌(きら)びやかな文字で飾った文章でお偉いさん方を喜ばせることはできない。

ほのかに長者の助言を耳にするに、

「剛直であるのは、長い寿命を養うのにはよろしくありませんぞ。

　顔に唾を吐きかけられても、少しも拭ったりせず、

　股をくぐれといわれたなら、すんなりはいつくばり、

　相手を仰ぎ見るのがよろしいでしょうな。

　とにかく、豪強の者に対抗しようなどとはしないで、

その前で身が朽ちるまでじっとしているくらいがよろしいのですぞ」

さてさて、貴君は、

海中で光を放つ珠のような智慧の持ち主であるのに、

どうしたことか、

このような助言は智慧の網目からうっかり漏れてしまったのだろうか。

世間の人はこのようなこともいう――

大きな器量の持ち主は目先のちまちました仕事には役に立たない、

絶世の美人も真の出会いがないままに老いてしまうこともある、と。

私はここのところ衰えることが久しく、

十年来の知己からさえも手紙がこなくなり、門には客人の訪れもない。

そこに貴君が詩を寄せてくださったことに感じ入り、

このような返事をして、またの返答を待つものである。

【補足】［蘇軾が杭州時代に、この詩に詠まれているような危機意識と向かい合ったことから、本章のタイトルを「大きな転機」としたのである］

■【04-2-004】法恵寺横翠閣

【解題】上に見た二篇の詩は、蘇軾の作品群の中でもほとんど注目されることはなく、杭州での 3 年間の代表作としてよく紹介されるのは例えばこの詩である。この日の朝、蘇軾は舟を西湖に浮かべ、湖の南に連なる山並みの一角に呉山を見た。午後に、杭州市内にある法恵寺に行き、そこの横翠閣から角度を変えて呉山を見た。

【訳文】

朝方には呉山が横に並ぶのを見て、

夕方には呉山が縦に並ぶのを見る。

呉山はまことにたくさんの姿を持ち、

あちらを向き、あるいは、こちらを向き、

見る人によって様々なポーズを取る。

ここに朱塗りの楼閣を建てたのは、

物の奥深さを知る人であろう。

中はがらんとして何もなく、

ただあるものといえば、

窓辺にかかる簾(すだれ)のように、

うねうねと連なる丘の遠景である。

こうして春が巡りきても、

私には故郷に帰るあてがない。

人は秋が哀しいというが、

春はさらに悲しい。

西湖(せいこ)に浮かんだとき、

故郷の眉山(びざん)を流れる岷江(びんこう)を思い出し、

さらに横翠閣(おうすいかく)に登って、

蜀(しょく)の霊峰、峨眉山(がびさん)を思い出した。

ここの欄干にもたれているこの私はもとより老いやすく、

欄干に施された彫刻とて、いつまでもその美を保ってはいられない。

幾百年にわたる興廃は悲しむべきなのか。

遥かに想像するに、

この寺もいつしか草むらの中に消えてしまうのだろう。

その時になって、もしも旅人が、

かつて私が遊んだところを訪ねようするのなら、

呉山が横に並ぶところから始めるのがよいであろう。

【補足】［冒頭の「朝見呉山横、暮見呉山縦」［朝に呉山を横に見て、暮に呉山を縦に見る］は、蘇軾がものごとには常に多様な面があると強く意識していたことを示す句として、特に有名である］

■【04-2-005】祥符寺九曲観燈

【解題】祥符寺の九曲法済院で燈篭を見て詠んだ詩。1 月 15 日は上元節で、上元節の前後の日々は色とりどりの灯篭を飾り付け、夜にそれを見て歩くことが盛んに行われた［→作品番号 03-2-008］。

【訳文】

紗を張った燈篭に迎えられて門から入ると、

銀の葉から昇る香の煙が待ち受けている。

燈篭の輝きは、

仙薬を焼く金の鼎からの光のように夜を照らし、

客人の流れは、

宝の珠を穿つ蟻の列のように朝まで絶えることがない。

西湖の波は燈篭の光のなかで翻り、

西湖の魚は燈篭の焔に焦がされるのを畏れたりはしない。

明日になって酒が醒めたらな、

この光景も空しく想像するだけで、

消えゆく夢を追いながら詩を詠むことになるのだろう。

■【04-2-006】上元過祥符僧可久房、蕭然無燈火

【解題】上の詩の続きで、祥符寺の中でも、可久の僧房ばかりは燈篭がなく静まり返っていた。可及は先に出てきた清順［→作品番号 04-1-063］と並んで詩をよくする僧として知られていた。恐らく蘇軾は燈篭見物が目的で祥符寺に来たのではなく、可及に会うためだったのだろう。

【訳文】

祥符寺の門前で、二手に分かれて人々が歌ったり踊ったりしている。

ここの一室だけは、清らかな冷たい風が吹いて、氷のように静まり返っている。

仏説で「無尽の燈火」という――

心に一つの火を灯せば、百にも千にも無限にもなる――

ここでは灯篭によって御仏を照らそうとしていない、

それを見たことで、

無尽の燈火とは元来は無の燈火であると知った。

【補足】［この詩の末句は、「始知無尽本無燈」［始めて知る無尽は本と無燈であると］である。わずか7文字に対して訳詩では5行を費やしている。「無尽の燈火」とは、仏の教えが、一から百、千、万……無限に広まって行くことの譬えである。蘇軾は、有限の数から無限が生じるのではなく、無がすなわち無限であるといっているのである。そのような理屈を詩に篭めるのが、蘇軾を代表選手とする宋代の詩の特色となっている。詩とは、言語では表しきれない感情の高まりを、言語によって表現しようとするものであるとするのなら、李白や杜甫を代表選手とする唐代の詩によってそのような

ことはほぼ窮められてしまい、宋代の人々は新たな可能性を切り拓くべく、静かな思索を詩に詠み込むようになった。後の時代には、こうなるともはや詩ではないとの批判も少なからず生じた]

■【04-2-007】正月二十一日病後、述古邀往城外尋春

【解題】蘇軾の詩の題にはよく「病」という字が出てくる。体調を崩すことがしばしばあったのだろうか。この詩の題は、「正月二十一日、病の後に、知事の陳襄［字は述古］から春を尋ねに郊外に行こうとの誘いがあった」。

【訳文】

欄干の前の凍っていた沼では、さざ波が立つようになり、

屋根の上では、鳥がねんごろに人を呼んでいる。

病を経て白髪が増えたと驚き、

こうも年を取ってしまうと、

妓女を伴っての酒には魅力を感じない。

なおも伏せたままでいると、

鼓と角笛が鳴らされるのが聞こえ、

長官様のお出ましではなかろうかと、

念のために息子を呼んで衣や冠を整えさせる。

すると、街中の建物はどれほど立派でもやはりせせこましいから、

広々とした野に出て、思う存分春を眺めようではないかとのお誘いであった。

【補足】［ちなみにこのとき蘇軾には 3 人の息子がいた。長男の邁は 15 歳、次男の迨は 4 歳、三男の過は 2 歳であった。長男は前妻の子、次男、三男は後妻の子である。

原詩では「穉子」に衣を整えさせたとあるが、穉い子といっても、さすがに 4 歳の次男では役に立たないであろう]

■【04-2-008】有以官法酒見餉者、因用前韻、求述古為移廚飲湖上

【解題】前の詩と同じ韻を踏んだ詩。詩の題は、「官製の酒を贈ってくれた者があった。それで前の詩の韻を用いて詩を作り、知事の陳襄を誘って西湖の上で料理しつつ飲むことにした」。

【訳文】

門の外に出たときに、

使いの者とばったり出会って、私は喜んだ。

官製の美酒を届けにきてくれたのだ。

ならば、料理人を引き連れて西湖に繰り出そうと思い立った。

赤い鱗の魚を船上で刺身にさばいてもらおう……。

湖を埋める遊覧の船には、

緩やかに漕ぐのによい棹が具えられ、

遊興の人々は春の新たな装いを身にまとっていることだろう……。

我等も厳めしい官人やら武人やらの格好などは無用として、

魚釣りに身をやつした仙人のようであるのがよろしかろうか。

水辺の春への先導役を私が務めようとするのは、

世の中の結構な興趣のほぼ全てが湖上にあるからだ。

■【04-2-009】飲湖上初晴後雨二首

【解題】「西湖で飲んだが、初めは晴れていて、後に雨になった」という詩。上の詩の続きであろう。

其の一

朝の光は、
客人を迎えるのが役目、
重なり合う丘をつややかにする。
夕べの雨は、
客人を引き留めるのが役目、
ほろ酔いの郷へと導き入れる。
これほど結構なことはないのに、
それもわからないのなら、
酒呑みの風上には置けないので、
その者の一杯は水の神様に捧げるべきであろう。

【補足】［この詩には、蘇軾自身の注で、湖のほとりには水の仙人の王様の廟があると記されている］

其の二

きらきらと広がるさざ波の光――
西湖は晴れてこそよろしかろう。
もわもわと雨に覆われる山々の色――
西湖は降るのもまたよろしかろう。
西湖をかの美女の西施と比べるのなら、

淡い化粧も濃い化粧も、

全てまことに結構なのである。

【補足】［西施はこの地方の歴史に深く関わる美女。「淡い化粧も濃い化粧も結構」淡粧濃抹総て相宜し］という句はすこぶる人口に膾炙し、現在でも高校の漢文の教科書に載っていたりするので、この詩の伝統的な読み下し文も添えておこう。この詩だけを見ると、蘇軾の快楽主義的な一面が強く印象付けられるであろう］

水光瀲灩晴方好、［水光 瀲灩として晴れ方に好く］

山色空濛雨亦奇。［山色 空濛として雨も亦た奇なり］

欲把西湖比西子、［西湖を把って西子に比さんと欲るなら］

淡粧濃抹総相宜。［淡粧 濃抹 総べて相い宜し］

■【04-2-010】往富陽新城、李節推先行三日、留風水洞見待

【解題】1 月の末に杭州の西南の富陽県や新城県のあたりを巡る出張に出た。この詩の題は、「富陽、新城に往くに、節度推官の職務にある李泌が三日早く出発して、風水洞に留まって待っているという」。風水洞は有名な洞窟である。

【訳文】

山は春――

タクタクと春の鳥が鳴く。

その声を聞いて、私は詩を吟じないではいられなくなった。

道は長い――

うねうねと川に寄り添う。

そこを歩きつつ、貴君と語らずにはいられなくなった。

路辺の人に問うと、

「馬に乗ったさっそうとした好男子のあのお方でございましたら、

　さだめしまだ遠くには行っておられませんでしょう」

皆がそのように答えてくれるのだが、

金鯽(きんせき)の池のあたりにも貴君の姿はなく、

貴君を追いつつ定山(ていざん)の村も過ぎてしまった。

風水洞(ふうすいどう)は昔から有名なところ、

山や谷川を隔てた先にあるから、

夜分に及ぶようになるともう行くことができない。

それで、まだ暁の間に、渓を渡る橋にまできてみたところ、

滴り落ちる水の上に梅の花びらが浮かんでいた。

ならば、いましがたこの梅の木に貴君が馬を繋いだのだと知れた。

杭(こう)州の町を出てこれで三日、

まだこのあたりでぐずぐずしていると知れたなら、

妻や子は、いつ帰ってくるのやらと、ぼやくであろう。

世間の若者はとかく速く行くのを誇りたがるものであるから、

貴君に私を待つ気があるとしても、

はてさてそれはどこであるのやら。

■【04-2-011】風水洞二首和李節推

【解題】風水洞(ふうすいどう)で李泌(りひつ)と落ち合い、李泌が詠んだ詩に和した。

其の一

風が吹き込むと、がらんとした洞窟が鳴る。

心を虚しくして、大地の奏でる音楽を聴く。

細い流れが石の門から流れ出てくる。

この洞窟の奥に桃花源（ユートピア）があるのではないかと空想する。

この奇観を前にしては、旅人が好い詩を詠むのは難しい。

ここにある寺の僧は無口であるので、

教えを受ける代わりに、氷雪のような水を瓶（かめ）に酌んで帰ろう、

これさえあればいかなる渇きも慰められるであろうから。

【補足】［続く其の二は、ここが仙境に近いと詠んでいるのだが、上にある「好い詩を詠むのは難しい」の証左であるかのように、苦労して訳してもあまり面白くないので割愛する。ただ、「世事漸艱吾欲去」［世事（せじ）漸（ようや）く艱（かん）なり 吾（われ）は去（さ）ろうと欲（ほっ）す］の句が、改革政治のもとで官職に就いているのに嫌気がさしたことを詠んでいるとして注目されもしたが、美しい風光のもとでそのような言葉を発するのは特段珍しくはないだろう］

■【04-2-012】風水洞聞二禽

【解題】風水洞（ふうすいどう）で二種の鳥の声を聞いて詠んだ詩。「青竹筍（せいちくじゅん）」と「白頭翁（はくとうおう）」がその鳥の名である。

【訳文】

青竹筍（せいちくじゅん）が竹の林の外でひと声啼くと、

白頭翁（はくとうおう）が半ば酔った白髪頭の翁に呼びかける。

春の山はこれほどまでに好いのに、

故郷に帰らずにいてよいのか、と、

鳥たちは私に勧めている……。

■【04-2-013】臨江仙

【解題】風水洞で作った詞。一連の詩と同時の作ではないのかもしれないが、ここで訳しておく。

【訳文】

四大従来都遍満、[四大[万物生成の四つの源]はもとよりあたりに満ち満ちていますから]

此間風水何疑。[ここにすてきな風水があるのもあたりまえなのでしょう]

故応為我発新詩。[それに応じて新しい詩が生まれます]

幽花香澗谷、[深い谷に花がゆかしく香り]

寒藻舞淪漪。[さざ波に浮草が舞っています]

借与玉川生両腋、[七杯の茶で両腋に翼が生じる気分になるといった人がいましたけど]

天仙未必相思。[仙界に飛んでいかなくてもここに来ればよいのです]

還恁流水送人帰。[流れる水が帰る人を送ってくれます]

層巓余落日、[重なる峰の向こうに日が落ちて行き]

草露已沾衣。[衣はすでに露に湿っています]

■【04-2-014】独遊富陽普照寺

【解題】風水洞で遊んだ後に李泌と別れたのだろう、富陽県の普照寺に独りで行き、

この詩を詠んだ。

【訳文】

富春[富陽]は漢の時代から知られる古い村、

この寺は唐の時代からのもの。

高い木に依るのは老いた鶴か、

朝廷から賜った文書を護るのは天上から帰った竜であろうか。

筒を連ねて春の水が遠くここに引かれ、

夕暮れの鐘の音は谷を出て遠くへと響いて行く。

昔、ある人が寺に泊まって夜の月を見つつ詩を詠み、

途中から次の句が浮かばなくなって苦しんでいると、

座禅を組む老僧がすらすらと句を吟じて聞かせたという。

私のためにそのようにしてくれる人はここにいるのだろうか。

【補足】[昔のある人とは唐代の宋之問である。宋之問は則天武后に仕えた人で、詩の形式美を整えるのに大きな功績があった。余談であるが、眉州の蘇氏の祖とされる蘇味道と同じ時代の人である。残念なことに、宋之問も蘇味道も道義的に問題のあるの振る舞いが多く、一方は皇帝から死を賜り、一方は流罪となって移動中に死んでいる]

■【04-2-015】自普照游二庵

【解題】上の詩の続き。普照寺の裏手にある西の庵と東の庵の二つの庵を訪ねた。

【訳文】

山に入ってからの半日、

人に出会うことがなく、

袂にふんわりと入ってきて迎えてくれたのは野の梅の香り。

高い松の木の上で風の音がするかと思ったら、

夕暮れ時の細かな雨が落ちてきた。

たどりついた西の庵は完全に閉ざされていたけれど、

東の庵は半分だけが閉ざされている。

そこの僧は笑っていう、

「ここの景色がお気に召しましたかな。

　愚僧なんぞはもう厭き厭きでございます。

　何しろこの山奥深くから出る算段がありませんのでな」

私は笑っていう。

「困ったことに山が好きなのです。

　しかし、独りだけで山を歩くと、

　心を痛め過ぎてしまって、

　後で修復しにくくなるのを恐れます。

　一番の治し方は、

　我が髪のあたりに色とりどりの杏や桃の香りを漂わせつつ、

　西湖（せいこ）で美酒を飲むことでありましょうか」

私は一篇の詩を認（したた）めて、

世俗と絶縁した山の僧に渡して別れを告げる。

私はもとより人を避けようとはしない、

だから世を避けるものでもないのだ。

【補足】[蘇軾は独り山に籠る隠者に憧れはしても、この詩で自認している通り、人との交際を好み、世間から隔絶して生きる者ではなかった]

■【04-2-016】富陽妙庭観董双成故宅、発地得丹鼎、覆以銅盤、承以琉璃盆、盆既破砕、丹亦為人争奪持去、今独盤鼎在耳、二首

長い題は、「富陽県にある道教の寺院、妙庭観には、太古の女仙の董双成が住んでいたという場所がある。かつてここを発掘したところ、董双成が仙人になるための薬、丹薬を作った鼎が発見された。鼎は銅盤で覆われ、下に琉璃盆があった。その後、琉璃盆は砕かれ、丹薬は持ち去られ、いまでは銅盤と鼎だけが残っている」。

其の一

鶴に化した董双成は去ったまま帰らず、

山は空しくあり続けている。

丹薬は亡んで鼎だけが残り、

世の人はいたずらに悲しみ続けている。

笑ってしまうのは、

唐の時代に、九転九変[複雑玄妙な化学変化]の末に丹薬を作り上げて、

さっさと世から去ればよいのに、

朝廷からの称号を得ることに御執心の者がいたことだ。

其のニ

瑠璃盆は打ち砕かれ、丹薬は失われた。

仙薬を作ったという壇からは、もはや神々しい光が発せられることはない。

昔むかしある仙人が仙薬を嘗めて昇天したときに、

庭に残された器にこびりついていた薬の滓(かす)をたまたま嘗めた鶏や犬も、

仙人を追って天に昇ったという。

だから、董双成のこの鼎を発見した人も、

さだめし鶏やら犬やらのさらなるお供として天上界に行ったことだろう。

【補足】［理系的素質のあった蘇軾は化学実験を好み、仙薬製造に強い関心を持っていた［→作品番号 02-4-014］。しかし、仙人が昇天するとか不老不死になるといったことについてはどちらかというと冷淡で、ここの二首でも仙薬に惑う人々を茶化している］

■【04-2-017】新城道中二首

【解題】出張の最終目的地である新城(しんじょう)県に向かう道での詩。

其の一

東の風は、

私が山の道を行こうとしているのを知っていて、

ずっと屋根で続いていた雨の音をすっかり吹き払ってくれた。

空は晴れ上がり、峠の上に重い綿帽子のような雲だけが残り、

ふらふらと現れ出てきた朝日は、梢の先に重くぶらさがった赤い銅鑼(どら)のようだ。

野の桃が笑いながら、

垣根のような低い竹むらから顔を出し、

柳が一人遊びをしているかのように、

砂も水も清らかな渓流の上で揺れている。

西の山辺の村の人々は今こそが最も楽しいのだろう、

芹を煮て筍を焼いて、

春の農作業の昼餉としているのだから。

【補足】［この詩は訳者にとっては特別な存在である。40 年以上も前のこと、蘇軾の詩集を、難解な語句の連打に辟易しながらも何とか辛抱して読み進めて、この詩に至って初めて蘇軾の詩に親近感を抱いたのだった。それがきっかけとなって蘇軾の詩集を何冊か続けて読んだのは、長い時間を隔ててこの自由訳に取り組むようになる伏線であったのだろうか。この詩のどこに引かれたのかというと、いまとなっては当時の気持ちも定かに思い出すことはできないが、終わりの二句が印象的であったのだろう。「西崦人家応最楽、煮芹燒筍餉春耕」［西崦の人家 応に最も楽しむべし、芹を煮て筍を焼いて春耕に餉す］。ここで蘇軾は、芹を煮て筍を焼いて食べる農民を為政者の眼で見ているのでもなく、風俗画を鑑賞するように眺めているのでもなく、本来はその農民こそが自分自身であると、もしかしたら涎を垂らしつつ目を細めているのである。すでに作品番号 04-1-060 で見ているように、蘇軾は故郷における農民の暮らし方に強い誇りを持ち、農民の日々の日常に宿る喜びこそ真に高い価値のあるものだと考えていた。蘇軾は超エリートであり、この後、朝廷の高官にもなるのだが、常に一介の農夫と至近距離の内に身を置いたのだった］

其のニ

この道を行く間に、

我が身は世間から遠く離れ、

馬の歩みに任せて谷川の音を聞く。

思えば、自分はそこにある取り柄のない木であろうか――

木こりの揮う斧を見るのを恐れるような気持ちがある。

思えば、自分はそこにいる疲れた馬であろうか――

隊長が旗を巻き、銅鑼を叩いて退却を命じるのを待つような気持ちがある。

山には幾つもの分かれ道があり、

あちらはたっぷりと雨の降るところ、

そこには喜びに満ちた茶農家が住んでいようか。

あちらは山また山の奥深いところ、

そこでは清らかさに満ちた長官が治めていようか。

人の世界にはたくさんの分かれ道がある。

試しにかしこの人に聞いてみよう、

私はあなたと並んで耕す人になれようかと。

【補足】［「清らかさに満ちた長官」と訳したあたりの原文は「乱山深処長官清」［乱山深き処 長官清し］である。これは都から小さな村に追われた官員の一つの理想像である。蘇軾の大先輩である寇準［→作品番号 01-1-027］も、大恩人である欧陽脩［→作品番号 01-1-039］も、中央では志を得なくとも、左遷された先で民衆と深く親しみ民衆のために努めた。蘇軾も杭州にあって地方官としていま何をすべきかを改めて思案し直していたのだろう。次の詩からそうした思案の一端を知ることができるだろう。なお、このときの新城県の知事は晁端友であった］

■【04-2-018】山村五絶

【解題】新城県付近の山間に散在する村を巡って 5 首の七言絶句を詠んだ。

其の一

竹の垣根、茅葺の家は、

谷に向かって斜めに傾いている。

山中のこの村にも春はきていて、

ところどころに花を咲かせている。

太平には目に見える形はないという。

私はここにはっきりとそれを見る気がする――

一本の煙が立つところに、また一つの人家がある。

其の二

そぼ降る雨に閉ざされた彼方から、

鶏や犬の声が聞こえてくる。

生(せい)あるものには、

その生を安んじられるところがきっとある。

あの鳥は「田に出て耕せ」と人を促す布穀(カッコウ)であろうか。

牛を売り刀を買って戦場に出よと強いることさえなければ、

布穀などは鳴かなくても、

人は自ずと田園において安らかに生きられるのだ。

【補足】[布穀(カッコウ)は農耕を促す鳥とされた。「牛を売り刀を買う」とは、古い故事をわざと逆に言ったもの。刀を売って牛を買わせて人々を安定した暮らしに導いた地方官が漢(かん)の時代にいた。進行中の改革で生産性の向上を目指すお上からの細かい指令は「布穀(カッコウ)」に譬えることができるのだろう。また、改革では、民衆に軍事訓練を施して、治安維持を地域住民に担わせようともしたので、「牛を売り刀を買う」に譬えることができるだろう]

其の三

七十を超えた老人が、

鎌を腰にして春の山に入り、

筍やら蕨やらを採ってきた。

「こいつはうまいものです」

というその老人に、

私は恥じ入らなければならない。

昔、孔子(こうし)は聖天子の御代の楽曲を聞いて、

そのすばらしさに三カ月間も食べ物の味を忘れたという。

今この山中においては、

塩の味を三カ月間も忘れているのだ。

【補足】[孔子(こうし)は古代の聖天子の堯(ぎょう)や舜(しゅん)の時代を理想とし、その頃に作曲されたという曲を聞いて、食べ物の味も忘れるほどに感動した。山の老人が塩の味を忘れたというのは、それとは全く違って、塩が手に入らなくなったからだ。改革は、専売品の国家統制を強化し、闇の塩を一掃しようとしたために、庶民に大打撃を与えた]

其の四

お上からの貸付金を手にすると、

あたふた巡り歩いて方々の支払いをすませる。

全ての金が手のひらを返すように空しく消え去ってしまう。

貸付金を得る手続きは煩雑で、

山間の村から何度も何度も町に出なければならなかった。

そのお蔭で、

若い者はすっかり垢抜けした町の言葉を話せるようになった。

【補足】[改革の最大の目玉は「青苗銭(せいびょうせん)」だった。国は税を金納に統一したために、自営農家は現金の遣り繰りに苦労し、悪い金貸しの餌食となることが多くあった。国は自営農家を守るために、民間よりも低利で融資する仕組みを作った。それが「青苗銭」である。制度の理念はよかったが、手続きが煩雑で、しかも最初は役人が不慣れであったために、貸付金を得るまでに民衆はかなりの労力を要した]

其の五

「豊作の後の年であるのに、その憂い顔はどうしてなのかな」

問われた私は、

「ただ俸禄を盗み取って、帰るのを忘れているからです」

と、顔をあからめる。

「いつもそんなことばかりをいっているではないか」

「昔、ある人が、故郷を発ったときに、弟は、

『僕は衣食が足りてさえいれば十分です』

と、いって故郷に留まりました。

そのある人は、遥か南方で戦って勝利しましたが、

高くに上がった飛鳶(ひえん)がいきなりすとん落ちたのを見て、

郷里に残った弟が正しかったと悟ったのでした。

飛鳶は落ちなくても、不意にそれと知れるときがあるのでしょう」

■【04-2-019】行香子

【解題】「七里灘を通過したときの作」との添え書きがある詞。七里灘は新城県より南に数十キロ離れた山間にあるので、この時期に足を延ばして立ち寄ったものとしてここで見ておく。風景から音楽が脳裏に浮かび、鼻歌に載せて言葉を並べたのだろうか。

【訳文】

一葉舟軽、[ひとひらの軽やかな舟]

双槳鴻驚。[その速さはまるでさっと飛び立つ鴻]

水天清、[清らかな水と天]

影湛波平。[すべてを映してどこまでも広がる波]

魚翻藻鑑、[翻って藻に潜り込む魚]

鷺点煙汀。[煙る汀にぽつねんと立つ鷺]

過沙溪急、[沙のほとりを過ぎれば急な渓]

霜溪冷、[七里瀬は、朝は冷たい霜に]

月溪明。[夜は明るい月の光に満たされるのです]

重重似画、[山はあたかも重ねて重ねられた画]

曲曲如屏。[山はあたかも曲げて曲げられた屏風]

算当年、[思えばかの漢の時代]

空老厳陵。[ここに一人老いたのは厳光]

君臣一夢、[光武帝と君臣の契りを結んで天下統一に奔走したのも一場の夢]

今古虚名。[古今に残る名も今では虚しいもの]

但遠山長、[ただ変わらないのは遠く遠くの]

雲山乱、[昼には雲が湧き立ち]

暁山青。[暁には青く沈む山なのです]

■【04-2-020】癸丑春分後雪

【解題】出張から杭州に戻って後の詩。「癸丑つまり熙寧六年の春分の後に降った雪」という題。この年の春分は2月20日であった。

【訳文】

春分になってからの雪はまず見ないので、

半ば開いた桃や李は縮み上がってしまった。

そのていたらくは、

梅には恥ずかしくて見せられたものではない、

梅はもっともっと寒いときに咲いていたのだから。

雪は、逆にむしろ季節を先取りした気でいて、

空いっぱいにあたかも柳絮を飛ばしている。

造物者はいったい何を考えているのやら、

春の神に季節のものをほしいままにさせたくなくて、

ことさらに陰の気を発して雪を降らせる新機軸を編み出したのか。

何はともあれ、冬着をしまえる暖かさがほしいのだが……。

■【04-2-021】湖上夜帰

【解題】西湖に遊び、帰りが夜になったという詩。

【訳文】

私は飲んでも器を空にすることはない、

半ば酔ったくらいの味わいが最もよい。

竹の輿に乗って湖のほとりを帰り行くと、

春の風が火照った頬を吹いてくれて涼しい。

孤山の西側へとまわり込むと、

すでに夜の色が青黒くなっている。

気分よろしく口に詩を吟じるが、

夢から出たり入ったりで、

良句を得ても、浮かんだ先から忘れてしまう。

そうだ、あれは梨の花の咲く村だった……

闇にも花の香りに包まれていた……

あの時に、集まった人々で誰と誰とが今も元気でいるだろうか……

いったい私はいつ都会に出て行くと決めたのか……。

眠っていた眼がたちまちはっきりして、

たくさんの燈火が並ぶ賑やかな水辺にいる。

都会の人々はさぞかし手を打って笑うだろう――

林を失った鹿のようなありさまではないかと。

私は野山にいるべき者、

強いて異なる趣に合せるのは難しい。

人生は己の性分のままに安らぐのを楽しみとするものだ。

私のここまでの策は特によろしくなかったのだ。

【補足】［(1) 何度か見てきているように、蘇軾は酒は好きでも、酒量はかなり少な

い方であった。この詩でも冒頭で「我飲不尽器、半酣味尤長」［我は飲んで器を尽さず、半酣味わい尤も長ず］と詠んでいる。(2) 己の本性は鹿、本来は田舎に住む農民であると考える蘇軾は、役人として町で暮らすことに常に違和感があった］

■【04-2-022】石屋洞題名

【解題】これは、ある書物に「臨安の石屋洞の崖の岩に書かれた二十五字」として引用されている題名［訪問記録］。石屋洞は杭州の町の南の山中にある洞窟。

【訳文】

陳襄、蘇頌、孫奕、黄灝、曽孝章、蘇軾が一緒に遊んだ。

熙寧六年二月二十一日。

【補足】［6月21日に、陳襄、蘇頌、孫奕、黄灝、曽孝章とともに石屋洞を訪ねたことがわかるだけの文であるが、当時の蘇軾の交遊関係を知ることができる。陳襄は杭州知事。蘇頌［字は子容］は婺州知事で、旧くからの友人。母の喪が明けて蘇軾が上京したころに会ったのが最初であったようだ。婺州は杭州から南西に百数十キロ離れた町で、何らかの用事で蘇頌は杭州に来ていたのだろう。孫奕［字は景山］は改革を批判して地方に出されていたのを陳襄が杭州に呼び寄せ、蘇軾の同僚となっていた。黄灝については不詳。曽孝章［字は元恕］は杭州の官員の一人で、次の詩にも登場する］

■【04-2-023】同曽元恕遊竜山、呂穆仲不至

【解題】上の短文に記されていた曽孝章［字は元恕］と竜山に遊び、呂仲甫［字は穆仲］がまだ来ないのを待っている間に詠んだ詩。竜山は杭州の南にある山々の一

つ。呂仲甫の名は作品番号 04-1-034 などですでに見ている。

【訳文】

春の盛りには、己が老いてゆくような気がしないものだが、

人生の大半は、書類の間に埋もれているうちに過ぎ去ってしまうのだ。

花は酒に似る――

愁いに沈む者は、そのような句は吟じない方がよい。

日が山に含まれる――

美しいお姉さん方よ、そのような詞は歌わないでくれ。

明日にはもう寒食(かんしょく)を過ぎてしまうのだから、

僧院の窓辺でこの半日をゆるゆると過ごそうではないか。

呂(りょ)君は、迎えを遣わしたのにまだ来ない、

曽(そう)君は、もう暮れてしまうから還えるといっている……。

■【04-2-024】書游霊化洞

【解題】呂仲甫(りょちゅうほ)を呼んでも来ないというシーンは作品番号 04-1-035 で一度見ていたが、このときには現れたということがこの短文からわかる。

【訳文】

私は初めに曽孝章君(そうこうしょう)と霊化洞(れいかどう)に入って行こうとした。日暮れが迫ってきていたし、曽君は道が険しいのに恐れをなし、途中で帰ってしまった。しばらくして呂仲甫(りょちゅうほ)君が来たので、また一緒に霊化洞に行ってみると、呂君は私よりも勇敢で、昔の人も至らなかったようなところにも進んで行った。そこは、世間を驚かすほどに奇異な景観で、とうてい語れるようなものではなかった。私はそのごく一部でも霊化洞に来よ

うとする者に伝えたいとは思うのだが、自然の秘密を明かしてしまうのを造物者が怒るのではないかと恐れてしまう。我等二人のように勇気のある者が行けば、自ずと知ることができるであろう。

【補足】［霊化洞は山の上にある奥行き百歩余りの洞窟であるという］

■【04-2-025】寒食未明至湖上、太守未来、両県令先在

【解題】この年の寒食は３月１日で、蘇軾はすっかり遊びモードになっていたのだろう、前の日は霊化洞を訪ね、そのままどこかに泊まりでもしたのか、翌日のまだ明けやらぬうちに西湖のほとりに行き、知事の陳襄が来るのを待ちつつ、この詩を詠んだ。詩の題に「両県令は先にきていた」とあるのは、銭塘県知事の周邠と、仁和県知事の徐疇である。周邠は作品番号 04-1-054 で見ているように母の喪中であったから、知事としての職務に就いてはいなかったろうが、以下の詩でも周邠には知事の肩書が付されている。

【訳文】

町の上の空が明け始め、

目覚めた烏がまだ互いに啼きかわしているときに、

黒い榜を挙げ、数々の紅い船が早くも西湖に満ちてくる。

音楽を奏して州知事殿の馬をまだ迎えに行く前に、

水辺の雲のなかから二羽の鳧のように、

さっと二人の県知事殿が現れる。

山を背に映えるのは、竜の頭をもたげた船先の黄色、

道を挟んで立ち昇るのは、鵲の尾の形の爐からの香の煙の青色。

老いたこの身は春に逢うと、

ただ眠ることだけを思って、

少しの間でもよいから僧榻[僧が座禅を組む台]を借りたいものである。

【補足】[知事たちへの挨拶の詩で、特に深い内容はない。州知事はまだこないが二人の県知事がすでにきていると歌ったところが、原詩では、「五馬」と「双鳧」の対句となっていて、そこが一つの眼目になっている。昔、地方の大官である太守は五頭立ての馬車に乗ったので「五馬」は州知事を指し、漢の時代に県知事であった王喬が鳧となって宮殿に飛び来たという伝説［→作品番号 01-2-037］があるので、「双鳧」は二人の県知事を指すのである。この対句を見て、三知事がにやりとしてくれれば蘇軾は満足なのだが、この訳詩ではその面白味を伝えられていない]

■【04-2-026】次韻孫莘老見贈、時莘老移廬州、因以別之

【解題】湖州知事の孫覚［字は莘老］［→作品番号 04-1-044 など］は、3 月に廬州に異動となり、そのことを詩を添えた手紙で知らせてきた。それへの返事。

【訳文】

造物者はたった一つの道具で形の異なる万物を作るとか。

造物者に作為などはないのだから、

造物者に向かってあれこれ望んだりはしない。

かくして私は粗雑で頑迷に作られたのであるから、

今の境遇も当然である。

貴君はまるでそうではないのに、

日陰に追いやられているのはどういう訳なのだろうか。

世の中には見識の高い方々、手腕の優れた方々が居並んでいる。

私なんぞが痴れ言をほざいても失笑を買うだけであるし、

貴君はなかなかの悪筆であるから見る人が眩暈を起こすだけである。

というわけで、貴君に新たに歌を贈ることはしないで、

決まり切った古い別れの歌を唱えて、

一杯の酒を差し上げることにする。

【補足】［(1)「造物者の道具」と訳したのは原詩では「鑪錘」［鍛冶屋の道具］。「造物者」と訳したのは「造化」。どちらも『荘子』に見える道家の用語。人格を持った万物の作り主は、道家の思想には存在しない。この世界は何らかの意図をもって作られたわけではなく、人々の運命は何らかの意味があって定められているわけでもない。全知全能の神を教義の根本に据える一神教とは考え方が大きく異なるのである。(2)孫覚は書の収集家ではあったが、おもしろいことに当人は自他ともに認める悪筆であった］

■【04-2-027】贈別

【解題】ここから見る 3 首はいかなる経緯で詠まれたのか不明。読んで自由に想像すればよいのだろう。誰かとの別れに贈った詩。

【訳文】

青い鳥は手紙を口に挟んで遠く飛ぶとか、

黄色い鶯は別れた人のために悲しく泣き続けるとか。

貴君と最後に手を携えて歩いた場所をきっと忘れないでほしい、

西湖の東、鳳凰山の西である。

■【04-2-028】次韻代留別

【解題】別れて去って行く人に代わって詠んだ詩に次韻した。

【訳文】

蝋燭の赤い炎が尽きるまで杯を交わし合い、

別れの歌を繰り返し一万回も唱える。

あのとき去ったのが誰だったのかと思い返したなら、

私はもとはあの西施（せいし）と同じところに住んでいたと覚えていてほしい。

【補足】［結びにこの地に所縁のある絶世の美女である西施（せいし）を引いていることから、去って行くのは女性であったのだろう。とすると、前の詩とともに妓女のために作った詩であるのかもしれない。もう１首、女性の衣の模様を歌ったらしい詩もあるが、訳者には意味を汲み取ることができないので割愛する］

■【04-2-029】薄命佳人

【解題】ある美少女を詠んだ詩。

【訳文】

頬はヨーグルトのように白く、

髪は漆を塗ったように黒く、

目から放たれる輝きは、的に向かってころころと玉粒を投げ付けるかのよう。

仙人の衣のような純白の絹をまとう天然の資質を、

紅で汚すのは不要だ。

軟らかく愛嬌のあるこの地の音の響きで言葉を発し、

まだまだ子供っぽいところがある。

この世界には果てしない愁いのあることなど、

まだまだ知らないのだろう。

昔から佳い人は薄命であることが多いという――

門を閉ざしていても、

春はどこかへ行き、楊の花は散ってしまう――

【補足】［(1) ヨーグルトの譬えは原詩では「凝酥」。酥は牛や羊の乳から作った固形物で、つまりはヨーグルトのようなもの。(2) これも妓女のために詠んだものなのだろうが、その女性が誰であるかは明らかではない。もしかしたら、後に見る作品番号04-3-068の12歳の少女であるのかもしれない］

■【04-2-030】書周韶

【解題】周韶という妓女について記した短文。

【訳文】

杭州の官妓の周韶は珍しい茶を多数蓄えていて、かつて蔡襄と茶の飲み分けをして勝ちもした。

周韶は詩にも通じている。蘇頌君が杭州に来たときに、陳襄知事が周韶を呼んで一緒に飲んだ。すると、周韶は泣きながら落籍［官妓からの解放］を求めた。蘇頌君は、「ならば、一首の絶句を作ってみるがよい」といった。

周韶は筆を取ると、たちどころに詩を書いた。

（それは雪のような衣をまとって自由に飛翔する夢を詠んだもので）このとき周韶はちょうど白い衣を着ていたので、一座の者は多いに感嘆し、ついに落籍の許可が出たのだった。

同輩の妓女たちは周韶を見送り、皆が詩を詠んだなかでも胡楚と竜靚の二人の詩が最も優れてい

た。杭州には才人がたくさんいるのである。

【補足】［(1) 蘇軾が州知事の代行をしていたときに、周囲が惜しんだために妓女の周生を解放しなかったというエピソードを見ているが［→作品番号 04-1-052］、それはここにある周韶とたぶん同一人物なのだろう。陳襄知事の温情でついに自由に身となったのである。(2) 蔡襄は先輩官人で、名筆家であり茶の大変な愛好家であった。蔡襄と交流があったわけだから、周韶はすでに若くはなかったのだろう。(3) 蘇頌は作品番号 04-2-022 で見ているようにこのとき婺州知事で、この後すぐに婺州に帰ったようだ。(4) 周韶と 2 人の妓女の詩は伝わっているが、訳文は煩を避けて割愛する。もしかすると、上に見た作品番号 04-2-027 とその次の詩は周韶と関係するのかもしれない］

■【04-2-031】銭塘六井記

【解題】蘇軾にしても陳襄知事にしても官人仲間や妓女と遊んで日々を送っていたわけではなく、地方官としての職務ももちろんきちんと果たしていた。なかでも特記すべきは、杭州の町［銭塘］の上水システムの改修を行ったことで、その工事が完了したことを記念する文章をこの春に蘇軾は記している。これは蘇軾の工学的センスを示すものとして興味深いのだが、上水システムの詳細を記述している箇所には多数の地名が引かれていて訳者には十分に理解できないので概略を汲んで訳す。

【訳文】

海からの潮は、銭塘江の流れを押しのけて遡り、東側から西の丘陵へと激突している。現在そのようになっていることの由来は遠く昔に遡る。

すなわち、かつては海水をかぶって低湿であった土地に次第に草木が生え、耕作ができるようにもなり、

そして久しい後に人が住むところとなり、村ができて町ができるようになったである。今の杭州の町が載る平らな陸地は、もとはいえば全て河口の下であったのだ。

そのようなことから、杭州の水はどこも塩が混じって質が悪く、ただ山の近くに掘った井戸だけから淡水を得ることができる。しかし、その水は狭い範囲にしか及ばない。

唐の世に宰相となった李泌が杭州知事であったときに「六井」が作られた。西湖の淡水を引いて六つの貯水池を作り、民の便宜を図ったのである。その後、杭州の知事となった白居易が西湖の治水工事を行い、六井に水を供給する水路を改修した。その事績は湖畔の石碑に刻まれている。現在に至るまで杭州の民はそれを頼りとしてきた。

李泌の最初の六井のうち最大のものは町の南にある相国井で、その西に西井があり、そのまた西北に金牛池があり、その北西に方井があり、また白亀池があり、さらに北東に小方井がある。その中で金牛池は早くに廃れてしまった。

宋の嘉祐年間に杭州知事の沈遘は六井の南に南井を作った。

町の西南にある湧金門から北には、湖に向かって三つの水門が開かれ、そこから東に石の樋で町の中へと水を流し、南井、相国井、方井はその水を取っている。相国井から分かれた水が西井にくる。白亀池と小方井は西湖の湖底に樋を埋めて水を取っていて、水門はない。

以上が六井の大略である。

熙寧五年[1072 年]秋、陳襄知事は赴任するとすぐに、民衆が困っていることは何かと尋ねた。皆が答えたのは、

「六井を直さないと民に水を供給できなくなります。特に、南井に通じる樋は低いところを通り、しかし貯水池は高い位置にありますので、水は地中深くに潜ってしまって、汲み上げることが困難になっています」

陳知事はいった。

「それはいかん。私がここにきたからには、民が水を求めて得られないようなことにさせはしないぞ」

陳知事はただちに仲文と子圭の二人の僧にこの問題に取り組むよう命じた。二人は二十余人の仲間を集め、解決策を検討し、自らカを出して官の仕事を助けることにした。最初に、古くなった樋を瓦作りのしっかりとした物に取り換えて水が漏れることがないようにした。すると相国井に向かって勢いよく水が流れ、瞬く間に水が貯まった。

また方井は水が汚染されてほとんど使えないくらいになっていたので、西に少し移動させることにした。すると、かつて築かれた基礎が出てきた。土地の古い人が驚いていうことには「これは昔の方井です。李甲という者が今の位置に移して六十年になります」

湧金門の近くに上、中、下三つの湧金池を造り、衣類を洗ったり馬に浴びせたりした汚れた水が他の池に及ばないようにした。その門の外に二つの水門を設け、一つは池に流し、もう一つは石の檻と竹の管を使って東に流し、三つの橋を超えて南井に注ぎ入れることにした。水は高いところから低いところに流れるものであるので、南井の水位を高く保つような工夫をしたのである。

西湖に開いた四つの水門を全て垣で守り、草や土で埋まらないようにした。

以上のようにして、明くる年の春までに六井の改修が全て終わると、たまたま日照りが続いて江南一帯ではどこも水不足となり、民は甕に貯めた水をまるで酒を神に捧げるかのようにわずかずつ節約して使うほどになった。ところが杭州の民だけは水が十分に足り、変わらずに牛馬に飲ませ、沐浴にも使ったのである。

この時になって、水を汲む者はこの仕事をしてくれた僧に感謝し、陳知事の成功を祝った。

私が思うに、水は人が絶対に必要とするものである。日照りとなって貯水池が枯渇するようなことはいつでもあるわけではない。しかし、いつもあるわけではないことが起こると、甚だしい緊急事態になってしまう。天下は常にこうした困難を患いとする。それは水だけには限らない。

だから、後の時代の人のためにも以上のようなことを私は詳しく記したのである。長年積もり積もって困難になった問題であってもよくよく考えればやれることがあるのだ。

【補足】［(1)　この文章を読むと、蘇軾が杭州の地勢や上水システムの問題点を正確

に把握していたことがわかる。その後の実績からしても蘇軾には優れた土木工学的センスがあったのは確かなので、このときの上水システムの改良事業に蘇軾がかなり尽力したと推測される。(2) また、興味深いのはこの事業を仏教界の力を借りて実施していることである。後にも見るように、様々な土木事業に僧侶や道士が活躍して、設計、施工、資金集めなどを行い、デベロッパーやゼネコンのような役割を果たしている]

■【04-2-032】乞子珪師号状

【解題】上の文章中に名が挙げられていた僧の子珪には後日談がある。六井の改修工事から 18 年後の元祐五年、子珪の功績を讃えて師号を与えるよう蘇軾は朝廷に要望している。その書面を見ておこう。そのとき蘇軾は知事として再び杭州に赴任していた。

【訳文】

元祐五年十二月、竜図閣学士左朝奉郎知杭州の蘇軾は文書をもって朝廷に奏上いたします。

臣が考察しますに、杭州の現在の平坦な陸地は、もとは河口ないし海でありましたので、淡水が湧く泉は山に近いところにしかなく、あとはいずれも塩辛い井戸となっております。唐の時代に杭州の知事となった李泌が初めて西湖の水を引いて町に六つの井戸を作りました。その後、白居易は西湖を治め、井戸を浚って、民の必要とするものを満たしました。宋代に至って、嘉祐年間に杭州知事の沈遘が大きな井戸を一つ増やしました。それは美俗坊にあって、いまは沈公井と呼ばれています。最も要の地を得たものでありましたので、四方の遠くからもそこに水を汲みにくるようになりました。しかし、完成してから次第に壊れて水が減り、いつも水が出るとは限らなくなってしまいました。熙寧年間に至って、六井も沈公井もどれもが壊れてしまったのでした。

そのようなときに杭州知事となった陳襄は僧の仲文、子珪、如正、思坦の四人を選び、井戸を改修させたところ、工事が完成した年はひどい日照りになったものの、杭州の民衆に限っては水に足りて、その利は非常に広く及んだのでした。臣は副知事としてそのことを親しく見たのでありました。

それから十八年を経たいま、沈公井はまた壊れ、一年中水が出なくなってしまいました。ほかの井戸からも水を得るのが難しい民は、七八銭で一斛の水を買うようになり、また軍の営舎においてもはなはだ水に困っていたのでした。臣はかつて熙寧年間に井戸を改修した四人の僧を探したところ、三人がすでに亡くなっていて、子珪だけが健在でありました。すでに七十歳になっていましたが、精力は衰えず、沈公井が壊れてしまった理由を尋ねたところ、

「熙寧年間の工事も簡単ではなく、竹の管を使わなければならなかったために、どうしても壊れやすかったのです」

と、いって、瓦の筒を作り、底を堅く厚くした石槽の中を通して、筒同士を緊密に繋ぐならば、水は十分に足りてしかも長く壊れることがないと、画をもって示しました。また、六井の水の余りを仁和門の外にも引いて、威果と雄節の二カ所の軍営の間に二つの井戸を作るならば、これまで井戸から遠くて水を得難かった場所にも及ぶようになることも示したのでした。

こうして、その通りに工事を実施したところ、西湖の淡水が町全体に行き渡るようになって、軍も民も喜びあったのでした。これはまさしく子珪の心力才幹がなければ決して成就することのなかったものなのであります。

子珪は先にすでに紫衣を賜る御恩を蒙っておりますが、さらに師号を与えて長く顕彰することを臣は求めるものであります。

右に申し上げました霊石多福院の僧の子珪は戒律に身を委ね、熙寧年間より今に及ぶまで二度にわたって井戸の改修に携わって、風雨も避けることなく労苦を重ねて著しい成功を遂げたのでありました。もしも聖恩を蒙って一師号を賜りますならば、恵遷をもって号といたしたく考えております。これは『易経』の「井の其の所に居る而ば遷る」の義から取ったものであります。慎んで奏聞いたし、伏して敕旨

が下されるのをお待ちいたします。

■【04-2-033】吉祥寺花将落而述古不至

【解題】六井の改修も、蘇軾と陳襄［字は述古］知事との関係がすこぶるよかったから成功したのだろう。蘇軾は牡丹の名所の吉祥寺で知事への戯れの詩を作っている。

【訳文】

今年の春風は裁縫がことに巧みである。

情を含んだ花のありさまは、

知事の訪れをまだかまだか待っているかのようだ。

花に対して信を示さなければ、

花はきっと恨みを抱くであろう。

恐れるのは、

来年はすねてもう開かなくなってしまうこと。

■【04-2-034】述古聞之、明日即至、坐上復用前韻同賦

【解題】早く来ないと牡丹が散ってしまうという上の詩を、陳襄［字は述古］知事は見ると、早速その翌日に吉祥寺を訪れた。蘇軾も同行して、上と同じ韻で詩を作った。

【訳文】

牡丹は仙人の衣――

布を裁つことのない無縫の衣。

牡丹は天下の美女――

朝の酒にほんのり酔ったかのよう。

知事殿が花に問うと、

花は花の言葉で答える。

「知事殿が来られないとしょんぼりし、

　知事殿が来られると存分に開くのです」

■【04-2-035】東陽水楽亭

【解題】東陽県知事の王槩［字は公操］のためにこの詩を作った。東陽県は杭州の100キロ余り南にあり、県の西南八里の峴山に水楽亭があった。蘇軾は現地に赴いて詠んだのではない。

【訳文】

よく知られているように、

漢の時代に、白公が涇水から水を引いて東の渭水に流し込んだところ、

大地は大いに潤い、豊かな泥が積み上がった。

よく知られているように、

漢の時代に、哥舒翰は西域を征伐してまわり、

帰りくると羯鼓[西方由来の打楽器]を打ち鳴らす音楽が盛んに奏せられた。

王槩君は人のいない山中で崖の岩に向かって、

無用の清流の無声の音楽を聞くのを愛している。

流れる水に弦はなく、石に窾はなく、

強いて水楽[水による音楽]と名付けても、

人々に笑われるだけではなかろうか。

山の僧はもう見慣れてもいるし聞き飽きてもいるが、

月は心を寄せて光をここに留めてくれる。

谷の間に響く音は、宮や徴の音階を含むにしても、

音楽としては実は成り立っていないのを、

王槩君だけは喜んでいるのである。

これを写して弦で真似したところで、

似た音になったとしても、

王槩君のほかにはそれを聞く耳はないのだ。

【補足】[原詩ではいろいろな故事を用いて、無用かつ無声の自然の水の音楽についてあれこれ歌っているのだが、宋代の士大夫の万分の一の知識もない訳者には何が面白いのかよくわからないので、大意を取って訳した。煩を嫌って、「白公」などについての説明は省き、非常に訳しずらい途中の4句を割愛している]

■【04-2-036】与康操都管

【解題】上の詩を作った経過は王槩［字は康操］へのこの手紙からわかる。

【訳文】

お手紙を頂戴し、御返事をいたさねばと思いながらも、あれやこれやと思いがけないことが重なって、これまでぐずぐずしてしまいました。すでに春の穏やかな陽気となりましたが、お変わりなくお過ごしでありましょうか。

先に図と文章と詩を寄せてくださり、深く心が慰められ、また慕わしく思われもします。これはまことに賢者の楽しみを得たものでありますので、いかに拙くても務めて詩を作って、高人[王槩]の絶境にお寄せし

たいと思っております。それによって長く伝えられることにもなりましょうか。何かと暇のない日々ではありますが、十日ほどのうちにはお送りすることができるでしょう。

【補足】［王槩から、水楽亭に関する絵と文章が送られてきて、詩を詠むよう求められたのである］

■【04-2-037】於潜令刁同年野翁亭

【解題】3 月に公務で杭州の西に出向き、於潜という町で、そこの知事の刁璹［字は景汜］が建てた野翁亭で詩を詠んだ。刁璹は蘇軾と同じ年に科挙に合格したいわゆる「同年」の間柄である。

【訳文】

野翁亭の主人がいうには、

「山翁は山から出ません、

　渓翁はずっと渓にいます。

　野翁は山と渓を行き来し、

　山に上れば鹿を友とし、

　渓に下れば鴨を友とします。

　つまり、山翁、渓翁は野翁には及ばないのです」

野翁亭の主人に尋ねる、

「人に引っ張り出されそうになったり、

　人に背中を押されたりしながらも、

　三年の間ずっとここにいて、

　いったい何を楽しみとしているのですか」

野翁亭の主人はいう、

「ここにある楽しみは、

琴による楽しみでも、笛による楽しみでも、

まして美しく引かれた眉による楽しみでもありません。

山の男は、冠が落ちるのもまるで気にせず酔っ払い、

渓の女は、櫛が落ちるのもまるで気にせずに笑い転げます。

そういうことこそが楽しいのです」

私は政治の実態を調べにここにきた。

人々に問うと皆がいうには、

「昔から、よく治まった村では、

犬も盗賊を追いかけて走ることがありませんので、

足の毛が擦り切れずに長く伸びるといわれています。

ここの村の犬がまさにそうなのであります。

ただ一つの心配は、

野翁亭の旦那様がここを見捨てて行ってしまわれること。

そうなったら、

山の男はただただ寂しがり、

渓の女はずっと泣くことでありましょう」

【補足】[この詩は、刁璹(ちょうじゅ)がこうありたいと思うところを詠んだのだろう。於潜(よせん)の人々が、この詩に詠まれているようなことを実際にいったわけではないだろう]

■【04-2-038】於潜僧緑筠軒

【解題】同じ於潜(よせん)で、恵覚(えがく)という僧の緑筠軒(りょくいんけん)を訪ねて詠んだ詩。緑筠とは緑の竹のこ

とで、竹は清らかな精神の象徴である。

【訳文】

「肉は食らわなくてもすむ。

しかし、竹がないところには住めない。

肉がないと人は痩せてしまい、

竹がないと人は俗っぽくなる。

一度痩せた人でも太らせることはできる。

しかし、俗に染まった人間は医者も治せない」

これは恵覚（えがく）の説である。

傍らの人は、お高く止まり過ぎてばかばかしいと笑う。

世間には「揚州（ようしゅう）の鶴」という笑い話がある。

揚州に三人の者がいて、どんな願いも叶うのなら――

一人目は、大金持ちになりたいといい、

二人目は、鶴にまたがって天に昇りたいといった。

そこで三人目は、胴巻きに十万貫を入れ、鶴に乗って天に昇るんだといった。

肉をむしゃむしゃ食らいながら、竹を眺めて清浄の心を養いたいと、

私がいったらどんなものだろうか。

■【04-2-039】於潜女

【解題】同じ於潜（よせん）で活動的な若い女性を見ての詩。

【訳文】

於潜の女性は、

両足に履をはかず、真っ白な素足のままだ。

左右に大きく張り出した髪の前面に、

一尺もある長い銀の櫛を横に挿し、

青いスカートに白い上着の袂を翻しながら、

風雨の中も平気で走り回る。

この地の女性の風俗には、

銭氏の呉越国の宮廷のよそおいが伝わっているのだろうか。

人々はいまも銭氏の時代を慕っている。

楊柳が白い花を飛ばし始めたなかを、

渓谷を照らすようにして美しい娘が渡って行く。

薪を採ってきた青年と出会い、

二人は目と目を見合わせる。

佳い妻は古い名族から娶るべきだなどという決まりは、

金輪際ありはしないのだ。

【補足】［(1)「両足如霜不穿履」［両足霜の如く履を穿かず］は風俗史上極めて重要な句とされている。旧い中国では女性の足を無理やり小さくする纏足が広く行われた。纏足が社会に流行し始めたのは北宋のころからだといわれる。蘇軾が見た於潜の女性はそれとは全く無縁で、裸足で走り回っていた。この句から、蘇軾の時代には纏足はまだ社会のごく一部で行われていただけであろうと推測されている。(2) 銭氏の呉越国は、前述の通り、宋による天下統一が成される前の五代十国時代に杭州を中心として繁栄した地方政権で、蘇軾は杭州にきて以来、呉越国の文化を重んじる姿勢を示している。それには蘇軾が蜀の出身であることが関係しているのだろう。五代十国時代

に、蜀には成都を中心とする地方政権があり、唐の文化を最も良く受け継ぐ国として栄えていた。蜀は呉越国と違って宋に抵抗したために、武力によって滅ぼされ、蜀の文物は宋の都に持ち去られ、蜀の人々はしばらく宋の圧政に苦しまなければならなかった。(3) この詩の後半は、美しい風景のもとで土地の若い男女が擦れ違い、そこから恋愛が始まることを歌っている。終わりの句は、男子の夢は朝廷の高位高官に連なり、名門貴族の娘を娶ることだという、唐代まで続いた強固な価値観を明確に否定するものである。北宋のころは、社会の様々な面で女性が活動し、それを支える制度もそれなりにあった。宋代は旧中国の歴史の分岐点で、西欧に先んじて自由闊達な社会を生み出し得る気運が芽生えていたのだが、残念ながら徐々にそれは凋んでしまった。王安石が国家の大改革を立案して実行できたのも宋代ならではのことで、それに強固に反対した蘇軾は、実は中国の歴史を逆行させた反動集団の一員だったとして糾弾されても仕方がないかもしれない。つまり、蘇軾は於潜の女の溌剌とした姿をここで賛美しつつも、それを消し去ってしまう方に加担してしまったのかもしれないのだ]

■【04-2-040】自昌化双溪館下歩尋溪源、至治平寺、二首

【解題】於潜からさらに西に進んで昌化県に至り、双溪という谷の奥にある治平寺を訪ねた。

【訳文】

其の一

春の山に入ると、

滴り落ちてくる緑のせいで、

衣が重みを増すかのようだ。

虚空に二つの谷川が響き合い、

寺の窓が揺れ動く。

谷間の筍は痩せているけれど、飽きずにたらふく食べられ、

林に入れば、香りの良い草がすぐに見つかる。

こうした楽しみを県令が知ってしまったので、

ちょくちょく遊びにくるのではないかと、

寺の僧は恐れを抱いている。

しかし、寺の前の橋を渡って、

土地の漁師が出入りするのはいつでも歓迎なのである。

私はふと思う――

これは故郷眉山(びざん)の醴泉山(れいせんざん)の下の路にそっくりではないか、

桑の枝が目を刺しそうなくらいに伸び、

麦の穂が腰近くまで高くなっているのは。

其の二

田園を見るたびに、

手招きされているような気になる。

しかし、昔からこういう――

鳥は飛び疲れても、強い風には乗って行こうとしない、と。

いま私は何に身を寄せるのがよいのか。

昔のむかしの高官で、

官職を投げ出して、田園生活のよさを嘯(うそぶ)いた人がいた。

しかし、その人が自分自身で豆畑を耕したり、

稲の苗を植えたりしたとは信じられない。

私は元来自ら耕作をする者であった。

それが今では、

お上から支給される米を食べ、

夢で時たま故郷の川辺の橋を訪れるだけなのだ。

ああ、官界に遊び呆けて、

帰る家のない人間になってはいけない。

終いには一族がずっと痩せ細ることになってしまうだろうから……。

【補足】［この詩の終わりにある「宦遊莫作無家客」［宦遊作る莫かれ無家の客に］の部分は、官員になることが最大の出世の道で、そのために多く人が懸命に科挙を目指したことと矛盾するかのようだが、実は表と裏の関係にある。下級・中級官僚は国から支給される俸禄だけではせいぜい官員らしい体面を保って暮らすので精一杯で、もし免官になったり病気や事故で死んだりしたならば、一家はたちまち窮乏に陥って、家のない旅人と化してしまうのであった。例えば、蘇軾の伯父の蘇渙は、かつての同僚の娘が売られて人の家で婢となっていたのを救っていた［→作品番号 02-4-017］。また、蘇軾が 8 歳のときにその名を知って以来尊敬し続けていた范仲淹は 2 歳のときに父を喪い、母は夫の親族に冷たくされて、朱という人の後妻になることでかろうじて生き延びることができた。范仲淹は朱の家の子として成長し、范の姓をどうにかして取り戻したいと、文字通りの苦学の末に科挙に合格して官員となった。蘇軾は長い目で見れば、官員となるよりも土地に根差した農民の方が一族の暮らしを長く維持できると、この詩で歌っているが、范仲淹は自身の苦労を子孫には味あわせまいと、誰もが「無家の客」にならないよう一族が助け合う仕組みを作って、子や孫に運営させた。驚くことに、その范氏の共同体は清朝の時代まで続いたのだった］

■【04-2-041】与臨安令宗人同年劇飲

【解題】蘇軾は昌化県から引き返し、臨安県で知事の蘇舜挙［字は世美］と劇飲してこの詩を詠んだ。詩の題に「宗人同年」とあるのは、同じ蘇姓で同じ年に科挙に合格した人物ということで、それが蘇舜挙なのである。劇飲とはいっても、蘇軾の酒量は実際には多くないことが、この詩の中で歌われている。

【訳文】

私は飲酒をあまりよくしないけれど、
盞を手にするのは嬉しくてならない。
白髪に秋を感じるような年になった我等も、
鶏が暁を呼ぶ歌を唱えるまで飲み続けようではないか。
貴君と科挙を受けたのは昨日のことのよう。
しかし、いま頬が紅いのは若いからではなく、
枯れる前の霜葉と同じであるのだろう。
いや、若くないだの老いただのというのはよそう、
筍が出てくるように子供等が育ってきているではないか。
もう朝になってしまうと残念がることはない。
これで世間全体が一日分老いるだけなのだから。

■【04-2-042】宝山昼睡

【解題】杭州に戻ってから、呉山の中の宝山にあるとある僧舎で昼寝をし、この詩を壁に書いた。

【訳文】

この七尺の体は愚かしくも頑健で、

お蔭で世間の塵の中を走り回っていられる。

この大きな腹の中に貯えているのは、

天が授けてくれた真実の我が本性だけ。

それ以外には何もない空洞である。

だから、そのあたりの諸君等なら数百人くらいは何でもなく入れられるのだ。

■【04-2-043】記宝山題詩

【解題】上の詩について記した蘇軾の短文がある。

【訳文】

わたしはかつて杭州にいたときに、ある日、宝山の僧舎で昼寝をし、起きて、その壁に詩を書いた。

七尺頑躯走世塵、[七尺の頑躯 世塵に走り]

十囲便腹貯天真。[十囲の便腹 天真を貯う]

此中空洞全無物、[此の中の空洞 全て物は無し]

何止容君数百人。[何ぞ君ら数百人を容れるに止まらんや]

その後、幾人かの小人が、その壁に詩を書いた。それ見た者は、私がまさにそうした連中を叱りつけているのだと考えた。

晋の時代に周顗は、王導[どちらも国家の重職に就いた人物]に向かって「君はまだ若い」といってたしなめたのだが、私がこの詩でいうところの「君」も王導の類で、つまらないことを言い立てる連中などではないのである。

世の君子が諱むのは、多くは僭る者たちである。

私はかつて李白の肖像画に添える詩を作った。その中に、

　平生不知高将軍、[李白はそれまで高将軍などは知らなかったために]

　手汚吾足乃敢瞋。[吾が足でその手を汚して怒らせてしまったのだった]

と、記した。僭る者とは高将軍のような連中である。

以上のようなことを書くのは、後の小人たちに自分のことを省みてもらいたいと思うからだ。

【補足】[(1) 僧舎の壁に書いた詩は、蘇軾の大きな心構えを詠んだもので、それをまぜっかえすような詩を書き添える者が大勢いたのだろう。(2) 李白の肖像画に添えた詩を作ったのは22年後で、この短文はそれより後に記されたことになる。当時、蘇軾は遠く南方に流されていて、もとの詩を詠んだときとはかなり異なる心境でこの短文を書いたのである。(3) 終わりの詩にある高将軍とは、玄宗皇帝に仕えた高力士という宦官。李白が酔って意図せずして侮辱してしまったことから、高力士の讒言によって李白は南方に流されたといわれている。蘇軾は自身の運命を李白になぞらえていて、高力士のようなつまらない連中はもとより己の腹におさめる価値もないといっているのである]

■【04-2-044】僧清順新作垂雲亭

【解題】宝厳院の清順［→作品番号 04-1-063］が新たに建てた垂雲亭を訪ねてこの詩を詠んだ。

【訳文】

このあたりの自然の風光は好すぎるほどであるのに、

これまで宝厳院の建物はどれも要領を得なくて、

登ったところで景色の要素がばらばらに見えるだけで、

かえって落ち着かない気分になった。

どうしてもっと早くに、

この場所を定めて垂雲亭（すいうんてい）を作らなかったのかと、

いまさらながら惜しまれる。

坂を上って道が窮まった先に、

岩壁がせめぎ合うようにして山を破り抜けた上に、

朱色の欄干が巡っている。

天は、ここで造化の妙を尽くしたのだから、

人は、眼力を尽くしてそれを見て、詩を詠み競うべきだといいたいのだろう。

それで、詠じると――

湖水は地の軸をすっぽり浸してしまうほどにどこまでも広がり、

湖の尾先は雲の峰へと巻き付く。

街は彫りが深くて麗しく、

村は淡く遠い靄の中にある。

一羽二羽と鳥が飛び去って行くと、

一人二人と漁師が帰ってくる。

ここに新たに雄大な景観を得たのも、

以前は知られなかった小さな見どころを得たのも、

実に愉快ではないか――

ここの僧は真に古（いにしえ）の人というべきで、

がらんとした部屋で草の敷物に臥し起きし、

遠く昔の人を慕ってひたすら詩を唱詠し、

草鞋も自分で編んで暮らしている。

天は詩人が困窮すると憐れんで、

乞われるままに詩の才能を与えるのだろうか。

私は詩をしばらく作らずにいたので、

荒れた畑を鋤き起こすところから始めないとならない。

貴僧に従っていささか佳句を求め、

食事も取らずに句を咀嚼しようと思う。

【補足】[「詩をしばらく作らずにいた」といっているが、実際にはこのころ蘇軾はなかなかに多作である]

■【04-2-045】五月十日、与呂仲甫、周邠、僧恵勤、恵思、清順、可久、惟粛、義詮同泛湖遊北山

【解題】5 月 10 日の楽しい遊びを詠んだ。この詩の題に、蘇軾の気の置けない友人の名が列挙されている。呂仲甫[→作品番号 04-1-034]と周邠[→作品番号 04-2-025]は官員仲間、恵勤、恵思[→作品番号 04-1-001]、清順[→上の作品]、可久[→作品番号04-2-006]、惟粛、義詮は僧である。以上の８人とともに船で西湖を渡って北岸の山に遊んだ。

【訳文】

いわゆる三呉地方のここは雨ばかり、

湖の水は日夜に増え続ける。

恵勤、恵思を訪ねようとしても、

軒に達するまでに水が溢れて寺への道がない。

そこで、湖の北側の山で皆と落ち合うことにした。

すると、あたりを暗く閉ざしていた雨を、

清らかな風が吹き払ってくれて、

木々が密集したところと低く草の生えたところとが、

くっきりと二つに分かれ、

夕方のすばらしい景色が現れ出た。

遥かに上って赤い楼閣の上の人になると、

落ち行く日が簾の上半分を照らす。

風に臨んで遠くを見渡し、

ひとたび手を揮うのと同時に、

いろいろな思いが湧き上がってくる。

世間の人々はいまごろは仕事に駆けずり回っているのに、

我等だけは山水に向かって安閑としている。

こうした楽しみをせよと、

天がこの段取りを整えてくれたのか――

薄っぺらな暮らしばかりをしていると、

精神を消耗してしまうぞ、と。

■【04-2-046】会客有美堂、周邠長官与数僧同泛湖往北山、湖中聞堂上歌笑声、以詩見寄、因和二首、時周有服

【解題】同じ 5 月に、少し場面を異にした遊びの詩。蘇軾が有美堂（ゆうびどう）［→作品番号 04-2-002］で客人と会を催していると、周邠（しゅうひん）と数人の僧が乗った船がその前を通って、北の方へと渡っていた。そのときに周邠は有美堂からの賑やかな歌や笑い声を聞いて詩

を詠み、それを蘇軾に寄せた。蘇軾はその詩に和して2首を作った。周邠はこのとき作品番号04-1-053で見たように喪に服していたので、そのことが詩中に触れられている。

【訳文】

其の一

貴君の詩は山にたなびく雲のような趣(おもむき)。

貴君は紅い裙の女性の脇で酔うことを許されない身であるが、

山の翠(みどり)の中を歩く楽しみを知らずに、

ひたすら浪を切って舟を軽やかに走らせている。

晋(しん)の時代に、

友人の桓温(かんおん)が、博打で大損してしまったので助けてくれと泣きついてきたときに、

袁耽(えんたん)は、喪に服していることを隠して賭博場に行き、損を取り戻してやった。

そういう例もあるのだから、

貴君も服喪中だからといって必ずしも堅苦しくしなくてもよいのではないだろうか。

夕方の風も、落ち行く日も、誰か持ち主がいるわけではない、

この涼しさを君と分かち合いたいから、どうかここにきてくれまいか。

【補足】[原詩では、袁耽(えんたん)の他にもう一つの故事を引いているが、わかりやすい訳文を作れないので割愛した。この後に続くもう一首も同様に友人への戯れの詩であるので割愛する]

■【04-2-047】唐道人言、天目山上俯視雷雨、毎大雷電、但聞雲中如嬰児声、殊不聞雷

【解題】唐道人という道士が「雷雨のときに、天目山の上から見下ろしていると、大きな電光が走っても雷鳴は聞こえず、雲の中からいつも赤ん坊の声のようなものがする」と蘇軾に話した。そのことを詩に詠んだ。

【訳文】

世間の浮名をすでに棄て、

この身も棄てた道士からすると、

雷電などは、神というに値しないつまらないもの、

ぎゃあぎゃあ泣く赤ん坊に見えるのであろう。

世の中はいろいろで、

本心を見透かされて、思わず箸を落としてしまったときに、

雷鳴に驚いたためだとごまかした人もいた。

【補足】［ここに引かれているのは、三国時代の劉備の故事である。曹操から何気なく、「いまの天下に英雄といえるのは私と君だけだな」と語りかけられて、劉備はぎくりとしたのだった］

■【04-2-048】追和子由去歳試挙人洛下所寄詩九首

【解題】弟の蘇轍から前の年に送られてきていた詩に和して 9 首の詩を作って送った。もとの詩はいずれも蘇轍が洛陽で行われた科挙の地方試験の監督の仕事に招集された際に詠んだもので、楼上から夕景を見て詠んだ 5 首、広愛寺で詠んだ 3 首、韓絳の屋敷を訪れて詠んだ 1 首から構成されていた。

【訳文】

暴雨初晴楼上晩景　其の一

[にわか雨が通り過ぎて晴れ上がった後で、楼閣の上から夕暮れの景色を眺めて蘇轍が詠んだ詩に和した]

結構なのは秋の風光、

雨上がりの山があればなおのこと。

青い水が町いっぱいにさらさらと流れるのなら、

なおなお結構。

水気に煙る好風景は洛陽(らくよう)こそが天下第一。

山に帰る鳥が点々と飛び去って行く。

【補足】[洛陽(らくよう)の夕方の景色を、弟の詩から想像を膨らませて詠んでいる。蘇軾は上京する折や逆に西に下る折に洛陽に何度か立ち寄る機会があったと推定されるのが、なぜか洛陽で詠んだとはっきりしている詩はない。洛陽は古い歴史のある古都であるので、蘇軾の詩心を刺激しないはずはないのだが……]

暴雨初晴楼上晩景　其の二

洛陽は古くから天地の中央に位置するとされる。

夕方になると、

南に嵩高山(すうこうざん)が青黒くわだかまり、

北に北邙山(ほくぼうざん)が赤く染まる。

この風流の地にあっても、

古老、長老は皆去ってしまって、

今はたった一人の病んだ翁を、

山々が見守っているのである。

【補足】[「病んだ翁」とは富弼のこと。富弼は改革に反対し、病気療養を理由に政界から完全に退いて洛陽に住んでいた。蘇軾が 8 歳の頃に強く憧れた范仲淹、欧陽脩、韓琦、富弼の 4 人のうち先の 2 人はすでに亡くなり、後の 2 人は政界を退いていた。大きく時代は変わったのである。実際には、富弼はこのとき病んでいたわけではなく、11 年後に 80 歳で亡くなるまで、洛陽に形成された改革に批判的な独自の言論空間の中心的人物であり続けた]

暴雨初晴楼上晩景　其の三

昼過ぎの暑い陽射しのもとでは、

水を撒くかように汗が飛び散る。

雨が通り過ぎて、

あたりがすべてさっぱりとした心持ちになったので、

まだ熟しきらない黄色い酒を傾けつつ、

晴れ上がったばかりの水色の天を見上げる。

暴雨初晴楼上晩景　其の四

雷を走らせ、家を破り、黄河をひっくりかえしたかのように雨を降らせた。

風がおさまってもまだその余韻から覚めないなかで思うに、

画師の呉道子は、まさにこのような勢いで、

高堂の巨壁に降魔のさまを写したのであろう。

【補足】[唐代の画師の呉道子［呉道玄］が力強いタッチの画を描いたことについては作品番号 02-1-018 の其の三などで見ている]

暴雨初晴楼上晩景　其の五

杭州から洛陽までの道のりは三千里、

そこにある山々は私には見えない。

だから、私の魂は夢に洛陽の楼閣に登って君に会おうとする。

しかし、朝がくれば、

私の魂は俗界の塵を踏んで帰らなくてはならない。

そのときに、僕のやつれた顔を君に見られてしまうのが恥ずかしい。

【補足】[弟に向けては弱音を吐くのがいつもの蘇軾である。このころ心身のバランスを崩しかけていたのは以下の詩から推測できる。蘇軾はなかなかに繊細なのである]

過広愛寺、見三学演師、観楊恵之塑宝山、朱瑤画文殊普賢　其の一

[蘇轍が広愛寺を訪れて、仏教の三学を修めた演師に会い、楊恵之が作った宝山の塑像と、朱瑤が描いた文殊菩薩と普賢菩薩の画を見て詠んだ詩に和した]

この世に身を寓するのはまことに夢、

安閑として過ごせば一日のうちに一年が過ぎ、

破れた布団をひっくり返して眠り、破れた衣を羽織るうちに一生は終わってしまう。

風に鳴る竹の下で休むよう師に勧められ、

心を清らかにして泉の水を飲む。

頭を回らせて顧みると、

万事が誤りだったと知れて、

師の賢なることに、我が身を笑うのである。

【補足】[この其の一は演師の教えを受けたことを詠み、其の二は塑像について、其の三は画について詠んでいる。いずれも弟の詩に応じて想像を働かせ、該博な知識を

活用して詩に仕立てたもので、さほど興味を引く作品ではないので続く二首は割愛する]

韓子華石淙荘

[蘇轍が洛陽にある韓絳[字は子華]の屋敷、石淙荘を訪ねて詠んだ詩に和した]

漢の時代に、かつて百万の兵を指揮した周勃も、

晩年は獄に下されて、

びくびくと獄吏の顔色を伺わねばならなかった。

功名を建てる気持ちがいつまでもあると、

危うい目に何度も遭うようにもなる。

韓公は高い見識を抱いて国家を治め、

古の名臣にも恥じないお方であるが、

もとより太古の隠者とも思いを同じくするところがあって、

まだ朝廷からのお許しは出ないものの、

退隠の誓いを心の内にずっと持ち続けている。

この身は造物者が定めるがまま、

大波の上で舞う一枚の葉と同じあると知っておられる。

退隠の場はまだ定めてはいないので、

終に行く田園がどこであるのかはわからないが、

石淙荘に到るなら、

世のもろもろの全てを忘れ去ることができる。

水は韓公の心を知っているのだろう、

折れ曲がって激しく流れ、

竹は清らかな音を響かせ、

冷たい光が胸の内を洗い流してくれる。

門前に訪ね来る客人が旧知の人であるときは、

韓公は心の中にある言葉をそのままに放つ。

園中には数限りなく木々が繁茂しているのだが、

試みに見回すならば、

冬になっても青いままであるのはあの檜だけである。

【補足】[韓絳は、蘇軾が受けた科挙の二次試験で試験官を務めた一人で［→作品番号 01-2-014］、官界の大先輩である。このころは西方での軍事に失策があって洛陽に退いていたようだ。この詩は様々な故事を用いて韓絳の境遇に思いを寄せたもので、その大意をとってかなり簡略化して訳した]

■【04-2-049】跋蒲伝正燕公山水

【解題】蒲宗孟［字は伝正］が所蔵する燕文貴［宋初の画師］の山水画に記した跋文。蒲宗孟は従兄の蘇不欺の妻の弟である［→作品番号 03-3-010］。蒲宗孟はかつて都で蘇軾と同じく学士院の一員であったが、素行がよろしくないと弾劾されて地方に出されていた。蒲宗孟は何らかの用事で杭州に来たのだろうか。

【訳文】

人物を画いて優れていると「神」といい、花や竹や鳥を画いて優れているとは「妙」といい、建物や器具を画いて優れていると「巧」といい、山水を画いて優れていると「勝」という。しかし山水の清雄奇富は変化に富み、それを窮め尽くすのは至難である。燕文貴の筆の跡はあたかも天が成すかのようで、粲然として日々に新たになり、画工の及ぶところを離れて詩人の清麗を得たものといえるだろう。

熙寧六年六月六日。

■【04-2-050】和柳子玉喜雪次韻仍呈述古

【解題】柳瑾［字は子玉］［→作品番号 04-1-003］がこのころに杭州に来たようである。柳瑾は寿春で官職に就いていたのだが、何かしら不本意なところがあったのだろう、職を辞して蘇軾のもとに半年ほど身を寄せることになった。これは、柳瑾の「雪を喜ぶ」という詩に蘇軾が次韻して陳襄知事に見せたもの。雪は豊作の徴とされ、官職にある者は「雪を喜ぶ」との題で詩をしばしば作った。柳瑾のもとの詩は、杭州に来てからの作品ではないのだろう。以下の訳詩から知れるように、蘇軾はこの詩をもって柳瑾を陳襄知事と引き合わせたようだ。

【訳文】

詩翁[劉瑾]は酒を愛し、いつも喉を湿かしている。

昔、酒が大好物の賀知章は、

「酒がなくなったって心配することはない、

　財布というものにはきっと銭が入っているのだから」

と、呑気に詩に詠んだのだが、

詩翁の酒瓶が尽きると、当然、財布も空っぽになってしまう。

酒がないから、燈火の冷たい光のもとで眠ることもできず、

髯をひねりながら、雪を喜ぶ詩を作りつつ吟じた。

詩ができたので、歓びをともにしようと私のもとに持ってきたのだが、

私とて窮することでは詩翁と似たりよったりであるから、

かの陳孟公のような知事殿のところに行くよう勧めた。

知事殿は詩翁を十分に酒に酔わせてくれるだけの徳を供えている。

玉のような雪は降りやもうとしているが、

天に惜しむ心はなく、

続けて月の清らかな光で地上を満たしてくれる。

さあ、美しい人に盃を持って来させて、

この好き風光と、この優れた詩に捧げ、

この詩を歌ってたちまち春をここに呼んで、

この高堂を暖かくしようではないか。

【補足】[陳孟公とは漢代の陳遵で、酒が大好きで、いつも大勢の客人を集めて酒を飲み、時には客人の車を井戸に投げ込んで帰れないようにして徹底的に飲ませたりした。同じ姓の陳襄知事も、いやというほど柳瑾に酒を振る舞ってくれるだろうと戯れたのである]

■【04-2-051】観子玉郎中草聖

【解題】柳瑾［字は子玉］の草書を観て詠んだ詩。気心が知れた仲であるからこその戯れの作である。

【訳文】

柳先生の筆の運びは、

雷の閃光のようにすばやい。

唐の太宗皇帝は蕭子雲の書を「寒悴」と評し、

梁の武帝は羊欣の書を「倹」と評した。

皇帝ならぬ私は柳先生の書をどう評したらよいのやら。

柳先生の筆は、

百斛の真珠を持ち上げるほどの力があるとでもいおうか。

何はともあれ、柳先生の書と並べられるのは、

他ならぬ私だけであるのは間違いない。

■【04-2-052】与大覚禅師璉公

【解題】都の浄因寺の大覚禅師［懐璉］に宛てた手紙。大覚禅師は父の蘇洵が親しくしていた禅僧である［→作品番号 02-1-002］。

【訳文】

人が来てお手紙を頂戴しました。……

先に喜捨すると申し上げました禅月大師[唐末から五代にかけての著名な僧]が画いた羅漢像は他でもなく、先君[蘇洵]が愛したその画です。喜捨するには最も愛する物であるのが最もよいと聞きます。先君が最も愛したのがこの画であり、先君が最も厚く善く親しくさせていただのは貴僧であります。またこの画にはすこぶる霊異があって、しばしば夢に羅漢が現れて、語り尽くせぬ思いがして目が覚めます。怪異にわたることでありますので、この画は俗家に置くべきではないのでありましょう。

私の思いは以上の通りでありますが、お手紙では私の申し出を疑われて、別の画と換えたらどうなのかとありましたので、思わず笑ってしまいました。近世の人々の気風は軽薄に流れ、ややもすれが疑わなければならないときもありましょうが、俗世の外にある者もそうであるとは思いもよらないことでありました。とはいえ、このことはもう論じないでおきましょう。……

杭州の景物の楽しさは帰るのを忘れるほどです。弟は陳州から移動することになり、都から東南の地で官職を授かることを願っています。まだ全くはっきりしませんが、冬の初めにはこちらにくることになるのかもしれません。……

【補足】［(1) 蘇洵が大切にしていた画を浄因寺に喜捨したいと大覚禅師に申し出たところ、そのような貴重な物を本当によいのかと疑うような手紙がきたので、その返事がこれである。最も愛しているものを喜捨するのがよいという考えは作品番号 03-1-009 で見ている。 (2) 禅月大師は、詩や画にも優れた高僧で、特に独特の画風で描いた羅漢図は有名で、その一つとされる画が現在東京の国立博物館に所蔵されている。禅月大師は唐が滅びゆくころに杭州から成都へと居を移し、何らかの経緯でその画が蘇洵のもとに伝わったのだろう。 (3) 蘇轍は陳州の学校の教授からいずれかの州へ移ることになり、当人はこの手紙にあるように兄のいる杭州に近い東南の地を要望した。しかし、実際に授かったのは逆に東北の方に離れた斉州で、総務部長的な職務であった。それがこの年の 6 月であるので、この手紙はそのことが定まる直前に出されたものであろう］

■【04-2-053】贈上天竺弁才師

【解題】蘇軾はここまで見てきたように杭州で仏教界の人々と親しくしたが、特に著名な僧として、弁才がいた。弁才の俗姓は徐氏、名は元浄、字は無象、於潜の人で、10 歳で出家し、天台宗を学んで杭州の上天竺霊観音寺に住まいし、上天竺弁才大師の号を贈られた。西湖の西側の霊隠寺［→作品番号 04-1-006］に隣接して、上天竺、中天竺、下天竺の三つの天竺寺があった。これは弁才に贈った詩。

【訳文】

山門からは南も北も全てが一望のもと、

上下にそれぞれ天竺寺がある。

中に一人の老法師がいて、

鶴のように痩せて背が高い。

何の行(ぎょう)を修められたのかは知らないが、

碧(あお)い眼が山や谷を照らしている。

その姿を見ると、自ずと清涼な心地になり、

煩悩の毒が洗い尽くされる。

したがって、一都会の男女が皆礼拝するのである。

私にはひょろ長い息子がいて、

頬が角ばって頭がとがっている。

四歳になってもまだ歩けなくて、

抱いたり背負ったり、いつも親の背や腹にへばりついている。

老法師がやって来られ、その頭を撫ぜたところ、

なんと立ち上がって鹿のように走り出した。

とすれば、戒律の中にも妙用があって、

束縛をふりほどいてくれるものがあるのだ。

だったら、『法華経(ほけきょう)』を唱えることに縛られずに、

魚肉を啖(く)らったってよいのかも知れない。

【補足】［(1) 4 歳の息子とあるのは次男の蘇迨(そたい)で、歩けなかったのが急に走れるようになったとここに詠まれているのはにわかには信じがたいが、何かしら歩行に障害があったのだろう。(2) 詩の終わり部分は理解できなかったので、ひどい「ずっぽ訳」で、たぶんこの訳文ほど乱暴な物言いではないはずだ］

■【04-2-054】立秋日祷雨、宿霊隠寺、同周、徐二令

【解題】この年は雨が少なく［→作品番号 04-2-031］、立秋の日に、周邠(しゅうひん)［このとき

もまだ喪中であった］と、仁和県知事の徐疇［→作品番号 04-2-025］とともに上天竺靈観音寺で雨を祈り、靈隠寺に泊まった。そのときの詩。雨乞いは地方官の大切な職務であった。上に見た詩は、これと同じときの作であるのだろう。

【訳文】

身を制することができるならば、

うず高く積まれた書類の間にあっても、

心を閑にしていられるはずだ。

まして、ひとひらの葉が落ちて秋を報せる声も聞こえる静けさのなかで、

禅榻に対しているのだから、

安らかに眠れるはずであるのだが、

牀の下に早くも霜が降りてきたかと疑って立てば、

窓から差し込む月の光であり、

枕の中で琴が鳴ると思って起き上がれば、

泉の水が流れ落ちる音であるのだった。

俗世の苦い味わいを嘗め尽くした後には、

寂寞とした山に棲むのが身に適う老人になれるのだろうか。

いまは農民を憫れむ心がなおもあって、

起きて遥か遠い銀河を見上げて、

雨を祈ることが報われるのをひたすら願うのである。

【補足】［残念ながら雨は期待するようには降らなかった。蘇軾は先に観音を揶揄する詩を詠んでいたから［→作品番号 04-1-024］、観音様は気分を害して、雨を降らせてやる気にならなかったのだろう。日照りの影響がどのようになるのかをこの後で見る

ようになる]

■【04-2-055】病中独遊浄慈、謁本長老、周長官以詩見寄、仍邀遊霊隠、因次韻答之

【解題】蘇軾は何らかの要因で不調に陥り、静養のために独りで浄慈寺に行き、本長老から仏教について教わった。そこに周邠から詩が送られてきたので、ならば一緒に霊隠寺に遊ぼうではないかと誘いの詩を、周邠の詩に次韻して作った。本長老とは円照禅師宗本のことで、当時、大通禅師善本というもう一人の本長老もいて、前者が大本、後者が小本と呼ばれていた。

【訳文】

病んでここに伏せつつ浄慈寺の由来を聞いたところ、

本長老が蘇州よりここに移られて、

五百羅漢堂に清らかな風が吹き込んだという。

私は、世間とは隔たりがあり、独りだけでここにきた。

貴君[周邠]の詩は、抜きん出てすばらしく、誰も追随できない。

私も貴君も、楽しいと思うことが年々減ってきていると感じている。

高い徳を具えた本長老のように、

いつも心を長閑にしていることが到底できない。

三界にはただ心だけがあり、それを「心地」という。

その意味を本長老に尋ねたくても、

その前に「心には還るところがない」ということを理解しないといけないのだ。

【補足】[蘇軾は仏教の専門用語を詩にしばしば取り込み、そのような詩は訳者はほとんど解することができない。この詩の後半はレベルの低い「ずっぽ訳」である。蘇

軾自身の注で「『楞厳経』に『我は今汝に示す、還える所の地が無い』とある」との注が付けられていて、本長老から仏教の「唯心」について教わり、早速そのことを詩に取り入れたものであるようだ]

■【04-2-056】病中遊祖塔院

【解題】前の詩の続きで、病気療養中に祖塔院に遊んでの詩。祖塔院は杭州の町の南の山々のなかの大慈山にあった。

【解題】

紫色の李の実、黄色い瓜の実、

黒い帽子を載せ、葛の道衣を涼しげにまとって、

香しい村の道を行く。

祖塔院に着いて門を閉じ、

松の木陰の風の入る軒端の下で枕につくと、

いつまでもいつまでも眠っていられる。

病によってこのような閑な時を得るのも悪くはない。

心を安らかにすること、

それ以上の薬方はない。

寺の道人は柄杓を貸してくれて、

「あの清水を好きなだけお飲みなさい」

と、いってくれる。

■【04-2-057】虎跑泉

【解題】前の詩で好きなだけ飲むようにいわれたのは、虎跑泉という有名な泉の水であった。唐の時代に性空大師という僧が大慈山にきて住んだところ、山に水がなくて困っていると、二匹の虎が夜に跑して［前脚で土をかいて］穴を掘り、そこから水が湧き出したという。

【訳文】

東の峰の上に石の塔が立つ。

その場所に昔、性空大師がやってきたときに、

土地の神々が揃って大師を仰ぎ見たという。

この地にはかつて水がなかったのだが、

性空大師の歩んだ後を追って、

虎が水脈を移動させ、

性空大師が差し出した手に、

竜がやってきてその掌から浪の花をほとばしらせた。

そのときに生じた泉から、

今に至るも人々は水を得ていて、

地に伏して聞けば、

滾々と水の湧き出る音がするのである。

人間の世界とは来ては去るものであるのだが、

性空大師はこの泉のように、

今もなおここにおられると思ってよいのだろう。

■【04-2-058】仏日山栄長老方丈五絶

【解題】上の病中の詩の続きかどうかはわからないが、仏日山にある仏日院の栄長老の方丈で5首の七言絶句を詠んだ。

【訳文】

其の一

私は山に帰ることを思いつつ、まだ果たせていない。

栄長老は山から出ないので、これまではその名を聞くだけであった。

山中には誰がいるのかというと、

蒼い髯を垂らした叟、つまり松がいるだけで、

数里にわたって訪れる人を送り迎えしてくれる。

【補足】［(1) 原詩には陶淵明などいくつかの故事が引かれているのだが、ここではその含意だけを取ってさらりと訳した。(2) 其の二と其の三は山中の風光を難しい言葉を用いて詠んでいるだけであるので割愛する］

其の四

食事を終えて、軽くお茶をいただく。

昼寝の床にそよそよと吹きくる風は千金の値打ちがある。

腹を揺らしての大いびきに庭の花も落ちてしまう。

普段の足りない思いがやっと晴れた気がする。

其の五

日が回廊の奥へと射し込んできて、

昼寝の枕もとが明るくなる。

水沈香は燃え尽きてしまって、

碧い煙の名残が横たわっている。

山中の人が眠りから覚めても、

あたりには人影がなく、

鬢のあたりを巡って飛ぶ蚊の音がするだけである。

■【04-2-059】江城子

【解題】これは詞。曲名は「江城子」とも「江神子」ともいう。「西湖で箏を弾じるのを聞きながら張先と賦した」と添え書きがある。張先［→作品番号 04-2-001］が湖州から杭州に来ていたのだろう。

【訳文】

鳳凰山下雨初晴。［雨が上がったばかりの鳳凰山の下］

水風清。［清らかな水と風］

晩霞明。［明るく変わる夕焼け］

一朶芙蓉、［一つの蓮の花が］

開過尚盈盈。［開き切ってもなお盛んな美しさ］

何処飛來双白鷺、［どこから飛んできたのか二羽の白鷺］

如有意、［きっとその心は］

慕娉婷。［二人の姐さん方を慕っているのでしょう］

忽聞江上弄哀箏。［たちまち水の上に聞こえる哀しい箏の音］

苦含情。［たっぷりと含まれた情］

遣誰聴。[聴かせるのは誰に]

煙斂雲收、[消える靄、収まる雲]

依約是湘霊。[音の主はあるいは湖の女神]

欲待曲終尋問取、[曲が終わって尋ねようとしても]

人不見、[人は見えなくて]

数峰青。[あるのは湖を囲む峰だけなのです]

【補足】[この詞が作られた経緯を張邦基の随筆『墨荘漫録』は次のように伝えている。張邦基は詳しいことはわからないが、蘇軾の少し後の時代の人で、伝聞に基づいて記録したのであって、事実であるかどうかは保証の限りでない]

【訳文】

張邦基:『墨荘漫録』

東坡[蘇軾]が杭州にいたときのこと、ある日、西湖に遊び、孤山の竹閣で休んだ。前に湖を望む亭である。そのとき東坡は二人の友人を連れていて、いずれも服喪中であった。しばらくすると、湖の中に飾り立てた一艘の舟が現れ、次第に近づいてきた。亭の前で泊まり、船中には綺麗に化粧した数人の女性がいた。その中でも最も美しい女性が箏を奏で始めた。年のころは三十余りで、まことにゆったりとして実に優雅な雰囲気を漂わせていた。二人の友人はすっかり見とれてしまった。曲がまだ終わらないうちに、ふっと舟は行ってしまった。東坡は戯れに詞を作った。……[以下、上の詞を記す]……

【補足】[(1) 孤山の竹閣は次の詩に歌われている。(2) 別の人の随筆には、ここに記されている二人の友人の名を挙げ、さらに箏を弾いた女性は、演奏する前に、蘇軾に向かって、「私は幼いころから先生の御高名に憧れておりましたが、女の身ではお会いすることもできずにおりました。いまはすでに人の妻となり、今日は先生が湖で

遊んでおられると聞いて、罪を承知でやってきました。一曲献じますので、もしも詞を付けてくださいましたなら、一生の誉れに存じます。いかがでありましょうか」と所望したので、蘇軾は断り切れずに詞を作ったとしていて、話はより小説的になっている。実際のところは、張先が連れてきた妓女が「江城子」の曲を弾いて、張先が「これに詞を付けようではないか」と誘ったので、蘇軾は妓女を喜ばせるようなことを織り込んで、この詞を作ってみせた、というのが真相であろう。蘇軾にまつわるエピソードは、次第に面白く脚色されて行く傾向が特に強いようだ］

■【04-2-060】孤山二詠

【解題】西湖に浮かぶ島である孤山にある柏堂と竹閣について詠んだ二つの詩。蘇軾が初めて孤山を訪れたときの詩［→作品番号 04-1-001］を見ると、よほど奥の深い山であるかのように思ってしまうのだが、実際には島の面積は 300 ヘクタール、高さは 38 メートルしかない。この詩には短い引［序文］が付けられている。

引

孤山には陳朝の時代に植えられた二本の柏の木があった。一本は、人々が薪にしてしまい、もう一本は、山の下の老人が子供にときにすでに枯れているのを見たという。それでも、幹が金石のように堅いことでは、まだ枯れていない木にも勝るほどである。志詮という僧がそのかたわらに堂を作り、柏堂と名付けた。それは唐の時代に白居易が作った竹閣と隣り合うもので、私はこの二つの詩を作って、このことについて記すものである。

柏堂

この柏の木は志詮が前世の前世のそのまた前世のころに植えたものだ。

枯れたとはいえ、いまもさながら鶴の骨、竜の筋の趣がある。

二本あった木のもう一本は、先に神物と化したが、

この木は九つの王朝の興亡と三度の太平を見たのである。

さらに、いまここに世間を驚かせることになったのは、

巌の中からすばらしい建物が出現して、

柏の佳き名を四方に広く知らしめたのだ。

とすれば、この柏はまだ枯れ果てたのではないと我等は記憶に刻むべきではなかろうか。

柏の心は灰のように静まり返って、仏の教えを体現しているのである。

【補足】[古い注に「三度の太平とは隋、唐、宋であろうか」と記されている。隋の時代は太平には入れ難いので、断定はするのは控えたのだろう。ここまで蘇軾が杭州で詠んだ詩を見てきた範囲でいえば、唐と宋とその間の呉越国も太平であったという認識だったのではないだろうか]

竹閣

白居易は、

海の彼方の蓬莱山ではなく、天の彼方の兜率天に帰るといった。

白い鶴となって飛び去った仙人はその後のことは語ってくれない。

竹閣に人影はなく、軒に竹が満ちている。

これらの竹は、ここに最初に植えられた竹の子孫である。

竹は唐の名工の蕭悦の筆になる画のようであり、

この場には白居易が退隠した村を想わせるものがある。

この詩をもって白居易の像に、何処に帰ったのかと問いたいのだが、

釈迦の弟子の維摩詰のように無言の答えがあるだけだ。

【補足】［こちらはもっぱら白居易［白楽天］にちなんだ詩である。蕭悦は唐の時代の画工で、その竹の画について白居易が詠んだ詩がある。維摩詰の無言の答えについては、作品番号 02-1-018 の其の四を参照］

■【04-2-061】与述古自有美堂乗月夜帰

【解題】月夜に西湖畔の有美堂から陳襄知事とともに帰った際の詩。有美堂は作品番号 04-2-002 などで見ている。

【訳文】

雲間の月が、娟娟と光のつぶやきをこぼしつつ軒端にかかると、

天の川は、潋潋と波音を立てつつ半ばを山の蔭に隠す。

この清らかな永い夜に、

湖中では漁師がいまも仕事を続け、

山麓の有美堂からはなおも笛の音が漏れ聞こえる。

松明をつらねて帰り行くと、

冷ややかな風が、琴の弦から発したかのような静かな音を立て、

淡い夜霧が、髪のあたりにまとわりつくようにしてささやきかける。

杭州の人々は、我が町の長官殿が、

地上の鼓楽も天上界の音楽も愛するのを喜び、

夜中でも見物に出てくる。

■【04-2-062】有美堂暴雨

【解題】杭州の役人は何かというと有美堂で一席設けたようで、これも有美堂での詩。

【訳文】

人々が遊ぶ足の下で、

一発の雷が鳴り響く。

あたりを包んだ雲はぴくりとも動かないのに、

遠い空の彼方から黒い風が吹いてきて湖に波が立ち、

川の向こうから雨が飛ぶようにしてやってくる。

雨とひとつに連なって湖は見る見る盛り上がり、

千の撥(ばち)で太鼓を叩くような騒ぎになる。

この壮観をいかに叙述したらよいのか。

酔い潰れた李白(りはく)の顔に水を注いで、

鮫人(さめびと)が玉(ぎょく)を吐き出すように名句を出させたいものだ。

【補足】［自然の壮観に、自分はうまく表現できないので、李白(りはく)を呼び出して、人魚が大切する宝玉のような秀句を吐き出してもらおうではないかという趣向。あるいは、酒に弱い蘇軾が雷の中でもすっかり眠りこけていたので、詩を詠めと皆で叩き起こしのだろうか］

■【04-2-063】八月十五日看潮五絶

【解題】この年も銭塘江(せんとうこう)の海嘯(かいしょう)［→作品番号 04-1-049］を見物し、5 首の絶句を詠んだ。

其の一

月が十分に円くなるとまさにそのとき、

海からの潮が押し寄せてきたのか、

冷たい九月の霜のような風が吹いてくる。

鍵をかけて海の門を厳重に閉ざしてくれないだろうか、

夜も潮を留めておいて、中天の月のもとでゆったりと見ていたいから。

其の二

遡り来る潮の音は、

昔むかし、越(えつ)の国の軍団が攻め込んで呉(ご)の国の人々を恐れさせた、

そのときの一万の軍勢が叩いた攻め太鼓の響きか。

遡り来る潮の先頭の波には、

昔むかし、大河を攻め下った水軍を指揮したかの将軍が乗っているのか。

潮の高さはどれほどかと尋ね見ると、

越の山々はすべて浪の花の中にあるのだった。

其の三

遠く銭塘江(せんとうこう)のほとりにまできて以来、

海から遡る波の頭と同じく我が頭も白くなってしまった。

人とはかくも老いやすいものであるのか。

しかし、造物者もなかなか洒落がお好きで、

たまには時間を逆転させてみせようかと、

川の水を逆に西に向かって流すのである。

【補足】［中国大陸の人々にとって川は西から東に流れるというのが常識であった］

其の四

この地の人々は水に慣れて成長し、

利益のためなら自分の命も軽んじ、

遡り来る潮に身を投じてみせる。

潮を弄ぶことを禁じる命令が新たに出されたと聞くが、

東海の神よ、民を憐れむお上の意を察して、

塩漬けの地をどうかして豊かな田畑に変えてはくれないだろうか。

【補足】［(1) 激しく遡る潮の中に飛び込んでみせる伊達男がいまもいるし、昔もいたのだろう。(2) 最後の第五首は、幾つかの故事を組み合わせた詩で、意味が通じるように訳そうとするとごちゃごちゃして面白くも何ともないので割愛する］

■【04-2-064】瑞鷓鴣

【解題】「潮を観る」との添え書きがあって、上と同じときに詠んだと推測される詞。潮の流れに身を投じるパフォーマンスをする「踏浪児（とうろうじ）」になり代わって詠んだ民謡調の戯れの詞であろう。

【訳文】

碧山影裏小紅旗。［碧い山の前の小さな紅い旗］

儂是江南踏浪児。［それを振るおいらは江南の踏浪児］

拍手欲嘲山簡酔、［知事殿が酔っぱらっているのを、手を打って囃し立て］

斉声争唱浪婆詞。［皆で一斉に浪婆詞［浪を母に見立てた詞］を歌ってみせようぜ］

西興渡口帆初落、［西興の渡し場で帆が降ろされると］

漁浦山頭日未欹。[漁浦の山のあたりに日が沈むんだ]

儂欲送潮歌底曲、[おいらが潮を送る曲を歌うと]

尊前還唱使君詩。[酒樽の前では知事殿の詩を唱えるのさ]

■【04-2-065】与周長官、李秀才遊径山、二君先以詩見寄、次其韻二首

【解題】8 月下旬にまた杭州から西に出て各地を回った。その折に周邠と李行中とともに径山に行った。周邠は作品番号 04-2-054 など何度もその名を見ている。李行中は官職には就いていない土地の名士である。径山はこの年の初めに一度訪れている［→作品番号 04-1-033］。周邠と李行中が先に詩を詠み、蘇軾がそれに和したのがこの作品。其の一が周邠の詩に、其の二が李行中の詩に和したもの。

【訳文】

其の一

若い連中は妓女と飲むのを好み、

酒がなくなって、「もうおよしなさいましな」といわれても帰ろうとしない。

そういう輩をこの径山に連れてきて、

心を覆っている塵まみれの霧を払ってやりたく思うのだが、

愚かな馬ほど、

身に纏う装具が泥に汚れるのを惜しんで川を渡ろうとしないといわれるように、

山のとば口できっと尻込みしてしまうであろう。

ただ周君は朝夕私と行動をともにし、

世俗の塵にまみれてしまった脚に、

しばし白い雲の履をはくようにしてくれている。

とはいうものの、私とて決断力のなさでは世間の若輩者と五十歩百歩である。

功名を立てる者は、

大切にしている物が壊れようが顧みずに突き進むものだし、

職を捨て去る者は、

行くべき道を悠久の旅人に決然と尋ねるのである。

其の二

天を自由に飛翔する竜でさえもとの住いを恋い慕い、

夜に、雹を走らせ、暗い霧を巻いて、

百年の後には帰ってくるという。

私は故国を棄てて、

長江(ちょうこう)を北に渡ることを忘れ、

この山の前に家を築いて、

老後の日々を送るのもよかろうかと思っている。

ただ恐れるのは、独りぼっちになってしまって、

歳の暮れに霜を踏む侘しさをしみじみ味合わなければならないこと。

幸いにも、ここに李(り)君とともに遊ぶことを得て、

よたよたひょろひょろと貴君についで歩いて行くことができる。

諸葛孔明(しょかつこうめい)は自分自身を大切にするよりも、

劉備(りゅうび)の「三顧(さんこ)の礼(れい)」に応えて郷里を去ったのだった。

私は逆に帰ることを思っている。

私が掃き清める門前の道を踏んで訪ね来るのは、

果たして誰なのだろうか。

■【04-2-066】臨安三絶

【解題】径山に登った後に臨安県に行き、三首の絶句を詠んだ。いずれも呉越国を建てた銭鏐にちなんだ詩で、其の一は、銭鏐が幼児のころにその下で遊んでいたことから「将軍樹」と名付けられた木を、其の二は、銭鏐が呉越国の王となって帰郷したときに、将軍樹の周りの山林を錦で飾ったことから「錦渓」と呼ばれるようになった谷を、其の三は、銭鏐が若いときに己を姿を映して見たといわれる表面がつるつるの岩、すなわち「石鏡」をそれぞれ詠んでいる。ここでは其の一だけを訳す。

其の一　将軍樹

沼に五つの節のある蒲が生じたことが、
後に苻堅という英雄が出る前触れであったとか。
劉備は少年時代に桑の木の下で遊びつつ、
「ぼくはこの木くらい大きな車に乗る大官になるんだ」
と、いったとか。
この将軍樹は、
呉越国を建てた銭鏐が子供のときにその下で遊んだ木である。
はてさて、そこらの草や木が、
国家の興亡と関わるようなことが果たしてあるのだろうか。

■【04-2-067】登玲瓏山

【解題】臨安県の西四十二里にある玲瓏山に登ってこの詩を詠んだ。「玲瓏」は、玉などの美しいありさま、あるいは美しく鳴るさまを表すオノマトペ［擬態語・擬音語］

である。

【訳文】

いずれの年から、

玲瓏山のこの蒼い二本の松は、

竜のように伏せたり立ったりしているのか。

曲がりくねった痩せた背が中空に寄りかかっている。

碧い玲瓏山からは、

白い雲が出たり潜ったりし、

山下に広がる紅い稲田では、

風の浪が舞ったり翻ったり。

三度休んでようやくたどり着いた三休亭は、

上に月を仰ぎ見ることができるように人の手で巧みに作られている。

九回折られて畳まれたような九折巌は、

内に風を貯えることができるよう自然によって巧みに作られている。

我が脚力がもはや尽き果てようというところで、

山はますます好くなってきた。

どうやら、限りある人間の能力をもって、

無窮の自然の美を趁ってはいけないようだ。

■【04-2-068】宿九仙山

【解題】玲瓏山に続いてその隣にある九仙山に登った。山頂には晋の時代に建てられたという無量院があり、蘇軾はそこに泊まってこの詩を詠んだ。

【訳文】

晋の王導、謝安は国家の重鎮でありながら、

真の仙人といってよいほどの風流人であった。

その人たちが去ってより、

この山は虚しく五百の春を過ごした。

無量院の堂内には、

さらに昔の漢の時代の道士の画が掲げられている。

ここは桃花源のように、時代の変遷の外にあって、

いつ秦の世が終わったかもわからずにいるのだろうか。

ここへの山道で疲れ果てた私は、

香の焚き篭められた帳の内の寝台に飛び込んで眠りについた。

夢の中で、我が身はなおも巌の道を巡っていて、

ぞっと冷たさが身に迫り、夜半に目覚めた。

ちょうど老僧の声がして、

「お起きなさいませ。

　雲の峰の欠けた所より、

　月が出て参りましたぞ」

【補足】[『桃花源の記』を書いた陶淵明は、王導や謝安が活躍した晋の時代の終わりに生まれ、晋が亡びるのを目の当たりにした。桃花源（ユートピア）の人々は、秦の世の乱れに山奥に逃れ、以来世間から隔絶し、秦の世が終わり、さらに漢の世も終わったことも知らずにいた。蘇軾のこの詩は、不変の月を眺めようとするところで結びとしている]

■【04-2-069】陌上花三首

【解題】蘇軾は九仙山に遊んだ折に、土地の人々が歌う『陌上花』をいう歌を聞き、それに刺激されて、この詩を作った。短い序文がある。

【訳文】

引

九仙山に遊んで、村の若者たちが『陌上花』を歌っているのを聞いた。年配の人々に尋ねると、このようにいった。

呉越国の王妃は、毎年春になると、(杭州の王宮から)臨安の実家に帰っていた。王は手紙を妃に送り、

「陌上[道のあたり]に花が開きましたよ。緩緩とお帰りになったらどうでしょうか」

と、告げた。

呉の人々がその言葉を使って作ったのが『陌上花』である。なよなよとした思いが籠っていて、聴く者は愛おしさを覚える。しかし、その詞はひなびているので、私はそれを作り直してみた。

其の一

陌の上では花が開き蝴蝶が飛んでいます。

川や山はもとのままでも、昔の人はもはやいません。

遺された民は幾度となく老いることをくりかえし、

遊び女たちはとこしえに歌い続けるのです、

「緩緩とお帰りなさい」と。

【補足】[この詩には、失われた呉越国の文化への哀惜の念も込められているのだろ

う]

其の二

陌(みち)の上(あたり)では花が無数に開いています。

沿道の人々は王妃の乗る車を見つめています。

そそくさと帰ってしまうのをどうかして引き留めたいと思いながらも、

緩緩(ゆるゆる)と帰り行くのに任せるのです。

其の三

生きている間の富貴などは草の葉の上の露のようなもの、

死んで後にも残るのは風雅の名、

それが陌(みち)の上(あたり)の花となって開いているのです。

花はもう散ってしまうでしょうに、

私は緩緩(ゆるゆる)と王宮へと帰って行くのです。

■【04-2-070】遊東西巖

【解題】臨安(りんあん)県には東永安巖(とうえいあんがん)と西永安巖(せいえいあんがん)があり、晋(しん)の時代に謝安(しゃあん)が住んだ東山(とうざん)がここであるとの伝承があった。蘇軾はそれに従ってこの詩を作っている。謝安の名は先の作品番号 04-2-068 にもあったが、すでに作品番号 02-3-014 で見たように蘇軾の憧れの人物の一人であった。

【訳文】

謝公(しゃこう)[謝安(しゃあん)]は温雅で度量の広い人であった。

時は艱難の続く時代、

まして謝公には人々の期待が集まったので、

盛りの年には様々な思いに襲われたのだった。

謝公はここに来て、

琴や笛の音楽に頼って楽しみを得て憂いを払おうとした。

謝公がそのようにしていることを若造どもが知ると、

気高い興趣を妨げられてしまうのを恐れ、

美しい妓女を一人だけ連れて、東西の山を登った。

思いをこの世界の外に放ち、

雲の中、滝の奥を歩き回った。

ひとたび功業を成し遂げると、

いかなる人物もあらぬ流言に悩まされる。

謝公は妓女の奏でる音楽に、

時に激昂して詩を吟じ、

時に哀しく静かに歌いもした。

思いは尽きることがなく、

歳月はたちまち過ぎ行き、

謝公は隠棲を遂げることなく、

病の身でありながら、

国家の困難のためにまた都へと向かい、

西州門（せいしゅうもん）から入るときに、

もうここを出て郷里に帰ることはないだろうと涙を流した。

以来、謝公の行楽したところは空しく残され、

古い木々が蒼く暗く空を覆っているのである。

【補足】[謝安の時代に、晋朝は中国の北半分を異民族国家に奪われ、内部では激しい門閥抗争が繰り返されていた。謝安は名門貴族の一人として、皇室を守り、また北からの侵攻を撥ねつけるのに大きな貢献をした。いつしか隠棲して晩年を静かに過ごしたいとの思いを遂げられないままに謝安は都で死んだ。謝安に可愛がられていた甥の羊曇は、謝安が最後に通って都に入った西州門の路は決して通るまいと心に決めた。しかし、ある日、酔っていつの間にか西州門にきて倒れ伏し、醒めてそこが西州門であると知って、激しく号泣した。蘇軾はこのエピソードを好み、後に詩に詠んでいる]

■【04-2-071】宿海会寺

【解題】臨安県の海会寺で一泊し、この詩を詠んだ。

【訳文】

山の中で竹の輿に揺られること三日、

まことに美しくはあるけれど、

平らな場所はほとんどない。

下に向かえば谷川に落ちそうで、

上に向かえば青空に吸い込まれそうだ。

細い道では毎度猿と前後を争わなくてはならない。

海会寺は渓谷に臨んで崖にしがみついているかのようで、

そこへと歩む間に両足は疲れ切り、

ぐうぐう腹が鳴り出す。

カラカラと音を立てて高い橋を渡ると、

長い垣根が寺を巡るありさまが見え、

まるで古い城のようだ。

大きな鐘が撞かれ、僧が一斉に出迎えてくれる。

高堂に案内され、夜になっても扉は開け放たれたままだ。

浴室の杉の槽(おけ)から川のように溢れ出る湯で身体を洗うと、

本来無垢の身に戻って軽やかになる。

そのまま寝床に倒れると、

ガアガアと我が鼾で周りを驚かせ、

タンタンと鼓を五つ叩く音で目覚める。

まだ夜は明けていない。

木魚を叩く音が聞こえると、粥の時刻で、

明るく清らかな朝となる。

人の声は全くなく、

粥を運びくる履き物の響きだけがする。

■【04-2-072】径山道中次韻答周長官兼贈蘇寺丞

【解題】蘇軾は海会寺(かいえじ)からまた径山(けいざん)に入った。そこに周邠(しゅうひん)から詩が送られてきたので次韻してそれに答え、合わせて蘇舜挙(そしゅんきょ)に贈った。蘇舜挙は作品番号 04-2-041 で見たように臨安(りんあん)県の知事である。詩中にあるいくつかの地名の多くはこれまでの詩ですでに見ている

【訳文】

ここ数年来、せわしない世情のあれこれと戦い、

ようやく先人の言う通り、

富貴よりも義が人を肥えさせるということがわかってきた。

それで、掃除の行き届いたちっぽけな家で、

清浄な暮らしを楽しみたいと思うようになった。

道(みち)を学ぶことのまだまだ日が浅いのを残念がり、

禅を問うてみて、これまでいかに聴き惑っていたかを知って恥じもする。

今はせめて山水を行き巡って、

我が鹿の本性をいささか遂げさせたいと思っている。

独りで遊ぶのはあまり得手ではなく、

かといって一緒に行く者を求めてもなかなか応じてくれない。

蘇舜挙(そしゅんきょ)君に――

我が蘇の一族は昔から愚直であるらしく、

世俗的な窮達(きゅうたつ)などは、どうせ前から定まっているものだと気にも留めない。

酒の糟を食らったって、どうにか酔っ払うことはできるのであって、

顔に水をかけられたくらいでは目を覚まさない。

蘇君がいうには、

「燕(つばめ)は一日の始まりは朝方にあると主張し、

蝙蝠(こうもり)は一日の始まりは夕方にあると主張し、

言い争って終わることがない。

それに似たことばかりしていたって意味がない」

ならば私と一緒に山中に遊んで、

もっともっとましなことを語り合おうではないか。

私は、渓の南から横木を渡って山寺へと至る小径に入り、

そこから山の奥深くを尋ねることを始めた。

功臣山を南に望むところから、

雲の彼方にわだかまる石の坂道をたどり、

またもとに帰ってきたのは、月がほんのり明るくなってきたころだった。

さらに夜明け前に起きて錦水を渡り、

もう一泊して石鏡にも行った。

周邠君に――

周君が李行中君とすばらしい詩を詠み合っていたのを私は思い出した。

ここに周君、李君、そして蘇君の三人がきてくれたら、

韻律がぴったり合ったすばらしい詩が生まれることだろう。

籃輿に紙と筆を置いて、

大国を我が領地とするよりも、好句を得ることを重んじようではないか。

玲瓏山は、その名にぴったりのはなはだすばらしい山で、

九仙山では、仙人の笑い声が千の山にこだまし、

空巌の洞窟では、水のしたたりが楽器を鳴らすように響く。

そのようなところで周君はどのような詩を吟じるだろうか。

私はいま山中にいて、虎の足跡を目にしている。

同行の役人は、銅鑼や太鼓を鳴らして虎を追い払おうとする。

我が人生はもとより難所ばかりだ。

釜に米がなく、あるのは塵ばかりということだってある。

山の鳥や野の獣は、私が久しく疲れているのを知っている。

それで笑って同行の役人にいう、

「虎に遭うのだって我が運命のままでよいのではなかろうか」

径山への道は遠い。

それでも旅する者はだんだんに辿って行けばよいのだ。

昔ある人は、月の夜にふと友の誘いを想い出し、

山の奥へと入って行ったという。

諸氏もそのようにしてここにきてくれるだろうか。

とはいえ、下界では菊の花がもう咲いていると報せてくれるのなら、

私はすぐさま下山の道を辿るであろう。

【補足】［(1) 蘇軾は「聊為山水行、遂此麋鹿性」［聊か山水の行を為し、此の麋鹿の性を遂げん］と歌っていて、もはや当たり前のように自分の本性は鹿であるとしている。(2)「燕と蝙蝠の論争」とは、改革派と非改革派の対立のことなのだろう。宋の政治を担った人々は難しい試験を勝ち抜いた秀才揃いであったから、ひとたび論争になると、知恵の限りを尽くして決して引き下がらなかったので、いつ終息するとも知れない泥仕合となった。議会における多数決で政策論争に決着をつけるという仕組みは、中国においては発明されなかった。(3) 詩中に詠まれている李行中の名は作品番号 04-2-065 で見ていて、先には李行中も周邠も一緒に径山に入ったのだが、今回は蘇軾一人であった。(4)「虎」は蘇軾を巡る政治状況を暗示してもいるのだろう］

■【04-2-073】汪覃秀才久留山中、以詩見寄、次其韻

【解題】蘇軾が臨安県に来たのを好機として、汪覃［字は天才］という人物が詩を寄せて来たので、それに次韻して返した。汪覃は科挙を受験したが合格を果たせず、山に籠っていた。

【訳文】

昔、蘇秦[戦国時代の遊説家]は諸国を巡り歩き、

まだ成果を挙げられずに家に帰ったときに、

妻は機織りの手を休めることなく無言のままであったので、

怒ってまた出て行ってしまった[蘇秦は後に大成功する]。

汪覃君は俗世の名声に捉われることなく、

昔の碧雲師のような高僧に就いた。

中秋の名月は静かに坐して見るだけで、

酒に酔うようなことはなく、

半月にわたるような長い精進潔斎も、

師に従って行っている。

筆を持てば、諸家の書に素直に倣い、

詩を詠めば、俗世にこだわりがないので、新味がある。

いずれ飛躍して朝廷に昇るようなことがあるとしても、

山中で薬草を採って過ごしていた日々を忘れはしないのである。

【補足】[この詩の終わりの部分からすると、汪覃はまだ科挙をあきらめてはいなかったようだが、結局、官に仕えることなく、後に水月居士と号した]

■【04-2-074】再遊径山

【解題】径山を再訪した際にこの詩を詠んだ。

【訳文】

老人が山に登ると、

洗い流されたかのように汗をかく。

疲れ切って牀(ベッド)に倒れ伏して、

もはや呼んでも目を覚ますことなく、

朝もどんどん過ぎて、日はすでに半空に上ってしまい、

山の頂上は天と一握りしか離れていないという昔の人の譬えを、

初めて実感するのだった。

普段から険しい道も何とも思わず、

両足は岩がころがるところにも馴れているので、

また山に入って、

含暉亭(がんきてい)から東に遠く海を望み、

凌霄峰(りょうしょうほう)の頂から南岳(なんがく)へと手を伸ばす。

杉が翠の糸を乱すように枝を垂らし、

紅い宝玉から彫り出したような茸もある。

白雲峰(はくうんほう)では、いつでも白い雲が行き来しているのか、

明月庵(めいげつあん)では、とこしえに月は欠けることなく明るいのか、

……[「以上、皆山中の故事」と注記する八句がこの後に続くが煩雑なので割愛する]……

私は頭の固い愚か者で、

学問はあれこれかじるだけ、

本当の道(みち)を聞くことが遅く、

世の中とはとかく食い違うばかりである。

竜井(りゅうせい)の霊水は眼に効くというけれど、

真理を見る妨げとなる眼中の障(さわ)りを除くべきである。

径山(けいざん)の風光を詠んだ清らかな詩は、

我が心の源にある濁りを澄ませてくれる。

詩を詠む人は、

どれほど難しい韻字であっても句を作ってみせようとか考えてしまうのだが、

禅の老僧は、

門を叩いて訪れ来る者があるのを喜ぶだけで、

己を誇ろうとするところなどはない。

生きている間にさらに何度ここに来られるのだろうか。

閑がある限りは、いくら繰り返してもよいのである。

【補足】［(1) 径山の竜井の水が眼病に効くことは当時よく知られ、蘇軾は別の詩でもそのことに触れている。(2) この後で杭州への帰路に洞霄宮に立ち寄って詩を詠んでいるが、興味を引くような内容ではないので割愛する。その中に「作者七人相対閑」［作者七人相い対して閑なり］とあって、一行七人で訪れたことが知れ、その七人とは蔡準、呉天常、楽富国、聞人安道、兪康直、張日華と蘇軾であったとされる。蔡準の名は作品番号 04-1-027 で見ているが、他の五人は蘇軾の作品の中ではここでしかその名を見ないという。当然ながら、蘇軾の交遊範囲は、後世の考証家が調べ尽くせないほどに広かったのである］

■【04-2-075】初自径山帰、述古召飲介亭、以病先起

【解題】径山から杭州に帰って間もなく、陳襄［字は述古］から介亭での酒宴に招かれて顔を出したものの、体調不良を理由に先に帰り、この詩を作った。介亭は西湖の南の鳳凰山の中腹にあった。

【訳文】

秋風が立ち始めたばかりのいまも、

介亭(かいてい)のあたりは十分に涼しく、

新たに実った橙は、

皮を通して香りが感じられるほどによく色づいている。

季節を愛(め)でる心はあっても、

移り変わりの速さには驚かされ、

高くから臨み見て、

秋の光のきらめきに怯えるばかりである。

雲の上の庵に隠れて眠るのに慣れたと歌った人もいたし、

美しい人が奏でる音楽の傍らで酔いに倦むと歌った人もいた。

私はというと、そうした気の利いたこともいえずに、

宴席より先に立ち去って眠りにつくことにしたのだが、

夢はなお宴席の楽しさの中にあって、

寝床で、知事殿が帰って行くのを送る楽曲の響きを聞くのである。

■【04-2-076】明日重九、亦以病不赴述古会、再用前韻

【解題】上の詩の翌日は 9 月 9 日、つまり重九(ちょうきゅう)［重陽(ちょうよう)］の節句で、陳襄(ちんじょう)知事が主催する宴席が開かれることになっていた。しかし、蘇軾は病のために出席できない旨を、上の詩と同じ韻で作った詩に託して知事にもとに届けた。

【訳文】

月の光が秋の帷(カーテン)を通して、

枕もとへとそっと入り込んできて、

霜が飛ぶような夜の冷ややかさのなかで、

ただ布団の香りと親しんでいる。

重陽の宴といえば、

桓温の前で帽子を吹き飛ばされてしまった孟嘉の故事を思い起こすが、

私はその真似さえもできずに、臼をつく老妻のもとで臥せっている。

集まる人々は古今の成敗を論じ合い、

あるいは、茱萸の実を見つめて思いに耽ったりしていることであろう。

【補足】［(1) 孟嘉の故事について作品番号 02-2-021 で見ている。そのときは、知事が主催する重陽の宴になぜか蘇軾は呼ばれず、その不満を籠めてその故事を引いたのだが、ここでは不穏当な意味合いはないと思われる。原詩では続いてさらに二つの故事を引いているのだが、何が言いたいのか理解できないので割愛する。(2) 連続する以上の二首を見ると、径山から帰って疲れが出て体調を崩したのだろうかと推測されもするのだが、次の詩を見ると実は大したことなかったようである］

■【04-2-077】九日、尋臻闍黎、遂泛小舟至勤師院、二首

【解題】9月9日、病で伏せているはずの蘇軾は、臻阿闍黎を尋ねて茶を飲み、それから、小舟を西湖に浮かべて孤山の恵勤の僧院を訪問した。その折にこの二首の詩を詠んだ。臻阿闍黎は実相法師梵臻のことで、天台教の僧で、このころは南屏興教寺にいた。恵勤の名は何度も見ている。

其の一

白髪は、これ以上歳月に侵されるのを嫌い、

病んだ眼は、杯に深く注がれた酒を怕れる。

昔、重陽の日に人を訪ね、留守だったために、

屏風に一篇の詩を書き置いて去った人がいたが、

南屏山に老僧の宿を過ると、

幸いにも、再び尋ねる面倒なこともなく、

露芽[茶の名]を碾いて、白雪のような茶を烹てくれる。

さらに霜蕊[茶の名]までも取り出して、

黄金のような芽を砕くことはしないでよろしい。

これより小さな舟を浮かべ、

湖水を切り分けて、

孤山にかの僧を訪ねようと思う。

【補足】[この詩を見ると、蘇軾の病は、単に前日の宴で酒にやられただけであったと思われる。家で休んでいるうちに回復し、臻阿闍黎を尋ねて茶を馳走してもらうと、もはや気分爽快となって、孤山に向かったのだろう]

其の二

湖の上の青い山は、翠をうず高く積み上げ、

葱葱鬱鬱、佳き気が集まっているのである。

笙の音や歌声が響く中から我が身を抽き出して、

雲と水の光の中で、我が眼を洗い流す。

足が白く髭の赤い僧が笑って私を出迎えてくれるが、

拒霜[芙蓉]と黄菊は誰のために開いているのか。

茶を深く知るここの僧[恵勤のこと]は、

来年の今日は、

この衰翁[蘇軾のこと]がどうして来ないかと、

何度も振り返り見るであろう。

【補足】[この詩の結びには、蘇軾自身の注で、「来年の九月九日よりも前に私は杭州を去っているだろう」と書き添えている。3年の任期が満ちるのである]

■【04-2-078】遊諸仏舎、一日飲釅茶七盞、戯書勤師壁

【解題】同じ9月9日の詩。孤山でも茶を馳走になった蘇軾は、結局朝から7杯も飲んだことになり、戯れにこの詩を詠んで恵勤の僧舎の壁に書いた。

【訳文】

釈迦の弟子の維摩詰が病んだとき、

「一切衆生が病むので我も病み、

一切衆生の病が消えるとき我が病も消える」

と、いったとか――

晋の世の謝霊運は菩薩の教えを聞き、

いま自分がどこにいるのかを完全に忘れたとか――

仏の道に入れば、

身を束縛するもの全てが消え去ってしまうのだろうか。

ならば、魏の皇帝は五色に輝く仙薬を手に入れたという話があるのだが、

そのようなものはなくてもよろしいのだ。

茶について、唐の盧仝は一椀目から順にその効能を説いて、

六椀目にして仙霊に通じるといった。

私はうっかり七椀目も飲んでしまったので、

結局、仏の道に入ることも仙人の境地に通じることもできなかったのだ。

■【04-2-079】九日、舟中望見有美堂上魯少卿飲、以詩戯之、二首

【解題】同じ 9 月 9 日の詩。孤山に行く途中か、帰りか、舟の中から湖畔にある有美堂を見上げると、同僚の魯有開［字は元翰］が宴に興じているのが見えたので、この戯れの詩を送った。

【訳文】

其の一

雲の間に咲く数点の紅の花[宴席の妓女をいう]、

花は紫の髯の翁[魯有開]を囲んで笙を吹き、歌をうたっている。

酒を愛する竜山の客[孟嘉のこと]がどこにいるのかというと、

なんと一艘の釣り舟のなかなのである。

【補足】［(1) 重陽といえば孟嘉の故事を引くのが蘇軾の常で、この詩では自分を孟嘉になぞらえている。(2) 魯有開はここで初めて登場する人物で、この詩に続く第二首では、魯有開は杭州での任期が満ちて本来なら都にある家に帰るべきときであるのに、ここで美女に囲まれてまだ遊んでいるので、家では帰り遅いと女性たちが怨んでいるだろうと、故事を引いてからかっている。機知に富んだその諧謔をうまく日本語に写すことができないので割愛する。(3) 魯有開は比較的裕福な人であったのだろう、蘇軾は魯有開から谷簾水という名水と竜団茶という銘茶を贈られたことがあり、謝礼の詩を詠んでいる。それはすこぶる儀礼的な詩であるので、それも割愛する］

■【04-2-080】九日湖上尋周、李二君、不見、君亦見尋於湖上、以詩見寄、明日乃次

其韻

【解題】重陽の節句は官民挙げて野外での遊びに興じ、とりわけこの年は好天で、西湖のあたりは大賑わいであったのだろう。周邠と李行中［→作品番号 04-2-065］も西湖に舟を浮かべて遊んでいると聞いて、蘇軾は孤山からの帰路、探してみたが、見つけることができなかった。翌日、周邠から、残念ながら会えなかったという詩が送られてきたので、それへの返事。

【訳文】

湖のほとりで芙蓉の花が揺れる、

何やら思いに沈むその様子。

古のかの淑女と同じく、

町を行く軽薄な連中なんぞにその美しい姿を見せはしない。

淑女の心を知る人はいつまでも現れず、

霜の季節が迫りくるので、もはや待つこともできない。

葦の間に棹の音が聞こえたかと思ったのに、

くるはずのその人は空飛ぶ鳥を追って、

雲の彼方へと駆けて行ってしまったのだろうか。

私は私で貴君を一日中捜して、この芙蓉の花に出会い、

その哀れな風情に摘み取ることができなかった。

人生は、朝露が日に当たって消えてしまうようなものだという。

長くても百年、

無限の時間の流れに一瞬の旅人として船を浮かべるだけだ。

毎日毎日労苦に明け暮れ、

せいぜい一日の閑が得られれば幸運である。

とかく思いとは隔たってしまうのが人の世の常、

貴君と会おうと願ったことも遂げられなかった。

このことから、私は天の定めがあるのを知り、

深く憂いて、我が魂を痛めるのである。

【補足】［(1) 友人と会えなかっただけのことをとんでもなく大袈裟に表現した戯れの詩。(2) この日はそもそも陳襄知事には病気のために宴席は欠席すると知らせていたのであって［→作品番号 04-2-076］、それなのにこれだけ動き回って何人もの人に詩を贈ったのでは、知事の耳にも入って、「あいつは何をしているのだ」と不審がられないはずがない。だから、三つ後の詩で見るように、知事からお咎めを食らうことになった］

■【04-2-081】送杭州杜、戚、陳三掾罷官帰郷

【解題】ここまでの一連の重陽の節句の詩を読むと、宋代の官僚はいかにも呑気なものと思えてしまうのだが、実際には役人暮らしはなかなかどうして厳しいものがあった。この詩はそれを端的に示すもので、杭州の役所に勤めていた杜子方、陳珪、戚秉道の 3 人が理不尽な経緯で罷免となり、それぞれ故郷に帰らねばならなくなり、蘇軾は重い気持ちでこの送別の詩を作った。3 人が罷免になったのは概ね次のような事情からであった。杭州の裴という者の家で、幼い娘が井戸に落ちて死んだ。家の主人は、娘の子守をしていた夏沈香という女が井戸に落として殺害したと役所に訴えた。夏沈香は目を離した隙に落ちたと証言した。取り調べに当たった上記の 3 人は過失による事故として処理し、背中を 20 回叩く刑罰を与えて夏沈香を釈放した。主人はそれを不服とし、より上級の役所に訴えて調べ直しを求めた。2 度目の裁きで夏沈香は殺人罪

で死刑となり、判断を誤った杭州の担当者 3 人は罷免となったのだった。真相は明らかでないにしても、弱い立場にある子守の娘の証言などは、家の主人によって無残に踏みにじられてしまうだろうということは容易に推測できる。

【訳文】

船が侘しい村里にさしかかり、

静かに夜が更けて行くときに、

秋風が枯れた蓼(たで)の茎をからからと鳴らす。

官を追われた旅人の腸(はらわた)は、

憂愁のあまり断ち切れんばかりで、

酔いに任せて詩を吟じつつ暁に至る。

そのような旅にいまから発つ貴君等は、

携える食糧さえ十分になく、憔悴し切っている。

役人の俸給はわずかではあっても、

それでも食いつなぐことだけはできた。

私は日頃から失敗と成功が半々ずつで、

しがない地位にしがみついて、

身を軽くして飛び去ることができずにいる。

貴君等は失意の内にいまはあるけれど、

それはきっといつまでも続くものではない。

月の光は闇の世界の蝦蟇(がま)に食われても、

その明かりは必ず再び戻ってくる。

証拠が十分でないのに人を死刑にしたならば、

心の内はきっとよろしいものではなく、

その悔恨は恐らくは生涯消え去りはしないだろう。

時流に乗って何かをしても、

得るところのものはわずかしかなく、

憂患のぐるぐるまわりの中へと落ちてしまうのだ。

貴君等にいおう――

今は来年植えるための麦を残しておく時なのである。

しばし飢えを忍ばなければならないけれど、

きっとおいしい麦こがしが食べられるようになるのだ。

【補足】[当時の行政官は裁判権も持っていて、民衆に対して強い権限を有していた。良心的な行政官は、冤罪を生むことがないよう慎重に裁こうとし、そのための判例集が編集されもした。その一方で、面倒な捜査を下級の吏人に任せ、自身の思い込みで、ときには賄賂に動かされて、理不尽な裁きを平然と行う者も少なくなかった。蘇軾がここで詩に詠んだのは、現地での正しい裁きが、何らかの力によって一段上のところでひっくり返されてしまった事例であるのだろう。それにもしも不服ならば、最終的には朝廷に訴え出ることも可能なのだが、子守の娘にはそれをする人脈も資力もなく、哀れにも処刑されてしまったのだろう。このような場合に、民衆が最終的に期待を寄せたのは、死後の世界で白黒はっきりさせることだった。つまり、いわゆる閻魔大王によって、冤罪を生んだ官員は厳しく裁かれて、永遠の罰を与えられるのである。宋代の人々の間で語り継がれた奇談のなかに、死後の世界を見てきた話が多数あり、地獄の責め苦に遭っているのはほとんどが役人と僧侶で、民衆がいかにその二者に虐げられていたかがよくわかる。そのような不思議な話が蘇軾の先祖にもあったのをずっと後の章で見ることになる]

■【04-2-082】次韻周長官寿星院同餞魯少卿

【解題】西湖の南の山中にある寿星院で、周邠が魯有開を見送った詩に次韻した。二人の名はすでに見ていて、作品番号 04-2-079 に付記したことを踏まえると、魯有開はいよいよ都に帰って行ったのであろう。

【訳文】

風はなく静かな湖、
百頃の大きさの琉璃玉か、あるいは水の仙人の家か。
まばらな松が、夕日の中に斜めに立ち、
寒さに震える蝶が、秋の花の中に抱かれている。
寿星院で仏の教えを聞いて、
月の照る道を踏みつつ帰る。
もしも二人が綸巾に鶴氅という昔の貴人の姿であったならば、
後々までも誇れる図柄となったであろう。

【補足】［(1) 寿星院のまわりの風光とそこにいる二人の姿を想像して詠んだ詩である。これを読んで二人がにやりとすればよいだけの作品で、千年も後の者がどうにかこうにか訳文をひねり出そうと頭を悩ませているのを蘇軾が見たなら、腹をよじって笑うであろう］

■【04-2-083】述古以詩見責屡不赴会復次前韻

【解題】知事の陳襄［字は述古］から、「何度も宴席に呼んだのに来ないではないか」と咎める詩がきて、それへの返事の詩。詩の題に「前の韻に次す」とあるのは、ここ

では訳さないが、この詩の前に一つ詩があって、それを踏まえているからだ。つまり、陳襄が周邠のもとを夜に訪れて飲んで詩を作り、蘇軾がそれに次韻していた。この詩はそれと同じ韻を用いているのである。たぶん陳襄は周邠のところで一緒に飲もうと蘇軾を誘っていたのだが、蘇軾が行かなかったのだろう。先の重陽の宴にも蘇軾は欠席していたから、いつも断ってばかりでどういうつもりなのだと、陳襄は咎めたのである。陳襄はむろん本気で怒ったのではなく、あくまでも戯れである。

【訳文】

私は偏った性格のひねくれ者で、

もとより親しもうとしてくれる人はいない。

年々それはひどくなり、

ますます俺は俺だというようになってしまった。

派手な着物の女の人が勧めてくれる美酒を強く断りはしないけれど、

元気な若者の前に出て行って、もののわからぬ親爺だと笑われるのはかなり残念に思う。

私は昔の隠者のように、北の山で鶴を友としたり、

南の畑で荷車を引いたりしていたいと思うのである。

このよく治まった時代に、

しばしばお呼びくださることに感謝はするものの、

四角い車輪がまわらないように、

のこのこ人の中へと出て行くのはまこと難しい……。

■【04-2-084】賀陳述古弟章生子

【解題】上の詩で見たようなおとがめを受けて、陳襄［字は述古］に対して少々引

け目を感じたからなのかどうか、陳知事の弟の陳章に子供が生まれたのを祝うこの詩を作って贈った。

【訳文】

夜の間に、町のあたりは佳気によって郁葱と充たされ、
唐の時代に杜甫が詩で褒め讃えたような子が生まれ出た。
誕生の三日目の湯餅の宴の客になりたくは思うものの、
唐の時代に李林甫が字を間違えて笑われたような失態を私もしてしまうのを恐れる。
昔、君の弟に娘を嫁がせていたなら宰相に昇るような子を産んだであろうと言った者がいたが、
まさにそのような弟の兄である陳君は余りある喜びのうちにあることだろう。
私もそれなりに見る目を具えておるので、
試しに赤ちゃんを泣かせてみていただきたい、
その様子から、将来、世に抜きん出た俊英になるかどうかを判定してさしあげましょうぞ。

【補足】［(1) この詩は、あれこれ故事を引いて知性溢れる作品であるかのように装ってはいるが、要するに、歯の浮くようなヨイショを並べているだけで、「どうしてこの種の詩が蘇軾の詩集に納められたのか」と酷評されるようなしろものである。(2) 故事を詳しく吟味するのは、ごちゃごちゃ面倒なので、赤ん坊の泣き声を聞くという部分にだけ説明を加えておく。のは、晋の時代の温嶠は、ある有力者のところに子が生まれたので祝いに行き、「この子がどの程度の人物になるのか見てしんぜましょう。ちょいと泣き声を聞かせてもらいたい」といった。赤ん坊が一声泣くと、温嶠は「これは真の英物であります」と褒めちぎり、父親は喜んで、温嶠にちなんでその子を温と名付けた。この赤ん坊は後に一国の運命を左右する大物となった恒温であった］

■【04-2-085】贈治易僧智周

【解題】『易経』を研究している智周という僧に贈った詩。父の蘇洵に始まって蘇軾、蘇轍の兄弟も『易経』を深く読んでいたので、智周とはかなり専門的な話をしたのだろう。

【訳文】

瓶の水が凍るほどの寒さでも、

窓辺に一人座って、昔の人が遺した書物を螢の光にかざして読み続け、

かつて夢で道士に教わった人のように、

貴僧は神霊に通じているのだろう、

王宮に招かれた九人の学者も及ばなかった新たな知見を得ている。

師と仰いだ契嵩が亡くなってからは、

もはやわかってくれる者はいないと、

誰もいない山の中で貴僧が『易経』を説いていると、

無数の岩がうなずきながら聴き入るのである。

潔斎するのに水を用いる必要はない、

胸中は経典によって自ずから洗われているからである。

■【04-2-086】張子野年八十五、尚聞買妾、述古令作詩

【解題】湖州で会ったり西湖で詞を詠んだりした張先［字は子野］［→作品番号 04-2-059 など］が、85 歳でありながら新たに妾を買った。蘇軾は陳襄知事から、「たいがいにしたらどうかとたしなめてやってくれないか」といわれて、この詩を作った。

「いい年をして恥を知りなさい」などと無粋な説教は蘇軾のするところではなく、故事来歴てんこ盛りの戯れの詩である。引かれた故事の当該人物がすべて張先と同じく張姓で、その工夫になるほどと張先が膝を叩き、少しでも反省してくれたしめたものというわけであろう。いろいろな張さんのどのような行為がこの詩に用いられているのかいちいち解説すると膨大な字数を要するので、大まかな流れがわかる程度に訳す。訳文中の「若き詩人」とか「若き貴公子」とかはすべて張姓の人物である。

【訳文】

先生[張先]は自ら狂であると笑っている。

眉も髭も真っ白であるのはどうしたって隠せるものではないのに、

老詩人[張先]のもとにはいつだって、

唐の御代に若き詩人と恋をした鶯鶯のような美女がいるし、

老貴公子[張先]がお帰りになると、

漢の御代に若き貴公子に愛された燕燕のような美女が出迎える。

漢の御代に老齢をもって隠退した大官は歯がもうなかったので、

乳母を雇って乳を吸って百余歳まで生きたというけれど、

先生には立派に歯がなおおありなさる。

唐の御代に心ならずも異動させられた老いた地方官僚は、

妓女が歌う送別の詩に腸が断たれる思いをしたというけれど、

先生にはそういう悲しみは一切ない。

漢の御代の老いた大学者には戴崇と彭宣の二人の弟子がいて、

お気に入りの戴崇がくると喜んで酒を用意して、

奥座敷に招き入れて妻妾も交えて夜遅くまで楽しんだのに、

堅物の彭宣がくると厳めしい顔で古典を論じ、

粗末な食事を出すだけで奥座敷に入れることはなかった。

私は先生にお近づきを得たところ、

私が彭宣のような堅物であることを御存知いただけず、

奥座敷に入れていただくようなことになったのはどういう間違いからなのでしょうか。

■【04-2-087】書双竹湛師房二首

【解題】杭州の広厳寺の竹はみな二本が対になって生える双竹で、双竹寺とも呼ばれた。そこの湛師の部屋の壁に書いた詩。

其の一

私は本来、西湖に一艘の舟を浮かべる釣り人であったのだろう。

屋内で風が渦巻くほどに高くて立派な建物を心に嫌い、

湛師のこの部屋がわずかに一丈四方であるのを羨ましく思う。

ここでは、終日、香の煙が一本立ち昇っているだけである。

【補足】［この詩の第一句「我本西湖一釣舟」［我は本 西湖の一釣 舟］は非常に印象的である。蘇軾は先に、故郷に西湖の美はないと歌っていた［→作品番号 04-1-028 の其の五］。ここではさらに一歩進んで、自分は元来西湖の釣り人であったとまで歌っている。西湖の風光がよほど気に入ったのだ］

其の二

朝の鐘も暮れの太鼓も湛師が自ら撃ち、

門を閉して、孤り燈火と向かい合う。

白い灰が落ちて、最後の紅の火が放たれると、

臥して窓を打つ雨の音を聴くのである。

■【04-2-088】宝山新開径

【解題】宝山に新らたに径が開かれたことを詩に詠んだ。宝山の名は作品番号 04-2-042 などで見ている。

【訳文】

藤の蔓やら橘の刺やらで塞がれていのが、

竹の杖とか椶の鞋の扶けがなくても歩ける径になった。

遠くの笑い声が風に乗って聞こえてくるし、

山から水が分かれて西湖へと流れ込む様子がくっきりと見える。

振り返ると、仏国土の菩薩の青い髻のような山々、

仙界の碧玉の壺のような宝山を遍く踏み歩こうではないか。

野の客が帰ると山に月が上り始め、

棠梨の葉を揺らして鳥が鳴きかわすのである。

■【04-2-089】和述古冬日牡丹四首

【解題】冬のとある日にとある寺で牡丹が咲き、陳襄［字は述古］知事がそれを詩に詠み、蘇軾が和した。

其の一

ひとつの枝から妖しい紅が翠に流れるかのよう。

春の照がここに早くも回ってきたとあっては、

雪や霜はもはや顔色ないと羞じ入るしかないであろう。

造化の技は新たな巧みを為して、

静かに眠っているべき花を少しも休ませまいとしているのか。

【補足】［(1) この詩から、冬の間に牡丹を咲かせようと、いろいろな工夫が為されていたことがわかる。(2) 原詩には「翠欲流」［翠流れんと欲す］の 3 字があり、南宋の陸游は、それについて随筆『老学庵筆記』で次のように記している。「初め私は『翠欲流』の意味を解することができなかった。後に成都に遊び、広い市場の中に『鮮翠紅紙舗』と書いてある店があった。人に尋ね、『鮮翠』とは『鮮明』」の意味であると知った。東坡はきっとこの蜀の方言を用いたのだろう］。このことから「翠欲流」とは「流れるばかりの翠さ」という意味のようである］

其の二

春は、しばしば雨とともに風が吹くので、

霜の降りるときにこそ、濃い紅で花を染めみようと、

春の光を特にこの牡丹だけに漏らしたのだろうか。

天の工がそのようなことをした――

その説を、私は信じることができない。

其三

昔、鶴林寺である仙人が、

秋に杜鵑花を咲かせてみせたという。

詩にそのような力があるとは誰も信じないだろうけれど、

霜に覆われた茎から春の妍やかな花を咲かせたのは、
実は陳襄知事の詩なのである。

【補足】［(1) 鶴林寺の仙人の話は作品番号 04-1-071 で見ている。(2) 第四首では、詩の力が自然を変化させるという発想をさらに発展させているのだが、訳すには故事の処理がかなり面倒となるので割愛する］

■【04-2-090】弔天竺海月弁師三首

【解題】天竺霊山寺の弁才、すなわち海月禅師慧弁が 10 月に亡くなったので、この詩を詠んだ。少し前に、弁才に贈った詩を見ている［→作品番号 04-2-053］。

其の一

もとより「生」というものはないのだから、「亡」もありえない。
だから、師の遺跡を尋ね、強いて衣を涙で沾すのである。
今夜も師の講堂には月が照り、
庭には霜のように冷たい光が、
変わることなく満ちている。

其の二

生と死は、臂を伸ばしたり曲げたりするようなもの、
それでも、我等は情のために苦しまなければならない。
白居易は「蓬莱島へと旅するのではない」と詩に詠んだ。
やはり西方浄土へと帰ったのである。

【補足】［白居易［白楽天］は、晩年は仏教に傾倒し、仙界［蓬莱島］に帰るのでは

なく、西方浄土に帰るのを願うといった［→作品番号 04-2-060］。杭州と縁の深い白居易の故事を引いて、仏教に帰依する気持ちを歌ったのである］

其の三

「因」があり、「縁」があって、物事が起こるという。

浮き雲に尋ねて「因」を滅するなら、

「縁」もなくなって、夢の中の身となる。

昔、先に死んだ方があちらのことを告げに来ようと友と約束した者がいた。

理がわかっているのなら、そのようなことをする必要はないのに。

【補足】［これから 22 年後に、蘇軾は海月禅師慧弁の肖像画に添える短文を記すのだが、その訳は第 11 章で見ることになる］

■【04-2-091】李頎秀才善画山、以両軸見寄、仍有詩、次韻答之

【解題】この詩の題は、「李頎秀才は善く山を画く。二つの画軸を寄せてくださり、詩が添えてあった。それに次韻して答える」。詳しい経緯が何遠の随筆『春渚紀聞』に記されているので、まずはそれを見ておこう。

【訳文】

何遠:『春渚紀聞』

李頎、字は粋老は、どこの出身であるかはわからない。若いときに科挙に合格し、官職を授けられるときになって、それを棄てて道士になった。各地の山河を旅し、晩年は呉の山水の景勝を好み、ついに臨安県の大滌洞天に隠れ、苕溪のあたりへも往き来し、優れた人がいると、必ず知り合いになった。画を善くし、ときに詩を作った。

東坡[蘇軾]が杭州の副知事になったときに、李頑は絹地に春の山を描いた横軸を作り、それに詩を一首書き添えた。東坡とはつてがなかったので、樵にそれを託し、東坡が門から出てくるのを待って渡してもらった。東坡が軸を開いて詩と画を見ると、みごとな出来栄えであったので、樵に、「誰がそなたを遣わしたのか」と尋ねた。樵は、「薪を背負って町に売りにきまして、初めてあなたさまの門のあたりにきますと、一人の道人がいて、百銭をくださって、これをあなたさまにさしあげるよういわれたのです。どなたであるのかは知りません」。東坡はますます驚いて珍しいことだと思った。折々に西湖の名僧たちに尋ねると、李頑であることが知れた。

それからしばらくして、たまたまある僧の住いで李頑に出会い、東坡は非常に喜んで、李頑の詩に和した。

……[以下に、蘇軾の詩と、李頑の画について幾つかの記事が続く]……

【補足】[訳を省略した後半部分に、何遠の家にはかつて李頑の画が何枚かあったのだが、兵火のためにいまでは「雪山」、「春晴」の二軸しか残っていないと記してある。そのようなことからも、上の記述はかなり信憑性が高いようである]

【訳文】

貴君はこの画の中の人、

釣り船に向かって真実を画こうとしているその人である。

貴君の詩句に和そうとしても手が出ない。

画中の雲や泉は早く俗世から身を抽けと勧める。

私は我が白髪に時の過ぎ行くのがあまりにも速いと驚かされ、

山々ばかりが年々新たになって行くことに恐れを抱いている。

これより北に帰るとして、

南を望んで悵むようなことはしないですむだろう。

わが嚢中には、貴君が描いてくれた桃源郷のようなここの景色があるのだから。

■【04-2-092】定風波

【解題】楊絵［字は元素］を見送ったときに詠んだ詞。官員仲間の楊絵が秋のころに杭州にきて、すぐに立ち去った。楊絵は翌年の秋にまた杭州にきて、親しく詩詞を詠み合うようになる。

【訳文】

千古風流阮步兵、［古今に名高い風流人といえば阮籍でしょう］

平生遊宦愛東平。［官員として各地を巡るなかでも愛したのが東平でした］

千里遠来還不住。［阮籍は千里の遠くから来て、還ってしまいました］

帰去。［帰ってしまったのです］

空留風韻照人清。［阮籍の清らかさを照らした風韻だけが空しく残ったのです］

紅粉尊前深懊悩、［妓女が歌い酒が並ぶ前で悩ましげにしています］

休道。［もうやめましょう］

如何留得許多情。［どれほど引き留めたいと思ってもどうにもならないのです］

記得明年花絮乱。［来年の柳絮が飛びに乱れるときのことがもうわかります］

看泛。［舟を浮かべて聞いてみなさい］

西湖総是断腸声。［西湖がすべて貴君のいない悲しみの声を挙げているのですよ］

【補足】［(1) この詞の前半では、楊絵を阮籍に譬えて、せっかく杭州にきたのにすぐに去ってしまうのが残念でならないと歌っている。阮籍について作品番号 01-2-041 などを参照。阮籍が東平の地を愛しているのを知った皇帝が、阮籍をその地の長官に

すると、たちまちみごとに治めたという話がある。(2) 後半では、楊絵の姓の楊からの連想で、楊の花絮が飛び散る来年の春に、楊絵が去ってしまったことが改めて強く惜しまれるだろうと歌っている。(3) 送別の宴で、即興でこの詞を披露して妓女が歌ったなら、拍手喝采大いに受けたであろう]

■【04-2-093】思聡名説

【解題】ある少年に思聡の法名を与えたことを記した短文。

【訳文】

法恵円師の小童の彭九は年が十一で、琴が上手で、応対が大人のように明瞭である。彭九が自分からまだ法名がないということを言い出したので、法恵円師の弟子にはみな「思」の字が用いられていることから、「思聡」の名を与えることにした。願うのは、いずれその名の通りに、仏法を聡く得ることである。このことを付してその名を与える。

【補足】[法恵円師とあるのは当時有名な円照大師のことで、その弟子の少年が詩を作ると聞いた蘇軾は、参寥という僧が作った詩を示して、これに和してみなさいといったところ、少年がたちまち詩を作ったので、蘇軾は大変感心して、法名を付けることになったという。参寥は後に蘇軾の親友となるのだが、このときまでに面識がすでにあったかどうかは定かではない]

■【04-2-094】答舒堯文

【解題】この年の終わりごろに書いたと推測される手紙を二通見ておこう。これは舒煥［字は堯文］への返書。舒煥はこの年に科挙に合格したばかりの若者である。

【訳文】

……[しばしば来書がありながら返事が遅れたことを詫びる]……賈収君と飲んだときに、貴君の送別の一絶句を出して見せてくれまして、その語を見て、たちまち酔中に問答をかわしているような気分になりました。酔いから醒めると、それがどのような語であったのか思い出すことができませんでした。貴君からお手紙をいただいて、「公沙」であったことを知りました。ぼんやりと夢のなかの出来事のようで、恥ずかしさに顔を赧くしてしまいました。……[舒煥の文章を褒める]……欧陽公[欧陽脩]はまさしく天人であります。私などとはむろん比べるまでもなく、たぶん誰も公を超えることはできませんでしょう。天が公を生んだ意味ははなはだ難しく、千年の後までもきっとこのような人は生まれてこないでしょう。世間には自ら欧陽公に似ているだの、あるいは超えるだのという者もいますが、狂であり愚であるだけです。貴君とはいつしか会って笑って楽しむ縁もありましょうか。……

【補足】［(1) 賈収とは1年ほど前に湖州で会っていて［→作品番号04-1-081］、そのときに舒煥の詩を見たのだろう。蘇軾が注目した「公沙」の語は、「杵臼の交わり」の故事で知られる公沙穆を指すのであろうという。公沙穆は漢の時代の人で、貧乏な家に生まれ、都にきて学費を稼ぐために呉祐の家で米を搗くアルバイトをしていた。あるとき呉祐は公沙穆と話してみて、優れた人物だと知って大いに驚き、杵と臼の前で友としての契りを結んだ。舒煥と賈収の間にも同じような友情があったのだろう。(2) 舒煥からの手紙には、蘇軾と欧陽脩を比較するようなことが書いてあったのだろう。欧陽脩は別格の「天人」であるとして、そのようなことをしてはならないと強くたしなめている。(3) 終わりに、いつか縁があればと書いているが、この4年後に蘇軾が徐州知事になったとき2人は会うようになる］

■【04-2-095】与晁美叔

【解題】晁端彦［字は美叔］に与えた手紙。晁端彦は蘇軾と同じ年の科挙に合格し

たいわゆる「同年」の仲間。欧陽脩の弟子で、科挙の最終結果が発表された直後に、師に勧められて蘇軾を訪問している。蘇軾は合格後すぐに母の訃報を得て慌ただしく帰郷したので、「同年」の人々と親交を深める余裕がなかったために、晁端彦の来訪は特に印象に残り、遥か後にそのことを詩に詠んでいる。この手紙によれば、たぶん杭州に赴任する途中で 2 人は会っていたのだろう。

【訳文】

お別れしてから、二度もお手紙を頂戴し、交情の厚さをことのほか強く感じ、いつもお礼を申さねばと思いつつ、ものぐさで筆下手であることから、ぐずぐずと今になってしまいました。……私は恙なく過ごし、新しい政事に従事しておりますが、なかなか法の通りにはなりません。いかにすべきかを尋ねて、御沙汰があるのを待つ日々であります。もしも帰ることが許されましたなら、淮河を過る折にてもきっとまたお会いできましょう。……

■【04-2-096】雪後至臨平、与柳子玉同至僧舎、見陳尉列

【解題】10 月、蘇軾は公務を帯びて、雪の舞う日に杭州を発ち、それからは各地を巡って半年余りを外で過ごすことになる。先に見た日照り［→作品番号 04-2-031 など］のために江南一帯は食糧不足に陥り、杭州よりも広い範囲を治める転運司の指令で飢餓対策のために奔走することになったのである。そのときに周邠と柳瑾が同行した。周邠は喪中で公務より離れていて、柳瑾は職を辞して蘇軾のもとに身を寄せていた。自由に動けて信頼のできる 2 人がいれば、大いに心強いと考えたのだろう。この詩は杭州を発って間もなく、船で大運河を北東に進んで、臨平でいささか名の知れた隠者である陳烈に会ったことを詠んだもの。

【訳文】

臨平(りんぺい)の町はずれに帆を降ろすと、

雪が丘を成すばかりに高く積もっている。

無理に老詩人[柳謹](りゅうきん)を連れ出してここにまできて、

まばらなその髯に風が吹き付けてしゅうしゅうと音が聞こえるほどだ。

僧房に入れてもらうと、

火が熾(おこ)っていて、手足が少しずつ軟らかくなる。

隠者はもとより寡黙であるが、

向き合っていると自ずと憂いが忘れられる。

僧房の内にあるものといえば、

銅の炉に烟の穂が立ち、

石の鼎(かなえ)に白い泡が浮かんでいる。

旅行く人たちはこの先の行程を思うのだろう、

太鼓を鳴らして船の出発を促している。

私にもやはり日程がある。

しかし、いましばらくは穏やかに座って留まっていよう。

天地の間は広大である。

だから、我がこの生(せい)も浮遊していられるのである。

【補足】[この詩には、蘇軾がいかなる危機意識をもって杭州を発ったのか全く写されていないが、この年の気象災害は相当に深刻で、長江(ちょうこう)から南の地域ばかりでなく、都周辺にまで飢餓が拡大してゆき、翌年の春になると、都から東の地域で蝗(いなご)が大発生して甚大な被害をもたらすようにもなった。飢えた民衆は食べ物を求めて都に向かって殺到し、国政を大きく揺るがす事態へと発展した。天災は政(まつりごと)の過ちを天が咎める

ものだという古くからの考え方があり、改革政治がこの災厄を招いたのだと批判する声がにわかに高まった。皇帝自身に天の咎めを受けさせるわけにはいかないので、王安石が責任をとり、4 月に宰相から退いて郷里に帰った。皇帝はこのことから一時期心が揺らいだものの、国にとって改革は必要であるとの考えを守り、王安石の腹心だった呂恵卿を中心に改革を継続することを決断した。改革は当初は少なからぬ混乱をもたらしはしたものの、事実として期待していた効果を発揮し始めていたので、天災とは分けて考えるべきだというのが皇帝の判断であった]

■【04-2-097】夜至永楽文長老院、文時臥病退院

【解題】臨平から秀州に至ると、1 年前に会った文長老［→作品番号 04-1-089］のことを思い出し、報本禅院を訪ねた。文長老は病のために院を退いたと聞いて、すでに夜になっていたのだが、文長老が身を寄せる民家を訪れた。詩中に「巴の叟」とあるのが文長老のこと。巴は蜀の一地方を指す古い地名。

【訳文】

巴の叟が病んで村に臥せっていると聞き、

夜更けに、月明かりのもと、門を叩いた。

「この前、お会いしてより一年、

　昨日のことのように思われます。

　私は命を保つことができましたので、

　再びお話しできます」

郷里を想うから巴の叟を懐かしく感じるのではない。

文長老と情が通じるのである。

病んで禅院を出て民家に臥せっているのは、

仏の道に深く通じてますます尊く思われる。

私の問いかけに、

頭を少しだけ挙げてこちらに目を向ける――

かつての邂逅を記憶する鶴が長く鳴く姿のように。

■【04-2-098】和銭安道寄恵建茶

【解題】秀州にはやはり 1 年前に会っていた銭顗［字は安道］がいた［→作品番号 04-1-088］。銭顗が建茶［建渓を産地とする茶の名品］に詩を添えて贈ってくれたので、それに和して返礼とした。

【訳文】

私は南方に赴任してより少々の歳月を過ごし、

建渓の茶もそこそこ嗜み、

その味わいを言葉では説明できなくても、

昔馴染の顔を胸の内に思い浮かべられるように、

心の内にはこうであるとわかるものがある。

貴君より建茶を頂戴したので、

試みにその概略を批評してみたい。

建渓の茶といっても産地は一つではない。

それでもどの茶にも君子の本性が天から与えられている。

茶葉は森を見るかのようで、

その内側は清く、表面はふっくらとなめらかで、

「和」と「正」という語がぴったりあてはまる。

雪花とか雨脚とかの茶も有名ではあるが、

啜ってみると、建茶こそは真実の味わいが永く続く。

苦く硬い感じがあり、それこそがよいのだ。

譬えていえば、

漢代の皇帝が、頑固で猛獣のようだと辟易した名臣のようなものだ。

一時期評判の高かった草茶なるものがあるが、

味わいのよいところがあるとはいえ、

頼みがいのない虚しい名を挙げただけだ。

譬えていえば、

漢代の皇帝から賢いと褒められたものの、

諫めることを一切しなかったごますり大臣のようなものだ。

建茶は雲を抱く嶺の向こうに産し、

険しい道を運びくるのは容易ではない。

思いがけないことに、

西から貴君の使者がきて、包みを開いたら、

なんと建茶の塊りが百も入っていた。

香りを嗅いで、茶の味わいを想うのはいつもの通りであるが、

貴君の詩を記した紙を透して、

貴君の心ばえから発した光を浴びるような気がした。

いただいた茶は大切にしまって、

愛惜してやまない佳い客の訪れを待ちたいと思う。

麗々しく包んでお偉いさん方への付け届けに使うようなことは断じてしない。

この詩にもしも味わいがあると思われても、

人には伝えないでほしい。

私が結構なものをもらったと人々は羨むだろうし、

私が世間のことを悪くいったと人々は怒るであろうから。

■【04-2-099】銭道席上令歌者道服

【解題】銭顗［字は安道］に招かれた酒席で、歌う者［妓女であろうか］に道士の服を着せて、この詩を歌わせた。

【訳文】

烏府先生[銭顗のこと]の肝は鉄で作られている。

冷たい風が地を巻いて激しく吹いても、

烏府先生は寒さを覚えることがない。

雪の中で、紅い燈をともして我が白髪を見るのは、

去年より少なくなっているのを嫌うからである。

かくて老齢に至って貴君が退隠するのを待って、

私はその隣に住むといまから約束しておこう。

とりあえずは、道服を着て、

仙薬の歌を酔って唱えるのである。

【補足】［最初に「烏府先生」とあるが、烏府とは御史台［官員の不正を裁く部署］の異名で、銭顗はかつてその一員で、王安石を批判して左遷の憂き目に遭ったのだった。銭顗は、王安石におもねる同僚を罵倒して去ったので、その肝は鉄でできていると称えられた］

■【04-2-100】蘇州請通長老疏

【解題】蘇軾は秀州から北へ進んで蘇州に入った。これは、蘇州にある報恩寺の水陸禅院の長老として成都の通法師を招こうとする手紙。

【訳文】

官員が身に付ける衣冠を目の前に指し示して(それを与えるからと誘って)、儒者に命じるのは、儒学の衰えたことの現れである。禅や律に通じていることをもって仏弟子であるとするのは、仏教が粗雑になったことの現れである。人の本来は清浄であるのだから、律を教えるまでもないし、一切の衆生が解脱し得るのであるから、禅に励むまでもない。世間の惑う者は禅と律は大きく異なるものだとし、儒学と仏教は互いに相手を笑っている。これは正しい覚りではないのであって、誰かが衆人の迷いを開かなければいけない。

成都の通法師は、その一族は士大夫で、西の地の衆望を集めていた。『詩経』や『礼記』に通じて、国の中でも光り輝く少年であった。一方で、幼いころから遠く思いを巡らせるところがあり、青年に至って君親関係を辞し、大官に昇って功名を立てることを棄てたのだった。儒より仏に入って儒でもあり、律より禅に入って常に律を持している。

蘇州の報恩寺の水陸禅院は、江南の要所にあって仏教徒が大いに集まるところである。通法師にここに来てもらえるのなら、衆人の教化を大いに助けてくれるだろう。為すであろうことは大きいので、通法師にはぜひ厭わないでほしい。

【補足】[この手紙からも、蘇軾は、儒学も仏教も深いところで通じていて、まして律宗と禅宗に差異はないと考えていたことがよくわかる]

■【04-2-101】仁宗皇帝御飛白記

【解題】このときの蘇州知事は、かつて都で同僚であった王誨［→作品番号 03-3-020］であった。王誨は、父の王挙正が仁宗皇帝から賜った直筆の書を蘇軾に見せ、一文を所望した。王挙正は仁宗皇帝のもとで副宰相にまでなり、安簡の諡を与えられた。題にある「飛白」は余白を大きく取った草書のことである。

【訳文】

世の治と乱を問うときには、必ずその時代の人を観る。人の賢と不肖を問うときには、必ずその人が生きた時代の世についても考える。『孟子』は、「その人の詩を誦し、その人の文章を読んで、なおその人がわからないということはあるだろう。その人が生きた時代についても論じなければならないのである」といった。腕を広げても抱えきれないような大木はごく狭い土地には生えないし、莫大な財産を築くような人はたった三軒しかないような村からは出ない。

臣はかつて仁宗皇帝の事績について考えことがあるのだが、愚かな臣にはその聖徳の至りを測り知るに足る智恵がなく、四十余年の間に仁宗皇帝の左右前後にいた人について竊に検討したのだった。そのなかでも偉大な人は、もとより光明儁偉、深厚雄傑であって他の人とは比べようもなく、そのなかでは目立たぬ者であっても、敦樸愷悌、靖恭持重で、長者として十分に称えるべき人物であると知れたのだった。ことのときにおいてまさに天と人が和同し、上と下とが心を合わせて喜び合い、才智を用いるまでもなく徳があり余るまでに溢れ、功業をもって一人だけが名を挙げるのは難しく、福禄は無窮であった。

仁宗皇帝が亡くなってから十二年、臣のような者も、深山、窮谷に住む老婦、稚子も、また遠く外国の酋長も、当時の人々の遺したものを見たり、当時のことを聞いたりして、いまも涙を流して頭を垂れない者はいない。それには皇帝の恩沢ばかりでなく、朝廷にいた人々の力も大いに預かっているのである。

太子少傅の安簡公の王挙正は、臣はその人を見ることはできなかったのだが、その人となりを識ること

はできる。その流風遺俗が称えるべきであることは、その時代から考えればわかるからである。熙寧六年冬、私は公務で蘇州に行くと、その子の王誨は、慶暦年間に王挙正が仁宗皇帝から賜った「端敏」の二字の飛白の一筆を臣に見せてくれて、これについての文章を記してくれたなら、石に刻んで後の世にまで伝えようといった。……[以下に、幾つかの故事を引きながら、仁宗皇帝の草書や王挙正の名が世間から知られずに埋もれてしまわないように文章を書くということを述べる]……およそこれを見る者は、聳然と身が引き締まって、皇帝がお出ましになるときの旌が遠くに見えて、御車の音が響いてくるかのような気がして、忠厚に勉めて、浮薄を恥じるようになるであろう。

【補足】[(1) この文章で、仁宗皇帝とその当時の人々を異様なほどに称えているのは、依頼主の王誨を喜ばせるためだけでなく、蘇軾が本気で仁宗皇帝の治世は理想の時代であったと捉えていたからで、それは当時の特に保守派の人々の共通の認識でもあった。現在の改革の強引な進め方に批判的であればあるだけ、仁宗皇帝の時代がより輝いて見えるようになるのだろう。(2) 省略した部分は、文章家としては工夫を凝らして大向こうをうならせるまさに見せ場であるのだろうが、我々にとってはごちゃごちゃ故事を詮索しなければ意味を掴むことができないので、かえった煩わしいだけであろう。このように書いたなら、蘇軾に叱られてしまうのは必定であるけれど、無学者の偽らざるところである]

■【04-2-102】恵山謁鉄道人、烹小竜団、登絶頂、望太湖

【解題】蘇州から北に常州に行き、恵山寺の鉄道人を訪ねた。小竜団という茶を烹て一緒に飲み、恵山の絶頂に登って太湖を望み見た。そのときの詩。鉄道人は銭顗の弟の銭道人［恵山老］［→作品番号 04-1-088］である。

【訳文】

長江の南の山々を遍く踏みまわったとしても、

この恵山に出会ったなら、やはり留まらずにはいられない。

天上の月のような小竜団の茶を携えて、

人間世界で第二と称えられた恵山の水を試してみる。

岩の路をぐるぐる巡って九竜脊をたどり、

水が動き、光が翻る五湖の天を見下ろす。

昔、阮籍は山で孫登[当時名高い道人]に会って道教の奥義について尋ねたが、

孫登は何も答えなかったので、

阮籍は空しく嘯きつつ下山したという。

鉄道人もまた何も語ってくれないので、

嶺の松が私に代わって万壑を震わすかのように嘯く声を挙げてくれる。

【補足】[唐の時代の陸羽は茶の大家で、恵山の石泉の水は茶に適した天下第二の名水であると賞賛した。詩中に九竜脊の名があるが、これは恵山に登った陸羽が付けたものである]

■【04-2-103】銭道人有詩云、直須認取主人翁、作両絶戯之

【解題】銭道人［鉄道人］が「直須認取主人翁」［直ちに須らく主人翁を認取すべし］という句を含む詩を詠んだので、それに応じて、戯れに二首の絶句を作った。銭道人の句は、「わしのことを何と見る」と問いかけたもので、いわゆる禅問答のようなやりとりで、訳者には理解不能であるので、第一首だけ仮の訳文を作ってみた。

【訳文】

其の一

貴僧は問う。

「わしは何者であると認識するか」

私はこのように考える――

首を断つ。

断った瞬間に首はすでにない。

だから、首はもう首を認識することはできない。

氷が解けて消える。

消えた瞬間に氷はすでにない。

だから、氷はもう氷を認識することはできない。

貴僧は、私に貴僧が何者であるか認識せよと求める。

私は、貴僧が何者であるかと見定める。

その瞬間に、その何者かは貴僧と断たれ、貴僧は解けて消える。

「わしは何者であると認識するか」と問うのは、

そもそも一体誰なのだろうか。

■【04-2-104】除夜野宿常州城外二首

【解題】蘇軾は常州滞在中に年末を迎え、町の外に停泊する船の中で除夜を迎えた。そのときの詩。

其の一

眠らずにいるのは、

起きたままで新年を迎えるためではない。

餓えて流民となった者が道で己の苦しみを歌っている――

餓死した者に向かって野辺で哭する声がする――

二つながら悲しみに耐えがたく、

我が目は病んだように閉ざすことができない。

遠くの火も、低い星も、次第に薄れてかすかになって行く。

故郷で年越しをしたあのころの人々のあの訛りがふと想われ、

妙に帰りたくてならなくなる。

布団を重ねても脚が冷たく、霜が重く降りてきたと知れる。

有り難いのはこの燈火である。

これば かりは私を嫌うことなく、

この船で一晩中付き合ってくれているのだから。

【補足】［この詩の冒頭で初めて実は厳しい状況の中にいることが歌われている。「行歌野哭両堪悲」［行歌 野哭 両ながら悲しむに堪えたり］は、飢餓に苦しむ民衆の声を、むろん蘇軾はきちんと受け止めていたことを示すものである。ここまでの一連を詩だけを見ると、現実から遊離していい気なものだと呆れてしまうのだが、友人と詩の贈答を楽しむことと公務とは別のことであるとしていたのだろう。官員としては人並み以上に良心的に励んでいたことは間違いない］

其の二

南にきてから年の徂くのを三度見た。

恐れるのは、このまま終身道に走り続けるのではないかということ。

新しい年の暦を見るのが怖いような気がする。

この地では、門に貼っていた桃符を除夜に剥がし、

元旦に新しい桃符を貼る。

旧い桃符には邪気を祓(はら)う効力がもうないからだ。

私は旧い桃符に習って、退く時を得たいと思う。

大気の気配や植物には陽春の心が動き出しているけれど、

私の髭のあたりには、

まだまだ霜や雪ばかりがやってきてさらに白くさせようとしている。

もしもいまの窮愁を老健と取り換えるようなことができるのなら、

最年長者として屠蘇を最後に飲むような年齢にまでなってみたいものだ。

【補足】[屠蘇を年少者から順に飲むという習慣は昔の中国から伝わったようだ]

第 4 章　大きな転機――初めての杭州

［第 4 章その三］

熙寧(きねい)7 年［1074 年］、蘇軾(そしょく)39 歳。

■【04-3-001】元日過丹陽、明日立春、寄魯元翰

【解題】常州(じょう)の町の外の船中で新年を迎えた蘇軾は、元日のうちに大運河を北西に進んで丹陽(たんよう)に至った。翌日は立春で、そのことを主題に詩を作って魯有開(ろゆうかい)［字(あざな)は元翰(げんかん)］に寄せた。魯有開は作品番号 04-2-082 で見たように、杭(こう)州を発って都に向かったのだが、まだこのあたりに留まっていたのだろう。

【訳文】

この地では元旦に、

紅い糸のように細く刻んだ五種の辛い物を盆の上にうずたかく盛り、

椒花(しょうか)と組み合わせて新しい意匠をそれぞれに工夫する。

子供のころ、

正月になると竹馬で遊んだものだが、

そのときにいまの年齢にまでなるとは思いもしなかった。

明日の立春には、

門の外に土の牛を出して、寒さを早く送り出すようにするのだが、

春ばっかりはゆっくり留まってくれるのがよい。

杭(こう)州の西湖(せいこ)では水遊びをするにはまだ早すぎるだろうか……

潤(じゅん)州の北固(ほくこ)山(じょうげん)では上元の灯籠を見物するのによい時分になるだろうか……。

新年を迎えて白髪がまた増えた私がいまここにいることなどは、

誰も気にかけてくれまいと思っていたのだが、

明け方からしきりにくしゃみが出るのは、

はてさてどこの誰かさんが噂でもしているのだろうか――

それは、貴公なのかな。

【補足】［(1) ニラ、ラッキョウ、ネギ、ニンニク、カラシの5種の辛いものを盆に盛って元旦に食べるという風習が中国の一部にあり、「五辛盤」といった。日本の七草粥の起源という説もある。(2) 潤州は丹陽からさらに北西に進んだところ、長江に接する町で、魯有開はすでにそこにまで達していたのかもしれない。(3) くしゃみが出るのは人が噂をしているからだとは、漢代以前からいわれていたことである。(4) 蘇軾はこのころに妓女を褒め讃える『古纏頭曲』という詩を作っているが、もしかすると、宴席で魯有開を喜ばせるために作ったものであるのかもしれない。故事てんこ盛りのややこしい作品であるので、訳は割愛する］

■【04-3-002】行香子

【解題】これは詞。上の詩と同じころに、杭州の陳襄知事のことを想ってこの詞を作った。同じ「行香子」の曲で詠んだ詞を作品番号 04-2-019 で見ているが、同じ曲であっても内容が全く異なっているところが詞の面白さである。

【訳文】

携手江村。［手を携えて歩いた川辺の村］

梅雪飄裙。［裾のあたりで雪のように翻った梅の花びら］

情何限、［限りない情］

処処銷魂。[どこを見ても消え入るばかりの我が魂]

故人不見、[会うことのできない友人]

旧曲重聞。[重ねて聞くのはかつての詩]

向望湖楼、[詩に寄せて見ようとする杭州の望湖楼]

孤山寺、[孤山寺]

湧金門。[湧金門]

尋常行処、[いつも行ったあのところ]

題詩千首。[題した詩は千首]

繍羅衫、[妓女の綺羅の袖]

与払紅塵。[それが払ってくれたのは詩稿に降りかかった町の塵]

別来相憶、[別れてより思うこの気持ち]

知是何人。[それを知ってくださるのは誰]

有湖中月、[湖に映る月]

江辺柳、[水辺の柳]

隴頭雲。[岡の上の雲]

【補足】[(1)「手を携えて歩いた川辺の村」とは、作品番号 04-2-007 にあった杭州城外の村のことだろう。ほぼ 1 年前のことである。(2) 詞の前半の終わりには、杭州の名所を三つ並べている。「望湖楼、孤山寺、湧金門」と、曲に合わせて歌ったときに、杭州の風光への想いが深い余韻として残るのであろう。詞ならではの表現である。無造作の三つ並べたように見えて、実はこれで音律がきちんと合っているのである。作者の腕の見せ所である。(3) 昨年の数々の作品で見たように、蘇軾は西湖の春がことのほか気に入っていた。いよいよ最もよい季節を迎える西湖に我が身を置けないのを

蘇軾は残念でならないと感じている。しかも、3 年の任期が秋には満ちるので、春の西湖をこの先二度と見られないかもしれないのである。そのような思いを込めた作品をこの後で幾つか見ることになる]

■【04-3-003】刁同年草堂

【解題】蘇軾は潤州［鎮江］に至り、しばらく滞在する。潤州は長江南岸の町で、4 年余り前に杭州に赴任する折に立ち寄っていた［→作品番号 03-4-038］。今回の出張では最も杭州から北に離れたところである。潤州には、蘇軾と同じ年の科挙に合格した刁璹［字は景汜］がいて、その草堂を訪ねてこの詩を詠んだ。刁璹は潜県の知事を勤めていたが、このときは郷里に帰っていた。

【訳文】

長い竿にことさらに立派な衣類を干すようなことはしない。

高くあるいは低く望み見えるのは、

貴君の家の南の庭の木々や北の草堂の屋根である。

青い山は約束したかのように、

ちょうど門戸の正面に向き合い、

流れる水には情はないはずなのに、

自ずと池へと入ってゆく。

久しい歳月を経て、酴醾［薔薇の一種］の枝々は広く合わさろうとしていて、

柳の木は、春が来て、もう堪え切れないほどに葉が繁っている。

ここの主人は慌ただしく立ち去ることを許してくれない、

紅梅が実をつけるまでいなさいと。

■【04-3-004】刁景純賞瑞香花、憶先朝侍宴、次韻

【解題】五代十国時代に、潤州を含む長江の下流域一帯の広大な地域は南唐国の統治下にあった。その南唐国の朝廷に仕えた刁彦能という人物がいて、その子の刁衎は宋朝に仕え、刁衎の孫の刁約［字は景純］が仁宗皇帝のもとで朝廷の高位に昇った。刁約は職を辞してからは、潤州の邸宅に住み、そこを蔵春塢と号した。刁約の甥が上の詩で見た刁璹である。つまり、刁璹は前代から続く名家の子弟である。蘇軾は刁璹に導かれて刁約の邸宅を訪ね、刁約が作った「瑞香花を賞して、先朝の宴に侍したことを憶う」という題の詩に和した。瑞香花は廬山にだけ産する香りの強い花で、南唐国の王宮に移植され、それが宋の王宮にも伝えられた。刁約は、瑞香花を愛でる仁宗皇帝の宴に出席したことがあり、その思い出を詩に詠んだのである。

【解題】

かつて唐の時代に、

劉禹錫は罪を赦されて都に復帰したとき、

宮中に立ち並ぶ桃の花を見て、

「それは自分が去ってから芳しい花を幾度咲かせたのか」

と、詩に詠んだ。

刁約殿は若い人とともに新しいものを愛でるのは好まれないので、

瑞香花の香りに、宮中での日々の思い出に浸り、

あれからこの花は幾度開いたかとやはり考えるのである。

ここ潤州には、

鶴林寺の躑躅を秋に咲かせた神女がいたというので、

私のために瑞香花をいま開かせてもらいたいと思うのだが、

神女は天界に行ってしまっていつ帰るとも知れない。

【補足】［(1) 劉禹錫が9年ぶりに都に復帰したときに、「玄都觀裏桃千樹、尽是劉郎去後栽」［玄都觀裏の桃千樹、尽く是れ劉郎の去って後に栽えられたもの］［玄都観にはたくさんの桃の木が花を咲かせているが、すべの私が都を去ってから植えられたものである］と詠んだ詩は非常に有名である。劉禹錫自身は何も変わらずに帰ってきたのだが、都では新進の連中がわがもの顔で跋扈していると皮肉っているのである。仁宗皇帝の時代を追憶する刁約の詩に和したこの作に、蘇軾はむろん改革派への批判を潜ませている。(2) 鶴林寺で秋に躑躅を咲かせた仙人がいたことは作品番号 04-1-071 で見ているが、ここでは神女ということになっている。(3) この詩の六句目と七句目は複雑な故事の用い方をしていて訳すのが困難なので割愛した］

■【04-3-005】同柳子玉遊鶴林、招隠、酔帰、呈景純

【解題】杭州からずっと行動をともにしてきた柳瑾［字は子玉］とともに潤州にある鶴林寺と招隠寺に遊び、酔って帰ってこの詩を作って、刁約［字は景純］に見せた。

【訳文】

この花の時節、

酒で顔を赤く光らせての帰りの道、

春の風に吹かれ、涼しく感じる。

鶴林寺のまわりは白く輝く竹におおわれ、

招隠寺の下の野には桃の花の香りが満ちていた。

岩山からは、天に掛かる練り絹のような滝が下り、

泉の底からは、真珠のような水がたえず湧き上がっていた。

このようなところでこそ、

笛を携えた道人(どうじん)が現れて、

翠(みどり)の崖をも裂くような音を聞かせてもらえたらと思ったのだった。

【補足】［終わりの部分は、刁約(ちょうやく)も一緒であったならばというココロであろう］

■【04-3-006】景純見和、復次韻贈之、二首

【解題】上の詩に刁約(ちょうやく)［字(あざな)は景純(けいじゅん)］が和したので、蘇軾がまた和して返した。二首のうちに第一首を訳す。

【訳文】

其の二

人間界の燈火は、

日や月の光と少しばかりは競えるとしても、

人が季節の変化を競って、

春をそのまま留めておくことはできない。

私は多事多忙の内にあって、初めて田舎暮らしのよさを知り、

この凶年に遭遇して、野の蔬菜(そさい)が甘く香しいのをしみじみ知った。

横糸を飛ばす梭(ひ)のように、右に左にと慌ただしく過ごし、

渓山の好(よ)さは画に勝ると、ただ口でいうだけだ。

結局、年を経てこの身に会得したものは何もない。

それでも翁(おう)のためなら、

ここ万松岡にまさに一万本の松を植えることならできるであろう。

【補足】［(1) 終わりの部分にある「翁」とは刁約のことで、このとき 81 歳であった。万松岡とは、刁約の家のある蔵春塢の向かいの岡で、松で覆われているので、刁約がそのように命名した。蘇軾は松を植える技術を持っていると自認しているので、ここでもそれをアピールしたのである。(2) 割愛した第一首では、刁約は退隠して功名などには無関心であることを幾つかの故事を引いて歌っている］

■【04-3-007】景純復以二篇、一言其亡兄与伯父同年之契、一言今者唱酬之意、仍次其韻

【解題】刁約［字は景純］がまた同じ詩に和したので、刁約と蘇軾の唱和はさらに続いた。刁約の詩の其の一は、先に亡くなった刁約の兄が蘇軾の伯父の蘇渙と同じ年の科挙に合格した「同年」の間柄であったことを歌い、其の二は、こうして唱和し合うことの喜びについて歌っていた。蘇軾が次韻して返した二首のうち第一首だけを訳す。

【訳文】

其の一

杖に拠って立つ貴君は、

あたかも漢の三代の皇帝に仕えて霊寿木の杖を賜った孔光を見るかのよう。

時の流れに感じ、旧い世を懐い、悲しみを覚えないわけにはいかない。

我が伯父は貴君の兄上とともに科挙に合格し、

貴君のように高位に昇るべき人であった。

いずれにしても、この世に生きるのは水に浮かぶようなもの、

この世を去るのは休息をとるようなもの、

得るものもなければ失うものもなく、

憂楽とは心にとっての閑と忙のようなものなのであろう。

世間でおこる事柄は、

波浪のように変化し続けるばかりで、

岡をすっぽり覆う柏の森のようになりはしないのだ。

■【04-3-008】子玉家宴、用前韻見寄、復答之

【解題】柳瑾［字は子玉］の家は潤州の町のすぐ東にある丹徒鎮にあって、柳瑾は蘇軾と鶴林寺などを巡った後で家に帰っていた。その柳瑾の家を訪ねたところ、作品番号 04-3-005 と同じ韻を用いて柳瑾が詩を作ったので、それに和して答えた。

【訳文】

貴君は自ら金の樽から酌み、

かの孟光のような妻にも酒を勧める。

さらに貴君は、家に住まう演奏家を呼んで、

笛の名曲を聞かせてくれる。

子供たちが私のまわりに集まってきて、

衣を引っ張ったり、

酒に火照った顔を扇であおったりしてくれる。

詩の病は春に逢ってますますひどい症状になり、

愁いの魔は酒の力でどこかに走り去った。

酒から醒めたときの情味といったら、

つまり、日がもう西南の岡の上にあるというものだ。

【補足】［(1) この詩は柳瑾のもてなしにすっかりくつろいだ気分になったということを歌っている。(2) 孟光は漢の時代の有名な賢妻。劉瑾は妻も宴席に同席させて、大いに歓待したのである。(3) この詩には、蘇軾自身の注で、「劉瑾の家には笛妓がいる」と添え書きがある。(4) この詩では、幾つもの故事を引いて劉瑾の家の人々の様子を描写しているのだが、訳詩はその大意だけを示した。(5) この詩の前にも、同じ韻で劉瑾と蘇軾は唱和していて、蘇軾の詩には「合わせて劉瑾の兄の子の劉 璋道人に寄せる」との添え書きがある。その詩は、まるで禅偈のようだとの評もあって、訳者にはさっぱり意味がわからない］

■【04-3-009】柳氏二外甥求筆跡二首

【解題】このとき柳瑾の家には、孫の柳閎と柳闢がいて、蘇軾は二人から書を所望され、それに応えてこの詩を詠んで書いて与えた。この二人の父は劉子文で、その妻は蘇渙の娘であったから［→作品番号 03-3-003］、二人は蘇軾から見ると「外甥」ということになるので、詩の題にそのように記されているのである。

其の一

使い古した筆を山のように積んだところで珍しくもなんともない。

幾千本もの筆をためにし、幾万巻の書物を読んで、

初めて真髄に迫ることができる。

唐の柳公権は「元和脚」と讃えられた新しい筆法を生み出した。

君の家にはそのような柳家の立派な伝統がある。

ある人が王羲之に書を習おうとすると、

王羲之は「貴君には兄上がおれられるではないか」といった。

その兄もかねてより王羲之と並ぶ書家として知られていた。

しかし、そのある人は、

「若い者は家の鶏よりも野の鶖(あひる)を愛すというではありませんか」

と、あきらめようとしなかった。

だが、私はきっぱりいう――

「家の鶏こそを第一として、さらに他人に問うのはおよしなさい」

【補足】［(1) 蘇軾は、私に書(しょ)を求めるよりも祖父に教わるのがよいと、この詩で柳閎(りゅうこう)と柳誠懸(りゅうせいけん)を諭したのである。(2) 柳公権(りゅうこうけん)は同じ柳姓(りゅうせい)の有名な書家として引いたもので、実際に古い先祖というわけではない］

其の二

唐(とう)の時代のこと、

名筆家と知られた褚遂良(ちょすいりょう)は、

皇帝を諫める文章を記したときには、

一晩で髪が真っ白になったという。

――筆は本来そのように心を砕いて用いるべきである。

唐の時代のこと、

柳公権(りゅうこうけん)は皇帝から書の極意を尋ねられたときに、

「心を正しくすれば、筆は正しくなる」

と、答えた。

――これこそ急ぎ諸君等が受け継ぐべき家伝の書法である。

いつか諸君が記した諫言の書を見たいものである。

■【04-3-010】成都進士杜暹伯升、出家、名法通、往来呉中

【解題】成都出身の杜暹［字は伯升］はかつて科挙を目指して地方試験に合格したのだが、その後、出家して法名を法通といい、呉のあたりを行き来していた。柳瑾が蘇軾と法通を引き合わせたので、詩を贈った。

【訳文】

かつてのその名を知られた杜暹と知り合いになりたければ、

飄然と往き来する一人の雲水の僧を尋ねなければならない。

もしも、法通の頭を垂れさせて、

官職の鎖に繋げたとしたら、

結局のところは、

我等とどっこいどっこいであっただけだろう。

■【04-3-011】書贈法通師詩

【解題】上の詩について記した蘇軾の短文がある。

【訳文】

私はあるとき、

「法通師が試験場から抜け出さなかったならば[つまり、合格したならば]、いまごろはどうなっていたでしょうか」

と、いったところ、柳瑾はこのようにいった。

「たかだか我等くらいのところでありましょうかな」

それで戯れにこの詩を作ったのである。

熙寧七年二月。

【補足】［柳瑾は法通のことを見くびったわけではなくて、官員の不自由さを嘆いたのである］

■【04-3-012】子玉以詩見邀同刁丈遊金山

【解題】蘇軾は多忙な中でも遊ぶことを忘れない。柳瑾［字は子玉］から詩でもって金山に行くことを誘われ、刁約［字は景純］とともに登った、そのときの詩。かつて金山に登ったときの詩を作品番号 03-4-038 で見ている。

【訳文】

柳君の年齢はまだ還暦に及んでいないのだから、

人の前で「老翁」と呼びかけるわけにはいかない。

しかも、ここには瞳の四角い［長寿の象徴］、八十一歳の刁翁がおられて、

矍鑠として衣をかかげて山中を走っておられるのだから。

■【04-3-013】金山寺与柳子玉飲、大酔、臥宝覚禅榻、夜分方醒、書其壁

【解題】金山寺で柳瑾と大酒を飲み、蘇軾は、宝覚という僧が使っている禅榻［禅を組むための椅子］で眠ってしまい、夜中に目覚めてこの詩を壁に書いた。後に金山寺を訪れた人がその詩を見て、石に刻んだという。

【訳文】

悪い酒［強い酒］は悪い人［強い人］と同じなのか、

刀とか矢とかよりも激しく攻めまくってくる。

禅榻(ぜんとう)の上でぐったりして思うには、

「勝とうとするより、戦わないのが最善である」

孫子(そんし)のこの言葉が真理であるとわかったのだ。

詩翁(しおう)[柳瑾(りゅうきん)]の意気は雄大で抜きん出ており、

禅老(ぜんろう)[宝覚(ほうがく)]の語りは清らかで柔らかい。

ところが、私は酔って全てわからなくなり、

眼がちかちかと紅くなったり緑になったりしたのを見ただけだった。

ふと醒めると――

月は川の向こうへと落ちかかって行き、

さくさくと木の葉の落ちる音とともに風の響きが変化する。

仏壇の燈火が一つの光を放っているだけで、

二人の豪傑の姿はどこにもない。

【補足】[蘇軾は酒を好むが酒に強いわけではく、すぐに酔いが回り、目の中が紅くなったり緑になったりして、眠りに落ちてしまうのだった。柳瑾(りゅうきん)と宝覚(ほうがく)はそのような蘇軾を残してどこかに飲み直しに行ったというのがこの詩のオチである。宝覚は禅僧でありながら『水滸伝(すいこでん)』の魯智深(ろちしん)のように大酒食らいだったのだろうか]

■【04-3-014】送柳子玉赴霊仙

【解題】ここまで行動を共にしてきた柳瑾(りゅうきん)［字(あざな)は子玉(しぎょく)］とは金山(きんざん)で別れ、この詩を贈った。柳瑾(りゅうきん)は天柱山(てんちゅうざん)にある霊仙観(れいせんかん)の管理人として赴任することになっていた。天柱山は舒州(じょ)にある。

【訳文】

世中の事は艱難ばかり、

猛々しく廻り変わり、

貴君の心は、まだ老いないうちから灰のようになってしまった。

いつしか貴君は夢で、

司命真君(しれいしんくん)[道教の神]の宮殿に昇ったと見ると、

霊仙観(れいせんかん)の管理人を命じられたのだった。

私もそれを学んで、同じく神仙に呼ばれたいものである。

■【04-3-015】昭君怨

【解題】「金山(きんざん)で柳瑾(りゅうきん)と別れる」との副題が添え書きのある詞。

【訳文】

誰作桓伊三弄(こと)。[誰が演奏するのか箏のこの名曲]

驚破綠窓幽夢。[窓から入り込んできて、はっと目覚めるこの夢]

新月与愁煙。[昇ったばかりの月と、愁うような夜霧]

満江天。[川の上の空を満たします]

欲去又還不去。[去ろうとして去らず]

明日落花飛絮。[明日は落花か飛ぶ柳絮(りゅうじょ)]

飛絮送行舟。[柳絮が送って行く舟]

水東流。[水はひたすら東に流れます]

■【04-3-016】監洞霄宮兪康直郎中所居四詠

【解題】潤州滞在中に、かつて朝廷の一員であった兪康直の住いを訪ね、四首の詩を詠んだ。儀礼的な詩であるので四首のうち第三首だけを訳す。この詩の題に、兪康直の肩書として「監洞霄宮」と記されている。これは杭州にある洞霄宮という道観の管理人ということなのだが、実際は名目だけで、それによっていわば年金に当たるわずかな俸禄が与えられていたのである。上で見た柳瑾は「監霊仙観」を授かって、実務に就いたようである。

【訳文】

其三　遁軒

先生[兪康直]は世から遁れるこの住まいを作られたのだが、

ひっきりなしに訪問客が来て、隠れる身を起こされてばかりいる。

だから、川を望むこの村でこのまま老いることはできそうもない。

古来、真遁[真に世から遁れること]はわざわざ自分から遁れようとはしないものだ。

それで先生は、

賓客がくると垣を越えて逃げたり、門を堅く閉じて引き籠ったりした人を、笑っているのである。

■【04-3-017】遊鶴林、招隠二首

【解題】再び潤州の鶴林寺と招隠寺に遊んでの詩。

【訳文】

其の一

町の外の野原は、雨が晴れ上がったところで、

春の風光の麗しさはあり余るほどだ。

鶴林寺(かくりんじ)は青い竹の中、

そのまた奥の深い林で杜鵑(ほととぎす)が鳴いている。

一人の病んだ僧が、

西の窓辺にもたれかかって、

香(こう)の煙をじっと見つめている。

外では柳の花が堕(お)ちて、

桜桃(ゆすらうめ)が目も眩むばかりに然(も)えているのに。

其の二

歌いつつ白雲のかかる嶺へと登り、

招隠寺(しょういんじ)の竹林の中に坐して詩を詠じる。

風の軽さに花がほろりと落ち、

日が薄れて山の半分が暗くなる。

谷川では無数の草が伸び出していて、

香りを聞いたりしてもその名を知るのは難しい。

時に町の人を見かけたりするから、

隠れ住むには十分に深いとはいえないであろう。

【補足】［この詩は、比較的平易な言葉で実景を淡々と描写していて、唐(とう)の時代の韋応物(いおうぶつ)や柳宗元(りゅうそうげん)の趣があると評されている。参考までに第二首の読み下し文を掲げておこう］

其の二

行歌白雲嶺、[行歌す 白雲の嶺]

坐詠修竹林。[坐詠す 修竹の林]

風軽花自落、[風は軽く花は自ずから落ち]

日薄山半陰。[日は薄く山は半ば陰る]

澗草誰復識、[澗の草は誰か復た識らん]

聞香杳難尋。[香りを聞くも杳として尋ね難し]

時見城市人、[時に城市の人を見る]

幽居惜未深。[幽居するには未だ深からざるを惜しむ]

■【04-3-018】書普慈長老壁

【解題】同じころに普慈寺を訪ねて、志誠長老の部屋の壁にこの詩を書いた。

【訳文】

普慈寺の後ろには千本もの竹、

かつて酔って見たときには、

碧玉の椽が並ぶのかと思った。

疲れた思いで再びここに来たので、

あれから自分は老いてしまったと思うのだが、

高僧は全くもとのままに微笑んでおられる。

しばらくぶりに禅の味わいを教えていただき、

その後の昼寝は黄公[鳥の名]の声に妨げられる。

いつしか日が暮れてしまったのだが、

寺には二株の紅百葉[花の名]があって、

人に向かって美しさを見せてくれている。

【補足】［この詩で、以前にも普慈寺にきているとあるのは、杭州に赴任する途中で立ち寄ったことをいうのだろう］

■【04-3-019】和蘇州太守王規甫侍太夫人観燈之什、余時以劉道原見訪、滞留京口、不及赴此会、二首

【解題】これは蘇州知事の王誨［字は規甫］［→作品番号 04-2-101］が送ってきた詩に和したもの。王誨のもとの作品は、母とともに上元節の燈篭見物をしたことを詠んだもの。蘇軾はなお潤州［京口］に留まっていて、その会に赴くことができなかったので、詩を和して送ったのである。詩の題にはこのとき劉恕［字は道原］の訪問を受けていたことが記されている。蘇軾は都において劉恕を見送る詩を詠んでいたが［→作品番号 03-4-007］、蘇軾が潤州のあたりにいると聞いて会いに来たのだろう。第二首だけを訳す。

【訳文】

其の二

赤い騎兵を先立てた漢代の高官のように、

蘇州知事殿は立派な行列を仕立てて、

火の輪が次々に転がるような燈篭の明かりの中を、

母君に従って練り歩かれた。

美酒を傾けて三夜の月を見て過ごし、

五州の春の中でただ蘇州だけが豊年を祝ったのだった。

私は帰る時期を誤ったために、

場違いの客人とならずにすんだのだが、

どうにかこうにか詩の調子だけは合わせようとしている。

人が去った後には、

耳飾りや簪が多数落ちていたのではなかろうか。

夢の世界のようなその宴を想い見るのである。

【補足】［この詩は華麗な語句を並べて、蘇州で行われた上元の宴を賛美しているようにも見えるのだが、真意はその逆のようである。蘇軾自身の注で「時に浙西はどこも稲が稔らず燈篭を飾るのをやめた。ただ蘇州だけが盛んであった」と付記されている。つまり、詩ではあたかも蘇州は豊作であったかのように詠まれているのだが、実態としてそのようなことはないのであって、うがちすぎかもしれないが、蘇軾の本心としては苦々しいものがあったので、かえって過剰なまでに華麗な語句で詩を構成したのではないだろうか］

■【04-3-020】書焦山綸長老壁

【解題】潤州［鎮江］にはいわゆる鎮江三山があり、かつてそれらを全て訪ねていが［→作品番号 03-4-038 以下］、今回は金山に続いて焦山を訪問し、かつて会った老僧［→作品番号 03-4-039］と再び会い、その僧の部屋の壁にこの詩を書いた。前回の詩ではその名を挙げていなかったが、ここでは綸長老と記されている。

【訳文】

綸長老はいう――

「愚僧は焦山に住み、その実、いまだかつて焦山に住んだことがない」

私はその意味を問うが、綸長老はそれっきり言葉を発しない。

綸長老に言葉がないのではない、

答えなければいけないとは思っていないのだ。

どういうことなのかというと、

人には頭と足があり、

頭には冠が載り、足には履(くつ)をはいて、

それらがそのままじっくりしていればどうということもない。

長い長い髭の人は、それでとりたてて苦にする様子はない。

つまりはそういうことなのだろう。

ある人がこういうことをいっていた――

「いつもの寝場所でいつもは安らかに眠っていた。

あるとき帰ってきて、上と下を逆にしてしまい、

一晩中、おさまるところがなくて、

寝返りを打ってばかりで朝になってしまった。

もういらいらして、心を鋏(はさみ)でぶった切りたくなった」

これは俗っぽい話ではあるが、

深い意味があるように思って、

これを糸口に綸長老に重ねて問うと、

ただにこっと笑ったのだった。

【補足】［訳者は、この詩は果たして何をいっているのかさっぱりわからないままに訳したのだが、いったい何がいいたいのかと蘇軾に問えば、やはり笑うだけなのだろう］

■【04-3-021】留別金山宝覚、円通二長老

【解題】二カ月間余り滞在した潤州から去る前に、もう一度金山寺を訪れて、宝覚、円通の二人の長老に別れを告げた詩。宝覚の名は作品番号 04-3-013 で見ている。

【訳文】

沐浴をし終わり、

東の軒端で髪を乾かす。

これは、敢えて忙しくない風を装っているのだろうか。

短い眠りから醒めると、

頭巾が軽くなったように感じられ、

夕べの風がまことに快い。

茶をすすると、歯から頬に香りが行きわたる。

長江を眺めおろし、

舟を整えて北岸へと渡るのはいつなのだろうか。

民を安んじて済けるのがいまの我が道である。

医薬による治療の方法はもとより私にはないし、

顧みれば、

二人の長老のように風流の世界を往還するところへと、

私が帰る時節はなお遥かな先なのである。

■【04-3-022】減字木蘭花

【解題】「手紙を得て」という添え書きのある詞。誰からの手紙であるのか明示されていないが、詞の内容から、妻の手紙であったと推測されている。

【訳文】

暁来風細。[明け方にひそやかな風が吹いてきました]

不会鵲声来報喜。[喜びごとを報じるという鵲は鳴いてくれません]

却羨寒梅。[羨ましいのは冬の梅]

先覚春風一夜来。[夜の間に春の風がやってきたことを真っ先に知るのですから]

香牋一紙。[香りを籠めた一枚の紙]

写尽回文機上意。[回文に思いのほどを全て写したのです]

欲巻重開。[一度は巻いてまた開きます]

読偏千回与万回。[千回でも一万回でも読み返しましょう]

【補足】[後半にある「回文」の語によって、妻からの手紙がきたと推測されるのである。これは晋の時代の竇滔の妻の蘇氏の故事に基づき、竇滔が遠い砂漠地帯に流されたときに、蘇氏は回文の詩を刺繍した錦を夫のもとに送った。詩は八百四十字にわたって尽きぬ思いを繰り返し繰り返し歌うものであったという]

■【04-3-023】少年游

【解題】「潤州での作、人に代わって遠くに寄せる想いを歌った」とその添え書きがある詞。その通りであるのかもしれないが、上の詞で推測される妻からの手紙への返事であったと解釈する方が正しい可能性が高いのかもしれない。長く杭州を離れ、妻や子のもとに早く帰りたいと思うのが人情で、そのことを素直に歌ったらよいのに、蘇軾には何かしら自負するようなところがあるのか、そのようなことはまず言葉にしない。代作であると敢えて断ることで、妻のことを詞に詠めたのかもしれない。

【訳文】

去年相送、[見送られたのは去年のこと]

余杭門外、[杭州の町の門の外]

飛雪似楊花。[あたかも柳絮のように飛んでいた雪]

今年春尽、[もう終わりそうな今年の春]

楊花似雪、[あたかも雪のように飛ぶ柳絮]

猶不見還家。[なおも私は家に還ることができないのです]

対酒捲簾邀明月、[酒に向かい、明るい月を迎え入れようと巻き上げる簾]

風露透窓紗。[しかし窓辺のカーテンを通して入ってきたのは風と夜露]

恰似姮娥憐双燕、[月の女神が愛おしむのは二羽の燕]

分明照、[はっきりと照らし出すのです]

画梁斜。[梁の上の傾いた巣を]

【補足】[(1) 蘇軾が杭州を発ったのは去年の 10 月、そのとき雪が降っていた[→作品番号 04-2-096]。この詞の前半はその情景を詠んだものと解釈できるので、杭州にいる妻を想う作品であるとするのはかなり妥当性が高い。(2) 後半の第一句目は、李白が、孤独のときには月と自分と影の三者で遊ぶと詩に詠んだことに基づく。それに習おうと月の光を迎え入れたのに、風と夜露が勝手に入りこんできてさらに寂しい気持ちになったと、ここでは歌っている。月の光とカーテンの組み合わせは、杜甫が家族と離れ離れになっていたときに、カーテンを通して注がれる月の光を受ける妻の姿を遠く想って詠んだ詩を連想させるものであるので、妻を想う作品であるとするのはさらに妥当性が高くなる。蘇軾は直接的には妻を歌わずに、月の光が照らし出す燕の巣によって、夫婦の愛を象徴的に表現している]

■【04-3-024】蝶戀花

【解題】これも詞。「京口［潤州］にて郷里からの手紙を得た」との添え書きがある。

【訳文】

雨後春容清更麗。［雨の後の風景はきらめくばかりの美しさ］

祇有離人、［でも、ここに故郷から離れた人がいて］

幽恨終難洗。［ひそやかな恨み心を洗い流せずにいます］

北固山前三面水。［北固山の前は三面の水］

碧瓊梳擁青螺髻。［碧の櫛が青い髷を梳いています］

紙郷書来万里。［万里の彼方からきた郷里の手紙］

問我何年、［私に問うているのは］

真箇成帰計。［本当にいつの年に帰るのですかと］

回首送春拚一酔。［見回せば、春は去ろうとしています］

東風吹破千行涙。［酔ってこぼれる千行の涙を東の風が吹き払ってくれます］

【補足】［前半の最後の句には、長江の流れを櫛に、北固山を女性の髷にたとえたもの。北固山は鎮江三山の一つである］

■【04-3-025】酔落魄

【解題】これも詞。「京口［潤州］を離れるときの作」と添え書きがある。このころから詞がにわかに増えるのは、たまたままとまって作品が残されたのか、何か蘇軾の

心境に変化があったのかはわからないが、なよなよとした心情を託すには詞の方が適していると感じて、さまざまな表現を試みていたのではないだろうか。

【訳文】

軽雲微月。[薄い雲にぼんやりとした月]

二更酒醒船初発。[船が発ったばかりで、酒は夜中に醒めてしまいます]

孤城回望蒼煙合。[振り返れば、町は暗い靄の向こう]

公子佳人、[誰やらも彼やらも]

不記帰時節。[いつ帰るのか知らないのです]

巾偏扇墜藤牀滑。[頭巾を傾け、扇を落として、牀(ベッド)に滑り込みます]

覚来幽夢無人説。[夢のなかでも話し相手がいません]

此生飄蕩何時歇。[ふらふらと私はいつまで旅を続けるのでしょうか]

家在西南、[家は西南の彼方にあるのに]

常作東南別。[別れはずっと東南の地です]

【補足】[もう一首、「離別」との添え書きがある詞があって、「旅のうちに清明節(せいめいせつ)も過ぎてしまった」と詠んでいることから、同じころの作と推測されている。蘇軾としては平凡な出来栄えであるので、訳は割愛する]

■【04-3-026】常潤道中、有懐銭塘、寄述古五首

【解題】潤州(じゅん)から南へ常州(じょう)へと南に向かう道で、しきりに銭塘(せんとう)[杭州(こう)]のことが思われ、そのことを詩に詠んで陳襄(ちんじょう)知事に送った。

【訳文】

其の一

真っ直ぐに道を歩むなら、

人から悪く見られるべき理由は全くない。

だから、貴君は、

西湖と向かい合って二度目の春を迎える幸いを得ているのだろう。

孔子が称賛したように、

春には新たに仕立てた着物を身につけて人々と水辺をそぞろ歩きするのがよろしかろう。

古代の学問所のように、

春には新たに出てきた芹を摘みにきた人々に知事が勉強する姿を見てもらうようにしたらよろしかろう。

年年歳歳、人の容貌が改まり行くことに驚く必要はない。

朝に夕に、それぞれの人にそれぞれに向き合えばよいのだ。

冬至から百六日目に、雨が上がったならば、

飾りつけた船に乗り、太鼓を合図に西湖に漕ぎ出し、

民衆とともに歓楽を尽くせばなおのことよろしかろう。

【補足】［この第一首は、西湖の春の風光を思いつつ、知事のあるべき理想を歌っているのだろう］

其のニ

江南の地に草が生い茂り、鶯が乱れ飛ぶときに、

我が心ばかりは、季節の事物と乖離してしまっている。

花は庭に咲いて、顧みられることなく落ち、

燕は家に入りくるが、そこには誰も帰ってこない。

世上の功名はいつ正しく定まるのか、

酒を酌んで飲む人のうち幾人がしかるべき者であるのか。

思えば、去年の柳絮(りゅうじょ)の飛ぶ時節に、

杭(こう)州の人々は金の籠から雪の衣をまとったような鶴を放って、

知事の長寿を祝ったのだった。

【補足】［(1) この第二首は、杭(こう)州の春に帰れずにいる自身のことを歌っている。ここで 1 年前の春の詩［作品番号 04-2-008 以下］を読み返せば、そのときに蘇軾がどれほど杭州の春を楽しんでいたかがわかるであろう。この年の終わりには 3 年の任期が切れて杭州を去ることになるので、もしかしたらもう二度と西湖の春を見られないのかもしれないので、それだけにいまなお帰れずにいることがよりいっそう残念でならないのである。(2) 結びの部分については、杭州ではそのような習慣があると蘇軾自身が注記している］

其の三

長江(ちょうこう)に浮かぶ金山(きんざん)からの風を日々に受けている間に、

杭(こう)州の湧金門(ゆうきんもん)の外ではすでにとろけるようにして春となった。

この二年の間に私は西湖(せいこ)の魚や鳥とすっかり知り合いになり、

三月の鶯と花をそっくり知事に差し上げたく思う。

近ごろ流行の「倒暈(とううん)」の形に整えた女性の眉を見ても、

西湖と別れたままでいる私の臉(かお)の涙を消すことはできない。

「相思(そうし)」[あなたを思う]の字を詩に織り込んで

北の川べりをさまよう鳥に寄せてくれる人はいないのだろうか。

【補足】［続く第四首は、「多く語を成さず」と古い評があって、意味が汲み取れない

ので割愛する］

其の五

常州の恵泉山の麓の土は水で潤っている。

常州の陽羨渓のほとりの米は珠よりも輝いている。

私はいま、剣を売って牛を買い、このあたりで年老いるのもよろしかろうかと考えている。

鶏を料理し、黍の飯を炊いたら、貴君は食べにきてくれるだろうか。

土地は辺鄙であるから、

世をときめく方々の訪れは決してないし、

風俗は実につつましいから、

私のような役立たずの儒学者も身を置くことができるであろう。

一生の身の振り方をどうするのかということでさえも、

迂遠な道をたどって決めかねているのだから、

江南のあたりにいつまでもぐずぐず留まっているのも、

どうか怪しく思わずにいてほしい。

【補足】［この第五首では、後々に隠棲する可能性のある場所として常州の恵泉山と陽羨渓の名を挙げているのは、たまたま通過しているところから適当な地名を選んだまでなのだろうが、実際に蘇軾の「一生の身の振り方」［原詩では「経営身計一生迂」［身計を経営すること一生迂なり］と詠まれている］と大きく関わってくるようになる。蘇軾には同じ年に科挙に合格した蒋之奇という人物がいて、科挙に合格した直後に、蒋之奇から出身地の常州宜興県の風光のよろしいことを聞かされ、ならば政界を引退した後に一緒にそこに住もうではないかと、蘇軾は軽口で応じていた。この詩を詠んだときに、そのことを思い出したかどうかはわからないが、陽羨渓は宜興県

にある。そして、これより数年後に、宜興県に隠棲することを現実的に可能かどうかを検討することになる]

■【04-3-027】卜算子

【解題】「京口［潤州］から銭塘［杭州］に還る道中で陳襄知事に寄せる」との添え書きがある詞。

【訳文】

蜀客到江南、[蜀からの旅人が来たのは江南の地]

長憶呉山好。[呉山のすばらしさをずっと思い続けています]

呉蜀風流自古同、[呉も蜀も昔から同じように風流の地]

帰去応須早。[どちらにしても早く帰えるのがよいのです]

還与去年人、[去年の人とともに]

共藉西湖草。[西湖の草の上にまた座れるのでしょうか]

莫惜尊前仔細看、[酒の前で互いに子細に見合うのです]

応是容顔老。[また一年、顔はきっと老いているでしょうから]

■【04-3-028】画堂春

【解題】「弟の蘇轍に寄せる」との添え書きがある詞。

【訳文】

柳花飛所麦揺波。[柳の花が飛び行く先で麦の波が揺れています]

暁湖浄、[暁の湖は清らかで]

鑿新磨。[まるで新たに磨き上げたよう]

小舟飛棹去如梭。[小舟が飛ぶようにして去ってゆきます]

斉唱采菱歌。[菱を採る人々の歌声が一斉にあがります]

平野水雲溶漾、[広い野原の上に水を帯びた雲がただよい]

小楼風日晴和。[小さな楼閣に和やかな風が入り込みます]

済南何在暮雲多。[君のいる済南はどこなのでしょうか、夕暮れの多く重なる向こうでしょうか]

帰去奈愁何。[いつか君とともに帰れるのでしょうか]

【補足】[(1) 前半は蘇轍がこれまでいた陳州の柳湖 [→作品番号 03-4-016] の春を、後半は新たに赴任した済南での蘇轍の様子をそれぞれ想って詠んでいる。(2) 蘇軾の詩文の制作年代は、多くの人々の綿密な考証によってほぼ確定しているが、詞には不確定のものがかなりある。訳者は基本的に孔凡礼『蘇軾年譜』に依拠しつつ、詞については薛瑞生『東坡詞編年箋證』に拠るところが多い。この詞について前者はこの時期に詠んだとしていて、後者はこれより 2 年後としている]

■【04-3-029】常州太平寺観牡丹

【解題】4 月から 5 月のころは常州のあたりで過ごし、常州の東門の外にある太平寺で牡丹の花を見てこの詩を詠んだ。

【訳文】

杭州武林山の千葉[牡丹の品種]は、

いましも観空閣に照り映えているであろう。

その花は、別れてから、

五月の風に幾度吹かれたのか。

笑ってしまうのは、

眼がかすむような老人でありながら、

ここ太平寺(たいへいじ)で鞓紅(ていこう)[牡丹の品種]に向き合っているとは。

■【04-3-030】遊太平寺浄土院観牡丹、中有淡黄一朶、特奇、為作小詩

【解題】同じく常州(じょうしゅう)の太平寺(たいへいじ)で牡丹を見ての詩。淡い黄色の花が一つあって、とくに印象的であったので、この詩を詠んだ。

【訳文】

酔うと眼の中にまだらにいろいろな色が飛びかい、

あたかも天から曼陀羅(まんだら)花の雨が降るかのよう……

それを受けて咲いているのがここの牡丹なのだろうか。

一つの淡い黄色の花が我が眼をかすめると、

鞓紅(ていこう)も魏紫(ぎし)[どちらも牡丹の品種]ももう見る気が起こらなくなる。

【補足】[様々な牡丹の品種が競って作られていたことがわかる]

■【04-3-031】杭州牡丹開時、僕猶在常、潤、周令作詩見寄、次其韻、復次一首送赴闕

【解題】詩の題は、「杭州(こう)で牡丹の花が開くときに、私はなお潤州(じゅんじょう)と常州(じょうしゅう)の間にいた。周邠(しゅうひん)が詩を作って杭州から寄せてくれたので、それに次韻した。さらにもう一首次韻して周邠が都に行くのを送る詩とする」。この題によれば蘇軾に同行していた周

邠［→作品番号 04-2-096］は先に杭州に帰っていて、足掛け 3 年の喪が明けたので次の官職を得るために都に行くことになったのだろう。

【訳文】

其の一

花の時期に背いてしまったので、
いまさら帰るのは羞(はじ)とすべきだろう。
もう緑陰が成って、実を結ぶときである。
事物に対して情が薄くなったのは、
どうやら老いたせいなのだろうか、
春が過ぎ去ってしまっても惜しむ心がない……
いや、ちがう、貴君の詩を見ればよいからなのだ。
朝の酒に酔う姿に譬えられたことのある牡丹は、
すでに空しく枝が残るだけ。
来年からきっと毎年見るようにしよう、
学問よりも花づくりの名人に学ぶのだ。

其の二

人が生きて、いつ困窮するのか、いつ栄達するのか、定まった時はない。
九月九日の節句に必ず咲く菊のようにはならないのだ。
昔、十年の間、思いを凝らして一篇の賦を作った人がいた。
昔、万戸の領主になるよりも、千首の詩を作ることを重んじるといった人がいた。
一度傷ついた鴻(おおとり)は、天がいくら静かでも翼をおさめたままでいるとか、

一度驚かされた鵲は、月がいくら明るく照っても枝で安らぐことはないとか。

君よ、見るがよい、

六月の大河に水がなければ、

万斛の荷を載せる堂々の船は、

進むのは自ずと遅いのである。

【補足】［この詩は幾つもの故事を並べて、いま都に行って官職を求めるのは、必ずしも周邠のためにならないのではないかと、暗に警告しているようである］

■【04-3-032】銭君倚哀詞

【解題】銭公輔［字は君倚］の死を哀しむ詞。常州滞在中に、銭公輔の子の銭世雄［字は済明］に依頼されて作ったものである。銭公輔は常州の人で、蘇軾より十五歳先輩で、2年前の11月に亡くなっていた。銭公輔とは生前に格別関わりはなかったようで、この哀詞は悲しみを表現する語句を巧みに並べてはあっても、特に胸に迫るようなところはないので、普通なら訳を割愛するところなのだが、息子の銭世雄とは後年深い関わりを持つようになってくるので、ここでその名を挙げておくために、始まりと終わりの部分だけを掲げておく。

【訳文】

大江之南兮、［長江の南］

震沢之北。［震沢［太湖］の北］

吾行四方而無帰兮、［吾が旅は四方に及んで帰えるときはなく］

逝将此焉止息。［果たしてどこで終わるのだろうか］

……

臨大江而長嘆兮、[長江に臨んで長く嘆息する]

吾不済其有命。[私は天命に任せるよりないのか]

■【04-3-033】無錫道中賦水車

【解題】蘇軾は常州から蘇州に向かって南下し、途中の無錫に至り、本来なら梅雨の季節であるのに、雨がずっと降らないために、水路から水を汲み上げて田に灌ぐ水車が動かずに置かれているのを、炎天下に見てこの詩を詠んだ。

【訳文】

太湖のあたりは五月だというのに、

からからに乾いて風とともに砂が飛ぶ。

亀は穴に潜って苦しげにうめき、

道辺に虚しく水車が放置されている。

それが動き出しさえすれば――

鴉が尾をくわえ、鴉が尾をくわえ、

次から次へと、翻翻聯聯と水を汲み上げる板が回る。

ざあっと水を注ぎ終わると、

骨組みだけとなった蛇がとぐろを巻いて、

次から次へと、犖犖確確と回る。

水は翠の浪となって畝ごとに分かれて広がり、

まるで雲の陣が野を走るかのよう。

その水をちくりと刺して見えてくる緑の鍼は、

すなわち稲の芽が抽んでてきたのである。

ああ、天は、大地に泣く老農夫を見ないのか。

どうかして、古(いにしえ)の仙人の娘を呼んで、

雷神の車を出動させたいものだ。

■【04-3-034】虎丘寺

【解題】蘇(そ)州に至り、郊外の小さな山の上にある虎丘寺(こきゅうじ)でこの詩を詠んだ。遠く春秋時代の呉国(ごこく)の王の闔閭(こうりょ)を葬ったところといわれている。この詩は、寺の来歴や景勝を圧縮された語句で叙述していてかなり難解であるので、その大意を取ってごくおおまかに訳す。

【訳文】

門から入るともはや平らな土地はなく、

石の路が細く嶺へと通じている。

谷にはほの暗い風が生じ、

古い木々の蔭が池をおおっている。

呉越(ごえつ)の歴史に関わったかの名剣はもはやどこにもないが、

池は剣のように冷たい光を湛え、

鉄花(てつか)の名のある岩壁は、

蛙黽(かえる)を怖気づかせる殺気を放っている。

かつて竺道生(じくどうせい)という僧がここで仏教を説き、

そのころは信じる人はいなかったものの、

石が聞いて頭を垂れたという。

それから百年の後には、

さまざまな人がここを訪れるようになり、

留められた数々の詩はいまも読む者の心を震わせる。

東の軒端からの景色は佳き趣があって、

雲水は千頃にわたって麗しく広がっている。

生きるものたちの和らぐ様子のなかから、

世の冷厳さを破る春のような意が湧いてくるのである。

私はここに来て、今日は何事もなく、

鵲が翻る朝から、鳶が蹲る夕暮れまで、

ことのほか長く感じられる。

新月が溪の上に光を投げかけるときに、

漁師や樵が還ってゆくのを見て、

自ずから楽しむところがあると悟る。

ああ、故郷に帰るのを願うべきであるのだろう。

■【04-3-035】劉孝叔会虎丘、時王規甫斎素祈雨、不至、二首

【解題】虎丘寺では、蘇州知事の王誨［字は規甫］［→作品番号 04-2-101］が、劉述［字は孝叔］と蘇軾を引き合わせる段取りになっていたのだが、王誨は雨乞いをするために身を清めなければならなくなってこられなくなった。これはそのことを詠んだ詩。劉述は政界の先輩で、かつて朝廷の御史台にいたときに王安石を弾劾して地方に出され、その後、郷里の湖州に引退していた。なお、王誨が雨乞いしなければいけなかったことからしても、王誨が上元節に燈篭見物を華やかに行ったのはあまり褒められる行為ではなかったことがわかるのである［→作品番号 04-3-019］。

【訳文】

其の一

かつて劉公[劉述]が記した弾劾状は、いまなお凛として威光を放ち、

青い山々は、そのころからずっと公に対して穏かな情を寄せている。

鶴の羽のような雲が閑に浮かび、

駱駝の背のような山が草にすっぽりと埋もれている。

跪いて教えを受けることを許してくださるのなら、

公の隣にどうか住まわせていただきたいものである。

そして、公にお尋ねするのは、

かの回先生[伝説の道士である呂洞賓のこと]とはいつお会いになったのですかと。

【補足】[続く第二首は、斎する王誨に贈ったもので、いくつかの故事を引いて再会を期待することを詠んでいるが、訳は割愛する]

■【04-3-036】蘇州閭丘、江君二家、雨中飲酒、二首

【解題】蘇州で、閭丘という人の家で江君とともに酒席に臨んでいると、そこに待望の雨が降ってきた。一同大いに喜び、蘇軾はこの詩を詠んだ。閭丘は姓で、名は孝終で、すでに政界を引退した人物のようである。江君については詳しいことはわからない。降雨を喜ぶ第一首だけを訳す。

其の一

畑の上を暗くして、

どこもかしこも降り注ぐのは塵ばかり。

四角い塘の内で何やらさやさやと波紋が生じ始めた。

歌妓が袖を翻して雨を祈って舞う。

その歌声に聞き惚れて、

雨雲よ、飛ぶ勢いを失わないでほしい。

美しい女性の前で酒を辞退しようとは思わないが、

今宵ばかりはしらふでいて、

文字をきちんと並べて皆さんにお見せしたい――

石段にばらばらと落ちてくる雨音を聞く心持ちはいかにと。

■【04-3-037】次韻沈長官三首

【解題】沈長官（ちん）の詩に次韻した。沈長官については詳しいことはわらない。

【訳文】

其の一

故郷の山はどこにあるのか。

我らは二人ともそれを忘れてしまっているが、

会って盃を交わそうとの約束を違えることはない。

杜甫（とほ）は李白（りはく）に会ったときに、

どうしてそれほどまでに痩せたのかと問われて、

苦吟したせいだと答えたというが、

貴君はどうやら硬い麦の糠（ぬか）を食べても太る性質であるのだろう。

其の二

息子が結婚して、娘が間もなく嫁ぐのなら、

累(わずらい)は尽きて身は軽くなるのだから、

退隠の志に違えることはないのだろう。

山中では肉など食らわなくても、

体中に精気が溢れて自ずと肥えると聞いている。

其の三

造物者は、私が帰ることを思い続けているのを知っているのだろう。

ちゃんと老い衰えて病むようにしてくれている。

しかも、震沢(しんたくたいこ)[太湖]には風が来て、帆がいっぱいに膨らみ、

松江(しょうこう)[太湖に注ぐ川]には雨が入って、水がいよいよ満ちてきているのだ。

■【04-3-038】戯書呉江三賢画像

【解題】呉江県(ごこう)で范蠡(はんれい)、張翰(ちょうかん)、陸亀蒙(りくきもう)の三人の賢者の画像を見て、戯れに詩を書き添えた。これらの詩を読み味わうにはそれぞれの人物とその時代に背景について知っている必要があるので、煩わしさを避けて第二首だけを読んでおこう。張翰は南北朝時代の晋朝(しんちょう)の人で、朝廷に招かれて高位に就いたが、あるとき秋風が立つのを見て、故郷の呉中(ごちゅう)の菰菜(こさい)のスープと鱸魚(ろぎょ)の刺身の味を思い出し、「人の生き方として、志に適うのを貴ぶ。それができなくて、千里の彼方にまできて地位を得ようとしたところで何もならない」といって、官職を棄てて帰郷した。張翰は故郷の味のなつかしさに引かれて帰ると宣言したのだが、実は中央政界が間もなく乱れることを予感しての振る舞いであった。

其の二　張翰(ちょうかん)

浮き世において人が功を求めて力を労するのも、

つまるところは、食べることと眠ることのためである。

張翰はまことに水中の仙人というべき人であった。

機を知ること早くあるべきだなどともっともらしく説いたりしないで、

実に賢いことに、

ただ鱸魚（ろぎょ）のために帰るといったのだった。

■【04-3-039】過永楽文長老已卒

【解題】秀州（しゅう）の永楽（えいらく）に至ると、文長老（ぶんちょうろう）［→作品番号 04-2-097］がすでに亡くなったと聞き、この詩を詠んだ。

【訳文】

最初は、痩せた鶴の姿に驚かされ、

二度目は、語を発せられず、

三度目は、雲は帰り去ってもはや尋ねるところがない。

その門を三度過（よぎ）る間に、

老、病、死の三つを経て、

指を一回弾くような短い間に、

去（きょ）、来（らい）、今（こん）の三つを通り過ぎたのだ。

文長老（ぶんちょうろう）は、存（そん）するも亡（ぼう）じるも見慣れて、

何に対しても涙を流すことはなかったであろう。

私は、家郷を同じくする者として懐かしさを忘れることができず、

その姿がいまも心にあり続けている。

唐の世に、李源は洛陽の僧円沢と親しくしていた――

ある日、円沢は水辺にいる女性を指していった。

「愚僧はあの女の息子として生まれることになっている。

十二年後にまた会おう」

円沢はその日の暮れ方に亡くなり、

十二年後の中秋の日に、

李源は葛洪川の畔で、牛の角をたたいて歌う牧童に出会った。

それが円沢であった。

ああ、これより杭州に帰る私は、

どの川で牧童を捜したらよいのだろうか。

■【04-3-040】安平泉

【解題】蘇軾は杭州まであと一歩の臨平［→作品番号 04-2-096］に戻り、安平泉でこの詩を詠んだ。

【訳文】

杖を手にゆるゆるとこの山を歩み、

雲を撥ねのけ、径の奥へと進むと、

ますます興がふわふわと湧いてくる。

地を鑿って泉を開いたのはいつの時代だったのか。

種を植えて菱の花が咲くようになってからの年もわからない。

この地で丹薬を煉った人は仙人になったという。

泉の水を汲んで茶を烹る僧は、

雪のような白い泡が浮かぶのを誇らしげに見せてくれる。
唐代の陸羽は茶によい水を天下からくまなく求めたのだが、
なぜか安平泉は漏らしてしまったのだ。

■【04-3-041】贈張刁二老

【解題】一連の長い出張を終えて杭州に帰る直前に、湖州の張先［→作品番号 04-2-086 など］と潤州の刁約［→作品番号 04-3-004 など］の 2 人の大老人にこの詩を贈った。

【訳文】

潤州、湖州の両邦の山水はいま華やいでいる、
二人の老風流人が何しろまだまだ強健であるからだ。
ともに合わせて一百七十歳！
おこおのこれまでに飲んだ酒は三万六千杯！
潤州の蔵春の塢のあたりでは、いつでも鶯が鳴いて花が咲き乱れ、
湖州の仁寿の橋のほとりでは、いつものどかに一日一日が長い。
ただ二人とも身を削るばかりに詩に熱中しているので、
家の中の女性は寂しい時を過ごしていなければならない。

■【04-3-042】去年秋、偶遊宝山上方。入一小院、闃然無人。有一僧、隠几低頭読書。与之語、漠然不甚対。問其隣之僧、曰、此雲閣黎也、不出十五年矣。今年六月、自常、潤還復至其室、則死葬数月矣。作詩題其壁。

【解題】蘇軾は 5 月の末ないし 6 月の初めに杭州に戻った。杭州では幾つかの変化が

待っていた。一つは陳襄知事が他所に移ることになり、杭州を離れる日がすでに迫っていた。もう一つはこの詩の題に示されている。「去年の秋にたまたま宝山に遊ぶと、小さな僧房があり、無人のようであったが、机にもたれて一人の僧が書物を読んでいた。声を掛けると、もごもごとはっきりとした返事がなかった。隣の僧に聞くと『雲閣黎といいまして、外に出なくなってもう十五年です』とのこと。私は常州、潤州から還って六月にまたその僧房に行くと、もう雲閣黎は葬られて数カ月になるという。それでこの詩を壁に記した」。宝山については作品番号 04-2-042 などで見ている。

【訳文】

雲師は宝山にひとたび住んでより、十五の秋を過ごした。

いつも戸を閉ざして書物を読み、人がきても頭を挙げることがなかった。

私は去年その堂に至り、静かに傍らに坐してみたところ、

百の憂いをすっかり忘れることができた。

私はこれといって教えを請うこともなく、雲師も応じることがなかった。

今また門を叩くと、部屋はからっぽで、あるのは隙間風の音だけ。

聞けば、雲師はすでに亡くなり、ここに残る物は何もない。

薪が尽きれば火は留まらない。

しかし、私はかえって疑う――

雲師はずっとここにいたのか、それともいなかったのか……

遭遇するところのもので、夢でないものはないのではないのか……

事はただ過ぎ行くばかり、

私は何を求めるのか。

■【04-3-043】与李公沢

【解題】李常［字は公沢］に与えた手紙。李常の名は作品番号 03-3-022 で見ている。李常は初めは王安石とよい関係にあって朝廷の要職に就いていたが、新法を批判して地方に出され、この 3 月に湖州知事に任命された。この手紙を書いた時点ではまだ湖州に着任していなかった。

【訳文】

私はすでに任期が満ちたところです。蘇明君が後任として来てくれることになっていましたが、近頃聞いたところでは、蘇明君は朝廷の御史台の一員として任命されたとのことで、私がいつ交替するのかはわかりません。……[以下、湖州の人々が李常が赴任してくるのを待ち望んでいることなどを述べる]……私はまだ交替がこないので、西湖の秋をさらにもう一度過ごすことができます。それもまた好い事なのでありましょう。これほどの景色から去ってどこに行くべきでしょうか。着る衣と食べる飯があるところなら、どこであれ行ってそこに住むべきなのでしょう。ただ、弟と遠くなってしまっていることが残念であります。それでもしばしば手紙にきますので、それもまた好いことであります。

■【04-3-044】鵲橋仙

【解題】「七夕に陳舜兪［字は令挙］を送る」との添え書きがある詞。陳舜兪は湖州の人で、科挙の特別試験の制科にも合格したエリートで、改革に反対したために遠く南方に左遷され、そこから郷里に帰る途中で杭州に立ち寄ったのだろう。詞の曲名の『鵲橋仙』は、天の川に鵲が連なって橋を掛けるとの伝説からきていて、『鵲橋仙』は珍しく曲名と内容が一致して、織女と牽牛の情愛を主題に詠むのが通例であった。蘇軾はそれを少しひねって送別の詞としている。

【訳文】

緱山仙子、[緱山に帰ってきた仙人は]

高情雲渺、[情は高く雲の向こうにあって]

不学癡牛騃女。[牽牛や織女の痴情とは、関わるところがありません]

鳳簫声断月明中、[月明かりの中で簫の音が終わると]

挙手謝、[手を挙げて別れを告げ]

時人欲去。[人々のもとから去っていったのでした]

客槎曽犯、[これまで旅の槎は]

銀河波浪、[銀河の波にもまれましたし]

尚帯天風海雨。[なおも雨と風にさらされています]

相逢一酔是前縁、[あなたと逢って一酔をともにするのは何の縁によるのでしょうか]

風雨散、[雨も風も止んだときに]

飄然何処。[あなたは飄然とどこに行くのでしょう]

【補足】[(1) 前半は、王子喬という仙人の伝説に基づく。王子喬は周王の太子であったが、あるとき山で道士と逢って姿を消し、三十年後に鶴に乗って緱山の頂の上に現れた。人々は地上へと招いたのだが、王子喬は手を挙げて去って行った。ここでは、遠い地から帰ってきた陳舜兪を王子喬に譬えている。(2) 後半にある「銀河の波浪」はもちろん当時を政界の厳しさを歌ったものである]

■【04-3-045】虞美人

【解題】「有美堂で陳襄を送る」との添え書きがある詞。有美堂は鳳凰山の上にあった建物［→作品番号 04-2-002］で、陳襄知事の送別の宴がそこで催されたのである。

陳知事の送別会は 7 月中旬から幾度となく繰り返し開かれたようで蘇軾はそのたびに詞を作っている。

【訳文】

湖山信是東南美。[東南第一の美はまことにこの湖と山]

一望弥千里。[一望するところは千里]

使君能得幾回来。[知事がここにこられるのはあと何回か]

便使尊前醉倒、[酒樽の前で酔い尽くして]

且徘徊。[しばし歩きまわりましょう]

沙河塘裏燈初上。[繁華街にいま上ったばかりの灯]

水調誰家唱。[どの家で歌うのかこの『水調』の歌]

夜闌風静欲帰時。[更け行く夜、静かな風、いま帰ろうとするとき]

惟有一江明月、[ただあるのは、川いっぱいに明るい月が]

碧琉璃。[青いガラスの光を流しているだけ]

【補足】[(1) 後半にある「水調」とは、大運河を造らせた隋の煬帝が、その大運河に豪華な船を浮かべて南方に行幸したときに作らせた曲。船を漕ぐ人々の労働歌をもとに作曲された哀切窮まりない曲である。(2) 陳襄が去る一方で、新しい知事として楊絵が赴任することが決まった。蘇軾は楊絵と面識があり［→作品番号 04-2-092］、たぶん蘇軾の発案なのだろう、杭州の妓女たちがわざわざ蘇州まで楊絵を迎えに行った。その折に、蘇軾が託して蘇州知事の王誨［→作品番号 04-3-035］に寄せた詞があるが、内輪の戯れの作であるので訳は割愛する]

■【04-3-046】聴僧昭素琴

【解題】昭素(しょうそ)という僧の琴を聴いての詩。

【訳文】

全ての音が完全に調和する「至和(しわ)」のときに、

爪を特にどうこう操作することはなく、

全ての音が完全に平らになる「至平(しへい)」のときに、

指の力を特にどうこう加減することはない。

「至和」「至平」の微妙の声は一体どこから出てくるのか。

それはわからなくても、

私の安定しない気(き)を散じてくれるし、

私の調和しない心を洗ってもくれる。

音楽とは、何かわからないものがもとにあって、

それによって心が動くことで生じるという。

琴の音とともに私が静かに吟じていることから察するに、

私にも確かに心があるのだろう。

【補足】[「心」という語が出てきているが、宋代(そうだい)の人々がどのように「心」を捉えていたのか、なかなか難しい問題である。「気(き)」[物質+エネルギー]と「心」はどのような関係にあるのか。「気」が安定していないと心は調和しない。作品番号04-3-042の詩にあった「薪が尽きれば火は留まらない」の譬えは、薪は「気」を、火は「心」を表すと理解することもできようか]

■【04-3-047】僧恵勤初罷僧職

【解題】蘇軾が出張している間に、孤山の恵勤［→作品番号 04-1-001 など］が僧職を罷めるという変化もあった。僧職は国から授かる職務で、それを罷めからといって仏教から離れるわけではない。

【訳文】

青い田の上を高く舞う鶴も、

実は鬱々として籠の中にいる鳥と変わらないのかも知れない。

つまるところ、物に束縛されているということでは、

私のような者と同じなのであろう。

恵勤師は僧職から去り、

万事は空であると一笑する。

新たに生まれる詩は、

洗い出したように外の垢を受けることがない。

清らかな風が恵勤師の身の内に入って、

松を鳴らす風と同じようにして言葉が出てくるのである。

髭は長く白く、骨ばかりが目立つ身体で、

何も食べずにいて午後の鐘を聴く。

「詩が人を困窮させるのではない。

　困窮して後に人は詩に巧みになるのである」

恵勤師を見ればこの語はまさにその通りだとわかる。

私はこの語を欧陽公に聞き、

恵勤師が賢であることもまた欧陽公に聞いたのだった。

【補足】［(1) 僧もまた僧職に束縛される身であったのだろうか。先に文長老が病気

で禅院を去った［→作品番号 04-2-097］のと思い合せると、最終的には何もかも捨てるのが僧の願いであったのだろう。(2) この詩の後半は、何もない窮乏状態に身を置いてこそ真に清らかな詩が詠めるということをいっている。「詩が人を困窮……」とは、欧陽脩(おうようしゅう)が梅堯臣(ばいぎょうしん)の詩集に寄せた序文の中にある有名なセリフ。梅堯臣は作品番号 01-2-016 などで見ているように蘇軾の大先輩にして恩人である。(3) 恵勤(えごん)が古くから欧陽脩と交流があったことは作品番号 03-4-026 で見ている］

■【04-3-048】遊霊隠高峰塔

【解題】霊隠寺(れいいんじ)の裏の山にある高峰塔(こうほうとう)で詠んだ詩。霊隠寺は作品番号 04-1-006 などですでに見ている。

【訳文】

私は、高峰塔(こうほうとう)に遊ぼうと、

夜明け前に寝床の中で食事をすませ、

野人(やじん)のような身ごしらえをした。

火を放つばかりの雲の勢いは秋になっても衰えなかったのだが、

今朝になって初めて涼しさを覚えるようになった。

暗く霧に埋もれていた谷から、

日が出るとともに草木の香りが上ってくる。

嬉しいことに私と一緒にきてくれたのは、

長らく雲水の郷(さと)にあるのをよしとしている人々だ。

足を挙げて進むことを促し合って行くのだが、

前路は高く、しかも遠い。

竜のようにねじ曲がった古い松に取りついてよじ登ったり、

牛や羊のような不思議な形をした岩に座って休んだりする。

だんだんと鐘や磬の音が近くなり、

鳥たちは我等の下を飛ぶようになる。

山門から入ると、

有も無もなく、雲の海が茫茫と広がっている。

耳の聞こえない道人がいて、

老いに病んで時に食べるものもない様子で、

年齢を問うと、

穴の開いた筵を敷いた寝床を指すだけ。

再びここにくることはないだろうと心に知って、

帰ろうとしてさらにまたあたりを歩き見る。

「今歳は早くから霜が降るかもしれませんな」

と、別れに際に病僧に一枚の布を贈ったのだった。

【補足】［ここまでの三首は一連の作で、恵勤や昭素とともに高峰塔に登ったのだろうと推測されている］

■【04-3-049】訴衷情

【解題】「陳襄を送って楊絵を迎える」との添え書きのある詞。送別の宴を繰り返しながら陳襄がなおも杭州に留まっていたのは、新知事の楊絵が到着するのを待っていたのかもしれない。このころの地方官の交替は割とのんびりとしたところがあって、辞令が出てから実際に任地に赴くまでにかなりの日数を要しても構わなかったようだ。蘇軾が副知事として杭州に赴くときも、弟のところに長い間身を寄せていた。こ

の詞は内容からすると、楊絵が間もなく杭州に到着するときの作品であるようだ。

【訳文】

銭塘風景古来奇。[銭塘[杭州]の風景は昔から奇れているとされてきました]

太守例能詩。[知事になるのは詩が上手に詠める人と決まっています]

先駆負駑何在、[新知事をお迎えする先駆けはどこにまで行ったのでしょうか]

心已浙江西。[杭州の人々の心は浙江[銭塘江]の西にもうあるのです]

花尽後、[花が尽きた後]

葉飛時。[葉が飛ぶとき]

雨淒淒。[雨がしとしと降っています]

若為情緒、[雨は思いをこめて]

更問新官、[新知事に挨拶をして]

向旧官啼。[旧知事に向かって泣いているのです]

■【04-3-050】仏日浄慧寺題名

【解題】陳襄知事の送別会が仏日浄慧寺で催された記録があるので見ておこう。

【訳文】

祖志入山の十三日、陳襄が南都に赴くために、孫奕、達原、林希を連れて蘇軾がここで別れの会を行った。

熙寧七年八月十三日

【補足】[(1) 冒頭にある「祖志入山の十三日」は意味不明だという。(2) 南都とあ

るのは南京応天府のことで、首都に準じる重要な都市。陳襄はそこの府知事として赴任するのである。次に杭州知事となる楊絵はそれまで南京応天府の知事を勤めていたので、2 人は全くの入れ替え人事であった。(3) 孫奕の名は作品番号 04-2-022 で、林希の名は作品番号 04-1-008 で見ている。林希はこのころに杭州に赴任したようである。達原は誰かの字であろうが、不詳]

■【04-3-051】江城子

【解題】「孤山の竹閣で陳襄知事を送る」との添え書きがある詞。孤山の竹閣は作品番号 04-2-060 で見ている。これは知事との別れを悲しむ妓女に代わって歌うという体裁で作られているようである。

【訳文】

翠娥羞黛怯人看。[人に見られるのを怯える美しい眉、恥じらいを含んだ目]

掩霜紈。[顔を覆う白い扇]

淚偸彈。[ひそかにぬぐう涙]

且尽一尊、[飲み尽くしてください このひと樽]

收淚聽陽関。[涙をおさめて聴いてください この送別の曲]

漫道帝城天様遠、[行かれる先は天のように遠いところとか]

天易見、[でも天は簡単に見られるのに]

見君難。[知事様を見るのはもう難しいのです]

画堂新締近孤山。[孤山の竹閣の隣に新たに構えた画堂]

曲闌干。[曲がる欄干]

為誰安。[でも誰のためのもの]

飛絮落花、[飛ぶ柳絮に落ちる花]

春色属明年。[春の色はもはや来年のもの]

欲棹小舟尋旧事、[そのときに今日のことを尋ねようとして棹さす小舟]

無処問、[どこを問えばよいのでしょう]

水連天。[ただ水が天に連なるばかりなのです]

■【04-3-052】南郷子

【解題】8 月中旬、いよいよ陳襄知事は杭州を去り、蘇軾は一緒に臨平山まで行き、そこでさらに送別の宴を開いて、「南郷子」の曲で送別の詞を詠んだ。詞中にある「亭亭」は高く真っ直ぐにのびるさまを、「熒熒」はきらきら輝くありさまを表すオノマトペ。楽曲に乗せて歌われるとき、その音が効果を発揮したのであろう。なお、陳知事を見送る詞はさらに 3 首残されていて、様々な曲調に合わせて離別の情を歌い上げた腕前は人々を驚嘆させたに違いないが、あまりにも煩瑣になるので訳は割愛する。

【訳文】

回首乱山横。[首を回らせば横たわる無数の山]

不見居人只見城。[住む人までは見えずに、見えるのは町]

誰似臨平山上塔、[誰が似るのでしょうか、臨平山の上の塔が]

亭亭。[亭亭と聳えて]

迎客西来送客行。[西からくる人を迎え、そして行く人を見送るのに]

帰路晩風清。[私が帰る道に清らかに吹く夕べの風]

一枕初寒夢不成。[枕辺に初めて寒さを感じて、結ばれぬ夢]

今夜残燈斜照処、[今夜、灯が消えかかって]

熒熒(けいけい)。[熒熒と瞬くところで]

秋雨晴時涙不晴。[秋の雨は晴れても涙は晴れないのです]

【補足】[前半は別れの場でのこと、後半は別れた後でのことを歌っている]

■【04-3-053】八月十七日、天竺山送桂花、分贈元素

【解題】詩の題は、「八月十七日に天竺山(てんじくざん)から桂花(けいか)が送られてきたので、それを分けて楊絵(ようかい)[字(あざな)は元素(げんそ)]に贈った」。花にこの詩を添えたのである。桂(かつら)の木は月の世界にあるとされ、天竺山の桂花は八月十五日に月から落ちてきたものだといわれていた。さらに、天竺山は天竺から飛んできたという伝説もある。

【訳文】

月が欠け始め、霜が濃(こま)やかに降って、

桂(かつら)の花の細い蘂(しべ)が乾く。

この花はもとは月の仙界にあったもの、

月の桂の木から実が落ちたのはいつ夜だったのか、

月の桂の木に枝だけが残っていて昔のことを憶えているのである。

破れた衣を身にまとう山の僧は、

谷の水に清らかな美しさを映す女性のようなこの花には無頓着なのだろう。

どうか公はこの花を衣に挟み込んで、

花の芳(かんば)しさを山だけのものに終わらせないようにしていただきたい。

■【04-3-054】南郷子

【解題】楊絵［字は元素］は前知事と同様に蘇軾のよき理解者であったようで、特に楊絵自身も詞を得意としていたことから、二人は多数の詞を詠み合うようになった。これは梅を主題に詠んだ楊絵の詞に和したもの。詞は楽曲に合わせて歌うという性格上、言葉のイメージ喚起力を重視し、この作品では、梅の花とは直接いわずに、梅のイメージを呼び起こすような言葉を並べて歌い上げている。

【訳文】

寒雀満疏籬、［まばらな垣根にたくさんの冬の雀］

争抱寒柯看玉蕤。［葉のない枝で場所を争って雀が見ようとするのは垂れ下がる花の姿］

忽見客来花下坐、［たちまち現れたのは花の下に座った客人たち］

驚飛、［雀は驚いて飛んで］

踏散芳英落酒卮。［踏み散らかした花びらを杯に落とすのです］

痛飲又能詩、［とにかく飲んでは詠む詩］

座客無氈酔不知。［毛氈がないのも気にかけないほどに酔った客人］

花謝酒闌春到也、［酒闌にして春も盛りとなって落ちる花］

離離。［はらはらと］

一点微酸已著枝。［小さな酸っぱいものが一つもう枝についています］

■【04-3-055】海会寺清心堂

【解題】旱魃と蝗害はセットで起こることが多く、都の東方で猛威をふるっていた蝗

［→作品番号 04-2-096 の補足］が杭州の西方にも飛来してきた。蘇軾は急遽被災地に向い、どうにかして蝗を退散させようと奮闘したのだが、当時の技術は蝗害にはほぼ無力であった。走り回る途中で、1年ほど前に立ち寄った海会寺［→作品番号 04-2-071］の清心堂でしばしの休息をした。

【訳文】

荘子はいう――

南郭子綦はある日不意に我を喪ったと。

仏説にいう――

達磨は九年壁に面して心を求めたと。

いずれが清、いずれが濁とここで判断することはできない。

人はそれぞれ自らを観て、

浅く得るなり、深く得るなり、

そうすることしかできない。

ここ二年ほとしきりに巡視の公務に追われ、

雪や霜のように冷え冷えとした長いこの渓にまた踏み入ることになった。

ひたすら忙しくしてはきたものの、

我が人生に補う何ほどのものがあったのだろうか。

清心堂の戸を閉ざして高人が吟じる声に、

まことに恥じ入るばかりだ。

【補足】［蘇軾が最初に学んだ寺子屋は道教の寺院内にあり、8 歳の頃から道教の経典に触れ、老子や荘子の思想に早くから親しみ、仏教を理解するに当たって老子や荘子を媒介項とする傾向が強くあった。この詩にはその傾向がよく現れている。蘇軾は優

れた洞察力と鋭い直観力によって、儒教、道教、仏教の三教を自身の内で融合させて行ったのだった]

■【04-3-056】跋蔡君謨書海会寺記

【解題】蘇軾は海会寺で蔡襄［字は君謨］が書いた『海会寺記』を見てこの跋文を添えた。

【訳文】

蔡襄がこれを書いたのは二十八歳のときであった。その三十二年後は熙寧甲寅に当たり、蘇軾は杭州から臨安にきてこれを借りて観た。

蔡襄が亡くなってすでに六年である。『記』に記されている明師はいまは齢七十四で、耳はますます聡く、目はますます明らかで、寺はますます立派である。『記』には、竹林橋から見る夕暮れの山は感嘆するに足る景色であると書かれている。師に従って竹林橋からの暮山を見ようと思う。ここはまさに人間世界の中の絶勝の地であることを『記』から馳せ想うのである。

【補足】［いま残されている『海会寺記』には、火災に遭って灰塵に帰してしまった海会寺を、有朋という僧が奮闘して再興したと記されている。その有朋が跋文にある明師であるのだろう。「朋」と「明」とは字形がよく似ていて、どちらかが誤って筆写されたのだろう。なお、蘇軾は、蔡襄が宋代第一の書家であると高く評価していることを後に見るようになる］

■【04-3-057】捕蝗至浮雲嶺、山行疲苶、有懐子由弟二首

【解題】蘇軾は蝗の被害の出たところを駆けまわり、浮雲嶺への上りの道で疲労困憊し、弟を想ってこの詩を詠んだ。

【訳文】

其の一

西から煙の壁のようなものがきて大空を塞いでしまうと、

秋の稲田へと、雨よりも激しく蝗(いなご)が降り注ぐ。

どうして蝗はこれほどまでに増えたのか。

朝廷は新しい法を定め、清く正しい政治をしているのだから、

天が咎めるようなことは決してないはずだ。

思うに、この僕が余りにもろくでもないので、

この事態を招いてしまったに相違ない。

ここでこのような困窮に僕が陥っていても、

烏に馬鹿にされるだけで、

君を想ってこの詩を書いたところで、

犬にでも届けてもらわねばならない。

もう笑うしかないさ――

僕は何をしてもこのように迂闊(うかつ)なのだ。

それでも、とにかく蝗は掴まえなければと思い続けている。

【補足】［(1) 当時は、基本的に蝗(いなご)を見つけては叩き潰す以外に対策はなく、労力の割にはあまり実効性は上がらなかった。蝗を追いかけまわして疲労困憊するのも当然であった。このときの蝗の被害がどのようなものであったのかは、次の章で蘇軾が朝廷に報告した文章で見ることになる。(2) 犬が手紙を届けることにはついては、有名な伝説があった。晋(しん)の時代の陸機(りくき)という人が、不穏な情勢のなかで都にいて、家との音信が長く通じないので、「おまえが手紙を届けてくれでもしたならな」と、笑いな

がら犬に語りかけると、黄犬(こうけん)という名のその犬は、竹筒に入れた手紙を首に下げて、郷里の家まで走って、さらに返事を持って帰ったのだった]

其のニ

涼しい風が吹いてきてそろそろ重陽(ちょうよう)の節句になる。
渓のあたりでは野の菊が黄色の鮮やかさを増している。
岩がごろごろころがる山道を歩くのは疲れ過ぎる――
いっそもう止めてしまおうか。
そうだ、村の酒に酔い、足をもつれさせて舞ったりするのはどうだろうか。
ひとり林の下で眠ったら、よい夢が見られることだろう。
見回せば人間世界には憂患ばかりだ。
昔ある人は、公務の煩雑さに倦み、
乗る車を壊し、曳く馬を殺して、姿をくらましてしまった。
僕もそうしたい気分だ。
君がもし探しにきてくれても、
とっくに行方知れずということになっているだろう。

■【04-3-058】牛嶺高絶処、有小寺、人跡罕

【解題】蘇軾は詩の中では職務放棄を夢想したものの、蝗(いなご)と闘い続け、青牛嶺(せいぎゅうれい)を越えた。人がめったにくることのない一番高いところに小さな寺があり、息抜きにこの詩を壁に書いた。

【訳文】

昨日の夕暮れは、

川のほとりで馬を走らせていた。

十里にわたって炉辺の煙が夕餉の匂いを漂わせていた。

今朝は青牛嶺へと杖を突いて登った。

冷たい水の流れる音だけがして千山は静まり返っている。

この寺にきて、いくら呼んでも返事がない。

老僧の耳が遠いのを気の毒がるまでもないだろう。

人は生きても百年、いずれ同じような身になるのだ。

明日はまた町に戻るであろうから、

この詩は雲の湧き立つなかにあるということになる。

■【04-3-059】新城陳氏園、次晁補之韻

【解題】蘇軾は新城県に至り、陳氏の庭園を訪れた。そこへ県知事の晁端友［→作品番号 04-2-017］の息子の晁補之［字は無咎］がきて詩を見せたので、それに次韻した。晁補之はこのとき 17 歳で、蘇軾に詩文の才能を見出されたことで名を知られるようになり、5 年後に科挙に合格し、後に蘇軾の高弟として「蘇門四学士」の一人に数えられるまでになった。

【訳文】

陳氏の庭園は荒涼として荒れ果て、

秋の花が夕暮れにか細げに咲いている。

町がすでに僻遠の山中にある上に、

町からもさらに遠いここへと、

私は何のためにきたのだろう。

ぶらぶらと歩いて、

雲のかかる峰を眺めているのである。

昔、詩作に苦しんで酒樽を明けてしまった人がいたが、

ここには苦吟する人などはいないのだから、

樽に酒が満たされているのは誰のためなのだろうか。

【補足】［終わりの部分は晁補之がすらすらと詩を詠むことを褒めたものであろう］

■【04-3-060】梅聖俞詩集中有毛長官者、今於潜令国華也。聖俞没十五年、而君猶為令、捕蝗至其邑、作詩戯之

【解題】蝗を捕えつつ於潜に至り、長官の毛国華に会って話をすると、梅堯臣［字は聖俞］の詩集にある毛長官というのが毛国華その人であると知れ、戯れにこの詩を作った。梅堯臣は亡くなってすでに 15 年、毛国華は以前と変わらずに小さな町の地方官として勤めているのだった。この詩で「詩翁」といっているのは梅堯臣のことである。なお、蘇軾より 34 歳年長だった梅堯臣は、張先や刁約［→作品番号 04-3-041 など］とも交流があった。

【訳文】

詩翁は低い官位のままに老い、

馬に食わせる秣代程度の俸給しかもらえず、

渋い顔で妻に向かっていった。

「所詮、鯉のような出世魚と異なって、

　僕などは藁で貫かれる目刺しの身なのだよ」

毛長官(もうちょうかん)はいまも同じ地位のままで白髪頭となり、

退庁時の太鼓が鳴っても居眠りをしていて、

朋友がつまらぬ出世をするのを笑っているのだが、

当人はまわりから、土の牛に乗っているような鈍くさい男だといわれている。

私が思うに、毛長官は、

唐代(とうだい)の高適(こうてき)のように、

小さな町を治める長官であり続けるのがよくて、

唐代の孟浩然(もうこうねん)のように、

都に呼ばれはしても皇帝を怒らせて山に追い返されたのでは何もならない。

私は官職にありつき、このところの年回りの悪さのために、

空を暗くして飛びくる蝗(いなご)に遭遇してしまった。

昔、漢(かん)の時代に卓茂(たくも)が県知事であったときに、

周囲の県はどこも蝗の害に遭ったけれども、

清官(せいかん)の誉れ高い卓茂の県には蝗も遠慮して入らなかったという。

見れば、毛長官の治める町では稲がみごとに稔っているではないか。

されば蝗は毛長官の人柄がわかっているのだ。

ところが人間はかえってそれを知らずにいて、

毛長官を長く地方の町に埋もれさせているのである。

【補足】[蘇軾の詩文を見ると、上に媚びず、不遇の者に温かいことがよくわかる]

■【04-3-061】与毛令方尉遊西菩提寺二首

【解題】上に見た毛長官(もうちょうかん)と、方君武(ほうくんぶ)とともに於潜(よせん)の西菩提寺(せいぼだいじ)に遊んだ詩。方君武はこの地の役人である。

其の一

くずくずと官より去らずにすでに三年、

魚も鳥も私がいつまでも頑なであるのを笑っているのだろう。

私が江北の路をとって帰って行こうとしないので、

ならばと、天は浙西の山をことごとく見させようとしたのだろう。

昔むかしの毛玠は高位にあっても粗衣粗食で清らかな節を守り、

昔むかしの方干は水石の間で風流に遊んで官に就かなかった。

現代の毛玠、方干ともいうべきお二人と逢ってこうして笑い合うのは、

なかなか得られることではない。

だから、この詩はたわごとのような出来栄えであっても、

このまま削らずにおいてほしい。

【補足】[(1)「江北の路」とは長江の北の路。都は長江の北にあり、蘇軾の故郷は長江の遥か上流にある。(2)「浙西の山」とは、浙江［銭塘江］の西の山々で、いま巡っているところなどを指すのだろう。(2) この詩では、毛国華と方君武を同姓の毛玠と方干になぞらえているのだが、記憶力抜群の蘇軾は、このような技巧を即興で披露して相手を楽しませるのを得意とした]

其のニ

路は山の腰のあたりで転回するのだが、

我が足はまだまだそこに至らない。

清らかな水によって岩は削られて痩せ細り、

それだけで奇勝というべきである上に、

昼には、東山と西山の二つの山のそれぞれに白い雲が乗って、

どちらが東やら西やら迷い、

夜には、清涼池と名月池の二つの池に月影が宿されて、

どちらが上やら下やらわからないのである。

黒い黍と黄色い粱が熟し始めたいまこの時、

朱い蜜柑と緑の橘が半ば甘くなったいまこの時、

こうした楽しみは天が人の世に与えてくれたものであって、

若輩者が知ってしまうのは早過ぎるのだ。

■【04-3-062】阿弥陀仏頌

【解題】蝗に対していかに力を尽くしても効果は薄く、結局はどこかに飛び去るか、季節とともに勢いが衰えるのを待つしかなく、甚大な被害がその後に残されたのだった。蘇軾は８月末ないし９月初めに杭州に帰還し、間もなく朝廷から蘇軾を密州知事に任命するとの辞令が届いた。密州に赴くときの詩文を見る前に、杭州副知事時代の作品であることが明らかではあっても、詳しい時期が不明なものを幾つか読んでおこう。最初に見るのは、母の遺品を売って阿弥陀像を画いて寺に寄付したことを記した文章。母の程氏は阿弥陀仏を信仰していたようである。

【訳文】

銭塘の円照律師は、西方極楽世界の阿弥陀仏に帰命することを普く人々に勧めている。眉山の蘇軾は亡き母、蜀郡太君程氏が遺した簪と珥を敬って喜捨し、画工の胡錫に頼んで彩色の仏像を画いて、父母の冥福を祈るものである。謹んで再拝稽首してこの頌歌を献じる。

【補足】［(1) 円照は元照と書かれることもある当時有名な高僧。 (2) この短い序文

の後に、阿弥陀仏の頌歌が続くが、阿弥陀信仰の知識がない訳者には手に余るので割愛する］

■【04-3-063】服生薑法

【解題】薑［生姜］の効用について記した短文。

【訳文】

杭州の副知事であったときに、浄慈寺に遊ぶと、衆人のなかに僧号を聡薬王をいう者がいて、歳は八十余り、顔色は朱い砂のようにてかてかとしていて、目が光り輝いていた。智縁［当時有名な医者の僧］のように脈をよく診る者なのだろうと思い、「どうしてそのようでおられるのですか」と尋ねた。聡薬王は、「生姜を食べて四十年になります。それで老いないのです」と、答えた。

【補足】［浄慈寺の名は作品番号 04-2-055 で見ている］

■【04-3-064】書夢中靴銘

【解題】これは後年記した文章であるが、杭州副知事時代に見た夢の中での出来事が記されている。

【訳文】

私が杭州の副知事であったとき、夢の中で、神宗皇帝の禁中に召された。宮女が皇帝の周りを囲んで侍り、紅の衣の一人の少女が紅い靴を捧げ持って立っていた。私はお上からその靴の銘を作るよう命じられた。

夢から覚めたとき、その一聯を記憶していた。

「寒女之糸、銖積寸累。天歩所臨、雲蒸雷起」

銘を提出すると、お上は機敏に作ったことを非常に褒めてくださって、宮女に指示して私を送り出してくれた。私の裙と帯の間をじっと見ると、六言詩が一首はさまっていた。

「百疊漪猗風皺、六珠縦縦雲軽。植立含風広殿、微聞環佩揺声」

【補足】［この文章によると、夢の中では、神宗皇帝から六言詩を与えられたということになるのだろう。銘も詩も美しい言葉を並べただけのものであるので訳すまでもないだろう］

■【04-3-065】与范夢得

【解題】杭州にあっても保守派の旧い重鎮たちとの関係が保たれていたことが、范祖禹［字は淳甫ないし夢得］［→作品番号 04-1-046］に宛てた手紙から知れるので、一部を読んでおこう。

【訳文】

久しくお手紙を差し上げず、恥ずかしさに言葉もありません。近頃はいかがお過ごしでありましょうか。私はほぼ変わりないものの、親しい友とも遠く離れ、わびしい旅の思い抱いております。蜀公［范鎮］からはしばしばお手紙を頂戴しております。……［以下、文彦博、富弼、司馬光といった著名人の消息について触れる］……お会いして直接お話しすることは叶いませんが、季節がらご自愛なさいますように。

【補足】［范鎮は蜀出身の大物で、科挙の試験以来何かと世話になっていて［→作品番号 01-2-014］、この後にも大きく力を貸してくれるようになる。范祖禹は范鎮の甥である］

■【04-3-066】題蔡君謨帖

【解題】蔡襄［字は君謨］［→作品番号 04-3-056］の書簡に書き添えた短文。

【訳文】

明雅禅師は北方に遊ぶこと十七年で杭州に帰り、孤山の下に退いて十八年になる。かつて人々と交わした手紙などはほぼなくなってしまったが、蔡公[蔡襄]の書簡を出して見せてくれた。繰り返し見ては悲嘆しているという。老人たちは世を挙げて惜しまれつつ次第に喪われてゆくのである。明雅禅師が悲嘆するのもまことにその通りである。

■【04-3-067】書孟徳伝後

【解題】弟の蘇轍が孟徳という人物の伝記を書き、その後ろに兄がこの文章を書き添えた。執筆の時期ははっきりとは知られていないが、杭州副知事であったころであろうと推測されている。蘇軾の文を見る前に、弟が書いたものを読んでおこう。なお、蘇轍が書いた人物伝は３篇残っていて、残り２篇も後に見るであろう。

【訳文】

蘇轍:『孟徳伝』

孟徳は神勇軍団の退役兵である。若いときから山林を好んでいた。しかし、兵士になったために、本来の志とは違ってしまった。

嘉祐年間[仁宗皇帝の時代の終わりごろ]に秦州[西北の国境地帯]の守備に就いた。秦州には名山が多い。孟徳はここで妻を離縁し、子供を人に与えた上で、華山[隠者や仙人が多く住む山とされていた]の麓へと逃げた。着ていた衣を、一本の刀および十枚の餅[小麦の焼き物]と交換し、それらを携えて山に入った。

そのとき、孟徳はこのように思った。

「自分は皇帝陛下の兵士でありながら逃げてここにきてしまった。捕えられれば死が待っている。食べる

ものがなくなれば死が待っている。虎や狼や毒蛇に触れても死ぬ。この三つのどの死に遭っても、自分は悔やまないぞ」

ひたすら山の奥深くへと行き、食べていた餅がなくなったので、草の根や木の実を取って食べた。一日に十回も吐いたり、下痢をしたり、腹が膨れ上がったり、あらゆる病気になり、十回愈えたりするうちに、数カ月もするとどれも五穀のように安らかに食べられるようになった。こうして山に入って二年の間、飢えることはなかった。

また、猛獣にもたびたび遭ったのだが、死ぬことはなかった。

孟徳はこのようにいった。

「およそ猛獣の類は人の気配を察知します。まだ人と百歩以上の距離があるときに、猛獣は伏せて叫びます。その声は山や谷を震わせます。あっしは死んでも構わないと思っていたので、動揺したことは一度もありません。猛獣は間近に出遭うとすぐに躍り上がり、搏とうとするかのように突進してきて、十数歩のところで止まり、坐わりこみます。それから逡巡し出し、耳を垂れて行ってしまいます。このようなことを試してみると、いつも全く同じになります」

後に孟徳は商州に至ったが、そこが商州であるのを知らなかった。孟徳は巡視の者に執えられ、これで自分は死ぬと思った。

商州知事の宋孝孫は孟徳にいった。

「そなたを見るに悪人とは思えない。むしろ道を得た者のようである」

孟徳は具にこれまでのことを話した。そこで宋孝孫は、孟徳を自首した者として秦州に送監した。

そのとき秦州知事であったのは張方平であった。張方平は孟徳を病人として扱い、兵籍から除いて一般の民にした。

かくして、いまに至るも孟徳はもろもろの山の中を行き来している。ほかに特に目立った才能はない。

孟徳は道を得た者というべきであろう。世間の君子といわれる人々はいずれも自負するところのものがあって、慕われたい、畏れられたいとの思いがある。慕われたい、畏れられたいとの思いが胸の中にこ

もごもあって、まだそれが行動には出ていなくても、顔にはその気配が現れている。人はそれを見て知ってしまう。そのために、弱い立場にある場合には侮られ、強い立場にある場合には笑われてしまう。結局、世の中で特にこれといったことのない者となってしまうのだ。

孟徳は自負するものがなく、浩然の気[存在の根源的エネルギー]が自然と体を超えて外へと発散されて行くので、自分ではそれが見えていなくても、物には見えるのである。これを推し進めて行くなら、天地に並ぶような存在にもなるのであって、猛獣など何ら言うに足りないのだ。

【補足】[後半に名の挙がっている張方平は蘇軾父子兄弟の恩人で、陳州知事であったときに蘇轍を学校の教授として招聘し、蘇軾は杭州に赴任した際に、陳州に立ち寄って張方平に会っていた［→作品番号03-4-015以下]。張方平が嘉祐年間の終わりに秦州知事であったことは別の史料からも知られているので、蘇轍は陳州にいる間に、張方平から孟徳のことを聞いてこの文章を書いたのであろう。だから、ここに描かれている孟徳の人物像は、張方平の眼を通して見たものといってよいだろう]

【訳文】

弟[蘇轍]が孟徳のことを書いて送ってきた。私は読んで、これを 異 と思った。

考えてみるに、虎は己を懼らないものを畏れるということは、信ずべき理なのではなかろうか。しかし、世の中に、虎を懼らないものはいないので、この理が成り立つかどうか確かめようがない。

私はかつてこのようなことを聞いた。

[蜀の]忠州、万州、雲安県には虎がたくさんいる。ある婦人が昼間、二人の小児を砂の上に置き、川で衣を洗っていた。そこに、虎が山から駆け出てきた。婦人はあわてて水に潜って虎を避けた。二人の小児は砂の上で何事もなく遊んでいた。虎はしばらくじっと見ていたのだが、首を伸ばして子供らに触れた。たぶん懼らせようとしたのだろう。子供らは知恵がないから一向に怪しまなかった。虎はついに立ち去ってしまった。

思うに、虎が人を食うときには、まず初めにその威力で圧倒するのであろう。しかし、懼らない人には、威力をもってしても施すすべがないのだろう。

あるいは、「虎は酔った人間は食べない。必ず坐って見守り、醒めるのを待つ」という者もいる。これは醒めるのを待つのではなく、懼るのを待つのではなかろうか。

ある人が夜になって外から帰ってくると、門のところに蹲っているものがいた。豚か犬であろうと思って、杖でこれを撃った。すると、すぐにそれは逃げ去った。山の下の月の明るいところに行ったのを見ると、それは虎であった。これはその人が虎に勝っていたわけではなく、その人の気が虎を呑んでしまったのであろう。

人が子供のように、あるいは酔っ払いのように懼ることがなく、またはそれと気づかないでいるときには、虎はそれを畏れるのである。これは怪しむに足りない話だ。

そこでこのことを弟の文章の後に書いて、弟の説を補強しておきたい。

【補足】［蘇轍と蘇軾は微妙に論点が異なる。いずれにしても、虎と遭遇したらどうすべきかのノウハウに興味があるのではなく、人としていかに振る舞うべきかという哲学を汲み出そうとしている］

■【04-3-068】減字木蘭花

【解題】ここまで杭州での日々を蘇軾の詩文から見てきたのだが、朱彧の随筆『萍洲可談』には、杭州の印象を蘇軾が四文字で表現したとされる言葉が記述されているので、それを見ておこう。朱彧は、蘇軾と交流があった朱服の息子で、父が蘇軾本人ないし近しい人から聞いたことを記録したのであろう。朱服はずっと後の章で登場する。

【訳文】

朱彧:『萍洲可談』

杭州は繁華の地で、多数の官員が州庁舎にいて、それぞれ公務に就いていた。副知事は二人いて、それぞれ分担して官員を監督していた。副知事は「今日も事は無し」と号しては、知事に従って庁舎の外に出て宴飲するのを常とした。東坡[蘇軾]が杭州副知事であったとき、杯酌のあまりの多さに耐え難い思いをした。諸公は東坡の才望を慕い、朝夕に東坡を呼んで集まったので、東坡は応接に疲れ、杭州は「酒食地獄」であると号した。後に袁毂が杭州副知事になったときには、たまたま他の官員と合わなくて、各部署の者から疎まれてしまった。それで袁毂は親しい者に、「酒食地獄も、いまどきの獄は空っぽであるらしい」とぼやいたので、人々はそれを伝えて笑い合った。

【補足】[蘇軾は社交的で人を喜ばせるのは得意だったので、ひっぱりだこだったのだろう。あまり頻繁であれば煩わしいし、酒は好きでも酒量はわずかであったから、実際に「酒食地獄」と感じたのかもしれないが、人々から「杭州はどのようなところでしょうか」と尋ねられたときに、必ずウケるネタとしてこの語を用意していたものとも推測される。「地獄」といってもかなり楽しい「地獄」であったのだろう。そうした「酒食地獄」には官妓が接客に当たることが多く、蘇軾は妓女たちにサービス精神を発揮して、詩詞を作って与えている。この『減字木蘭花』もその一つである]

【訳文】

琵琶絶芸。[絶妙な琵琶の芸]

年紀都来纔十二。[年の頃はまだまだわずかに十二歳]

撥弄么弦。[撥が当たるのは四番目の弦]

未解将心指下伝。[その指先で自分の心の内を伝えることまではまだ知らないのです]

主人嗔小。[主人の怒りに触れてしまった少女]

欲向春風先酔倒。[できれば酔い倒れてしまいたい春風の中で]

已属君家。[でもわたしはこの家の者]

且更従容等待他。[いつもいつもおとなしく従っていなければならないのです]

【補足】[この詞には「小鬟(しょうかん)の琵琶に贈る」との添え書きがある。小鬟とは少女の髪型［お下げ髪］で、12 歳の少女は一人前の妓女になるための修行を積みつつあったのだろう]

■【04-3-069】三部楽

【解題】「情景」との添え書きがある詞。そのようにわざわざ断っているのが、かえってそうではないことを暗示しているように思われる。

【訳文】

美人如月。[すてきな人は月のよう]

乍見掩暮雲、[見えたと思ったらたちまち雲に覆われて]

更增増絶。[もっとずっとすてきになるのです]

算応無恨、[月にはもともと恨まれることはないとか]

安用陰晴円欠。[晴れも曇りも円いのも欠けているのも、月のせいではありません]

嬌甚空只成愁、[美しすぎるのも愁いが生まれて]

待下牀又懶、[牀(ベッド)を下りて待っているのも物憂くて]

未語先咽。[何もいわないうちから泣けてしまいます]

数日不来、[何日か来ないうちに]

落尽一庭紅葉。[落ち尽くして庭は紅葉に埋まってしまうのです]

今朝置酒強起、[今朝は酒を置いて無理に起きて]

問為誰減動、[尋ねるのは、誰のために減らしてしまったのでしょうか]

一分香雪。[雪のような美しい一枚の花びらを]

何事散花却病、[天女が花を散らしたのを受けて]

維摩無疾。[維摩菩薩は病が癒えたとか]

却低眉、[花が散ってかえってうなだれて]

惨然不答。[しょんぼりとものもいいません]

唱金縷、[かの『金縷の曲』を唱えて]

一声怨切。[ひと声だけ切なさがあふれます]

堪折便折、[「折り取れるときにはすぐに折りなさい」と]

且惜取少年花発。[でも、若く開いたばかりの花を取るのは惜しまれるのです]

【補足】[(1) 後半にある『金縷の曲』とは、杜牧が杜秋という 15 歳の少女について歌ったもので、「堪折便折」[折るに堪えるとき便ち折るべし]の四文字はそのままその曲にある。若いときはすぐに失われてしまうということをいっている。(2) 蘇軾は、この作品は前半では月を詠み、後半では花を詠んだ「情景」の詞であると強弁するのだろうが、作品を読むと説得力は全くない。上で見た「小鬟の少女」を詠んだ詞と一連のものであるに違いない。蘇軾は「小鬟の少女」に特別な想いを寄せ、「堪折便折」は蘇軾の決意をその少女に伝えるものであるのだろう。(3) 確かな事実として知られているのは、蘇軾は杭州を発つに先立って、12 歳の少女を身請けし、妻の使用人として連れて行くことにしたことで、これらの詞との関連性は推測でしかない。少女の名を王朝雲という。蘇軾は、不慮の事故を起こした子守の娘に対して見せたように [→作品番号 04-2-081]、辛い境遇に置かれた少女に強く同情する傾向があった。伯父の蘇渙は没落した士大夫の娘が人身売買の対象になってしまったのを救ったことがあって、蘇軾はそのことを聞いていた。何よりも、蘇軾が 17 歳のときに不幸な事件で姉を亡く

したことがあった［→作品番号 01-2-008］。蘇軾は 12 歳の王朝雲を見て、そこに亡き姉に似た天賦の才が宿されていると感じ、そのままにしておくことができなくなったと推測しても大きな間違いではないだろう。実際に、王朝雲は後に蘇軾の導きもあって、優れた女性に成長する。蘇軾は副知事の権限を利用して王朝雲を官妓の籍から抜き、妻の王閏之（おうじゅんし）の同意も得て家に引き取ったのだろう。もしも、このときの妻が、蘇軾の最初の妻の王弗（おうふつ）であったならば、蘇軾も王朝雲も自分のコントロールのもとに置いて、いずれ年頃になったときにはしかるべき相手を見つけて王朝雲を嫁がせ、蘇軾もまたそれで満足したであろうが、王閏之は王弗より遥かに遠慮がちの性格であり、夫の思うところを察することにかけては王弗に劣らず、それをそのまま受け入れようとすることでは王弗を凌いだ。だから、王閏之は王朝雲が家にきたときから、この少女は終生夫にもとにいるのだろうと察知したのだろう。もちろんそれは憶測でしかないのだが］

■【03-3-070】与楊済甫

【解題】郷里の知人である楊済甫（ようせいほ）［→作品番号 03-3-029］に宛てた手紙。

【訳文】

こちらからは長らくお手紙を差し上げず、そちらからのお手紙も少なくなり、思うところは心から去りません。近頃はどのようにされていますでしょうか。皆さま方はいずれも恙（つつが）なくお過ごしでありましょうか。私は健やかでありますが、任期が満ちたところで郷里に帰ろうとも思いましたが、弟が都の東にあって、このまま長く遠く別れたままでいるのが偲び難く、私も同じ方面に行くことを願い出ていたところ、密（みつ）州知事を拝命いたしました。密州は風土も事物も佳（よ）く、弟がいる斉（せい）州とも近く、もしかしたら職務上のことで会えるようなことがあるのかもしれません。私の願うところにぴったりの場所でありましょう。ただ、郷里に帰れるのは

数年は遅れることになります。墓所を望み見て、また懐かしい友人を想って、ついしみじみとした気持ちになってしまいます。いまだお会いする機会がありませんが、ただただ御自愛のほどを願うものであります。

【補足】［(1) このとき、蘇軾は郷里を離れて6年が経過していた。楊済甫との再会が果たして叶うのか、本自由訳の最後の章で明らかになる。(2) 密州と斉州は同じ山東半島にあって、杭州から見れば確かに二つの州は近いけれど、実際には 200㎞ ほど離れていて、密州知事在任中には兄弟再会の機会がなかったのを次の章で見ることになる］

■【04-3-071】浣渓沙

【解題】「重陽の一日前に、杭州から密州に移る送別の宴席で、楊絵に別れを告げた」と添え書きのある詞。

【訳文】

縹渺危楼紫翠間。［山の翠の中にはるかに聳える高い楼閣］

良辰楽事古難全。［昔から両立しにくいとされている良い辰と楽しい事］

感時懐旧独凄然。［今に感じ昔を懐って独り悲しく思うのです］

璧月瓊枝空夜夜、［毎夜毎夜空しく枝にかかる月］

菊花人貌自年年。［年々咲き替わり行き来する菊と人］

不知来歳与誰看。［来年はいったい誰とともに見るのでしょう］

【補足】［これは、詞によく使われる常套句を並べただけの軽い座興といってよいような作品。翌日の重陽の日［9 月 9 日］に同じ韻でまた詞を作っているが、それも同

様であるので、訳は割愛する]

■【04-3-072】題王羲之敬和帖

【解題】王羲之が書いた『敬和帖』を見たことを記した短文。むろん真筆ではなく模写であろう。

【訳文】

楊絵[字は元素]は翰林院に還ろうとし、私は密州に赴こうとしていて、宝臣とともに西院法恵院に遊び、言師の僧舎にきてこれを見た。

熙寧七年九月十一日

【補足】[楊絵が杭州に赴任して間もなく、楊絵を朝廷の翰林院に召還する辞令が届き、楊絵もたちまち杭州を離れて行くことになった。その前に、宝臣とともに言師という僧のもとを訪ねたのだった。宝臣も言師も詳しいことはわからない]

■【04-3-073】霊鷲題名

【解題】これも楊絵とともに、霊鷲興聖寺を訪問したときの記録。

【訳文】

楊絵[字は元素]と魯有開[字は元翰]、陳舜兪[字は令挙]とともに蘇軾が遊んだ。

熙寧七年九月二十日

【補足】[(1) 魯有開と陳舜兪はそれぞれ作品番号 04-2-082、04-3-044 などで見ている。陳舜兪はこの後しばらく蘇軾と行動をともにする。(2) 蘇軾に関しては、こうした小さな記録も見逃すことなく収集されて、蘇軾が少なくとも 9 月 20 日までは杭州に

いたことが知れているのである]

■【04-3-074】定風波

【解題】「楊絵を送る」との添え書きのある詞。蘇軾は密州に赴任するために見送られる立場であったのだが、楊絵も杭州を離れて行くことになったので、楊絵を見送る席上で、蘇軾がこの詞を披露したのである。

【訳文】

千古風流阮步兵。[歴史に残る風流人といえば阮籍[実は楊絵のこと]]

平生游宦愛東平。[各地を巡って最も愛したのが東平[実は杭州のこと]]

千里遠来還不住。[千里の遠くからきたのに、とどまらずに還ってしまいます]

帰去。[帰ってしまうのです]

空留風韻照人清。[その人の清らかな印象だけを空しく残して]

紅粉尊前深懊悩、[別れの酒の前で女性たちは深く悩まし気]

休道。[もういうのはよしましょう]

如何留得許多情。[どれほど思っても留まってくださらないのですから]

記得明年花絮乱。[来年の春に花が乱れ散るときに]

須泛。[お舟を浮かべてご覧なさい]

西湖総是断腸声。[西湖は悲しみの声であふれていることでしょう]

【補足】[前半では、晋の時代の阮籍の故事を引いて、楊絵のことを歌っている。当時の皇帝は、阮籍が東平郡の土地柄を愛していると聞いて、早速派遣したところ、その地はすこぶるよく治まった。楊絵も同じようにしてせっかく杭州にきたのに、すぐ

に帰ってしまうのを残念がっているのである]

■【04-3-075】勧金船

【解題】楊絵と蘇軾が杭州を発つに当たって、送別の宴が幾度か催された。張先［→作品番号 04-3-041 など］も顔を出した中和堂での宴で、楊絵の詞に和した。

【訳文】

無情流水多情客。[流れる水には情がないのに、ここにいる人には情がありすぎます]

勧我如曽識。[私に勧めてくださるのはよく知った人]

杯行到手休辞却。[杯がまわったなら辞退してはなりません]

這公道難得。[公[楊絵]はここにおられるのが難しいお方]

曲水池上、[かの曲水の宴で]

小字更書年月。[立派な文章を書いた王羲之のようなお方]

還対茂林修竹、[林や竹に向かっていると]

似永和節。[永和の昔にいるような気になります]

纖纖素手如霜雪。[雪のように白くか細い手で]

笑把秋花插。[笑いかけながら秋の花の髪に挿します]

尊前莫怪歌声咽。[でも杯の前の歌声はつい咽んでしまいます]

又還是軽別。[これとても軽いお別れなのです]

此去翺翔、[公はここから飛び去って]

偏賞玉堂金闕。[宮殿において人々の賞賛を得ることでしょう]

欲問再来何歳、[いつまた来られるのかとお尋ねすると]

応有華髪。[髪が真っ白になったときと答えるのです]

【補足】[(1) 前半は、古今第一の名筆とされる『蘭亭の序』に記されている永和九年の曲水の宴を引いて、楊絵が王羲之に匹敵するような人であると賞賛したもの。

(2) 後半は妓女が楊絵に呼びかける体で詠まれているのだろう]

■【04-3-076】減字木蘭花

【解題】送別の宴を繰り返した蘇軾と楊絵は、結局のところ同じ船で杭州を発ち、張先や陳舜兪ら幾人もの人がそれに同行して湖州にまで赴いた。折しも、湖州知事の李常［字は公択］［→作品番号 04-3-043］のところでは子が生まれて三日目を祝う洗児宴という行事が行われるというので、蘇軾とその同行者が揃ってそこに顔を出した。蘇軾は即興でこの詞を披露し、李常を初めとして大勢の人々を楽しませた。この詞を読み味わうには二つの前提知識が必要になるので、それを先に見ておこう。最初は杜甫の詩で、これは、中途半端な世辞は下卑で、ヨイショをするなら人の度肝を抜くレベルにまで達してこそ一流の芸になるという手本である。杜甫は階層社会の枠組みがまだまだ強固だった唐代半ばに、自己の才能を発揮できる場を得ることに非常に苦労し、ヨイショ芸に磨きをかけることを強いられ、その筋の王者となった。杜甫のこの詩は徐卿という人の２人の息子を徹底的に褒めちぎっている。

【訳文】

杜甫:『徐卿二子歌』

さあさあ皆さんご覧あれ、

徐卿殿の二人のお子さまこそは生まれたときから超非凡、

何しろ、お母様が天と感応して吉い夢を続けてご覧になったのでござる。

長男さんは孔子様が、次男さんはお釈迦様がそれぞれ抱いて連れてきてくださった。

長男さんは九歳で、お顔が清く澄みきっておられますのは、

秋の水を精神とし、宝玉を骨としておられるからでござる。

次男さんは五歳で、その気迫のみなぎっているのは牛を丸ごと食わんばかりで、

部屋いっぱいの客人はとにかく片時も目を離せないのでござる。

私めは知っておりますぞ、徐卿殿にはもう心配事など一つもありはしないと。

何しろ、徐卿殿はいままで善には善を積み重ねてこられ、

きっと高い位にお昇りになるとお約束されているお子さまが生まれるに至ったのですからな。

人の親となって、二人のお子さんがこのようであるのなら、

そのお父さまが低い地位のままでいるなどということは金輪際ありっこないのでござる。

【解題】もう一つの前提知識は次の笑い話である。

【訳文】

ある皇帝に男の子が生まれ、三日目の祝いが盛大に宮中で行われた。この行事の常として、近臣に祝儀が配られたのだが、それが大層立派なものであったので、皆が恐縮していうには、

「これほどまでの賜りものを頂戴いたしまして、我等一同に何らの功績がないのを深く恥じ入るばかりにございます」

皇帝がそれに応じて、

「皇子の誕生にもしも諸君等になにがしかの功績なんぞがあったとしたら、朕の心は穏やかではないぞよ」

【訳文】

維熊佳夢、[熊を見るこそ佳い夢]

釈氏老君親抱送。[子を抱いて送ってきてくれましたのは釈迦と老子]

壮気横秋、[この秋の時季に満ち溢れるばかりの勇壮の気]

未満三朝已食牛。[まだ生まれて三日足らずでもう牛を食らい尽しましょうぞ]

犀銭玉果、[ご祝儀は犀の角のような銭と宝玉のような果物]

利市平分潤四座。[平等に全ての客に行き渡るその利市]

多謝無功、[申し訳ないことに我等には一切ない功績]

此事如何着得儂。[誕生に関わりもしない我等にどうしてこうもご褒美があるのでしょうか]

【補足】[(1) 一富士二鷹三なすびではないが、熊を見るのがよい夢であるという古い伝承があった。「犀銭」というのは、銭の色が犀の角の色に似ているからだ。この詞の上段は「熊」から、下段は「犀」から始まったので、聞く人は「おやっ」と思ったことだろう。(2) 蘇軾は、杜甫の詩と笑い話を換骨奪胎し、『減字木蘭花』の音律にぴったりとはめ込んで歌ってみせたので、その力技に李常も客人も驚嘆し、大いに笑ったことだろう。なお李常は、もともとは王安石と親しくし、改革の素案を練るに当たっては一緒に相談するほどの間柄だったのだが、改革案が具体化する過程で意見が合わなくなり、ついには袂を分かって都を出たという信念の人であった。つまりは堅物であるのだが、蘇軾はそういう人の前でこの詞を披露したのである]

■【04-3-077】記游垂虹亭

【解題】このときに湖州に集まった人々は、松江の流れに船を浮かべ、絶好のビューポイントに建つ垂虹亭に至り、詞を唱和し合い、沈強輔という者が胡琴を演奏したりして遊んだ。そのときのことを7年後に記したのがこの文章である。

【訳文】

私は昔、杭州から密州に移ったときに、楊絵と同じ舟に乗って杭州を発った。そして、陳舜兪と張先とともに湖州の李常を訪ねた。さらに、劉述とともに松江に至ると、夜半に月が出て、垂虹亭の上で酒を置いた。このとき張先は八十五歳で、歌詞で天下にその名が聞こえ、『定風波令』の詞を作った。その中に、

見説賢人聚呉分、[いま賢人が呉の分野に集まっているとか]

試問、[ちょっと聞いてみましょう]

也応傍有老人星。[星々のかたわらにあるのはきっと老人星でしょうね]

坐客は非常に喜び、酔い潰れる者もいた。このときの楽しさはいまも忘れることができない。

あれからわずかに七年であるのに、張先も劉述も陳舜兪もこの世の人ではなくなってしまった。そして松江の橋のたもとにあった亭も、今年の七月九日に海からの風で水位が上がって一丈余りの水が平地上に溢れたために、跡形もなく消えてしまったという。

昔を思えばまさに一つの夢である。

元豊四年十二月十二日、黄州臨皐亭で夜に坐して書く。

【補足】[(1) 名が挙がっている者のうち楊絵、陳舜兪、張先は杭州から蘇軾に同行し、李常は湖州知事で、劉述は湖州に隠棲する先輩［→作品番号 04-3-035］であった。(2) 張先の詞にある「呉分」とは星座のことで、実際にいま呉の地にいることの意を兼ねている。老人星は西洋でいうカノープス。(3) このときに沈強輔の胡琴を聴いて詠んだ詞、李常に酒を勧める詞、陳舜兪に和した詞などが残っているが、いずれも酒席での座興で、当事者がそのときに楽しめばよいような作品であるので、訳は割愛する]

■【04-3-078】李行中秀才醉眠亭三首

【解題】上に記されている面々とともに李行中［字は無悔］の住いである醉眠亭を訪ねてこの詩を詠んだ。李行中とは１年ほど前に周邠とともに径山を登っている［→作品番号 04-2-065］。この詩は、唐代の賀知章、晋代の陶淵明、漢代の辺韶という三人の有名な風流人の振る舞いを詠んで、李行中はそれを上回るような人であると讃えたもので、第二首だけを訳す。

【訳文】

其の二

「君はもう帰りなさい、私はいまにも眠ってしまうから」

酔った陶淵明がそのようにいったのは、

ごく自然な心持ちから出たものであるとされている。

酔ったのだから、

客人の前で眠ったってよいではないか。

とすると、

陶淵明は必ずしも賢者だったわけではないのだ。

【補足】［これは李行中のことではなく、蘇軾自身のことを詠んでいるかのようである。蘇軾はアルコールにさほど強くないので、いつの間にか眠りに落ちてしまうこともあったようだ［→作品番号 04-3-013］］

■【04-3-0079】与周開祖

【解題】上の解題で名を挙げた周邠［字は開祖］に、このころに手紙を書いてい

る。先に杭州を発った周邠は［→作品番号 04-3-031］、すでに都に到着していたのだろう。

【訳文】

忝くも皆様方のお蔭によって私は杭州を出発して、呉興［湖州］に至り、李常知事にお会いしました。このときに、楊絵君、張先君、劉述君、陳舜兪君も湖州にいて、燕集すること甚だ盛んでありました。それだけに周邠君がその場にいないのがひどく残念でなりませんでした。

貴君と別れてからは、山水の佳いところに到るごとに、貴君と談笑しつつ歩いたことを懐かしく想わずにいることはありませんでした。私はこれより都よりもさらに北に行き、そこの風俗は椎魯でありましょうから、詩と酒に遊ぶ貴君のような人は得られないでしょう。つまり、杭州での楽しみは、またと得られるものではなかったのだと知るのでありましょう。陳舜兪君は杭州で別れてからも特に同行して、ついに湖州にまできて、さらにしばらくそこに滞在してから去って行きました。陳舜兪君が行ってしまってからは、数日間気が塞いでいます。しかも詩人［周邠］もいないのです。貴君と数十首を唱酬し合ったことは、まことに小さなことではなかったのであります。

■【04-3-080】阮郎帰

【解題】蘇軾は蘇州に至り、州知事の王誨［字は規甫］［→作品番号 04-3-019］に迎えられ、その宴席でこの詞を披露した。詞の最初に「三度」とあるのは、飢民救済のために蘇州を 2 度行き来していて、これが 3 度目だったからだ。

【訳文】

一年三度過蘇台。［一年の間に蘇州を過るのはこれで三度］

清尊長是開。［だから送別の宴の酒樽は開けたままです］

佳人相問苦相猜。[佳き女はいぶかしみつつ問うのです]

這回来不来。[「これで、また来るのかしら、もう来ないのかしら」]

情未尽、[尽きることのない情]

老先催。[それより先に催されてしまう老い]

人生真可咍咳。[笑うべきは人生というもの]

他年桃李阿誰栽、[次を期して桃の木を植えてくれたとしまても]

劉郎双鬢摧。[そのとき私の髪はどうあっても白くなってしまっていることでしょう]

【補足】[原詞の終わりに「劉郎」とあるのは、唐の劉禹錫のこと［→作品番号 04-3-004]]

■【04-3-081】贈写真何充秀才

【解題】蘇州では、何充［字は浩然］という人が蘇軾の肖像画を描き、その謝礼にこの詩を贈った。

【訳文】

若き日の玄宗皇帝が狩りをする画――

左手に弓を掛け、右手に矢を横にし、

眼からは雷電のような光が放たれる。

驢馬に乗って雪の中を行く孟浩然の画――

肩を聳やかし、眉を顰めて、詩を吟じている。

玄宗皇帝は富貴の身にあり、

孟浩然は飢えと寒さの身にあった。

そのどちらもいまはただ画として残っているだけ。

私は常に自然のままに任せ、

浮き雲のように変化して、

我が跡を残すまいとしている。

そのような私をどうして描くのかと、貴君に問うと、

自分の楽しみのためだと、貴君は答える。

山家暮らしの身なりをした私を描いたのは、

私を巌(いわお)の聳える山中に置こうとの心であろう。

しかし、貴君の力量からしたら、

唐の世を築いた二十四人の功臣の肖像画を描いて、

凌烟閣(りょうえんかく)に並べたような仕事をすべきであろう。

■【04-3-082】酔落魄

【解題】「蘇洲の閶門(そしょうもん)で別れた」との添え書きのある詞。妓女と語り合うという体裁で作られていて、前半が蘇軾からの、後半が妓女からのことば。

【訳文】

蒼顔華髪、[衰えた顔色、白くなった髪]

故山帰計何時決。[いつまでも定まることのない故郷に帰る計画]

旧交新貴音書絶。[旧い友人からも新たに昇進した者からも絶えた音信]

惟有佳人、[ただここにいる佳(よ)き人だけが]

猶作殷勤別。[なおも別れを惜しみ続けてくれます]

離亭欲去歌声咽、[離亭から去ってしまおうとして、咽ぶような歌声]

瀟瀟細雨涼吹頬。[しとしとと冷たく頬に吹いてくる小雨]

涙珠不用羅巾浥。[羅巾でぬぐわずにおく涙の珠]

弾在羅衫、[それが散らばるままの着物]

図得見時説。[それを見て、「ああ、あの時は」と、言い合うようになるのでしょう]

■【04-3-083】与何浩然

【解題】蘇州を発ってから、肖像画を描いてくれた何充［字は浩然］に宛てて書いた手紙。

【訳文】

人が蘇州からもどってきて、お手紙を頂戴しました。日々お変わりのないとのこと嬉しく思います。描いてくださった肖像画のすばらしさに、見る者皆が、形と精神を十分に写していて、真の姿そのままだといってくれます。昔の画工がどれほど心を籠めた作品もこれに及ぶものではありません。感服の至りです。御所望の詩は、少々の暇を得ましたので、ここに書き終えました。双幅を蜀中の織り物造りに頼みましたので、お納めください。お会いすることは叶いませんが、千万御自愛ください。

【補足】[先に訳した詩は、実はこの手紙とともに贈ったのかもしれないし、何充の求めに応じて、きちんと清書し直したのかもしれない]

■【04-3-084】回先生過湖州東林沈氏、飲酔、以石榴皮書其家東老庵之壁云、西隣巳富憂不足、東老雖貧楽有余。白酒釀来因好客、黄金散尽為収書。西蜀和仲、聞而次其韻三首。東老、沈氏之老自謂也、湖人因以名之。其子偕作詩、有可観者

【解題】蘇州を出て晋陵に至ると、沈偕という人が尋ねきて、蘇軾に詩を見せて、興

味深い話をした。それで三首の詩を詠んだ。長い詩の題とともに訳文を示す。

【訳文】

あるとき、回先生が湖州の東林の沈氏の家に立ち寄った。回先生は酒を飲んで酔い、石榴の皮を使ってその家の東老庵の壁に詩を書いた。

西鄰已富憂不足、[西隣りでは富んでいるのに不足を憂いている]

東老雖貧楽有余。[東隣りの老人は貧乏だけれどたっぷり楽しみがある]

白酒釀来因好客、[なぜなら、うまい酒ができれば好い客人がくるし]

黄金散尽為收書。[金をそっくり使い果たして、書物を買っているからだ]

西蜀の蘇軾はその詩を聞き、次韻して三首を作った。「東老」とは、沈氏の老翁の自称である。このことから湖州の人々はこのあたりを「東老」と呼ぶようになった。その子の沈偕は詩を作り、観るべきものがある。

【補足】[別の史料には次のようにある。「湖州帰安県の東林に沈思［字は持正］という隠者がいて、自ら東老と号し、『十八仙白酒』という酒を醸していた。ある日、回道人と名乗る者がきて、東老に丁寧に挨拶して、『あなたのところで白酒が新たに熟したと聞きましたので、一酔を求めたく思い、やってまいりました。願いを聞いてくださいましょうか』といった。東老は回道人を座らせ、じっとその目を観ると、碧色に燦然と輝き、人を射るような光を放っていた。語りかけると、どのようなことにも通じていたので、俗世の人ではないと知れた。それで酒を出して飲ませると、日中から夕暮れに至って数斗を飲み、顔色は少しも変わらなかった。回道人は『これからしばらくは浙中に遊ぶことはないので、貴君のために隠徳を残し、詩を留めて贈りまし

ょう』といって、そこらにあった石榴の皮で、庵の壁に詩を書いた」。この回道人は謎の人物で、呂洞賓ではないかという説もあった。呂洞賓は、宋代においては知らない人のいない有名な仙人である。呂洞賓は一説によると唐の貞元12年［796年］の生まれであるから、このころまでそこらをうろうろしていたとすると、そろそろ300歳ということになる］

【訳文】

其の一

世俗の人は、貧乏は病のようなものだということを知らない。

神仙は学ぶべきであっても、本来の学問の余りでしかない。

よい酒は佳い客人を留めることは知っていたけれど、

違う人に直接問うことをしないで、書物ばかりに求めていたとは……。

【補足】［(1) 東老は書物を好む余り、回道人の弟子となる絶好の機会を逃してしまったと、戯れたのである。(2) 第二首は、当時有名な別の仙人の事績を詠んでいて、訳すのは少々面倒なので割愛する］

其の三

あれから三年、

冷たい雨や露にさらされ、

塵や埃に埋もれて、

回先生の詩はわずか数文字をぼんやりと見るだけとなってしまった。

どうして石榴の皮を用いたのか。

そういえば、筆というものには「中書君」の別称があるけれど、

筆などは「書するに中らず」と、

回先生は思っていたのだろうか。

【補足】［(1) 終わりに部分は「中書」という語を用いた言葉遊びで、回道人は世間の常識の外にあるということがいいたいのだろう。(2) これから 16 年後に蘇軾が沈偕と再会するのを後の章で見るであろう］

■【04-3-085】単同年求徳興兪氏聚遠楼詩三首

【解題】蘇軾が常州に至ると、同じ年の科挙で合格した単錫が尋ねきて、徳興県にある兪氏の聚遠楼についての詩を所望したので、この三首を詠んだ。徳興県の景勝の地にかつて兪氏の建てた楼閣があり、徳興県知事として赴任した単錫がそれを再建して、聚遠楼と名付けたのである。単錫は自作の詩を示してその建物の由来を語り、蘇軾は実景を見ることなくこの詩を作った。

【訳文】

其の一

雲や山、煙る水気、

近くに寄ってそれに親しむのは難しい。

野の草や花、

それぞれに春というべきときがある。

高い楼閣は、

それらを、遠くにあるものまでもすっかり聚めて、

閑な者にそっくり与えてくれるのである。

其の二

無限の広がる青い山々を一つに収め切ることはできない。

雲は走り、浪は巻き、どこへ行くかと思うと、

聚遠楼(しゅうえんろう)の簾から勝手に入ってくるのだ。

一万戸の民を己の領地の中におさめて誇った者もいたけれど、

我等にとっての境界線がどこにあるのかといったら、

眼力の及ぶ限りの向こうなのである。

其の三

聞くところでは、

聚遠楼には地上の仙人が住まうとか。

門の外の塵の世があるのも知らず、

その人は静かに机にもたれ、

何も語ることがない。

その心は、

鴻(おおとり)が雲間に消え去るところにあるのである。

■【04-3-086】采桑子

【解題】「潤州(じゅんしゅう)の多景楼(たけいろう)で孫洙(そんしゅ)［字(あざな)は巨源(きょげん)］と遇(あ)う」との添え書きのある詞。蘇軾は10月に長江(ちょうこう)に面する潤州(じゅん)に至り、旧友の孫洙と会った。孫洙とは都にいたときに親交があり［→作品番号03-4-037］、やはり改革に反対して地方に出され、海州(かい)知事となっていたのだが、任期が満ちていったん郷里に揚州(よう)に還ると、蘇軾が潤州にまできていると聞き、わざわざ長江を渡って会いにきたのだった。多景楼は北固山(ほくこざん)の甘露寺(かんろじ)に

あった。蘇軾が 3 年前に甘露寺で詠んだ詩を作品番号 03-4-040 で見ている。

【訳文】

多情多感仍多病、[多情、あるいは多感な人は、きっと多病なのです]

多景楼中。[多景楼にいるのはそのような人たち]

樽酒相逢。[酒樽の前で会って]

楽事回頭一笑空。[楽しかったことを回顧しながら、からからと笑い飛ばしましょう]

停杯且聴琵琶語、[盃を止めて、琵琶が語るのを聴きます]

細撚軽攏。[こまかく撚れるような、軽く攏めるようなその音色]

酔臉春融。[酔いとともに顔は春に逢ったようにとろけてゆきます]

斜照江天一抹紅。[江も天も夕日のなかで紅く染まっています]

【補足】[(1) 後に蘇軾のこの詞を刻んだ石が甘露寺に建てられた。(2) このときに、琴の演奏を聴いて蘇軾は詩に詠んでいるが、訳は割愛する]

■【04-3-087】膠西蓋公堂照壁画賛并引

【解題】甘露寺には、南朝の宋の時代に陸探微が描いた狻［想像上の神獣］の画があった［→作品番号 03-4-040］。蘇軾は画工にそれを模写させ、賛を書き添えた。蘇軾はその模写を携えて密州に赴任し、蓋公堂の壁に飾った。蓋公堂については次章で見ることになるが、そのことを記した文章をここで先に見ておこう。

【訳文】

陸探微が描いた獅子[狻]の画は潤州の甘露寺にある。唐の時代に李徳裕が浙西を治めたときに

ここに留めたのである。その筆法は非常に優れていて、近世にはないものである。私はかつて甘露寺の詩を作り、その画について、「破板陸生画、青猊戯盤跚。上有二天人、揮手如翔鸞。筆墨雖欲尽、典刑垂不刊」と、詠んだ。

熙寧九年十一月十五日、画工に命じて模写したものを膠西[密州]の蓋公堂の中に置く。その賛に云う。

高其目、仰其鼻、奮髯吐舌威見歯。[その目、その鼻、その髯、その舌、その歯]

舞其足、前其耳、左顧右盼喜見尾。[その足、その耳、上に下に右に左に動かし]

雖猛而和蓋其戯、置之高堂護燕几。[猛々しいようでいて穏やかに戯れている]

啼呼顛沛走百鬼、嗟乎妙哉古陸子。[陸探微の妙技は百鬼をも走らせてしまう]

【補足】[途中にはさまれている甘露寺の詩の訳文は先に掲げてある。賛の訳は大意を示しただけのもの]

■【04-3-088】酔落魄

【解題】杭州を一緒に発った楊絵とは潤州まで一緒にきたが、長江を渡るに際していよいよ別行動をとることになり、この別れの詞を詠んだ。

【訳文】

分携如昨。[会うも別れるも昨日のことのよう]

人生到処萍飄泊。[人はどこでも漂う浮き草として生きるのでしょう]

偶然相聚還離索。[たまたま集まって、たまたま離れてゆくのです]

多病多愁、[悲しんだり愁いたりするのも]

須信従来錯。[どれもつまらないことだと見切ればよいのでしょう]

樽前一笑休辞却。[別れの酒の前では笑いましょう]

天涯同是傷淪落。[天地の涯で同じく落ちぶれていても]

故山猶負平生約。[故郷の山には日頃の約束に背いたまま]

西望峨嵋、[西に峨眉山を望んで]

長羨帰飛鶴。[飛び行く鳥を羨むのです]

■【04-3-090】与李公択

【解題】楊絵を見送った蘇軾もまた 10 月のうちに潤州を発って長江を渡った。この時の旅に伴ったのは妻の王閏之、長男の邁、次男の迨、三男の過、乳母の任採蓮、従者にして友人の馬正卿、そして 12 歳の少女、王朝雲であった。これからしばらく蘇軾は長江よりも北の地で過ごすことになるのだが、本章の終わりに、揚州に達してから湖州知事の李常［字は公択］に宛てて送った手紙を見ておこう。

【訳文】

私はすでに揚州に到着しました。今回の旅は天の幸いに恵まれているのでしょうか、貴君とともに李之儀[字は端叔]君に会いましたし、また途中で胡宗愈[字は完夫]、王存[字は正仲]君、孫洙[字は巨源]君とも会うことができました。至るところで人々としばしば劇飲し楽しく笑い合ったのでした。人生においてこのようなことは何度あるでしょうか。後にも同じようなこと続くがどうかはわかりません。湖州では急なお別れでしたので、この町で紙に臨んでいます。

【補足】［(1) ここに名が挙がっている李之儀は、遥か後年になって非常に親密な関係を結ぶ人物。(2) 胡宗愈、王存、孫洙［→作品番号 04-3-086］とは潤州で会っている。胡宗愈はこのとき少し上流の真州の副知事で、王存は母の喪に服して故郷の潤州に還っていたようだ。(3) 本章の最初のあたりで見たように、蘇軾は政治的に難しい

立場にあって地方官としての勤めを果たせるのかどうか大きな不安を抱いて杭州に赴任したのだが、多くの人々と「楽しく笑い合う」ような関係を結び、この上なく西湖の風光を愛し、多くの詩文を残した。その結果、今後はどの地であっても地方官として十分にやっていけるとの自信を持つようになり、これからは州知事として思う存分采配を揮ってみようとの思いを抱くようになったと推測される。そして、果たして「後にも同じようなことが続く」のかどうかは、次章以降で見てゆくことになる］

第 4 章　原文

詩のテキストは孔凡礼点校『蘇軾詩集』（1982 年）に、賦のテキストは李之亮箋注『蘇軾文集編年箋注』（2011 年）に、詞のテキストは薛瑞生箋證『東坡詞編年箋證』（1998 年）に準拠し、その他の散文類は省略する。

■【04-1-001】臘日遊孤山訪恵勤恵思二僧

天欲雪、雲満湖、楼台明滅山有無。

水清石出魚可数、林深無人鳥相呼。

臘日不帰対妻孥、名尋道人実自娯。

道人之居在何許、宝雲山前路盤紆。

孤山孤絶誰肯廬、道人有道山不孤。

紙窗竹屋深自暖、擁褐坐睡依圍蒲。

天寒路遠愁僕夫、整駕催帰及未晡。

出山回望雲木合、但見野鶻盤浮図。

慈遊淡泊歓有余、到家恍如夢蘧蘧。

作詩火急追亡逋、清景一失後難摹。

■【04-1-002】初到杭州寄子由二絶

其一

眼看時事力難勝、貪恋君恩退未能。

遅鈍終須投劾去、使君何日換聾丞。

其二

聖明寛大許全身、衰病摧頽自畏人。

莫上岡頭苦相望、吾方祭竈請比隣。

■【04-1-003】次韻柳子玉

其一　地爐

細声蚯蚓發銀瓶、擁褐横眠天未明。

衰鬢鑷殘欹雪領、壮心降尽倒風旌。

自称丹竈錙銖火、倦聴山城長短更。

聞道牀頭惟竹几、夫人応不解卿卿。

其二　紙帳

乱文亀殻細相連、慣臥青綾恐未便。

潔似僧巾白氎布、暖於蛮帳紫茸氈。

錦衾速巻持還客、破屋那愁仰見天。

但恐嬌児還悪睡、夜深踏裂不成眠。

■【04-1-004】李杞寺丞見和前篇復用元韻答之

獣在藪、魚在湖、一入池檻帰期無。

誤随弓旌落塵土、坐使鞭箠環呻呼。

追胥連保罪及孥、百日愁嘆一日楽。

白雲旧有終老約、朱綬豈合山人紆。

人生何者非蘧廬、故山鶴怨秋猿孤。

何時自駕鹿車去、掃除白髪煩菖蒲。

麻鞋短後随猟夫、射弋狐兎供朝晡。

陶潜自作五柳伝、潘閬画入三峰図。

吾年凜凜今幾余、知非不去慚衛蘧。

歳荒無術帰亡逋、鵠則易画虎難摹。

■【04-1-005】再和

東望海、西望湖、山平水遠細欲無。

野人疏狂逐漁釣、刺史寛大容歌呼。

君恩飽暖及爾孥、才者不閑拙者楽。

穿巌度嶺脚力健、未厭山水相縈紆。

三百六十古精廬、出遊無伴籃輿孤。

作詩雖未造藩閫、破悶豈不賢樗蒲。

君才敏贍兼百夫、朝作千篇日未晡。

揭来湖上得佳句、従此不看営丘図。

知君篋櫝富有余、莫惜錦繍償管蘧。

窮多門険誰先逋、賭取名画不用摹。

■【04-1-006】遊霊隠寺、得来詩、復用前韻

君不見、銭塘湖、銭王壮観已無。

屋堆黄金斗量珠、運尽不労折簡呼。

四方宦遊散其孥、宮闕留与閑人娯。

盛衰哀楽両須臾、何用多憂心鬱紆。

溪山処処皆可廬、最愛霊隠飛来孤。

喬松百丈蒼髯鬚、擾擾下笑柳与蒲。

高堂会食羅千夫、撞鐘撃鼓喧朝晡。

凝香方丈眠氍毹、絶勝絮被縫海図。

清風時来驚睡余、遂超羲皇傲幾蘧。

帰時棲鴉正畢逋、孤煙落日不可摹。

■【04-1-007】戯子由

宛丘先生長如丘、宛丘学舎小如舟。

常時低頭誦経史、忽然欠伸屋打頭。

斜風吹帷雨注面、先生不愧旁人羞。

任従飽死笑方朔、肯為雨立求秦優。

眼前勃谿何足道、処置六鑿須天游。

読書万巻不読律、致君堯舜知無術。

勧農冠蓋閙如雲、送老齏塩甘似蜜。

門前万事不掛眼、頭雖長低気不屈。

余杭別駕無功労、昼堂五丈容旆旌。

重楼跨空雨声遠、屋多人少風騒騒。

平生所慚今不恥、坐対疲氓更鞭箠。

道逢陽虎呼与言、心知其非口諾唯。

居高忘下真何益、気節消縮今無幾。

文章小技安足程、先生別駕旧斉名。

如今衰老倶無用、付与時人分重軽。

■【04-1-008】与林子中

■【04-1-009】浪淘沙

昨日出東城。

試探春情。

牆頭紅杏暗如傾。

檻内群芳芽未吐、

早已回春。

綺陌斂香塵。

雪霽前村、

東君用意不辞辛。

料想春光先到処、

吹綻梅英。

■【04-1-010】越州張中舎寿楽堂

青山偃蹇如高人、常時不肯入官府。

高人自与山有素、不待招邀満庭庭。

臥竜蟠屈半東州、万室鱗鱗枕其股。

背之不見与無同、狐裘反衣無乃魯。

張君眼力覷天奥、能遣荊棘化堂宇。

持頤宴坐不出門、収攬奇秀得十五。

才多事少厭閑寂、臥看雲煙変風雨。

筍如玉箸椹如簪、強飲且為山作主。

不憂児輩知此楽、但恐造物怪多取。

春濃睡足午窗明、想見新茶如溲乳。

■【04-1-011】与文与可

■【04-1-012】姚屯田挽詩

京口年来耆旧衰、高人淪喪路人悲。

空聞韋叟一経在、不見恬侯万石時。

貧病只知為善楽、逍遙却恨棄官遅。

七年一別真如夢、猶記蕭然痩鶴姿。

■【04-1-013】送岑著作

懶者常似静、静豈懶者徒。

拙則近於直、而直豈拙歟。

夫子静且直、雍容時巻舒。

嗟我復何為、相得歓有余。

我本不違世、而世与我殊。

拙於林間鳩、懶於冰底魚。

人皆笑其狂、子独憐其愚。

直者有時信、静者不終居。

而我懶拙病、不受砭薬除。

臨行怪酒薄、已与別涙俱。

後会豈無時、遂恐出処疏。

惟応故山夢、随子到吾廬。

■【04-1-014】雨中明慶賞牡丹

霏霏雨露作清妍、爍爍明燈照欲然。

明日春陰花未老、故応未忍著酥煎。

■【04-1-015】吉祥寺賞牡丹

人老簪花不自羞、花応羞上老人頭。

酔帰扶路人応笑、十里珠簾半上鉤。

■【04-1-016】吉祥寺僧求閣名

過眼栄枯電与風、久長那得似花紅。

上人宴坐観空閣、観色観空色即空。

■【04-1-017】牡丹記叙

■【04-1-018】戯贈

惆悵沙河十里春、一番花老一番新。

小楼依旧斜陽裏、不見楼中垂手人。

■【04-1-019】和劉道原見寄

敢向清時怨不容、直嗟吾道与君東。

坐談足使淮南懼、帰去方知冀北空。

独鶴不須驚夜旦、群烏未可弁雌雄。

盧山自古不到処、得与幽人子細窮。

■【04-1-020】和劉道原寄張師民

仁義大捷径、詩書一旅亭。

相誇綬若若、猶誦麦青青。

腐鼠何労嚇、高鴻本自冥。

顛狂不用喚、酒尽漸須醒。

■【04-1-021】送張職方吉甫赴閩漕六和寺中作

羨君超然鸞鶴姿、江湖欲下還飛去。

空使呉児怨不留、青山漫漫七閩路。

門前江水去掀天、寺後清池碧玉環。

君如大江日千里、我如此水千山底。

■【04-1-022】和子由柳湖久涸、忽有水、開元寺山茶旧無花、今歳盛開

其一

太昊祠東鉄墓西、一樽曽与子同携。

回瞻郡閣遙飛檻、北望檣竿半隠堤。

飯豆羹藜思両鵠、飲河噣水頼長霓。

如今勝事無人共、花下壺盧鳥勧提。

其二

長明燈下石欄干、長共杉松門歳寒。

葉厚有稜犀甲健、花深少態鶴頭丹。

久陪方丈曼陀雨、羞対先生苜蓿盤。

雪裏盛開知有意、明年開後更誰看。

■【04-1-023】与堂兄

■【04-1-024】雨中遊天竺靈感観音院

蠶欲老、麦半黄、前山後山雨浪浪。

農夫輟耒女廃筐、白衣仙人在高堂。

■【04-1-025】和欧陽少師会老堂次韻

一時冠蓋尽厳終、旧徳年来豈易逢。

聞道堂中延蓋叟、定応牀下拝梁松。

蠹魚自曬閑箱篋、科斗長収古鼎鐘。

我欲棄官重問道、寸筵何以得春容。

■【04-1-026】和欧陽少師寄趙少師次韻

朱門有遺啄、千里来燕雀。

公家冷如冰、百呼無一諾。

平生親友半遷逝、公雖不怪旁人愕。

世事如今臘酒濃、交情自古春雲薄。

二公凜凜和非同、疇昔心親豈貌従。

白鬚相映松間鶴、清句更酬雪裏鴻。

何日揚雄一廬足、却追范蠡五湖中。

■【04-1-027】和蔡準郎中見邀遊西湖

其一

夏潦漲湖深更幽、西風落木芙蓉秋。

飛雪闇天雲払地、新蒲出水柳映洲。

湖上四時看不足、惟有人生飄若浮。

解顔一笑豈易得、主人有酒君応留。

君不見銭塘游宦、朝推囚、暮決獄、不因人喚何時休。

其二

城市不識江湖幽、如与螭蛄語春秋。

試令江湖処城市、却似麋鹿遊汀洲。

高人無心無不可、得坎且止乗流浮。

公卿故旧留不得、遇所得意終年留。

君不見抛官彭沢令、琴無弦、巾有酒、酔欲眠時遣客休。

其三

田間決水鳴幽幽、插秧未遍麦已秋。

相携焼筍苦竹寺、却下踏藕荷花洲。

船頭斫鮮細縷縷、船尾炊玉香浮浮。

臨風飽食得甘寝、肯使細故胸中留。

君不見壮士憔悴時、饑謀食、渇謀飲、功名有時無罷休。

■【04-1-028】六月二十七日望湖楼酔書五絶

其一

黒雲翻墨未遮山、白雨跳珠乱入船。

巻地風来忽吹散、望湖楼下水如天。

其二

放生魚鱉逐人来、無主荷花到処開。

水枕能令山俯仰、風船解与月徘徊。

其三

烏菱白芡不論銭、乱繋青菰裏緑盤。

忽憶嘗新会霊観、滞留江海得加餐。

其四

献花遊女木蘭橈、細雨斜風湿翠翹。

無限芳洲生杜若、呉児不識楚辞招。

其五

未成小隠聊中隠、可得長閑勝暫閑。

我本無家更安往、故郷無此好湖山。

■【04-1-029】七月一日出城舟中苦熱

涼飆呼不来、流汗方被体。

稀星乍明滅、暗水光瀰瀰。

香風過蓮芡、驚枕裂魴鯉。

欠伸宿酒余、起坐濯清泚。

火雲勢方壮、未受月露洗。

身微欲安適、坐待東方啓。

■【04-1-030】宿余杭法喜寺、寺後緑野堂、望呉興諸山、懐孫莘老学士

徙倚秋原上、淒涼晩照中。

水流天不尽、人遠思何窮。

問諜知秦過、看山識禹功。

稲涼初吠蛤、柳老半書虫。

荷背風翻白、蓮腮雨退紅。

追游慰遅暮、覓句效児童。

北望苕溪転、遙憐震沢通。

烹魚得尺素、好在紫髯翁。

■【04-1-031】宿臨安浄土寺

雞鳴発余杭、到寺已亭午。

参禅固未暇、飽食良先務。

平生睡不足、急掃清風宇。

閉門群動息、香篆起煙縷。

覚来烹石泉、紫筍発軽乳。

晩涼沐浴罷、衰髪稀可数。

浩歌出門去、暮色入村塢。

微月半隠山、円荷争瀉露。

相携石橋上、夜与故人語。

明朝入山房、石鏡炯当路。

昔照熊虎姿、今為猿鳥顧。

廃興何足弔、万世一仰俯。

■【04-1-032】自浄土歩至功臣寺

落日岸葛巾、晩風吹羽扇。

松間野歩穏、竹外飛橋転。

神功鑿横嶺、巌石得巨片。

直渡千人溝、下有微流泫。

岡巒蔚回合、金碧爛明絢。

緬懐異姓王、負擔此郷県。

長逢跨下辱、屡乞桑間飯。

誰謂山石頑、識此希世彦。

凜然英気逼、屹起猶聳戦。

他年万騎帰、父老恣歓宴。

錦繍被原野、金珠散貧賤。

宝融既入朝、呉芮空記面。

栄華坐銷歇、閲世如郵伝。

惟有長明燈、依然照深殿。

■【04-1-033】遊径山

衆峰来自天目山、勢若駿馬奔平川。

中途勒破千里足、金鞭玉轡相回旋。

人言山住水亦住、下有万古蛟竜淵。

道人天眼識王気、結茅宴坐荒山巓。

精誠貫山石為裂、天女下試顔如蓮。

寒窗暖足来朴朔、夜鉢呪水降蜿蜒。

雪眉老人朝叩門、願為弟子長参禅。

爾来廃興三百載、奔走呉会輸金銭。

飛楼湧殿圧山谷、朝鐘暮鼓驚竜眠。

晴空仰見浮海蜃、落日下数投林鳶。

有生共処覆載内、擾擾膏火同烹煎。

近来愈覚世路隘、毎到寛処差安便。

嗟余老矣百事廃、却尋旧学心茫然。

問竜乞水帰洗眼、欲看細字銷残年。

■【04-1-034】自径山回、得呂察推詩、用其韻招之、宿湖上

多君貴公子、愛山如愛色。

心随葉舟去、夢繞千山碧。

新詩到中路、令我喜折屐。

古来軒冕徒、操舎両悲慄。

数朝辞簪笏、両脚得暫赤。

帰来不入府、却走湖上宅。

寵辱吾久忘、寧畏官長詰。

飄然便欲去、誰在子思側。

君能従我遊、出郭及未黒。

■【04-1-035】宿望湖楼再和

新月如佳人、出海初弄色。

娟娟到湖上、瀲瀲揺空碧。

夜涼人未寝、山静聞響屐。

騒人故多感、悲秋更憀慄。

君胡不相就、朱墨紛黝赤。

我行得所嗜、十日忘家宅。

但恨無友生、詩病莫訶詰。

君来試吟詠、定作鶴頭側。

改罷心愈疑、満紙蛟蛇黒。

■【04-1-036】夜泛西湖五絶

其一

新月生魄跡未安、才破五六漸盤桓。

今夜吐艶如半璧、游人得向三更看。

其二

三更向闌月漸垂、欲落未落景特奇。

明朝人事誰料得、看到蒼竜西没時。

其三

蒼竜已没牛斗横、東方芒角升長庚。

漁人収筒及未暁、船過惟有菰蒲声。

〈湖上禁漁，皆盗釣者也。〉

其四

菰蒲無辺水茫茫、荷花夜開風露香。

漸見燈明出遠寺、更待月黒看湖光。

其五

湖光非鬼亦非仙、風恬浪静光満川。

須臾両両入寺去、就視不見空茫然。

■【04-1-037】求焦千之恵山泉詩

茲山定空中、乳水満其腹。

遇隙則発見、臭味実一族。

浅深各有値、方円随所蓄。

或為雲洶湧、或作線断続。

或鳴空洞中、雑佩間琴築。

或流蒼石縫、宛転竜鸞蹙。

瓶罌走四海、真偽半相瀆。

貴人高宴罷、酔眼乱紅緑。

赤泥開方印、紫餅截円玉。

傾甌共嘆賞、竊語笑僮僕。

豈如泉上僧、盥灑自挹掬。

故人憐我病、蒻籠寄新馥。

欠伸北窗下、昼睡美方熟。

精品厭凡泉、願子致一斛。

■【04-1-038】答任師中次韻

閑裏有深趣、常憂児輩知。

已成帰蜀計、誰惜買山貲。

世事久已謝、故人猶見思。

平生不飲酒、対子敢論詩。

■【04-1-039】沈諫議召游湖、不赴、明日得双蓮於北山下、作一絶持献沈、既見和、又別作一首、因用其韻

其一

湖上棠陰手自栽、問公更得幾回来。

水仙亦恐公帰去、故遣双蓮一夜開。

其二

詔書行捧縷金箋、楽府応歌相府蓮。

莫忘今年花発処、西湖西畔北山前。

■【04-1-040】与范子豊

■【04-1-041】監試呈諸試官

我本山中人、寒苦盗寸廩。

文辞雖少作、勉強非天廩。

既得旋廃忘、懶惰今十稔。

麻衣如再著、墨水真可飲。

毎聞科詔下、白汗如流瀋。

此邦東南会、多士敢題品。

匏蕘尽蘭蓀、香不数葵荏。

貧家見珠貝、眩晃自難審。

緬懐嘉祐初、文格変已甚。

千金砕全璧、百衲収寸錦。

調和椒桂醶、咀嚼沙礫碖。

広眉成半額、学歩帰踔踔。

維時老宗伯、気圧群児凜。

蛟竜不世出、魚鮪初驚唫。

至音久乃信、知味猶食椹。

至今天下士、微管幾左衽。

謂当千載後、石室祠高朕。

爾来又一変、此学初誰諗。

権衡破旧法、芻豢笑凡飪。

高言追衛楽、篆刻鄙曹沈。

先生周孔出、弟子淵騫寝。

卻顧老鈍軀、頑樸謝鐫鋟。

諸君況才傑、容我懶且噤。

聊欲廃書眠、秋濤舂午枕。

■【04-1-042】望海楼晩景五絶

其一

海上濤頭一線来、楼前相顧雪成堆。

従今潮上君須上、更看銀山二十回。

其二

横風吹雨入楼斜、壮観応須好句誇。

雨過潮平江海碧、電光時掣紫金蛇。

其三

青山断処塔層層、隔岸人家喚欲応。

江上秋風晩来急、為伝鐘鼓到西興。

其四

楼下誰家焼夜香、玉笙哀怨弄初涼。

臨風有客吟秋扇、拝月無人見晩粧。

其五

沙河燈火照山紅、歌鼓喧喧笑語中。

為問少年心在否，角巾欹側鬢如蓬。

■【04-1-043】試院煎茶

蟹眼已過魚眼生、颼颼欲作松風鳴。

蒙茸出磨細珠落、眩転遶甌飛雪軽。

銀瓶瀉湯誇第二、未識古人煎水意。

君不見昔時李生好客手自煎、貴従活火発新泉。

又不見今時潞公煎茶学西蜀、定州花瓷琢紅玉。

我今貧病長苦饑、分無玉碗捧蛾眉。

且学公家作茗飲、磚爐石銚行相随。

不用撑腸拄腹文字五千巻、但願一甌常及睡足日高時。

■【04-1-044】孫莘老求墨妙亭詩

蘭亭繭紙入昭陵、世間遺跡猶竜騰。

顔公変法出新意、細筋入骨如秋鷹。

徐家父子亦秀絶、字外出力中蔵稜。

嶧山伝刻典刑在、千載筆法留陽冰。

杜陵評書貴瘦硬、此諭未公吾不憑。

短長肥瘠各有態、玉環飛燕誰敢憎。

呉興太守真好古、購買断欠揮縑繒。

亀趺入座螭隠壁、空斎昼静聞登登。

奇踪散出走呉越、勝事伝説誇友朋。

書来乞詩要自写、為把栗尾書溪藤。

後来視今猶視昔、過眼百世如風燈。

他年劉郎憶賀監、還道同是須服膺。

■【04-1-045】李公択求黄鶴楼詩、因記旧所聞於馮当世者

黄鶴楼前月満川、抱関老卒飢不眠。

夜聞三人笑語言、羽衣著屐響空山。

非鬼非人意其仙、石扉三叩声清円。

洞中鏗鉱落門関、縹緲入石如飛煙。

雞鳴月落風馭還、迎拝稽首願執鞭。

汝非其人骨腥膻、黄金乞得重莫肩。

持帰包裹敝席氈、夜穿茅屋光射天。

里閭来観已変遷、似石非石鉛非鉛。

或取而有衆憤喧、訟帰有司今幾年。

無功暴得喜欲顛、神人戯汝真可憐。

願君為考然不然、此語可信馮公伝。

■【04-1-046】与范夢得

■【04-1-047】八月十日夜看月有懐子由並崔度賢良

宛丘先生自不飽、更笑老崔窮百巧。

一更相過三更帰、古柏陰中看参昴。

去年挙君苜蓿盤、夜傾閩酒赤如丹。

今年還看去年月、露冷遙知范叔寒。

典衣自種一頃豆、那知積雨生科斗。

帰来四壁草虫鳴、不如王江長飲酒。

■【04-1-048】和沈立之留別二首

其一

而今父老千行涙、一似当時初去時。

不用鐫碑頌遺愛、丈人清徳畏人知。

其二

臥聞鐃鼓送帰艎、夢裏遭悤悤共一觴。

試問別来愁幾許、春江万斛若為量。

■【04-1-049】催試官考較戯作

八月十五夜、月色従処好。

不択茅檐与市楼、況我官居似蓬島。

鳳咮堂前野橘香、剣潭橋畔秋荷老。

八月十八潮、壮観天下無。

鯤鵬水撃三千里、組練長駆十万夫。

紅旗青蓋互明滅、黒沙白浪相呑屠。

人生会合古難必、此景此行那両得。

願君聞此添蠟燭、門外白袍如立鵠。

■【04-1-050】八月十七日、復登望海楼、自和前篇、是日榜出、余与試官両人復留五首

其一

楼上煙雲怪不来、楼前飛紙落成堆。

非関文字須重看、却被江山未放回。

其二

眼昏燭暗細行斜、考閲精強外已誇。

明日失懐君莫怪、早知安足不成蛇。

其三

乱山遮暁擁千層、睡美初涼撼不応。

昨夜酒行君屡嘆、定知帰夢到呉興。

其四

天台桂子為誰香、倦聴空階夜点涼。

頼有明朝看潮在、万人空巷鬬新粧。

其五

秋花不見眼花紅、身在孤舟兀兀中。

細雨作寒知有意、未教金菊出蒿蓬。

■【04-1-051】与郭功父

■【04-1-052】和陳述古拒霜花

千林掃作一番黄、只有芙蓉独自芳。

喚作拒霜知未称、細思却是最宜霜。

■【04-1-053】次韻答開祖

涙滴秋風不為麟、虚名何用実之賓。

蒸豚未害為純孝、貍首何妨助故人。

好喚遊湖縁路便、難邀入社為詩頻。

知君頗有東山興、喝石巌前自過春。

■【04-1-054】周夫人挽詞

教子通経古所賢、安貧守道節尤堅。

当熊遺烈伝家世、投燭諸郎慰眼前。

不待金花書誥命、忽驚玉樹掩新阡。

凱風吹棘君休詠、我亦孤懐一泫然。

■【04-1-055】梵天寺見僧守詮小詩清婉可愛、次韻

但聞煙外鐘、不見煙中寺。

幽人行未已、草露湿芒履。

惟応山頭月、夜夜照来去。

■【04-1-056】聴賢師琴

大弦春温和且平、小弦廉折亮以清。

平生未識宮与角、但聞牛鳴盎中雉登木。

門前剝啄誰叩門、山僧未閑君勿嗔。

帰家且覓千斛水、浄洗従前箏笛耳。

■【04-1-057】雑書琴事十首

■【04-1-058】祭欧陽文忠公文

■【04-1-059】哭欧陽公、孤山僧恵思示小詩、次韻

故人已為土、衰鬢亦驚秋。

猶喜孤山下、相逢説旧遊。

■【04-1-060】秋懐二首

其一

苦熱念西風、常恐来無時。

及茲遂淒凜、又作徂年悲。

蟋蟀鳴我牀、黄葉投我帷。

窗前有棲鵬、夜嘯如狐貍。

露冷梧葉脱、孤眠無安枝。

熠燿亦求偶、高屋飛相追。

定知無幾見、迫此清霜期。

物化逝不留、我興為嗟咨。

便当勤秉燭、為楽戒暮遅。

其二

海風東南来、吹尽三日雨。

空階有余滴、似与幽人語。

念我平生歓、寂寞守環堵。

壺漿慰作労、裹飯救寒苦。

今年秋応熟、過従飽雞黍。

嗟我独何求、万里渉江浦。

居貧豈無食、自不安畎畝。

念此坐達晨、残燈翳復吐。

■【04-1-061】次韻孔文仲推官見贈

我本麋鹿性、諒非伏轅姿。

君如汗血馬、作駒已権奇。

斉駆大道中、並帯鑾鏕馳。

聞声自決驟、那復受縶維。

謂君朝発燕、秣楚日未欹。

云何中道止、連蹇驢騾随。

金鞍冒翠錦、玉勒垂青糸。

旁観信美矣、自揣良厭之。

均為人所労、何必陋塩輜。

君看立仗馬、不敢鳴且窺。

調習困鞭箠、僅存骨与皮。

人生各有志、此論我久持。

他人聞定笑、聊与吾子期。

空斎臥積雨、病骨煩撐支。

秋草上垣墻、霜葉鳴階墀。

門前自無客、敢作揚雄麾。

候吏報君来、弭節江之湄。

一対高人談、稍忘俗吏卑。

今朝枉詩句、粲如鳳来儀。

上山絶梯磴、墜海迷津涯。

憐我枯槁質、借潤生華滋。

肯效世俗人、洗刮求瘢痍。

賢明日登用、清廟歌緝熙。

胡不学長卿、預作封禅詞。

■【04-1-062】湯村開運塩河雨中督役

居官不任事、蕭散羨長卿。

胡不帰去来、滞留愧淵明。

塩事星火急、誰能恤農耕。

薨薨暁鼓動、万指羅溝坑。

天雨助官政、泫然淋衣纓。

人如鴨与豬、投泥相濺驚。

下馬荒堤上、四顧但湖泓。

線路不容足、又与牛羊争。

帰田雖賤辱、豈失泥中行。

寄語故山友、慎毋厭藜羹。

■【04-1-063】是日宿水陸寺、寄北山清順僧二首

其一

草没河堤雨暗村、寺蔵修竹不知門。

拾薪煮薬憐僧病、掃地焚香浄客魂。

農事未休侵小雪、仏燈初上報黄昏。

年来漸識幽居味、思与高人対榻論。

其二

長嫌鐘鼓聒湖山、此境蕭条却自然。

乞食繞村真為飽、無言対客本非禅。

披榛覓路衝泥入、洗足関門聴雨眠。

遙想後身窮賈島、夜寒応聳作詩肩。

■【04-1-064】塩官部役戯呈同事兼寄述古

新月照水水欲冰、夜霜穿屋衣生稜。

野廬半与牛羊共、暁鼓却随鴉鵲興。

夜来履破裘穿縫、紅頬曲眉応入夢。

千夫在野口如林、豈不懐帰畏嘲弄。

我州賢将知人労、已醸白酒買豚羔。

耐寒努力帰不遠、両脚凍硬須公軟。

■【04-1-065】塩官絶句四首

其一　南寺千仏閣

古邑居民半海濤、師来搞築便能高。

千金用尽身無事、坐看香煙繞白毫。

其二　北寺悟空禅師塔

已将世界等微塵、空裏浮花夢裏身。

豈為竜顔更分別、只応天眼識天人。

其三　塔前古檜

当年双檜是双童、相対無言老更恭。

庭雪到腰埋不死、如今化作両蒼竜。

其四　僧爽白雞

断尾雄雞本畏烹、年来聴法伴修行。

還須却置蓮花漏、老怯風霜恐不鳴。

■【04-1-066】六和寺沖師閘山溪為水軒

欲放清溪自在流、忍教冰雪落沙洲。

出山定被江潮涴、能為山僧更少留。

■【04-1-067】送杭州進士詩叙

■【04-1-068】和人求筆跡

麦光鋪幾浄無瑕、入夜青燈照眼花。

従此剡藤真可弔、半紆春蚓綰秋蛇。

■【04-1-069】冬至日独遊吉祥寺

井底微陽回未回、蕭蕭寒雨湿枯荄。

何人更似蘇夫子、不是花時肯独来。

■【04-1-070】与子明兄

■【04-1-071】後十余日復至

東君意浅著寒梅、千朶深紅未暇裁。

安得道人殷七七、不論時節遣花開。

■【04-1-072】送張軒民寺丞赴省試

竜飛甲子尽豪英、嘗喜吾猶及老成。

人競春蘭笑秋菊、天教明月伴長庚。

伝家各自聞詩礼、与子相逢亦弟兄。

洗眼上林看躍馬、賀詩先到古宣城。

〈伯父與太平州張侍讀同年，此其子〉

■【04-1-073】将之湖州戲贈莘老

余杭自是山水窟、仄聞吳興更清絶。

湖中橘林新著霜、溪上苕花正浮雪。

顧渚茶牙白於齒、梅溪木瓜紅勝頬。

吳児膾縷薄欲飛、未去先説饞涎垂。

亦知謝公到郡久、応怪杜牧尋春遅。

鬢糸只好封禅槨、湖亭不用張水嬉。

■【04-1-074】再用前韻寄莘老

君不見夷甫開三窟、不如長康号癡絶。

癡人自得終天年、智士死智罪莫雪。

困窮誰要卿料理、挙頭看山笏拄頬。

野鳧翅重自不飛、黄鶴何事両翼垂。

泥中相従豈得久、今我不往行恐遅。

江夏無双應未去、恨無文字相娯嬉。

■【04-1-075】答黄魯直書

■【04-1-076】画魚歌

天寒水落魚在泥、短鉤画水如耕犁。

渚蒲披折藻荇乱、此意豈復遺鮂鯢。

偶然信手皆虚撃、本不辞労幾万一。

一魚中刃百魚驚、蝦蟹奔忙誤跳擲。

漁人養魚如養雛、插竿冠笠驚鵜鶘。

豈知白挺鬧如雨、攪水覓魚嗟已疏。

■【04-1-077】鴉種麦行

霜林老鴉閑無用、畦東拾麦畦西種。

畦西種得青猗猗、畦東已作牛尾稀。

明年麦熟芒攅槊、農夫未食鴉先啄。

徐行俯仰若自矜、鼓翅跳踉上牛角。

憶昔舜耕歴山鳥為耘、, 如今老鴉種麦更辛勤。

農夫羅拝鴉飛起、勧農使者来行水。

■【04-1-078】墨妙亭記

■【04-1-079】題羊欣帖

■【04-1-080】和致仕張郎中春昼

投紱帰来万事軽、消磨未尽只風情。

旧因蓴菜求長仮、新為楊枝作短行。

不祷自安縁寿骨、苦蔵難没是詩名。

浅斟杯酒紅生頬、細琢歌詞穏称声。

蝸殻卜居心自放、蠅頭写字眼能明。

盛衰閲過君応笑、寵辱年来我亦平。

跪履数従圯下老、逸書閑問済南生。

東風屈指無多日、只恐先春鶗鴂鳴。

■【04-1-081】和邵同年戯贈賈収秀才三首

其一

傾蓋相歓一笑中、従来未省馬牛風。

卜隣尚可容三径、投社終当作両翁。

古意已将蘭緝佩、招詞閑詠桂生叢。

此身自断天休問、白髪年来漸不公。

其二

朝見新黄出旧槎、騒人孤憤苦思家。

五噫処士太窮約、三賦先生多誕誇。

帳外鶴鳴匳有鏡、筒中銭尽案無鮭。

玉川何日朝金闕、白昼関門守夜叉。

其三

生涯到処似檣烏、科第無心摘頷鬚。

黄帽刺船忘歳月、白衣擔酒慰鰥孤。

狙公欺病来分栗、水伯知饞為出鱸。

莫向洞庭歌楚曲、煙波渺渺正愁予。

■【04-1-082】邵茂誠詩集敘

■【04-1-083】呉中田婦嘆

今年粳稲熟苦遅、庶見霜風来幾時。

霜風来時雨如瀉、耙頭出菌鐮生衣。

眼枯涙尽而不尽、忍見黄穂臥青泥。

茅苫一月被上宿、天晴獲稲随車帰。

汗流肩赭載入市、価賤乞与如糠粞。

売牛納税拆屋炊、慮浅不及明年飢。

官今要銭不要米、西北万里招羌児。

龔黄満朝人更苦、不如却作河伯婦。

■【04-1-084】双荷葉

双溪月。

清光偏照双荷葉。

双荷葉。

紅心未偶、

緑衣偸結。

背風迎迎雨流珠滑。

軽舟短棹先秋折。

先秋折。

煙鬟未上、

玉杯微缺。

■【04-1-085】遊道場山何山

道場山頂何山麓、上徹雲峰下幽谷。

我従山水窟中来、尚愛此山看不足。

陂湖行尽白漫漫，青山忽作竜蛇盤。

山高無風松自響、誤認石歯号驚湍。

山僧不放山泉出、屋底清池照瑤席。

階前合抱香入雲、月裏仙人親手植。

出山回望翠雲鬟、碧瓦朱欄縹緲間。

白水田頭問行路、小溪深処是何山。

高人読書夜達旦、至今山鶴鳴夜半。

我今廃学不帰山、山中対酒空三歎。

■【04-1-086】莘老葺天慶観小園、有亭北向、道士山宗説乞名与詩

春風欲動北風微、帰雁亭辺送雁帰。

蜀客南遊家最遠、呉山寒尽雪先晞。

扁舟去後花絮乱、五馬来時賓従非。

惟有道人応不忘、抱琴無語立斜暉。

■【04-1-087】贈莘老七絶

其一

嗟予与子久離群、耳冷心灰百不聞。

若対青山談世事、当須挙白便浮君。

其二

天目山前緑浸裾、碧瀾堂下看銜艫。

作堤捍水非吾事、閑送苕溪入太湖。

其三

夜来雨洗碧巑岏、浪湧雲屯繞郭寒。

聞有弁山何処是、為君四面竟求看。

其四

夜橋燈火照溪明、欲放扁舟取次行。

暫借官奴遣吹笛、明朝新月到三更。

其五

三年京国厭藜蒿、長羨淮魚圧楚糟。

今日駱駝橋下泊、恣看修網出銀刀。

其六

烏程霜稲襲人香、醸作春風雪水光。

時復中之徐邈聖、無多酌我次公狂。

其七

去年臘日訪孤山、曽借僧窗半日閑。

不為思帰対妻子、道人有約径須還。

■【04-1-088】至秀州、贈銭端公安道、並寄其弟恵山老

鴛鴦湖辺月如水、孤舟夜傍鴛鴦起。

平明撃纜石橋亭、慚愧冒寒髯御史。

結交最晩情独厚、論心無数今有幾。

寂寞抱関嘆蕭生、耆老執戟哀揚子。

怪君顔采卻秀発、無乃遷謫反便美。

天公欲困無奈何、世人共抑真疏矣。

毘陵高山錫為骨、陸子遺味泉冰歯。

賢哉仲氏早払衣、占断此山長洗耳。

山頭望湖光溌眼、山下濯足波生指。

倘容逸少問金堂、記與稽康留石髄。

■【04-1-089】秀州報本禅院郷僧文長老方丈

万里家山一夢中、呉音漸已変児童。

毎逢蜀叟談終日、便覚峨眉翠掃空。

師已忘言真有道、我除捜句百無功。

明年采薬天台去、更欲題詩満浙東。

■【04-1-090】王復秀才所居双檜

其一

呉王池館遍重城、閑草幽花不記名。

青蓋一帰無覓処、只留双檜待昇平。

其二

凛然相対敢相欺、直幹凌空未要奇。

根到九泉無曲処、世間惟有蟄竜知。

■【04-1-091】与林子中

■【04-1-092】除夜、直都庁、囚繋皆満、暮不得返舎。因題一詩於壁

除日当早帰、官事乃見留。

執筆対之泣、哀此繋中囚。

小人営糇糧、堕網不知羞。

我亦恋薄禄、因循失帰休。

不須論賢愚、均是為食謀。

誰能暫縦遣、閔黙愧前修。

■【04-2-001】元日次韻張先子野見和七夕寄莘老之作

得句牛女夕、転頭参尾中。

青春先入睡、白髪不遺窮。

酒社我為敵、詩壇子有功。

縮頭先夏鱉、実腹鄙秋虫。〈見《玉川子》。〉

莫唱裙垂緑、無人臉断紅。

旧交懐賀老、新進謝終童。

袍鶻双双瑞、腰犀一一通。

小蛮知在否、試問囁嚅翁。

■【04-2-002】正月九日、有美堂飲、酔帰径睡、五鼓方醒、不復能眠、起閲文書、得鮮于子駿所寄雑興、作古意一首答之

衆人事紛擾、志士独悄悄。

何意琵琶弦、常遭腰鼓鬧。

三杯忘万慮、醒後還皎皎。

有如轆轤索、已脱重縈繞。

家人自約飭、始慕陳婦孝。

可憐原巨先、放蕩今誰弔。

平生嗜羊炙、識味肯軽飽。

烹蛇啖蛙蛤、頗訝能稍稍。

憂来自不寐、起視天漢渺。

闌干玉繩紙、耿耿太白暁。

■【04-2-003】次韻答章伝道見贈

並生天地宇、同閲古今宙。

視下則有高、無前孰為後。

達人千鈞弩、一弛難再彀。

下士沐猴冠、已繋猶跳驟。

欲将駒過隙、坐待石穿溜。

君看漢唐主、宮殿悲麦秀。

而況彼区区、何異一酔富。

鶺鴒非所養、俯仰眩金奏。

髑髏有余楽、不博南面后。

嗟我昔少年、守道貧非疚。

自従出求仕、役物恐見囿。

馬融既依梁、班固亦事竇。

效瞢豈不欲、頑質謝鐫鏤。

仄聞長者言、婞直非養寿。

唾面慎勿拭、出胯当俯就。

居然成懶廃、敢復歯豪右。

子如照海珠、網目疏見漏。

宏材乏近用、巧舞困短袖。

坐令傾国容、臨老見邂逅。

吾衰信久矣、書絶十年旧。

門前可羅雀、感子煩屡叩。

願言歌緇衣、子粲還予授。

■【04-2-004】法恵寺横翠閣

朝見呉山横、暮見呉山縦。

呉山故多態、転折為君容。

幽人起朱閣、空洞更無物。

惟有千歩岡、東西作簾額。

春来故国帰無期、人言秋悲春更悲。

已泛平湖思濯錦、更看横翠憶峨眉。

雕欄能得幾時好、不独憑欄人易老。

百年興廃更堪哀、懸知草莽化池台。

遊人尋我旧遊処、但覓呉山横処来。

■【04-2-005】祥符寺九曲観燈

紗籠擎燭迎門入、銀葉燒香見客邀。

金鼎転丹光吐夜、宝珠穿蟻鬧連朝。

波翻焔裏元相激、魚舞湯中不畏焦。

明日酒醒空想像、清吟半逐夢魂銷。

■【04-2-006】上元過祥符僧可久房、蕭然無燈火

門前歌鼓鬥分朋、一室清風冷欲冰。

不把琉璃閑照仏、始知無尽本無燈。

■【04-2-007】正月二十一日病後、述古邀往城外尋春

屋上山禽苦喚人、檻前冰沼忽生鱗。

老来厭伴紅裙酔、病起空驚白髪新。

臥聴使君鳴鼓角、試呼穉子整冠巾。

曲欄幽榭終寒窘、一看郊原浩蕩春。

■【04-2-008】有以官法酒見餉者、因用前韻、求述古為移廚飲湖上

喜逢門外白衣人、欲膾湖中赤玉鱗。

遊舫已粧呉榜穏、舞衫初試越羅新。

欲将漁釣追黄帽、未要靴刀抹絳巾。

芳意十分強半在、為君先踏水辺春。

■【04-2-009】飲湖上初晴後雨二首

其一

朝曦迎客艷重岡、晩雨留人入醉郷。

此意自佳君不会、一杯当属水仙王。

〈湖上有水仙王廟。〉

其二

水光瀲灩晴方好、山色空濛雨亦奇。

欲把西湖比西子、淡粧濃抹総相宜。

■【04-2-010】往富陽新城、李節推先行三日、留風水洞見待

春山磔磔鳴春禽、此間不可無我吟。

路長漫漫傍江浦、此間不可無君語。

金鯽池辺不見君、追君直過定山村。

路人皆言君未遠、騎馬少年清且婉。

風巌水穴旧聞名、只隔山溪夜不行。

溪橋暁溜浮梅萼、知君系馬巌花落。

出城三日尚逶遲、妻孥怪罵帰何時。

世上小児誇疾走、如君相待今安有。

■【04-2-011】風水洞二首和李節推

其一

風転鳴空穴、泉幽瀉石門。

虚心聞地籟、妄意覓桃源。

過客詩難好、居僧語不繁。

帰瓶得冰雪、清冷慰文園。

其二

山前雨水隔塵凡、山上仙風舞檜杉。

細細竜鱗生乱石、団団羊角転空巌。

馮夷窟宅非梁棟、御寇車輿謝轡銜。

世事漸艱吾欲去、永随二子脱譏讒。

■【04-2-012】風水洞聞二禽

林外一声青竹筍、坐間半酔白頭翁。

春山最好不帰去、慚愧春禽解勧儂。

■【04-2-013】臨江仙

四大従来都遍満、

此間風水何疑。

故応為我発新詩。

幽花香澗谷、

寒藻舞淪漪。

借与玉川生両腋、

天仙未必相思。

還恁流水送人帰。

層巓余落日、

草露已沾衣。

■【04-2-014】独遊富陽普照寺

富春真古邑、此寺亦唐余。

鶴老依喬木、竜帰護賜書。

連筒春水遠、出谷晩鐘疏。

欲継江潮韻、何人為起予。

■【04-2-015】自普照遊二庵

長松吟風晩雨細、東庵半掩西庵閉。

山行尽日不逢人、裛裛野梅香入袂。

居僧笑我恋清景、自厭山深出無計。

我雖愛山亦自笑、独往神傷後難継。

不如西湖飲美酒、紅杏碧桃香覆髻。

作詩寄謝采薇翁、本不避人那避世。

■【04-2-016】富陽妙庭観董双成故宅、発地得丹鼎、覆以銅盤、承以琉璃盆、盆既破砕、丹亦為人争奪持去、今独盤鼎在耳、二首

其一

人去山空鶴不帰、丹亡鼎在世徒悲。

可憐九転功成後、却把飛昇乞内芝。

其二

琉璃撃砕走金丹、無復神光発旧壇。

時有世人来舐鼎、欲随雞犬事劉安。

■【04-2-017】新城道中二首

其一

東風知我欲山行、吹断檐間積雨声。

嶺上晴雲披絮帽、樹頭初日掛銅鉦。

野桃含笑竹籬短、溪柳自揺沙水清。

西崦人家応最楽、煮芹焼筍餉春耕。

其二

身世悠悠我此行、溪辺委轡聴溪声。

散材畏見捜林斧、疲馬思聞巻旆鉦。

細雨足時茶戸喜、乱山深処長官清。

人間岐路知多少、試向桑田問耦耕。

■【04-2-018】山村五絶

其一

竹籬茅屋趁溪斜、春入山村処処花。

無象太平還有象、孤煙起処是人家。

其二

煙雨濛濛雞犬声、有生何処不安生。

但令黄犢無人佩、布穀何労也勧耕。

其三

老翁七十自腰鎌、慚愧春山筍蕨甜。

豈是聞韶解忘味、邇来三月食無塩。

其四

杖藜裹飯去忽忽、過眼青銭転手空。

贏得児童語音好、一年強半在城中。

其五

竊祿忘帰我自羞、豊年底事汝憂愁。

不須更待飛鳶墜、方念平生馬少游。

■【04-2-019】行香子

一葉舟軽、

双槳鴻驚。

水天清、

影湛波平。

魚翻藻鑑、

鷺点煙汀。

過沙溪急、

霜溪冷、

月溪明。

重重似画、

曲曲如屏。

算当年、

空老厳陵。

君臣一夢、

今古虚名。

但遠山長、

雲山乱、

暁山青。

■【04-2-020】癸丑春分後雪

雪入春分省見稀、半開桃李不勝威。

応慚落地梅花識、却作漫天柳絮飛。

不分東君専節物、故将新巧発陰機。

従今造物尤難料、更暖須留御臘衣。

■【04-2-021】湖上夜帰

我飲不尽器、半酣味尤長。

籃輿湖上帰、春風灑面涼。

行到孤山西、夜色已蒼蒼。

清吟雑夢寐、得句旋已忘。

尚記梨花村、依依聞暗香。

入城定何時、賓客半在亡。

睡眼忽驚翼、繁燈鬧河塘。

市人拍手笑、状如失林麞。

始悟山野姿、異趣難自強。

人生安為楽、吾策殊未良。

■【04-2-022】石屋洞題名

■【04-2-023】同曽元恕遊竜山、呂穆仲不至

青春不覚老朱顔、強半銷磨簿領間。

愁客倦吟花以酒、佳人休唱日衔山。

共知寒食明朝過、且赴僧窓半日閑。

命駕呂安邀不至、浴沂曽点暮方還。

■【04-2-024】書游霊化洞

■【04-2-025】寒食未明至湖上、太守未来、両県令先在

城頭月落尚啼烏、烏榜紅舷早満湖。

鼓吹未容迎五馬、水雲先已颺双鳧。

映山黄帽蜫頭舫、夾道青煙鵲尾爐。

老病逢春只思睡、独求僧榻寄須臾。

■【04-2-026】次韻孫莘老見贈、時莘老移廬州、因以別之

爐錘一手賦形殊、造物無心敢忘渠。

我本疎頑固当爾、子猶淪落況其余。

龔黄側畔難言政、羅趙前頭且眩書。

惟有陽関一杯酒、殷勤重唱贈離居。

■【04-2-027】贈別

青鳥銜巾久欲飛、黄鶯別主更悲啼。

殷勤莫忘分携処、湖水東辺鳳嶺西。

■【04-2-028】次韻代留別

絳蠟燒焼残玉豆飛、離歌唱徹万行啼。

他年一舸鴟夷去、応記儂家旧住西。

■【04-2-029】薄命佳人

双頬凝酥髪抹漆、眼光入簾珠的皪。

故将白練作仙衣、不許紅膏汚天質。

呉音嬌軟帯児癡、無限閑愁総未知。

自古佳人多命薄、閉門春尽楊花落。

■【04-2-030】書周韶

■【04-2-031】銭塘六井記

■【04-2-032】乞子珪師号状

■【04-2-033】吉祥寺花将落而述古不至

今歳東風巧剪裁、含情只待使君来。

対花無信花応恨、直恐明年便不開。

■【04-2-034】述古聞之、明日即至、坐上復用前韻同賦

仙衣不用剪刀裁、国色初酣卯酒来。

太守問花花有語、為君零落為君開。

■【04-2-035】東陽水楽亭

君不学白公引涇東註渭、五斗黄泥一鐘水。

又不学哥舒横行西海頭、帰来羯鼓打涼州。

但向空山石壁下、愛此有声無用之清流。

流泉無弦石無竅、強名水楽人人笑。

慣見山僧已厭聴、多情海月空留照。

洞庭不復来軒轅、至今魚竜舞鈞天。

聞道磬襄東入海、遺声恐在海山間。

鏘然澗谷含宮徴、節奏未成君独喜。

不須写入薫風弦、縦有此声無此耳。

■【04-2-036】与康操都管

■【04-2-037】於潜令刁同年野翁亭

山翁不出山、渓翁長在渓。

不如野翁来往渓山間、上友麋鹿下鳧鷖。

問翁何所楽、三年不去煩推擠。

翁言此間亦有楽、非糸絲非竹非蛾眉。

山人酔後鉄冠落、渓女笑時銀櫛低。

我来観政問風謡、皆云吠犬足生麏。

但恐此翁一旦捨此去、長使山人索寞渓女啼。

■【04-2-038】於潜僧綠筠軒

可使食無肉、不可使居無竹。

無肉令人瘦、無竹令人俗。

人瘦尚可肥、俗士不可医。

旁人笑此言、似高還似癡。

若対此君仍大嚼、世間那有揚州鶴。

■【04-2-039】於潜女

青裙縞袂於潜女、両足如霜不穿履。

●沙鬢髪糸穿柠、蓬沓障前走風雨。[●は舟の右に奢]

老濞宮粧伝父祖、至今遺民悲故主。

苕溪楊柳初飛絮、照溪画眉渡溪去。

逢郎樵帰相媚嫵、不信姫姜有斉魯。

■【04-2-040】自昌化双溪館下歩尋溪源、至治平寺

其一

乱山滴翠衣裘重、双澗響空窓戸揺。

飽食不嫌溪筍痩、穿林閑覓野芎苗。

却愁県令知游寺、尚喜漁人争渡橋。

正似醴泉山下路、桑枝刺眼麥斉腰。

其二

毎見田園輒自招、倦飛不擬控扶揺。

共疑楊惲非鋤豆、誰信劉章解立苗。

老去尚貪彭沢米、夢帰時到錦江橋。

宦遊莫作無家客、挙族長懸似細腰。

■【04-2-041】与臨安令宗人同年劇飲

我雖不解飲、把盞歓意足。

試呼白髪感秋人、令唱黄雞催暁曲。

与君登科如隔晨、敝袍霜葉空残緑。

如今莫問老与少、児子森森如立竹。

黄雞催暁不須愁、老尽世人非我独。

■【04-2-042】宝山昼睡

七尺頑躯走世塵、十囲便腹貯天真。

此中空洞渾無物、何止容君数百人。

■【04-2-043】記宝山題詩

■【04-2-044】僧清順新作垂雲亭

江山雖有余、亭榭苦難穏。

登臨不得要、万象各偃蹇。

惜哉垂雲軒、此地得何晩。

天功争向背、詩眼巧増損。

路窮朱欄出、山破石壁很。

海門浸坤軸、湖尾抱雲巘。

葱葱城郭麗、淡淡煙村遠。

紛紛鳥鵲去、一一漁樵返。

雄観快新獲、微景収昔遁。

道人真古人、嘯詠慕嵇阮。

空齋臥蒲褐、芒履毎自捆。

天憐詩人窮、乞与供詩本。

我詩久不作、荒渋旋鋤墾。

従君覓佳句、咀嚼廃朝飯。

■【04-2-045】五月十日、与呂仲甫、周邠、僧恵勤、恵思、清順、可久、惟粛、義詮同泛湖遊北山

三呉雨連月、湖水日夜添。

尋僧去無路、瀲瀲水拍檐。

駕言徂北山、得与幽人兼。

清風洗昏翳、晩景分濃纖。

縹緲朱楼人、斜陽半疏簾。

臨風一揮手、悵焉起遐瞻。

世人驚朝市、独向溪山廉。

此楽得有命、軽薄神所殲。

■【04-2-046】会客有美堂、周邠長官与数僧同泛湖往北山、湖中聞堂上歌笑声、以詩見寄、因和二首、時周有服

其一

藹藹君詩似嶺雲、従来不許酔紅裙。

不知野屐穿山翠、惟見軽橈破浪紋。

頗憶呼盧袁彦道、難邀罵座灌将軍。

晩風落日元無主、不惜清涼与子分。

其二

載酒無人過子雲、掩関昼臥客書裙。

歌喉不共聴珠貫、酔面何因作纈紋。

僧侶且陪香火社、詩壇欲斂鸛鵝軍。

憑君遍繞湖辺寺、漲緑晴来已十分。

■【04-2-047】唐道人言、天目山上俯視雷雨、毎大雷電、但聞雲中如嬰児声、殊不聞雷

已外浮名更外身、区区雷電若為神。

山頭只作嬰児看、無限人間失箸人。

■【04-2-048】追和子由去歳試挙人洛下所寄九首

暴雨初晴楼上晩景

其一

秋後風光雨後山、満城流水碧潺潺。

煙雲好処無多子、及取昏鴉未到間。

其二

洛邑従来天地中、嵩高蒼翠北邙紅。

風流耆旧消磨尽、只有青山対病翁。〈(謂富公也。)〉

其三

白汗翻漿午景前、雨余風物便蕭然。

応傾半熟鵝黄酒、照見新晴水碧天。

其四

疾雷破屋雨翻河、一掃清風未覚多。

応似画師呉道子、高堂巨壁写降魔。

其五

客路三年不見山、上楼相対夢魂間。

明朝却踏紅塵去、羞向清伊照病顔。

過広愛寺、見三学演師、観楊恵之塑宝山、朱瑤画文殊普賢三首

其一

寓世身如夢、安閑日似年。

敗蒲翻覆臥、破裓再三連。

勧客眠風竹、長斎飲石泉。

回頭万事錯，自笑覚師賢。

其二

妙迹苦難尋、茲山見幾層。

乱峰螺髻出、絶澗陣雲崩。

措意元同画、観空欲問僧。

莫教林下意、終老嘆何曽。

其三

朱瑤唐晩輩、得法尚雄深。

満寺空遺跡、何人識苦心。

長廊欹雨脚、破壁撼鐘音。

成壊無窮事、他年復弔今。

韓子華石淙荘

絳侯百万兵、尚畏書牘背。

功名意不已、数与危機会。

我公抱絶識、凜凜鎮横潰。

欲収伊呂迹、遠与巣由対。

誓言雖未従、久已断諸内。

区区為懐祖、頗覚羲之隘。

此身随造物、一葉舞澎湃。

田園不早定、帰宿終安在。

彼美石淙荘、毎到百事廃。

泉流知人意、屈折作濤瀨。

寒光洗肝膈、清響跨竽籟。

我旧門前客、放言不自外。

園中亦何有、薈蔚可勝計。

請公試回首、歳晩余蒼檜。

■【04-2-049】跋蒲伝正燕公山水

畫以人物為神，花、竹、禽、魚為妙，宮室、器用為巧，山水為勝，而山水以清雄奇富變態無窮為難。燕公之筆，軍然天成，粲然日新，已離畫工之度數而得詩人之清麗也。

■【04-2-050】和柳子玉喜雪次韻仍呈述古

詩翁愛酒長如渇、瓶尽欲沽囊已竭。

燈青火冷不成眠、一夜撚鬚吟喜雪。

詩成就我覓歓処、我窮正与君彷彿。

曷不走投陳孟公、有酒酔君仍飽徳。

瓊瑤欲尽天応惜、更遣清光続残月。

安得佳人擢素手、笑捧玉碗両奇絶。

艶歌一曲回陽春、坐使高堂生暖熱。

■【04-2-051】観子玉郎中草聖

柳侯運筆如電閃、子雲寒悴羊欣倹。

百斛明珠便可扛、此書非我誰能双。

■【04-2-052】与大覚禅師璉公

■【04-2-053】贈上天竺弁才師

南北一山門、上下両天竺。

中有老法師、痩長如鶴鵠。

不知修何行、碧眼照山谷。

見之自清涼、洗尽煩悩毒。

坐令一都会、男女礼白足。

我有長頭児、角頬峙犀玉。

四歳不知行、抱負煩背腹。

師来為摩頂、起走趁奔鹿。

乃知戒律中、妙用謝羈束。

何必言法華、佯狂啖魚肉。

■【04-2-054】立秋日祷雨、宿霊隠寺、同周、徐二令

百重堆案掣身閑、一葉秋声対榻眠。

牀下雪霜侵戸月、枕中琴築落階泉。

崎嶇世味嘗応遍、寂寞山棲老漸便。

惟有憫農心尚在、起瞻雲漢更茫然。

■【04-2-055】病中独遊浄慈、謁本長老、周長官以詩見寄、仍邀遊霊隠、因次韻答之

臥聞禅老入南山、浄掃清風五百間。

我与世疏宜独往、君縁詩好不容攀。

自知楽事年年減、難得高人日日閑。

欲問雲公覓心地、要知何処是無還。

〈(《楞嚴經》云:我今示汝無所還地。)

■【04-2-056】病中遊祖塔院

紫李黄瓜村路香、烏紗白葛道衣涼。

閉門野寺松陰転、欹枕風軒客夢長。

因病得閑殊不悪、安心是薬更無方。

道人不惜階前水、借与匏樽自在嘗。

■【04-2-057】虎跑泉

亭亭石塔東峰上、此老初来百神仰。

虎移泉眼趁行脚、竜作浪花供撫掌。

至今遊人潅濯罷、臥聴空階環玦響。

故知此老如此泉、莫作人間去来想。

■【04-2-058】仏日山栄長老方丈五絶

其一

陶令思帰久未成、遠公不出但聞名。

山中只有蒼髯叟、数里蕭蕭管送迎。

其二

千株玉槊攙雲立、一穂珠旒落鏡寒。

何処霜眉碧眼客、結為三友令相看。

其三

東麓雲根露角牙、細泉幽咽走金沙。

不堪土肉埋山骨、未放蒼竜浴渥洼。

其四

食罷茶甌未要深、清風一榻抵千金。

腹揺鼻息庭花落、還尽平生未足心。

其五

日射回廊午枕明、水沈銷尽碧煙横。

山人睡覚無人見、只有飛蚊遶鬢鳴。

■【04-2-059】江城子

鳳凰山下雨初晴。

水風清。

晩霞明。

一朶芙蓉、

開過尚盈盈。

何処飛来双白鷺、

如有意、

慕娉婷。

忽聞江上弄哀箏。

苦含情。

遣誰聽。

煙斂雲収、

依約是湘霊。

欲待曲終尋問取、

人不見、

数峰青。

■【04-2-060】孤山二詠

引

孤山有陳時柏二株。其一為人所薪、山下老人自為児、已見其枯矣、然堅悍如金石、愈於未枯者。僧志詮作堂於其側、名之曰柏堂。堂与白公居易竹閣相連属。余作二詩以記之。

其一　柏堂

道人手種幾生前、鶴骨竜筋尚宛然。

双幹一先神物化、九朝三見太平年。

忽驚華構依巖出、乞与佳名到処伝。

此柏未枯君記取、灰心聊伴小乗禅。

其二　竹閣

海山兜率両茫然、古寺無人竹満軒。

白鶴不留帰後語、蒼竜猶是種時孫。

両叢恰似蕭郎筆、十畝空懐渭上村。

欲把新詩問遺像、病維摩詰更無言。

■【04-2-061】与述古自有美堂乗月夜帰

娟娟雲月稍侵軒、瀲瀲星河半隠山。

魚鑰未収清夜永、鳳簫猶在翠微間。

凄風瑟縮経絃柱、香霧凄迷著髻鬟。

共喜使君能鼓楽、万人争看火城還。

■【04-2-062】有美堂暴雨

游人脚底一声雷、満座頑雲撥不開。

天外黒風吹海立、浙東飛雨過江来。

十分瀲灩金樽凸、千杖敲鏗羯鼓催。

喚起謫仙泉酒面、倒傾鮫室瀉瓊瑰。

■【04-2-063】八月十五日看潮五絶

其一

定知玉兎十分円、已作霜風九月寒。

寄語重門休上鑰、夜潮留向月中看。

其二

万人鼓噪懾呉儂、猶似浮江老阿童。

欲識潮頭高幾許、越山渾在浪花中。

其三

江辺身世両悠悠、久与滄波共白頭。

造物亦知人易老、故教江水更西流。

其四

呉児生長狎濤淵、冒利軽生不自憐。

東海若知明主意、応教斥鹵変桑田。〈(是時新有旨禁弄潮。)〉

其五

江神河伯両醯雞、海若東来気吐霓。

安得夫差水犀手、三千強弩射潮低。

〈(呉越王嘗以弓弩射潮頭, 與海神戦, 自爾水不近城。)

■【04-2-064】瑞鷓鴣

瑞鷓鴣(觀潮)

碧山影裏小紅旗。

儂是江南踏浪児。

拍手欲嘲山簡酔、

斉声争唱浪婆詞。

西興渡口帆初落、

漁浦山頭日未欹。

儂欲送潮歌底曲、

尊前還唱使君詩。

■【04-2-065】与周長官、李秀才遊径山、二君先以詩見寄、次其韻二首

其一

少年飲紅裙、酒尽推不去。

呼来径山下、試与洗塵霧。

癡馬惜障泥、臨流不肯渡。

独有汝南君、従我無朝暮。

肯将紅塵脚、暫著白雲履。

嗟我与世人、何異笑百歩。

功名一破甑、棄置何用顧。

更憑陶靖節、往問征夫路。

其二

竜亦恋故居、百年尚来去。

至今雨雹夜、殿暗風纏霧。

而我棄郷国、大江忘北渡。

便欲此山前、築室安遅暮。

又恐太幽独、歳晩霜入履。

同遊得李生、仄足随蹇歩。

孔明不自愛、臨老起三顧。

吾帰便却掃、誰踏門前路。

■【04-2-066】臨安三絶

其一　将軍樹

阿堅沢畔菰蒲節、玄徳墻頭羽葆桑。

不会世間閑草木、与人何事管興亡。

其二　錦溪

楚人休笑沐猴冠、越俗徒誇翁子賢。

五百年間異人出、尽将錦繍裹山川。

其三　石鏡

山雞舞破半巖雲、菱葉開残野水春。

応笑武都山下土、枉教明月殉佳人。

■【04-2-067】登玲瓏山

何年僵立両蒼竜、痩脊盤盤尚倚空。

翠浪舞翻紅罷亜、白雲穿破碧玲瓏。

三休亭上工延月、九折巌前巧貯風。

脚力尽時山更好、莫将有限趁無窮。

■【04-2-068】宿九仙山

（九仙謂左元放、許邁、王、謝之流。）

風流王謝古仙真、一去空山五百春。

玉室金堂余漢士、桃花流水失秦人。

困眠一榻香凝帳、夢繞千巌冷逼身。

夜半老僧呼客起、雲峰欠処湧冰輪。

■【04-2-069】陌上花三首

引

遊九仙山、聞里中児歌陌上花。父老云呉越王妃、毎歳春必帰臨安、王以書遺妃曰、陌上花開、可緩緩帰矣。呉人用其語為歌、含思宛転、聴之淒然、而其詞鄙野、為易之云。

其一

陌上花開蝴蝶飛、江山猶是昔人非。

遺民幾度垂垂老、遊女長歌緩緩帰。

其二

陌上山花無数開、路人争看翠駢来。

若為留得堂堂去、且更従教緩緩回。

其三

生前富貴草頭露、身後風流陌上花。

已作遅遅君去魯、猶歌緩緩妾還家。

■【04-2-070】遊東西巖

謝公含雅量、世運属艱難。

況復情所鐘、感慨萃中年。

正頼糸竹竹、陶写有余歓。

嘗恐児輩覚、坐令高趣闌。

独携縹緲人、来上東西山。

放懐事物外、徙倚弄雲泉。

一旦功業成、管蔡復流言。

慷慨桓野王、哀歌和清弾。

挽鬚起流涕、始知使君賢。

意長日月促、臥病已辛酸。

慟哭西州門、往駕那復還。

空余行楽処、古木昏蒼煙。

■【04-2-071】宿海会寺

籃輿三日山中行、山中信美少曠平。

下投黄泉上青冥、線路毎与猿猱争。

重楼束縛遭澗坑、両股酸辛飢腸鳴。

北度飛橋踏彭鏗、繚垣百歩如古城。

大鐘横撞千指迎、高堂延客夜不扃。

杉槽漆斛江河傾、本来無垢洗更軽。

倒牀鼻息四隣驚、紈如五鼓天未明。

木魚呼粥亮且清、不聞人声聞履声。

■【04-2-072】径山道中次韻答周長官兼贈蘇寺丞

年来戦紛華、漸覚夫子勝。

欲求五畝宅、灑掃楽清浄。

学道恨日浅、問禅慚聴瑩。

聊為山水行、遂此麋鹿性。

独遊吾未果、覓伴誰復聴。

吾宗古遺直、窮達付前定。

餔糟酔方熟、灑面呼不醒。

奈何效燕蝠、屡欲争晨暝。

不如従我遊、高論発犀柄。

渓南渡横木、山寺称小径。

幽尋自茲始、帰路微月欠。

南望功臣山、雲外盤飛磴。

三更渡錦水、再宿留石鏡。

緬懐周与李、能作洛生詠。

明朝二子至、詩律厳号令。

籃輿置紙筆、得句軽千乗。

玲瓏苦奇秀、名実巧相称。

九仙更幽絶、笑語千山応。

空巌側破甕、飛溜灑浮磬。

山前見虎迹、候吏鐃鼓競。

我生本艱奇、塵土満釜甑。

山禽与野獣、知我久蹭蹬。

笑謂候吏還、遇虎吾有命。

径山雖云遠、行李稍可並。

頗訝王子猷、忽起山陰興。

但報菊花開、吾当理帰榜。

■【04-2-073】汪覃秀才久留山中、以詩見寄、次其韻

季子応嗔不下機、棄家来伴碧雲師。

中秋冷坐無因酔、半月長斎未肯辞。

擲簡揺毫無忤色、投名入社有新詩。

飛騰桂籍他年事、莫忘山中采薬時。

■【04-2-074】再遊径山

老人登山汗如濯、到牀困臥呼不覚。

覚来五鼓日三竿、始信孤雲天一握。

平生未省出艱険、両足慣曽行犖确。

含暉亭上望東溟、凌霄峰頭挹南岳。

共愛糸杉翠糸乱、誰見玉芝紅玉琢。

白雲何事自来往、明月長円無晦朔。

冢上雞鳴猶憶欽、山前鳳舞遠徴璞。

雪窓馴兎元不死、煙嶺孤猿苦難捉。

従来白足傲死生、不怕黄巾把刀槊。

榻上双痕凜然在、剣頭一吷何須角。

嗟我昏頑晩聞道、与世齟齬空多学。

霊水先除眼界花、清詩為洗心源濁。

騒人未要逃競病、禅老但喜聞剥啄。

此生更得幾迴来、従今有暇無辞数。

■【04-2-075】初自径山帰、述古召飲介亭、以病先起

西風初作十分涼、喜見新橙透甲香。

遅暮賞心驚節物、登臨病眼怯秋光。

慣眠処士雲庵裏、倦酔佳人錦瑟旁。

猶有夢回清興在、臥聞帰路楽声長。

■【04-2-076】明日重九、亦以病不赴述古会、再用前韻

月入秋帷病枕涼、霜飛夜簟故衾香。

可憐吹帽狂司馬、空対親舂老孟光。

不作雍容傾座上、翻成骯臓倚門旁。

人間此会論今古、細看茱萸感嘆長。

■【04-2-077】九日、尋臻闍黎、遂泛小舟至勤師院、二首

其一

白髪長嫌歳月侵、病眸兼怕酒杯深。

南屏老宿閑相過、東閣郎君懶重尋。

試碾露芽烹白雪、休拈霜蕊嚼黄金。

扁舟又截平湖去、欲訪孤山支道林。

其二

湖上青山翠作堆、葱葱鬱鬱気佳哉。

笙歌叢裏抽身出、雲水光中洗眼来。

白足赤髭迎我笑、拒霜黄菊為誰開。

明年桑苧煎茶処、憶著衰翁首重回。〈(皎然有《九日與陸羽煎茶》詩, 羽自號桑苧翁。余來年九日去此久矣。)

■【04-2-078】遊諸仏舎、一日飲釅茶七盞、戯書勤師壁

示病維摩元不病、在家霊運已忘家。

何須魏帝一丸薬、且尽盧仝七碗茶。

■【04-2-079】九日、舟中望見有美堂上魯少卿飲、以詩戯之、二首

其一

指点雲間数点紅、笙歌正擁紫髯翁。

誰知愛酒竜山客、却在漁舟一葉中。

其二

西閣珠簾巻落暉、水沈煙断佩声微。

遙知通徳淒涼甚、擁髻無言怨未帰。

■【04-2-080】九日湖上尋周、李二君、不見、君亦見尋於湖上、以詩見寄、明日乃次其韻

湖上野芙蓉、含思愁脈脈。

娟然如静女、不肯傍阡陌。

詩人杳未来、霜艶冷難宅。

君行逐鴎鷺、出処浩莫測。

葦間聞拏音、雲表已飛屐。

使我終日尋、逢花不忍摘。

人生如朝露、要作百年客。

嘗彼終歳労、幸茲一日沢。

願言竟不遂、人事多乖隔。

悟此知有命、冗憂傷魂魄。

■【04-2-081】送杭州杜、戚陳三掾罷官帰郷

秋風摵摵鳴枯蓼、船閣荒村夜悄悄。

正当逐客断腸時、君独歌呼酔連暁。

老夫平生斉得喪、尚恋微官失軽矯。

君今憔悴帰無食、五斗未可秋毫小。

君言失意能幾時、月啖蝦蟆行復皎。

殺人無験中不快、此恨終身恐難了。

徇時所得無幾何、随手已遭憂患繞。

期君正似種宿麦、忍饑待食明年麨。

■【04-2-082】次韻周長官寿星院同餞魯少卿

琉璃百頃水仙家、風静湖平響釣車。

寂歴疏松欹晩照、伶俜寒蝶抱秋花。

困眠不覚依蒲褐、帰路相将踏桂華。

更著綸巾披鶴氅、他年応作画図誇。

■【04-2-083】述古以詩見責屢不赴会、復次前韻

我生孤僻本無隣、老病年来益自珍。

肯対紅裙辞白酒、但愁新進笑陳人。

北山怨鶴休驚夜、南畝巾車欲及春。

多謝清詩屢推轂，猶膏那解転方輪。

■【04-2-084】賀陳述古弟章生子

郁葱佳気夜充閭、始見徐卿第二雛。

甚欲去為湯餅客、惟愁錯写弄璽書。

参軍新婦賢相敵、阿大中郎喜有余。

我亦従来識英物、試教啼看定何如。

■【04-2-085】贈治易僧智周

寒窓孤坐凍生瓶、尚把遺編照露螢。

閣束九師新得妙、夢呑三画旧通霊。

断弦掛壁知音喪、揮塵空山乱石聴。

斎罷何須更臨水、胸中自有洗心経。

■【04-2-086】張子野年八十五、尚聞買妾、述古令作詩

錦裏先生自笑狂、莫欺九尺鬢眉蒼。

詩人老去鶯鶯在、公子帰来燕燕忙。

柱下相君猶有歯、江南刺史已無腸。

平生謬作安昌客、略遣彭宣到後堂。

■【04-2-087】書双竹湛師房二首

其一

我本西湖一釣舟、意嫌高屋冷颼颼。

羨師此室纔方丈、一炷清香尽日留。

其二

暮鼓朝鐘自撃撞、閉門孤枕対残缸。

白灰旋撥通紅火、臥聴蕭蕭雨打窓。

■【04-2-088】宝山新開径

藤梢橘刺元無路、竹杖芒鞋不用扶。

風自遠来聞笑語、水分流処見江湖。

回観仏国青螺髻、踏遍仙人碧玉壺。

野客帰時山月上、棠梨葉戦暝禽呼。

■【04-2-089】和述古冬日牡丹四首

其一

一朶妖紅翠欲流、春光回照雪霜羞。

化工只欲呈新巧、不放閑花得少休。

其二

花開時節雨連風、却向霜余染爛紅。

漏洩春光私一物、此心未信出天工。

其三

当時只道鶴林仙、解遣秋光発杜鵑。

誰信詩能回造化、直教霜卉放春妍。

其四

不分清霜入小園、故将詩律変寒暄。

使君欲見藍関詠、更倩韓郎為染根。

■【04-2-090】弔天竺海月弁師三首

其一

欲尋遺跡強沾裳、本自無生可得亡。

今夜生公講堂月、満庭依旧冷如霜。

其二

生死猶如臂屈伸、情鍾我輩一酸辛。

楽天不是蓬萊客、憑仗西方作主人。

其三

欲訪浮雲起滅因、無縁却見夢中身。

安心好住王文度、此理何須更問人。

■【04-2-091】李頑秀才善画山、以両軸見寄、仍有詩、次韻答之

平生自是箇中人、欲向漁舟便写真。

詩句対君難出手、雲泉勧我早抽身。

年来白髪驚秋速、長恐青山与世新。

従此北帰休悵望、嚢中収得武林春。

■【04-2-092】定風波

千古風流阮歩兵、

平生遊宦愛東平。

千里遠来還不住。

帰去。

空留風韻照人清。

紅粉尊前深懊悩、

休道。

如何留得許多情。

記得明年花絮乱。

看泛。

西湖総是断腸声。

■【04-2-093】思聡名説

■【04-2-094】答舒堯文

■【04-2-095】与晁美叔

■【04-2-096】雪後至臨平、与柳子玉同至僧舎、見陳尉列

落帆古戍下、積雪高如丘。

強邀詩老出、疏髯散颼颼。

僧房有宿火、手足漸和柔。

静士素寡言、相対自忘憂。

銅爐擢煙穂、石鼎浮霜漚。

征夫念前路、急鼓催行舟。

我行雖有程、坐穏且復留。

大哉天地間、此生得浮遊。

■【04-2-097】夜至永楽文長老院、文時臥病退院

夜聞巴叟臥荒村、来打三更月下門。

往事過年如昨日、此身未死得重論。

老非懐土情相得、病不開堂道益尊。

惟有孤棲旧時鶴、挙頭見客似長言。

■【04-2-098】和銭安道寄恵建茶

我官於南今幾時、嘗尽溪茶与山茗。

胸中似記故人面、口不能言心自省。

為君細説我未暇、試評其略差可聴。

建溪所産雖不同、一一天与君子性。

森然可愛不可慢、骨清肉膩和且正。

雪花雨脚何足道、啜過始知真味永。

縦復苦硬終可録、汲黯少戇寛饒猛。

草茶無頼空有名、高者妖邪次頑懭。

体軽雖復強浮沈、性滞偏工嘔酸冷。

其間絶品豈不佳、張禹縦賢非骨鯁。

葵花玉誇不易致、道路幽険隔雲嶺。

誰知使者来自西、開緘磊落収百餅。

嗅香嚼味本非別、透紙自覚光炯炯。

粧糠団鳳友小竜、奴隷日註臣双井。

収蔵愛惜待佳客、不敢包裹鈷権幸。

此詩有味君勿伝、空使時人怒生瘦。

■【04-2-099】銭道席上令歌者道服

烏府先生鉄作肝、霜風巻地不知寒。

猶嫌白髪年前少、故点紅燈雪裏看。

他日卜隣先有約、待君投劾我休官。

如今且作華陽服、酔唱儂家七返丹。

■【04-2-100】蘇州請通長老疏

■【04-2-101】仁宗皇帝御飛白記

■【04-2-102】恵山謁鉄道人、烹小竜団、登絶頂、望太湖

踏遍江南南岸山、逢山未免更留連。

独携天上小団月、来試人間第二泉。

石路縈回九竜脊、水光翻動五湖天。

孫登無語空帰去、半嶺松声万壑伝。

■【04-2-103】銭道人有詩云、直須認取主人翁、作両絶戯之

其一

首断故応無断者、冰銷那復有冰知。

主人苦苦令儂認、認主人人竟是誰。

其二

有主還須更有賓、不如無境自無塵。

只従半夜安心後、失却当前覚痛人。

■【04-2-104】除夜野宿常州城外

其一

行歌野哭両堪悲、遠火低星漸向微。

病眼不眠非守歳、郷音無伴苦思帰。

重衾脚冷知霜重、新沐頭軽感髪稀。

多謝残燈不嫌客、孤舟一夜許相依。

其二

南来三見歳雲徂、直恐終身走道途。

老去怕看新暦日、退帰擬学旧桃符。

煙花已作青春意、霜雪偏尋病客鬚。

但把窮愁博長健、不辞酔後飲屠蘇。

■【04-3-001】元日過丹陽、明日立春、寄魯元翰

堆盤紅縷細茵陳、巧与椒花両鬬新。

竹馬異時寧信老、土牛明日莫辞春。

西湖弄水猶応早、北寺観燈欲及辰。

白髪蒼顔誰肯記、暁来頻嚏為何人。

■【04-3-002】行香子

携手江村。

梅雪飄裙。

情何限、

処処銷魂。

故人不見、

旧曲重聞。

向望湖楼、

孤山寺、

湧金門。

尋常行処、

題詩千首。

繍羅衫、

与払紅塵。

別来相憶、

知是何人。

有湖中月、

江辺柳、

隴頭雲。

■【04-3-003】刁同年草堂

不用長竿矯繡衣、南園北第両参差。

青山有約長当戸、流水無情自入池。

歳久酔醲渾欲合、春来楊柳不勝垂。

主人不用悤悤去、正是紅梅着子時。

■【04-3-004】刁景純賞瑞香花、憶先朝侍宴、次韻

上宛夭桃自作行、劉郎去後幾回芳。

厭従年少追新賞、閑対宮花識旧香。

欲贈佳人非泛洧、好紉幽佩弔沈湘。

鶴林神女無消息、為問何年返帝郷。

■【04-3-005】同柳子玉遊鶴林、招隠、酔帰、呈景純

花時臘酒照人光、帰路春風灑面涼。

劉氏宅辺霜竹老、戴公山下野桃香。

巌頭匹練兼天浄、泉底真珠濺客忙。

安得道人携笛去、一声吹裂翠崖岡。

■【04-3-006】景純見和、復次韻贈之、二首

其一

解組帰来道益光、坐看百物自炎涼。

巻簾堂上檀槽鬧、送客林間樺燭香。

浅量已愁当酒怯、非才猶覚和詩忙。

何人貪佩黄金印、千柱耽耽鎖北岡。

其二

人間膏火正争光、毎到蔵春得暫涼。

多事始知田舎好、凶年偏覚野蔬香。

渓山勝画徒能説、来往如梭為底忙。

老去此身無処著、為翁載插万松岡。

■【04-3-007】景純復以二篇、一言其亡兄与伯父同年之契、一言今者唱酬之意、仍次其韻

其一

霊寿扶来似孔光、感時懐旧一悲涼。

蟾枝不独同攀桂、雞舌還応共賜香。〈公自注亦同為郎〉

等是浮休無得喪、麤分憂楽有閑忙。

年来世事如波浪、鬱鬱誰知柏在岡

其二

屢把鉛刀歯歩光、更遭華袞照屍涼。

蘇門山上莫長嘯、蒼葡林中無別香。

燭燼已残終夜刻、槐花還似昔年忙。

背城借一吾何敢、慎莫樽前替戻岡。

■【04-3-008】子玉家宴、用前韻見寄、復答之

自酌金樽勧孟光、更教長笛奏伊涼。

牽衣男女繞太白、扇枕郎君煩阿香。

詩病逢春転深痼、愁魔得酒暫奔忙。

醒時情味吾能説、日在西南白草岡。

■【04-3-009】柳氏二外甥求筆跡二首

其一

退筆成山未足珍、読書万巻始通神。

君家自有元和脚、莫厭家雞更問人。

其二

一紙行書両絶詩、遂良鬚鬢已如糸。

何当火急伝家法、欲見誠懸筆諫時。

■【04-3-010】成都進士杜暹伯升、出家、名法通、往来呉中

欲識当年杜伯升、飄然雲水一孤僧。

若教俯首随韁鎖、料得如今似我能。

■【04-3-011】書贈法通師詩

■【04-3-012】子玉以詩見邀同刁丈遊金山

君年甲子未相逢、難向人前説老翁。

更有方瞳八十一、奮衣翼鑠走山中。

■【04-3-013】金山寺与柳子玉飲、大酔、臥宝覚禅榻、夜分方醒、書其壁

悪酒如悪人、相攻劇刀箭。

頽然一榻上、勝之以不戦。

詩翁気雄拔、禅老語清軟。

我酔都不知、但覚紅緑眩。

醒時江月墮、摵摵風響変。

惟有一龕燈、二豪倶不見。

■【04-3-014】送柳子玉赴霊仙

世事方艱便猛廻、此心未老已先灰。

何時夢入真君殿、也学伝呼観主来。

■【04-3-015】昭君怨

誰作桓伊三弄。

驚破綠窓幽夢。

新月与愁煙。

満江天。

欲去又還不去。

明日落花飛絮。

飛絮送行舟。

水東流。

■【04-3-016】監洞霄宮俞康直郎中所居四詠

其一　退圃

百丈休牽上瀨船、一鉤帰釣縮頭鰁。

園中草木春無数、只有黄楊厄閏年。

〈(俗說黃楊歲長一寸，遇閏退三寸。)

其二　逸堂

新第誰來作並隣、旧官寧復憶星辰。

請君置酒吾当賀、知向江湖拝散人。

其三　遁軒

冠蓋相望起隠淪、先生那得老江村。

古来真遁何曽遁、笑殺踰垣与閉門。

其四　遠楼

西山煙雨巻疏簾、北戸星河落短檐。

不独江天解空闊、地偏心遠似陶潜。

■【04-3-017】遊鶴林、招隠二首

其一

郊原雨初霽、春物有余妍。

古寺満修竹、深林聞杜鵑。

睡餘柳花墮、目眩山桜然。

西窗有病客、危坐看香煙。

其二

行歌白雲嶺、坐詠修竹林。

風軽花自落、日薄山半陰。

澗草誰復識、聞香杳難尋。

時見城市人、幽居惜未深。

■【04-3-018】書普慈長老壁

普慈寺後千竿竹、酔裏曽看碧玉椽。

倦客再遊行老矣、高僧一笑故依然。

久参白足知禅味、苦厭黄公聒昼眠。

惟有両株紅百葉、晩来猶得向人妍。

■【04-3-019】和蘇州太守王規甫侍太夫人観燈之什、余時以劉道原見訪、滞留京口、不及赴此会、二首

其一

不覚朱幡輾後塵、争看繍幰錦纏輪。

洛濱侍従三人貴、京兆平反一笑春。

但逐東山携妓女、那知後閣走窮賓。

滞留不見栄華事、空作賡詩第七人。

其二

翻翻緹騎走香塵、激激飛濤射火輪。

美酒留連三夜月、豊年傾倒五州春。

安排詩律追強対、蹭蹬帰期為悪賓。

堕珥遺簪想無限、華胥猶見夢回人。

■【04-3-020】書焦山綸長老壁

法師住焦山、而実未嘗住。

我来輒問法、法師了無語。

法師非無語、不知所答故。

君看頭与足、本自安冠履。

譬如長鬣人、不以長為苦。

一旦或人問、毎睡安所措。

帰来被上下、一夜著無処。

展転遂達晨、意欲尽鑷去。

此言雖鄙浅、故自有深趣。

持此問法師、法師一笑許。

■【04-3-021】留別金山法覚、円通二長老

沐罷巾冠快晩涼、睡余歯頬帯茶香。

艤舟北岸何時渡、晞髪東軒未肯忙。

康済此身殊有道、医治外物本無方。

風流二老長還往、顧我帰期尚渺茫。

■【04-3-022】減字木蘭花

暁来風細。

不会鵲声来報喜。

却羨寒梅。

先覚春風一夜来。

香牋一紙。

写尽回文機上意。

欲巻重開。

読偏千回与万回。

■【04-3-023】少年游

去年相送、

余杭門外、

飛雪似楊花。

今年春尽、

楊花似雪、

猶不見還家。

対酒捲簾邀明月、

風露透窓紗。

恰似姮娥憐双燕、

分明照、

画梁斜。

■【04-3-024】蝶恋花

雨後春容清更麗。

祇有離人、

幽恨終難洗。

北固山前三面水。

碧瓊梳擁青螺髻。

紙郷書来万里。

問我何年、

真箇成帰計。

回首送春拚一酔。

東風吹破千行涙。

■【04-3-025】酔落魄

軽雲微月。

二更酒醒船初発。

孤城回望蒼煙合。

公子佳人、

不記帰時節。

巾偏扇墜藤牀滑。

覚来幽夢無人説。

此生飄蕩何時歇。

家在西南、

常作東南別。

■【04-3-026】常潤道中、有懐銭塘、寄述古五首

其一

従来直道不辜身、得向西湖両過春。

沂上已成曽点服、泮宮初采魯侯芹。

休驚歳歳年年貌、且対朝朝暮暮人。

細雨晴時一百六、画船鼉鼓莫違民。

其二

草長江南鶯乱飛、年来事事与心違。

花開後院還空落、燕入華堂怪未帰。

世上功名何日是、樽前点検幾人非。

去年柳絮飛時節、記得金籠放雪衣。〈(杭人以放鴿為太守壽。)〉

其三

浮玉山頭日日風、〈(即金山也。)〉湧金門外已春融。

二年魚鳥渾相識、三月鶯花付与公。

剰看新翻眉倒暈、未応泣別臉消紅。

何人織得相思字、寄与江辺北向鴻。

其四

国艶夭嬈酒半酣、去年同賞寄僧檐。

但知撲撲晴香軟、誰見森森暁態厳。

穀雨共驚無幾日、蜜蜂未許輒先甜。

応須火急回征棹、一片辞枝可得粘。

其五

恵泉山下土如濡、陽羨溪頭米勝珠。

売剣買牛吾欲老、殺雞為黍子来無。

地偏不信容高蓋、俗倹真堪著腐儒。

莫怪江南苦留滞、経営身計一生迂。

■【04-3-027】卜算子

蜀客到江南、

長憶呉山好。

呉蜀風流自古同、

帰去応須早。

還与去年人、

共藉西湖草。

莫惜尊前仔細看、

応是容顔老。

■【04-3-028】画堂春

柳花飛所麦揺波。

暁湖浄、

鑿新磨。

小舟飛棹去如梭。

斉唱采菱歌。

平野水雲溶漾、

小楼風日晴和。

済南何在暮雲多。

帰去奈愁何。

■【04-3-029】常州太平寺観牡丹

武林千葉照観空、別後湖山幾信風。

自笑眼花紅緑眩、還将白首看鞓紅。

■【04-3-030】遊太平寺浄土院観牡丹、中有淡黄一朶、特奇、為作小詩

酔中眼纈自斕斑、天雨曼陀照玉盤。

一朶淡黄微払掠、鞓紅魏紫不須看。

■【04-3-031】杭州牡丹開時、僕猶在常、潤、周令作詩見寄、次其韻、復次一首送赴闕

其一

羞帰応為負花期、已是成陰結子時。

与物寡情憐我老、遣春無恨頼君詩。

玉台不見朝酣酒、金縷猶歌空折枝。

従此年年定相見、欲師老圃問樊遅。

其二

莫負黄花九日期、人生窮達可無時。

十年且就三都賦、万戸終軽千首詩。

天静傷鴻猶戢翼、月明驚鵲未安枝。

君看六月河無水、万斛竜驤到自遅。

■【04-3-032】銭君倚哀詞

■【04-3-033】無錫道中賦水車

翻翻聯聯銜尾鴉、犖犖確確蛻骨蛇。

分疇翠浪走雲陣、刺水緑針抽稲芽。

洞庭五月欲飛沙、鼉鳴窟中如打衙。

天公不見老翁泣、喚取阿香推雷車。

■【04-3-034】虎丘寺

入門無平田、石路穿細嶺。

陰風生澗壑、古木翳潭井。

湛盧誰復見、秋水光耿耿。

鉄花秀巌壁、殺気噤蛙黽。

幽幽生公堂、左右立頑礦。

当年或未信、異類服精猛。

胡為百歳後、仙鬼互馳騁。

窈然留新詩、読者為悲哽。

東軒有佳致、雲水麗千頃。

熙熙覧生物、春意破淒冷。

我来属無事、暖日相与永。

喜鵲翻初旦、愁鳶蹲落景。

坐見漁樵還、新月渓上影。

悟彼良自怡、帰田行可請。

■【04-3-035】劉孝叔会虎丘、時王規甫斎素祈雨、不至、二首

其一

白簡威猶凜、青山興已穠。

鶴閑雲作氅、駝臥草埋峰。

跪履若可教、卜隣応見容。

因公問回老、何処定相逢。

其二

太常斎未解、不肯対纖穠。

只遣三千履、来遊十二峰。

林空答清唱、潭浄写衰容。

帰去瑤台路、還応月下逢。

■【04-3-036】蘇州閭丘、江君二家、雨中飲酒、二首

其一

小圃陰陰遍灑塵、方塘瀲瀲欲生紋。

已煩仙袂来行雨、莫遣歌声便駐雲。

肯対綺羅辞白酒、試将文字悩紅裙。

今宵記取醒時節、点滴空階独自聞。

其二

五紀帰来鬢未霜、十眉環列坐生光。

喚船渡口迎秋女、駐馬橋辺問泰娘。

曽把四弦娯白伝、敢将百草鬥呉王。

従今却笑風流守、画戟空凝宴寝香。

■【04-3-037】次韻沈長官三首

其一

家山何在両忘帰、杯酒相逢慎勿違。

不独飯山嘲我瘦、也応糠核怪君肥。

其二

男婚已畢女将帰、累尽身軽志莫違。

聞道山中食無肉、玉池清水自生肥。

其三

造物知吾久念帰、似憐衰病不相違。

風来震沢帆初飽、雨入松江水漸肥。

■【04-3-038】戯書呉江三賢画像

其一　范蠡

誰将射御教呉児、長笑申公為夏姫。

却遣姑蘇有麋鹿、更憐夫子得西施。

其二　張翰

浮世功労食与眠、季鷹真得水中仙。

不須更説知機早、直為鱸魚也自賢。

其三　陸亀蒙

千首文章二頃田、嚢中未有一鉄看。

却因養得能言鴨、驚破王孫金弾丸。

■【04-3-039】過永楽文長老已卒

初驚鶴痩不可識、旋覚雲帰無処尋。

三過門間老病死、一弾指頃去来今。

存亡慣見渾無涙、郷井難忘尚有心。

欲向銭塘訪円沢、葛洪川畔待秋深。

■【04-3-040】安平泉

策杖徐徐歩此山、撥雲尋径興飄然。

鑿開海眼知何代、種出菱花不計年。

烹茗僧誇甌泛雪、煉丹人化骨成仙。

当年陸羽空収拾、遺却安平一片泉。

■【04-3-041】贈張刁二老

両邦山水未淒涼、二老風流総健強。

共成一百七十歳、各飲三万六千觴。

蔵春塢裏鶯花鬧、仁寿橋辺日月長。

惟有詩人被磨折、金釵零落不成行。

■【04-3-042】去年秋、偶遊宝山上方。入一小院、闃然無人。有一僧、隠几低頭読書。与之語、漠然不甚対。問其隣之僧、曰、此雲閣黎也、不出十五年矣。今年六月、自常、潤還復至其室、則死葬数月矣。作詩題其壁。

雲師来宝山、一住十五秋。

読書嘗閉戸、客至不挙頭。

去年造其室、清坐忘百憂。

我初無言説、師亦無対酬。

今来復扣門、空房但颼颼。

云已滅無余、薪尽火不留。

却疑此室中、常有斯人不。

所遇孰非夢、事過吾何求。

■【04-3-043】与李公沢

■【04-3-044】鵲橋仙

七夕送陳令挙

緱山仙子、

高情雲渺、

不学癡牛騃女。

鳳簫声断月明中、

挙手謝、

時人欲去。

客槎曽犯、

銀河波浪、

尚帯天風海雨。

相逢一酔是前縁、

風雨散、

飄然何処。

■【04-3-045】虞美人

有美堂贈述古

湖山信是東南美。

一望弥千里。

使君能得幾回来。

便使尊前酔倒、

且徘徊。

沙河塘裏鐙初上。

水調誰家唱。

夜闌風静欲帰時。

惟有一江明月、

碧琉璃。

■【04-3-046】聴僧昭素琴

至和無攫醳、至平無按抑。

不知微妙声、究竟何従出。

散我不平気、洗我不和心。

此心知有在、尚復此微吟。

■【04-3-047】僧恵勤初罷僧職

軒軒青田鶴、鬱鬱在樊籠。

既為物所縻、遂与吾輩同。

今来始謝去、万事一笑空。

新詩如洗出、不受外垢蒙。

清風入歯牙、出語如風松。

霜髭茁病骨、飢坐聴午鐘。

非詩能窮人、窮者詩乃工。

此語信不妄、吾聞諸酔翁。

■【04-3-048】遊霊隠高峰塔

言遊高峰塔、蓐食治野装。

火雲秋未衰、及此初旦涼。

霧霏巌谷暗、日出草木香。

嘉我同来人、久便雲水郷。

相勤小挙足、前路高且長。

古松攀竜蛇、怪石坐牛羊。

漸聞鐘磬音、飛鳥皆下翔。

入門空有無、雲海浩茫茫。

惟見聾道人、老病時絶糧。

問年笑不答、但指穴藜牀。

心知不復来、欲帰更彷徨。

贈別留匹布、今歳天早霜。

■【04-3-049】訴衷情

送述古，迓元素）

銭塘風景古来奇。

太守例能詩。

先駆負駑何在、

心已浙江西。

花尽後、

葉飛時。

雨淒淒。

若為情緒、

更問新官、

向旧官啼。

■【04-3-050】仏日浄慧寺題名

■【04-3-051】江城子

翠娥羞黛怯人看。

掩霜紈。

淚偸弾。

且尽一尊、

収淚聴陽関。

漫道帝城天様遠、

天易見、

見君難。

画堂新締近孤山。

曲闌干。

為誰安。

飛絮落花、

春色属明年。

欲棹小舟尋旧事、

無処問、

水連天。

■【04-3-052】南郷子

回首乱山横。

不見居人只見城。

誰似臨平山上塔、

亭亭。

迎客西来送客行。

帰路晩風清。

一枕初寒夢不成。

今夜残燈斜照処、

熒熒。

秋雨晴時涙不晴。

■【04-3-053】八月十七日、天竺山送桂花、分贈元素

月欠霜濃細蘂乾、此花原属玉堂仙。

鷲峰子落驚前夜、蟾窟枝空記昔年。

破裩山僧憐耿介、練裙溪女鬬清妍。

願公採擷紉幽佩、莫遣孤芳老澗辺。

■【04-3-054】南郷子

寒雀満疏籬、

争抱寒柯看玉蕤。

忽見客来花下坐、

驚飛、

踏散芳英落酒巵。

痛飲又能詩、

座客無氈酔不知。

花謝酒闌春到也、

離離。

一点微酸已著枝。

■【04-3-055】海会寺清心堂

南郭子綦初喪我、西来達摩尚求心。

此堂不説有清濁、遊客自観随浅深。

両歳頻為山水役、一溪長照雪霜侵。

紛紛無補竟何事、慚愧高人閉戸吟。

■【04-3-056】跋蔡君謨書海会寺記

■【04-3-057】捕蝗至浮雲嶺、山行疲苶、有懐子由弟二首

其一

西来煙障塞空虚、灑徧秋田雨不如。

新法清平那有此、老身窮苦自招渠。

無人可訴烏銜肉、憶弟難憑犬寄書。

自笑迂疏皆此類、区区猶欲理蝗余。

其二

霜風漸欲作重陽、熠熠溪辺野菊黄。

久廃山行疲犖確、尚能村酔舞淋浪。

独眠林下夢魂好、回首人間憂患長。

殺馬毀車従此逝、子来何処問行蔵。

■【04-3-058】青牛嶺高絶処、有小寺、人跡罕到

暮帰走馬沙河塘、爐煙裊裊十里香。

朝行曳杖青牛嶺、崖泉咽咽千山静。

君勿笑老僧、耳聾喚不聞、百年倶是可憐人。

明朝且復城中去、白雲却在題詩処。

■【04-3-059】新城陳氏園、次晁補之韻

荒涼廃圃秋、寂歴幽花晩。

山城已窮僻、況与城相遠。

我来亦何事、徙倚望雲巘。

不見苦吟人、清樽為誰満。

■【04-3-060】梅聖俞詩集中有毛長官者、今於潜令国華也。聖俞没十五年、而君猶為令、捕蝗至其邑、作詩戯之

詩翁憔悴老一官、厭見苜蓿堆青盤。

帰来羞渋対妻子、自比鮎魚縁竹竿。

今君滞留生二毛、飽聴衙鼓眠黄紬。

更将嘲笑調朋友、人道彌猴騎土牛。

願君恰似高常侍、暫為小邑仍刺史。

不願君為孟浩然、却遭明主放還山。

宦遊逢此歳年悪、飛蝗来時半天黒。

羨君封境稲如雲、蝗自識人人不識。

■【04-3-061】与毛令方尉遊西菩提寺二首

其一

推擠不去已三年、魚鳥依然笑我頑。

人未放帰江北路、天教看尽浙西山。

尚書清節衣冠後、処士風流水石間。

一笑相逢那易得、数詩狂語不須刪。

其二

路転山腰足未移、水清石瘦便能奇。

白雲自占東西嶺、明月誰分上下池。

黒黍黄粱初熟後、朱柑緑橘半甜時。

人生此楽須天付、莫遣児曹取次知。

■【04-3-062】阿弥陀仏頌

■【04-3-063】服生薑法

■【04-3-064】書夢中靴銘

■【04-3-065】与范夢得

■【04-3-066】題蔡君謨帖

■【04-3-067】書孟徳伝後

■【04-3-068】減字木蘭花

琵琶絶芸。

年紀都来纔十二。

撥弄幺弦。

未解将心指下伝。

主人嗔小。

欲向春風先酔倒。

已属君家。

且更従容等待他。

■【04-3-069】三部楽

美人如月。

乍見掩暮雲、

更增增絶。

算応無恨、

安用陰晴円欠。

嬌甚空只成愁、

待下牀又懶、

未語先咽。

数日不来、

落尽一庭紅葉。

今朝置酒強起、

問為誰減動、

一分香雪。

何事散花却病、

維摩無疾。

却低眉、

慘然不答。

唱金縷、

一声怨切。

堪折便折、

且惜取少年花発。

■【04-3-070】与楊済甫

■【04-3-071】浣渓沙

縹渺危楼紫翠間。

良辰楽事古難全。

感時懐旧独凄然。

璧月瓊枝空夜夜、

菊花人貌自年年。

不知来歳与誰看。

■【04-3-072】題王羲之敬和帖

■【04-3-073】霊鷲題名

■【04-3-074】定風波

千古風流阮歩兵。

平生游宦愛東平。

千里遠来還不住。

帰去。

空留風韻照人清。

紅粉尊前深懊悩、

休道。

如何留得許多情。

記得明年花絮乱。

須泛。

西湖総是断腸声。

■【04-3-075】勧金船

無情流水多情客。

勧我如曽識。

杯行到手休辞却。

這公道難得。

曲水池上、

小字更書年月。

還対茂林修竹、

似永和節。

纖纖素手如霜雪。

笑把秋花插。

尊前莫怪歌声咽。

又還是軽別。

此去翺翔、

偏賞玉堂金闕。

欲問再来何歳、

応有華髪。

■【04-3-076】減字木蘭花

維熊佳夢、

釈氏老君親抱送。

壮気横秋、

未満三朝已食牛。

犀銭玉果、

利市平分潤四座。

多謝無功、

此事如何着得儂。

■【04-3-077】記游垂虹亭

■【04-3-078】李行中秀才酔眠亭三首

其一

已向閑中作地仙、更於酒裏得天全。

従教世路風波悪、賀監偏工水底眠。

其二

君且帰休我欲眠、人言此語出天然。

酔中対客眠何害、須信陶潜未若賢。

其三

孝先風味也堪憐、肯為周公昼日眠。

枕麹先生猶笑汝、枉将空腹貯遺編。

■【04-3-0079】与周開祖

■【04-3-080】阮郎帰

一年三度過蘇台。

清尊長是開。

佳人相問苦相猜。

這回来不来。

情未尽、

老先催。

人生真可咍咳。

他年桃李阿誰栽、

劉郎双鬢摧。

■【04-3-081】贈写真何充秀才

君不見潞州別駕眼如電、左手挂弓横撚箭。

又不見雪中騎驢孟浩然、皺眉吟詩肩聳山。

飢寒富貴両安在、空有遺像留人間。

此身常擬同外物、浮雲変化無蹤跡。

問君何苦写我真、君言好之聊自適。

黄冠野服山家容、意欲置我山巌中。

勲名将相今何限、往写褒公与鄂公。

■【04-3-082】醉落魄

蒼顔華髪、

故山帰計何時決。

旧交新貴音書絶。

惟有佳人、

猶作殷勤別。

離亭欲去歌声咽、

瀟瀟細雨涼吹頬。

涙珠不用羅巾浥。

弾在羅衫、

図得見時説。

■【04-3-083】与何浩然

■【04-3-084】回先生過湖州東林沈氏、飲酔、以石榴皮書其家東老庵之壁云、西隣已富憂不足、東老雖貧楽有余。白酒醸来因好客、黄金散尽為収書。西蜀和仲、聞而次其韻三首。東老、沈氏之老自謂也、湖人因以名之。其子偕作詩、有可観者

其一

世俗何知貧是病、神仙可学道之余。

但知白酒留佳客、不問黄公覓素書。

其二

符離道士晨興際、華岳先生尸解余。

忽見黄庭丹篆句、猶伝青紙小朱書。

其三

淒涼雨露三年後、彷彿塵埃数字余。

至用榴皮縁底事、中書君豈不中書。

■【04-3-085】単同年求徳興俞氏聚遠楼詩三首

其一

雲山煙水苦難親、野草幽花各自春。

頼有高楼能聚遠、一時収拾与閑人。

其二

無限青山散不収、雲奔浪巻入簾鉤。

直将眼力為疆界、何啻人間万戸侯。

其三

聞説楼居似地仙、不知門外有塵寰。

幽人隠几寂無語、心在飛鴻滅没間。

■【04-3-086】采桑子

多情多感仍多病、

多景楼中。

樽酒相逢。

楽事回頭一笑空。

停杯且聴琵琶語、

細撚軽攏。

酔臉春融。

斜照江天一抹紅。

■【04-3-087】膠西蓋公堂照壁画賛并引

■【04-3-088】酔落魄

分携如昨。

人生到処萍飄泊。

偶然相聚還離索。

多病多愁、須信従来錯。

樽前一笑休辞却。

天涯同是傷淪落。

故山猶負平生約。

西望峨嵋、

長羨帰飛鶴。

■【04-3-089】与李公択